

昭和60年度浪岡城跡発掘調査報告書

浪 岡 城 跡 IX

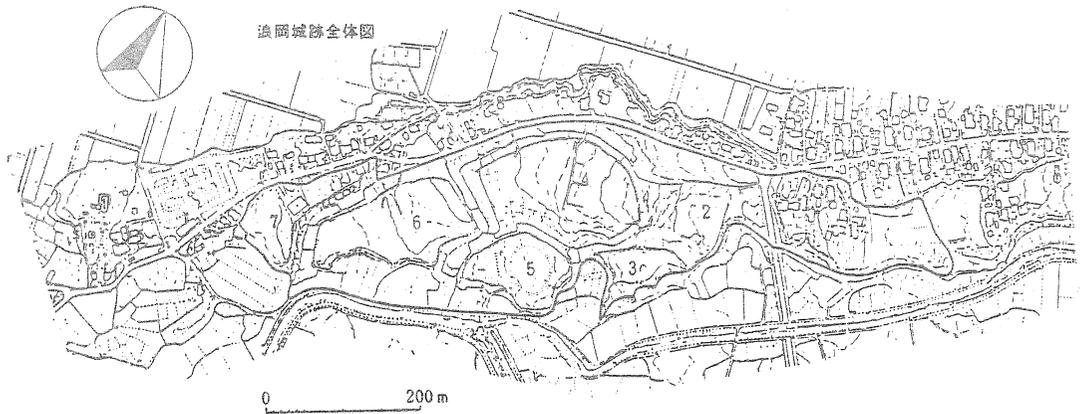
浪岡町教育委員会

昭和60年度浪岡城跡発掘調査報告書(Ⅸ)訂正表

- P15の10行 東西軸4間、南北軸4間 ⇒ 東西軸3間、南北軸3間
P33の22行 東西190cm、本 ⇒ 東西190cm、
P53の19行 R41区検出。 ⇒ R42区検出。

お詫び

昭和59年度発掘調査報告書までの史跡指定地面積と公有地面積の数値が誤っていたので、下記の通り変更してください。お詫び申し上げます。



史跡指定地面積 136,000㎡

公有地面積 114,800㎡

- | | |
|---------------|-----------------|
| 1. 新館 15,480㎡ | 5. 内館 7,890㎡ |
| 2. 東館 5,400㎡ | 6. 西館 13,830㎡ |
| 3. 城菜館 3,750㎡ | 7. 検校館 8,550㎡ |
| 4. 北館 15,450㎡ | 8. 無名の館 22,250㎡ |

発刊にあたって

史跡浪岡城跡は、南朝の雄奥州鎮守府將軍北畠顕家の末孫が拠った中世城館として、津軽地域の中では特異な光彩をはなっております。

このたび、昭和60年度の発掘調査報告書を発刊するにあたって、浪岡城が浪岡町民の精神的柱石であると同じように津軽中世史を解明するための貴重な資料として県内外の研究者に発表できますことは、浪岡町の文化財保護行政を推進する上で、誠に意義深いことと考えております。

今後、浪岡城跡は「史跡公園」として順次環境整備し、町民および全国の方々に公開して歴史学習の場となる予定です。さらに近接した場所に浪岡城跡出土品を中心とした歴史資料館を建設する計画が進み「歴史のまち浪岡」を標榜できることもそれほど遠いことではないと思われます。関係各位にあっては、旧に倍しての御指導・御助言をお願い申し上げます。

昭和63年1月31日

浪岡町教育委員会

教育長 蝦名 俊 吉

例 言

1. 本書は昭和60年度に調査した、浪岡城跡内館に関する発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、国（50%）・県（8%）の補助を受け、浪岡町（町長・工藤善弘）と浪岡町教育委員会（教育長・蝦名俊吉）が総額1,200万円で実施した。
3. 発掘調査は、昭和60年5月27日から同年11月22日までが野外調査、昭和60年11月25日から昭和62年3月10日までが屋内整理作業として実施した。
4. 本書の編集は、工藤清泰がおこない、執筆は以下の通りである。
 - I 調査に至る経緯……………工藤清泰
 - II 調査経過……………木村浩一
 - III 検出遺構と主な出土遺物……………工藤清泰・木村浩一
 - IV 出土遺物……………工藤清泰
 - V まとめ……………工藤清泰
5. 本書は、本文5項目、写真図版（PL.）33枚、挿図（Fig.）62枚、表（Ch.）109枚で構成した。
6. 遺構の略称は以下の通りである。

S B	礎石・掘立柱建物跡	S T	竪穴建物跡	S E	井戸跡
S D	溝跡	S F	焼土遺構	S X	性格不明遺構
7. 遺物の略称は以下の通りである。

P	陶磁器・土器類	F	鉄・銅製品	C	銭貨
S	石製品	B	骨類	M	木製品・漆器被膜等
N R	自然遺物類				
8. 遺構の土層注記にあたっては「新版標準土色帖」小山正忠・竹原秀雄編著（1976. 9）を参考にした。
9. 本書を作製するにあたり、注記・錆取り・実測・浄書等の整理作業は下記の方々の手に寄るところが大きかった。記して感謝申し上げます。

武田嘉彦、長谷川亘、斎藤とも子、佐々木里見、常田紀子、成田和佳子、工藤馨、石岡佳子

10. 本書の刊行にあたり、下記の機関・各位の御指導・御助言を得た。

記して感謝申し上げます。（敬称略・順不同）

文化庁記念物課、県教育庁文化課、県埋蔵文化財調査センター、
八戸市立博物館、秋田裕毅

本文目次

発刊にあたって

例言

I 調査に至る経緯	1
II 調査経過	5
III 検出遺構と主な出土遺物	9
IV 出土遺物	74
V まとめ	152
写真図版 (PL.)	159

I 調査に至る経緯

史跡浪岡城跡は、陸奥国鎮守府將軍北畠顕家の末裔が抛った城館として、津軽中世史の中で特筆すべき意味を有している。15世紀前半まで津軽北半を勢力範囲としていた安藤氏と姻戚関係にあった北畠氏は南北朝の動乱後、北奥の地まで落ちのびることになるが、安藤氏と南部氏の抗争によって安藤氏が駆逐された後は、旧安藤領を南部氏から委任統治する形で、浪岡の地に抛を構えたものと思われる。

(注1) (注2)
浪岡城北畠氏に関する研究は、明治以降戦前まで地元の前田喜一郎、小友叔雄等を中心におこなわれ、南朝事蹟の城館として昭和15年2月10日に国の史跡指定を受けることとなった。史跡指定は当時の戦時下における思想背景があったとしても、その事によって城館の改変に歯止めがかかり、現在に至ると平場・堀跡ともに平城形態の中では盛時の遺構を良好に残存している中世城館の一つであると言える。

浪岡町では、明治百周年の記念事業として史跡地内の公有化事業を昭和44年から着手している。当時、内館を除く平場は林檎園・畑地、堀跡は苗代として住民に使用されていたが、北館・猿楽館・東館・西館・検校館およびその間の堀跡は、ほぼ全面が昭和49年までに買収済となった。史跡指定地、136,000㎡のうち84%に及ぶ114,800㎡が公有化することとなった。

その後町当局は、史跡公園として史跡の活用を図るべく文化庁との協議にあたったが、基礎資料の不足によって明確な環境整備計画を策定するまでには至らなかった。そのため、昭和52年度から、環境整備の基礎資料を得るため発掘調査事業に着手した。昭和52年度には、町単独事業（総額300万円）として弘前大学教育学部歴史研究室に委託して調査を実施し、北館と東館の堀跡をトレンチ方式にて発掘した。翌昭和53年度からは補助事業として進展し、文化庁・県文化課・町教育委員会が一体となって東館・北館・内館の各平場および堀跡の調査を実施してきた所である。

(注3)
これまでに検出された遺構・遺物は多種多様に亘り、既刊報告書「浪岡城跡Ⅰ～Ⅷ」に詳しいので参照願いたい。

昭和60年度の調査は、前年度から開始した内館平場の2年次にあたり、礎石建物跡などが検出し浪岡城主館としての性格を濃くしている内館の平場を、以下の調査要項に従って実施した。

昭和60年度史跡浪岡城跡発掘調査要項

1. 調査の目的

浪岡城跡は、北畠氏居館として浪岡町民の精神的柱石となっている中世城館である。発掘調査は、将来「史跡公園」として環境整備する上での基礎資料を得るためにおこなうものである。

Fig. 1 浪岡城跡全体図



- | | | | |
|------|-------------------------|---------|-------------------------|
| 1. 新 | 館 15,480 m ² | 5. 内 | 館 7,890 m ² |
| 2. 東 | 館 5,400 m ² | 6. 西 | 館 13,830 m ² |
| 3. 猿 | 菜館 3,750 m ² | 7. 檢校 | 館 8,550 m ² |
| 4. 北 | 館 15,450 m ² | 8. 無名の館 | 22,250 m ² |

—— 史跡指定地 136,000 m²

2. 調査期間

事前作業 昭和60年4月1日～5月25日

発掘作業 昭和60年5月27日～11月2日（実際は11月22日まで）

整理作業 昭和60年11月5日～昭和61年3月29日（実際は昭和60年11月24日から昭和62年3月27日まで）

3. 調査対象区域と面積

青森県南津軽郡浪岡町大字浪岡字五所地内

浪岡城跡内館 約3,000㎡（実際の調査面積は約2,400㎡）

4. 調査員等

調査顧問 村越 潔 弘前大学教育学部教授

” 佐々木達夫 金沢大学文学部助教授

” 高島 成侑 八戸工業大学助教授

調査員 宇野 栄二 浪岡町文化財審議委員長

” 葛西 善一 浪岡町文化財審議委員

” 佐藤 仁 弘前高等学校教諭

” 三浦貞栄治 浪岡高等学校教諭

” 奈良岡洋一 藤崎園芸高等学校実習教諭

5. 調査協力員等

調査協力員 辻佳伸、須藤光治、羽柴直人、蜂須賀里佳（以上弘前大学）、
木村日登美（東北女子大学）

調査補助員 常田紀子、対馬桂子、佐々木忠義、工藤馨、斎藤とも子、成田和佳子、
武田嘉彦、坂本里見、伊藤圭子

調査作業員 大坂弘子、鎌田ふみ、奈良岡昭江、林ソミ、太田容子、杉山徹、
常田節子、出町とみゑ、有馬節子、津川ふさ、塙はる子、藤田幸子、
山田とも子、村岡せい子、太田ミツ、奈良岡英子、有馬恵子、工藤久子
小笠原トシエ、山内美世

6. 調査主体者

浪岡町 町長 工藤 善弘（昭和62年1月18日から阿部幡彦）

青森県南津軽郡浪岡町大字浪岡字稲村101の1

7. 調査担当者（事務局）

浪岡町教育委員会社会教育課 Tel 0172-62-3001

教 育 長 蝦名 俊吉

社会教育課長	鎌田 静治（昭和62年4月1日から土岐圭一）
社会教育係長	木村 鐵雄（昭和61年4月1日から石村正司）
社会教育係主査	佐藤 司
社会教育係主事	工藤 清泰（調査担当）
“ ”	成田 和子
“ ”	櫛引 顕芳
“ ”	木村 浩一（調査担当）

8. 調査方法

平場はグリッド方式により遺構・遺物の検出に努める。

9. 報告書の刊行

浪岡町教育委員会が作製・刊行する。

（注1）前田喜一郎 「浪岡御所と其城趾」他多数の著述がある。

（注2）小友叔雄は「津軽封内城趾考」「北畠本永録日記を読む」等の多数の著述がある。

（注3）(1)昭和52年度浪岡城跡発掘調査報告書 (1978年3月)

(2) “ 53 “ “ “ 浪岡城跡Ⅱ（1980年3月）

(3) “ 54 “ “ “ 浪岡城跡Ⅲ（1981年3月）

(4) “ 55 “ “ “ 浪岡城跡Ⅳ（1982年3月）

(5) “ 56 “ “ “ 浪岡城跡Ⅴ（1983年3月）

(6) “ 57 “ “ “ 浪岡城跡Ⅵ（1984年3月）

(7) “ 58 “ “ “ 浪岡城跡Ⅶ（1985年3月）

(8) “ 59 “ “ “ 浪岡城跡Ⅷ（1986年3月）

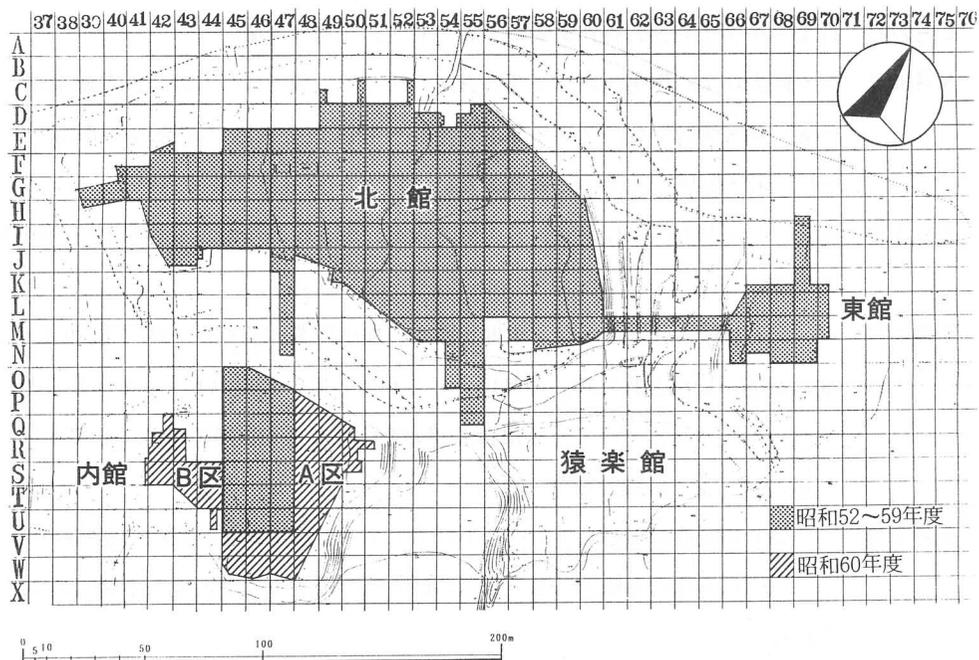
Ⅱ 調査経過

昭和60年

- 4月22日 事前調査開始。
- 5月15日 今年度調査区のグリッド設定並びに仮杭打ち作業開始。
- 5月23日 仮杭の設定（雑草の刈り取り及び樹木の間を抜けて設定するため、時間を要する）、器材点検、ベルトコンベアー、テントの設営。
- 5月27日 作業員を加え発掘調査作業開始。表土剥ぎ、草刈り作業。
- 5月30日 表土除去作業。作業区が昨年度調査区を挟んで二箇所になるため、内館東側（P～W-48～50区）及び南端（V・W-45～47区）をA区、内館中央部南側（O～U-43・44区）をB区と仮称する。（以下A区・B区として用いる。）
- 6月3日 A区、B区調査区平板測量、B・M・設定、表土除去作業。浪岡高校2年生150名見学。
- 6月6日 W-45・46区、昨年度トレンチ掘り箇所の検出作業。B区の一部で黒色土の遺構確認面が検出されたが、運動場として利用していた時のトラック部分であり、攪乱土が入り込んでいるため遺構確認面を広げてゆく段階で注意が必要となる。気温32℃、暑く砂ぼこりの一日。
- 6月8日 V-45・46区遺構確認面まで掘り下げる。V-45区で昨年度検出の建物跡に連なると思われる柱穴を確認。V-46区には、灰が覆土中に混入する小竪穴遺構がみられる。
- 6月10日 V・W-46区に礎石列が4間検出される。（SB60）
- 6月12日 V・W-45.46区、遺構確認面まで掘り下げ。SE111・112の井戸跡を検出。
- 6月14日 SE111・112、SX270・271・272掘り下げ開始。礎石建物跡（SB60）の柱穴は掘り方断面図作成のため半裁。SB61は'84検出のものに引き続く柱穴列と思われる。
- 6月17日 県道青森-浪岡線拡幅に伴う緊急調査が青森県の委託で始まる（昭和61年1月20日整理作業終了）。
- 6月19日 SE111・112・113・114・115、SX271・273、SD82の掘り下げ。
- 6月20日 SE110掘り下げ。SE111灰層確認状態写真撮影。SE112プラン平面実測完了。SE113・114・115掘り下げとセクション図作成。SX270掘り上がり写真撮影。SEと思われるものの中で直径が3m未満のものは、半裁し1mまで掘り下げ、セクション図を作成、プラン確認で終了することにした。

- 6月21日 S E111掘り下げ。S D82はS E111の南と北で確認状態が異なるため、S D92に変更する。S X271セクション図作成。S E114プラン確認。S D90掘り下げ。W-46・47区境にS E116設定。午後5時になっても気温が30℃、暑い一日。
- 6月25日 S E110・111掘り下げ、S X273・S D90掘り下げ。乾燥状態が続き、遺構確認・発掘作業に支障をきたしたため、下の水路から揚水し散布するが効果少。

Fig. 2 昭和60年度発掘調査区とグリッド配置図



- 7月1日 雨のため室内作業。発掘調査担当の一人、木村が8月10日まで奈良文化財研究所にて研修を受ける。
- 7月2日 S E111の北西部で隅柱検出
- 7月3日 R・S・T-48区第1層素掘り。
- 7月5日 P Q-48区、P-49区素掘り。調査員の佐藤仁先生指導にみえる。
- 7月10日 Q-48区、遺構確認面まで掘り下げ。Q-48区については、削平されており遺構確認面=地山と考えた方がよさそうである。
- 7月16日 R-49~51区を遺構確認面まで掘り下げ。Q R-48区から粘土貼遺構を検出（S X275）。S E111-240cmまで掘り下げる。四方の隅柱検出（1辺67~68cmの方形柱）

- 7月24日 S E 111木枠内覆土除去作業終了、床面直上から椀と茶臼が出土。S E 111は、横棧を2段(柄と切れ込み)で造作している。S X 287から鉈刀、S X 288から赤絵、苧引金出土。
- 8月7日 S E 121の覆土中から「かまど」状の焼土遺構が検出、実測・写真撮影を行う。
- 8月13日～15日 盆のため全員休み。
- 8月21日 乾燥が激しいため遺構の掘り下げを中断し、S・T-38・39区の第Ⅱ層を掘り下げる。
- 8月30日 調査区内の石等が踏み荒らされていた。乾燥時のこともあり復元は不可能。
- 9月9日 S E 118は染付が多く出土しているが、壁面崩落の危険性もあり、セクションも前日の雨で崩れるなど作業に危険性がでてきたため掘り下げを一時中止する。調査員の宇野栄二先生が指導に見える。明の星高校生65名見学。
- 9月13日 遺構掘り下げ、セクション図作成作業を進める。U～W-48区の遺構確認作業。中里町高齢者学級150名見学。
- 9月18日 Pit・遺構掘り下げ作業。Q・R-49区の遺構平面実測作業始める。
- 9月26日 A区北東部遺構平面実測終了。A区は掘り下げ作業が終了し、実測並びに精査作業が残る。以後はB区が作業の中心となる。
- 9月28日 S E 118掘り下げ終了(完掘)。B区は、竪穴建物跡・竪穴遺構がA区よりも多く検出されているが、ほとんどが重複している。
- 10月7日 S T 277・280、S E 137、S X 318・319・320掘り下げ。
- 10月11日 S E 138掘り下げ、-180cm付近から木枠検出(隅柱・横棧の一部)。セクションは井戸枠に沿った形できれいに残っている。
- 10月17日 S E 138木枠検出、1辺100cmの隅柱横棧形の井戸枠である。S T 246・247・280 S X 321・329の調査。S X 321からは遺物が多量に出土しており、廃棄場所と考えられる。
- 10月23日 S T 277精査、S E 138木枠側面実測、S B 71範囲確認作業、S X 321・330掘り下げ。十和田湖町文化財審議委員会来訪。
- 11月2日・3日 中世考古学シンポジウム開催、県内外から研究者、一般の人々を含め100名以上の参加者があった。
- 11月7日 掘り下げ作業終了。A区南端とB区的全景写真撮影。深く掘り下げたS E 111・128を危険防止のため-200cmまで埋め戻す。S B 38・60の礎石建物跡柱穴の埋め戻し。
- 11月21日 A区遺構平面実測終了。B区遺構平面実測開始。今年度の調査区面積は約2400

m²。

11月25日～昭和61年3月27日 室内にて整理作業。

※出土遺物と実測図面等は浪岡町教育委員会で保管している。

III 検出遺構と主な出土遺物

1. 礎石建物跡

礎石建物跡は昭和59年度調査区において1棟検出しただけであるが、そのSB38から30m南側で東西に1列だけ掘り方内に礎石を置いた遺構が発見された。SB38もそうであったが、掘り方内に礎石を置き柱を建てた時に礎石が土に覆われて外見上は掘立柱状を呈する建物を、礎石建物と扱えるのか疑問を提示する識者もいた。しかし、浪岡城に一般的な掘立柱建物の柱穴内に根石を入れることさえ稀である事実からすれば、柱の心身が礎石と考えた石の上で間尺を調節している事実から、あえて礎石建物跡と使用することを御寛容いただきたい。

SB60 (PL.3—上、Fig.5—b、Ch.1) —— U・V45区検出。規模は対応する梁間方向が発見できず0間、桁行が6間でその方向はN-76°-Eであるが、この東西軸はSB38の東西軸とまったく同じものであり、本遺構がSB38と関連のあることをうかがわせる。礎石の据え方はa1、a2がST275と重複したため掘り方線を明確に検出できなかったが、a3～a7は径80cm強、深さは遺構確認面から50cm前後の所に礎石を据えている。礎石上端の比高は最大27cmである。礎石の表面観察によると、表面が火を受けたと思われる痕跡があり、柱痕の部分は丸く石質表面が剥離するような状態となっていた。(Fig.5—bにおけるスクリーントーンの白ぬき部分)よって、これらの柱痕から柱心身を計測すると以下のようになる。

- a1 ～ a2 = 200cm (6.60尺)
- a2 ～ a3 = 215cm (7.09尺)
- a3 ～ a4 = 206cm (6.79尺)
- a4 ～ a5 = 211cm (6.96尺)
- a5 ～ a6 = 217cm (7.16尺)
- a6 ～ a7 = 192cm (6.33尺)
- 平均値 = 206.8cm (6.82尺)

Ch.1 (a) SB60覆土層序注記表 (Fig.5—b)

Pit No.	形状	長径×短径(cm)	深さ(cm)	礎石標高(m)	備考
a-1	—	—	—	35.62	ST275重複
a-2	—	—	—	35.70	ST275重複
a-3	円	83×80	(30)	35.85	
a-4	円	88×80	(18)	35.64	
a-5	円	88×78	50	35.63	
a-6	円	90×82	48	35.58	
a-7	円	78×(77)	26	35.82	

Ch.1 (b) SB60柱穴計測表 (Fig.5—b)

層序No.	特 徴
1	黒色土(7.5YR2/1)に小粒の明黄褐色砂質土(10YR6/6)を3%と極小塊の炭化物を1%含む。
2	黒色土(10YR2/1)に極小塊の炭化物を若干含む。
3	黒色土(10YR2/1)に小粒の黄褐色砂質土(10YR5/6)と極小粒の炭化物を若干含む。
4	黒色土(10YR2/1)に極小から中粒の黄褐色砂質土(10YR5/6)を15%と小塊の炭化物を2%含む。
5	黒色土(7.5YR2/1)に黒色灰(10YR1.7/1)を部分的に3%と小粒の黄褐色砂質土(10YR5/6)を2%とにぶい黄褐色粘土(10YR7/3)を若干と極小塊の炭化物を1%含む。
6	黒色土(7.5YR2/1)に明褐色砂質土(10YR6/6)を2%と黒色灰(N2/0)と極小塊の炭化物を1%含む。
7	黒色土(7.5YR2/1)に極小粒の明黄褐色砂質土(10YR6/6)を2%と極小粒の炭化物を1%含む。
8	黒褐色土(10YR3/2)に極小から小粒の淡黄色砂質土(2.5Y8/4)を2%と小塊の炭化物を1%含む。
9	黒褐色土(10YR2/2)に極小から小粒の明黄褐色砂質土(10YR6/6)と小から中塊の炭化物を1%含む。
10	黒褐色土(10YR2/2)に極小塊の炭化物を若干含む。
11	黒色土(10YR2/2)に極小粒の黄褐色砂質土(10YR5/6)を1%未満と褐色灰(10YR4/1)と極小塊の炭化物を1%含む。
12	黒褐色土(10YR2/3)に極小から中塊の炭化物を1%含む。
13	地山。明黄褐色砂質土(10YR6/6)。

Fig. 3 内館礎石・掘立柱建物跡配置図



Fig. 4 S B44実測図

Ch. 2 S B44柱穴計測表

Pit No.	形状	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備考
a-3	方	50 × 48	63	
a-4	円	38 × 38	44	
b-3	方	48 × 46	48	
b-4	—	—	—	
c-3	方	52 × 46	52	
c-4	方	43 × 39	48	
d-1	—	—	—	
d-2	方	51 × 45	35	
d-3	方	66 × 52	33	
d-4	不	52 × 48	62	
e-1	不	48 × 48	26	
e-2	方	55 × 46	20	
e-3	方	54 × 52	(33)	
e-4	不	47 × (49)	33	
f-1	不	39 × 34	33	
f-2	円	45 × 40	41	
f-3	方	59 × 54	43	
f-4	不	63 × 49	55	
g-1	不	60 × 48	63	
g-2	方	52 × 41	54	
g-3	不	—	—	
g-4	不	55 × 53	59	

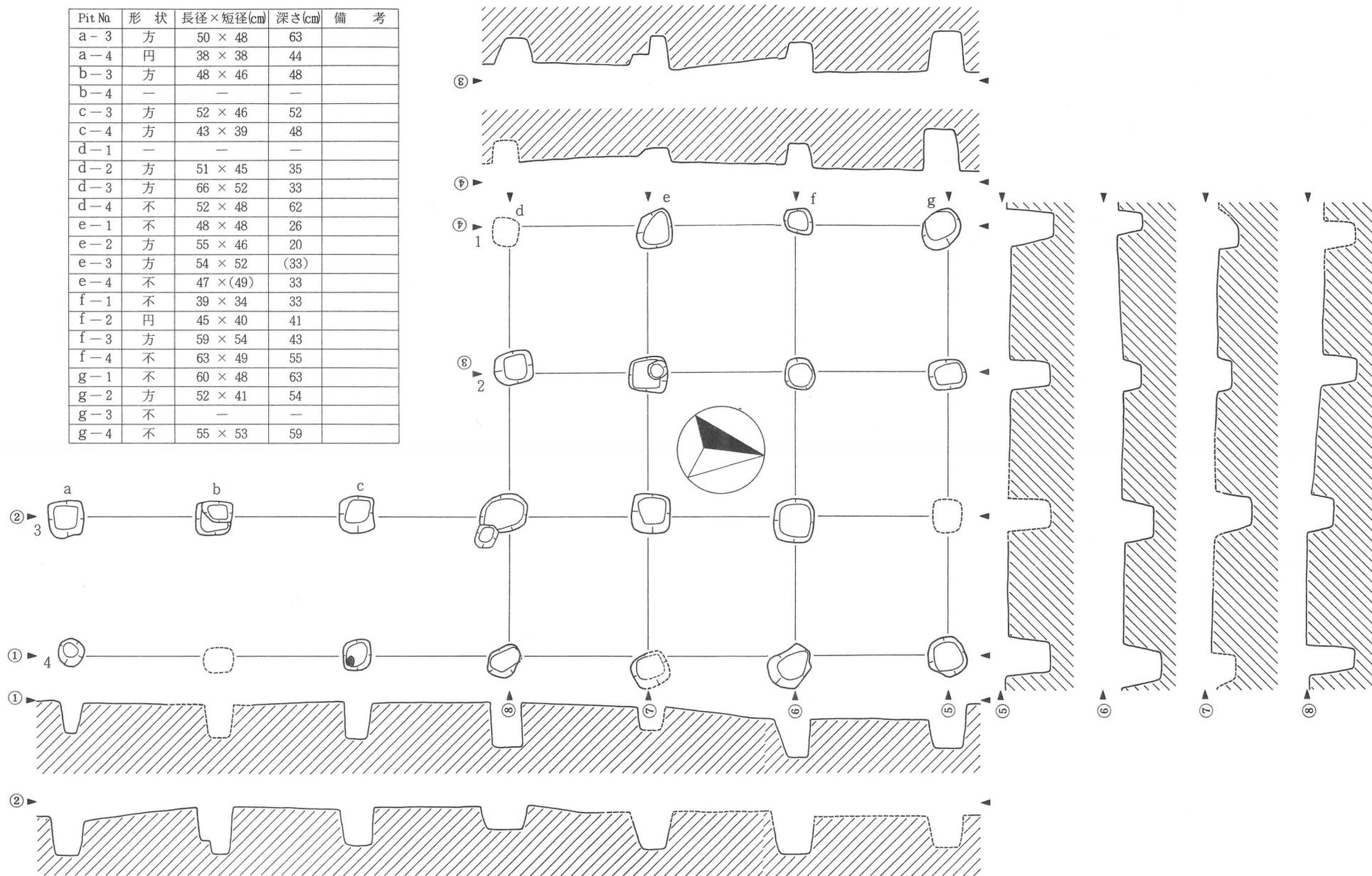
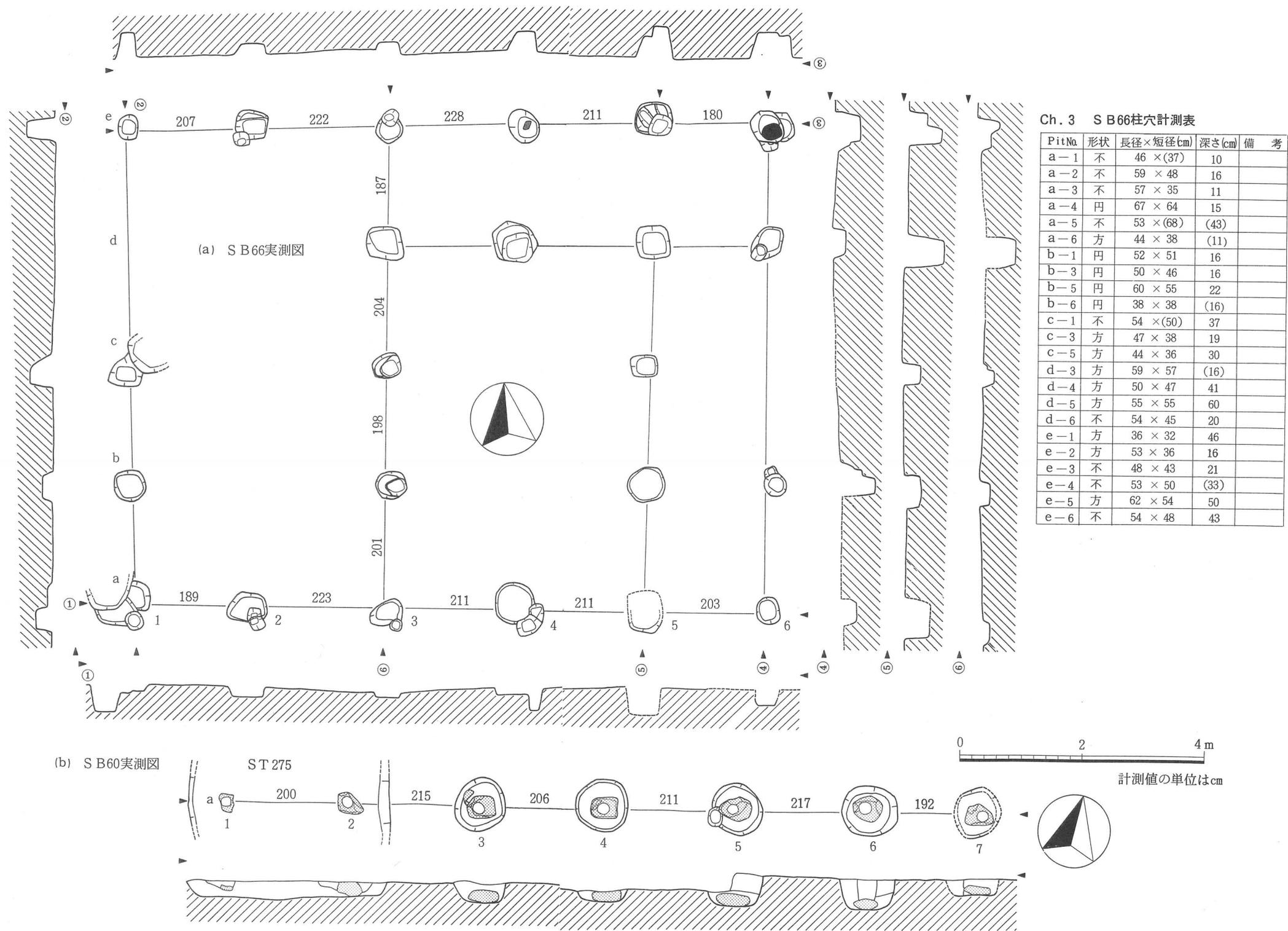


Fig. 5 S B60・66実測図



S B 38の場合は、1間の平均値が196.96cm（6尺5寸）であったのと比較すると本遺構は間尺が長くなっている。重複する遺構にはS T 275（旧）があり、a 6の部分にだけ層序断面に柱痕らしい形跡が発見されているが出土遺物に丸釘があったため新規の攪乱とも推定される。他の掘り方覆土からの出土遺物としては、a 2から不明鉄製品、a 3から不明鉄製品と角釘、a 5から美濃灰釉皿、角釘、○宋通○、a 7から美濃灰釉皿、角釘が出土しており、16世紀代の廃絶と推定される。

2. 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡と認定したものは12棟であり、その内6棟は昭和59年度調査区と連続するものである。以下、その規模・間尺・重複関係・出土遺物等について報告する。

S B 44（Fig. 4、Ch. 2）—— U・V 45区検出。東西軸4間、南北軸4間の主屋に、1間×3間の張り出し部が南側へ伸びる。この張り出し部は、破線で示した通り1間×2間の別棟である可能性もあるが接距離が200cmで本建物跡の間尺に近いことから一応張り出しとして考えた。南北軸の方向はN-7.5°-Wである。柱穴の掘り方は方形プランが多く、一辺50cm前後となり深さは外側が40cm以上、内側が30cm前後と比較的浅く、現状では4×4間の総柱建物跡になると考えられる。間尺の基本は200cm（6.6尺）を使用しており、一間あたりの長短はあるもののほぼ6.6尺の範囲で柱穴が並んでいる。重複する遺構としては、S T 258（旧）、S F 64（新）があり、柱穴から出土している美濃灰釉皿、青磁皿、無文銭から16世紀代の廃絶と推定される。

S B 63 —— Q・R-48・49・50区検出。4間×7間の規模を有すると考えられるが現在検討中のため次年度に報告予定。

S B 64 —— Q・R・S-47・48区検出。5間×3間以上の規模を有すると考えられるが現在検討中のため次年度に報告予定。

S B 65 —— Q・R-47・48区検出。7間×3間の規模を有すると考えられるが現在検討中のため次年度報告予定。

S B 66（P L. 2-上、Fig. 5、Ch. 3）—— Q・R-49・50区検出。長軸（東西）5間、短軸（南北）4間の規模を有する。ただし、張り出しとみられる部分が南辺東側に1×2間である可能性もあり今後再検討する予定である。東西列で見ると、a列とd列の柱穴が一辺50cm以上の比較的大きい掘り方を呈するのに対して他は、径40cm前後の円形あるいは不整形の掘り方を呈している。短軸方向はN-4°-Eである。重複する遺構としては、S D 95（旧）、S D 94（新旧不明）、S B 63（新旧不明）、S B 73（新旧不明）、S B 67（新旧不明）等がある。間尺は、最小180cm（6.0尺）から最大228cm（7.5尺）まであり、a列、e列、3列の平均値は

205.3cm (6.77尺) であり、6.6尺より若干幅広の間尺となっている。柱穴からの出土遺物には a 4 から紹聖元宝、e 2 から瓦質土器他が出土しており、廃絶時期は15～16世紀と考えられる。

SB67 (PL. 2、Fig. 6、Ch. 4) —— Q・R48・49区検出。長軸(東西)3間、短軸(南北)2間の規模を有し、短軸方向はN-8°-Wである。本掘立柱建物跡の柱穴は方形基調の掘り方を呈し、一辺30cm弱と小形のプランに対して深さは50～80cmと非常に深い掘り方である。重複する遺構としては、S×275(新)、SE127(新旧不明)があり、廃絶年代を推定できる遺物は出土していないが、b 3の部分にあたる柱穴(今回は掘立柱の柱穴と考えなかった)からは砥石が出土しており注目できる。柱間をみると、最小値

が140cm (a 1～a 2、b 4～c 4)、最大値が200cm (a 4～b 4) であり、160cm～150cmの使用度が高い。この間尺は6.6尺を基準とした場合の $\frac{1}{4}$ の数値に近く、一般的には主屋以外の縁というような部分で使用する事が多い。

(SB02参照)しかしながら、本柱穴の形状・深さ・不規則性はそのまま壁面が削平された竪建物跡とも以ており注意を要する点である。

Ch. 4 SB67柱穴計測表

Pit No.	形状	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備考
a-1	円	28×27	(57)	
a-2	方	25×20	57	
a-3	方	29×27	68	
a-4	方	27×26	59	
b-1	方	25×23	(25)	
b-4	不	26×—	54	
c-1	不	28×24	58	
c-2	方	24×23	65	
c-3	円	29×29	81	
c-4	方	22×22	(56)	

Fig. 6 SB67実測図

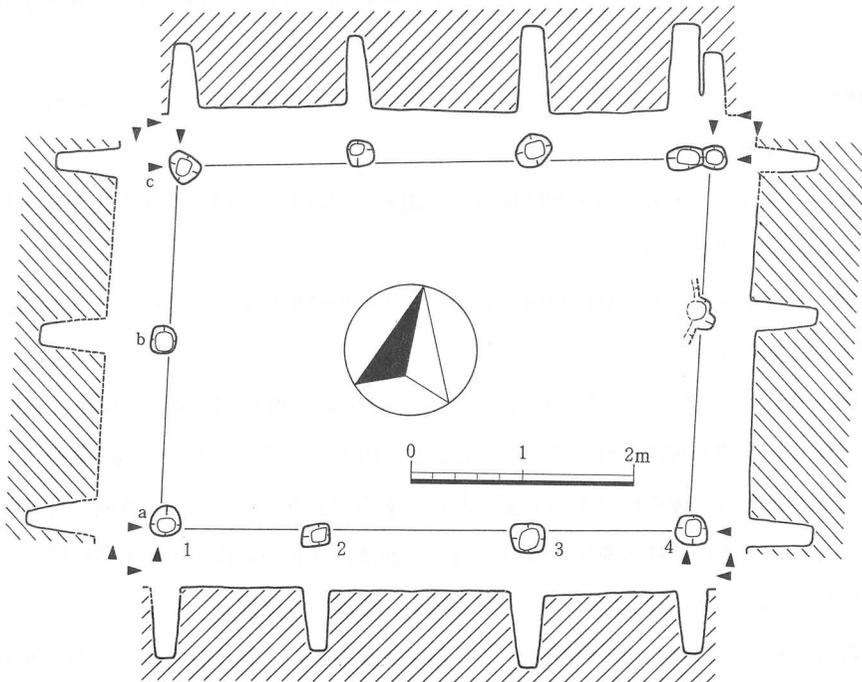


Fig. 7 S B68実測図

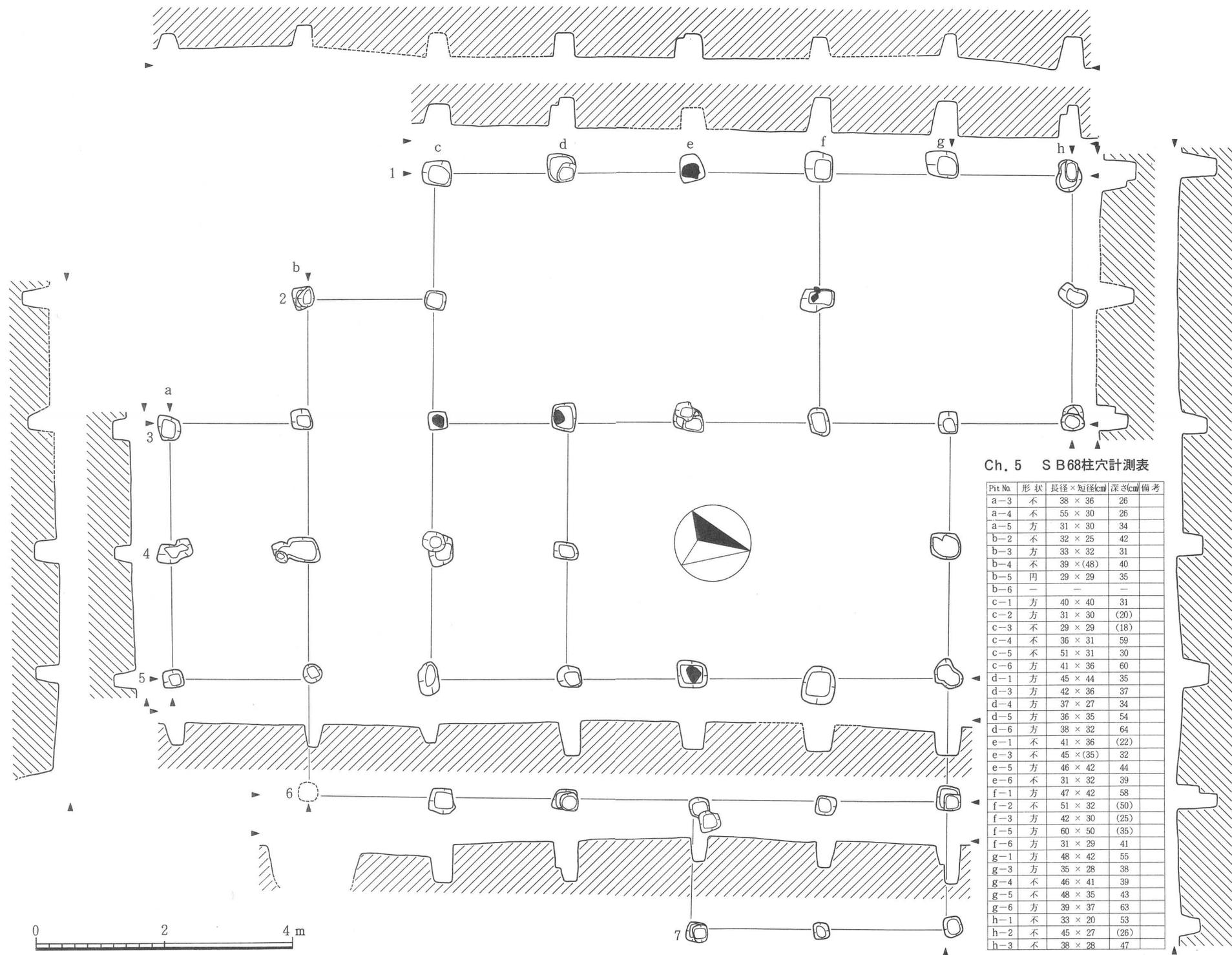
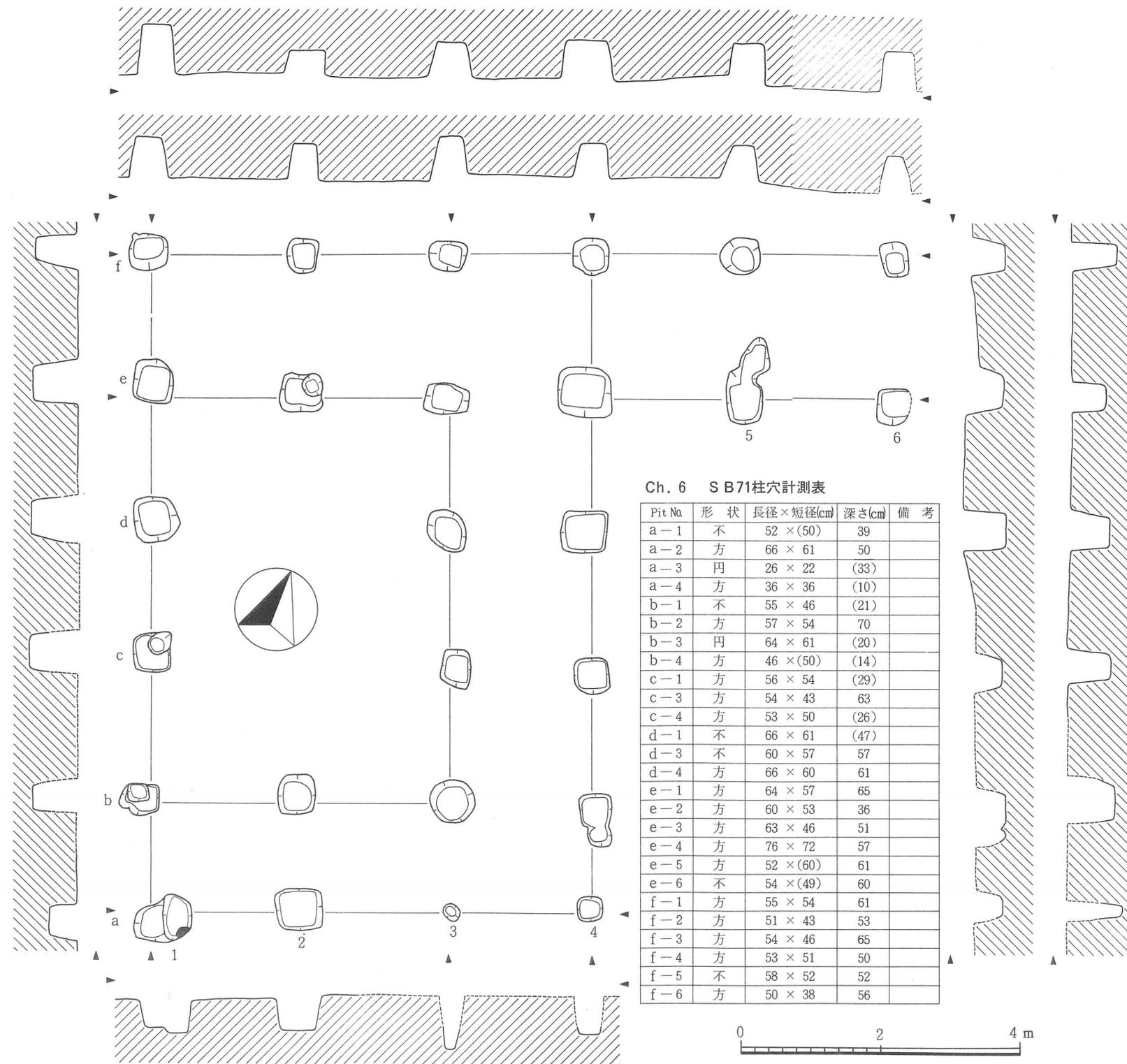


Fig. 8 S B71実測図



SB68 (P.L. 2、Fig. 7、Ch. 5) —— S・T・U48・49区検出。長軸(南北)7間、短軸6間の規模を有し、長軸方向はN-11.5°-Wである。柱穴の間尺は6.6尺(約200cm)を基準としており、最大220cmから最小で185cmの計測値は2間ないし3間の測点によってほぼ6.6尺の範囲に入ってくる傾向がある。柱穴の掘り方は方形基調であり、一辺30cm前後、40cm前後、50cm前後の各種が存在し、深さも30~60cm前後と統一的ではない。しかし、その配置をみると、南側に2間×1間の張り出し(おそらく出入口部分と考えられる)部を有し、b6の柱穴が存在したとすれば南側と東側に1間幅の縁を回していたような柱穴配置である。さらに3の列を境に東側に六間と四間、西側に六間と二間を配置しているのは二列平面の系譜に連なるものと考えられる。特に注目されるのは、柱穴の上端に川原石を据え付けて、修理ないしは柱据え付けの補強をおこなっている点である。e1、c3、d3、e5がそれであり、礎石構成の建物跡であったSB38が本遺構の西側にほぼ軸を同じくして存在することは、礎石建物跡の発生と系譜を考える上で示唆に富む所である。柱穴内からの主な出土遺物としては、b4から染付皿、e1から美濃天目碗、f2から染付皿と角釘、f5から美濃灰釉皿、g4から染付皿と無文銭があった。よって本遺構の廃絶時期は16世紀代と考えられる。

SB69 —— S・T43・44区検出。東西5間、南北4間ほどの規模を有すると推定されたが、柱穴の配置が不明確なため、現在検討中の掘立柱建物跡である。

SB70 —— S42・43区検出。東西2列に6間の並びは確認したものの竪穴建物跡との重複が激しいため北側での柱穴配置を確認することができず、現在検討中である。

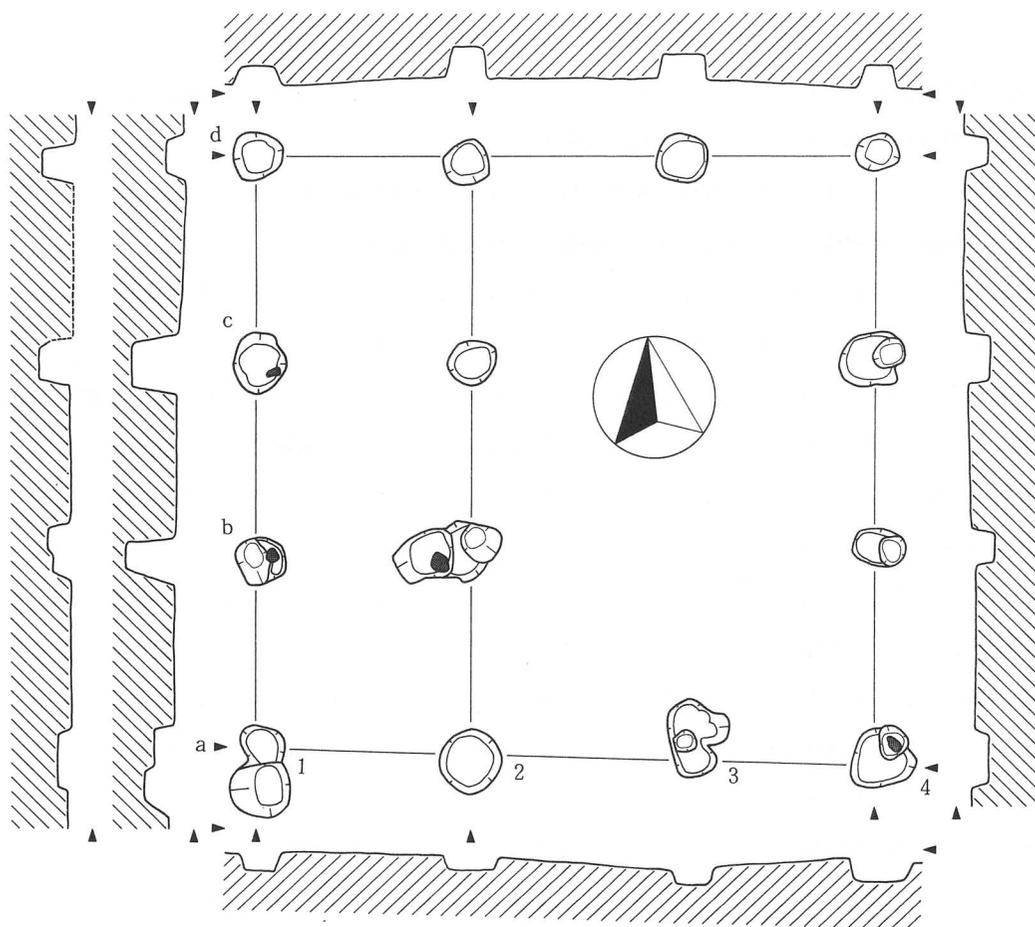
SB71 (P.L. 3一下、Fig. 8、Ch. 6) —— Q・R42・43区検出。長軸(南北)5間、短軸(東西)3間の主屋に2×1間の張り出しが東側北端に付属する規模である。張り出し部は拡張する可能性もある。柱穴の掘り方は、方形基調で一辺60cm以上のものから30cm前後のものまで各種存在し、深さは50~60cmぐらいのものが多い。ただし、a3については明確に本遺構のものとは断定できない。柱穴配置をみると3間×2間の主屋部分の南・東・北側に縁を回す形態と考えられ、東側北端から東に向かって2間×1間の張り出しが出入口等の施設になる可能性が高い。しかしながら柱穴の間尺についてみると、a列からb列へが160cm(5.3尺)を使用している以外、200cm(6.6尺)を基準としていることから南側の縁と、東・北側の縁では機能上の違いがあるのかもしれない。重複する遺構としては、ST277、ST280、ST282、ST283等の竪穴遺構およびSB70があり、新旧関係については不明である。主な柱穴からの出土遺物としては、c3から小札、d3から鉄滓と皇宋通宝、e1から白磁皿2点、e2から白磁皿、f1から青磁碗片4点、f2から青磁碗、f4から青磁鉢、a2から慶元通宝と聖宋元宝があった。出土遺物からは16世紀前半以前の廃絶と考えられるが明確でない。

SB72 —— S42区検出。2×2間までは確認しているものの南側が未調査のため後日報告す

Fig. 9 S B73実測図

Ch. 7 S B73柱穴計測表

Pit No.	形状	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備考
a-1	不	45 × 35	19	
a-2	円	61 × 59	13	
a-3	不	39 × 35	16	
a-4	不	56 × 55	21	
b-1	方	31 × 44	48	
b-2	不	58 × (50)	22	
b-4	方	50 × 37	28	
c-1	不	70 × 50	24	
c-2	円	45 × 43	45	
c-4	不	54 × 52	29	
d-1	不	49 × 46	17	
d-2	不	44 × 41	35	
d-3	方	48 × 48	25	
d-4	方	41 × 35	21	



る予定である。

SB73 (PL.2-上、Fig. 9、Ch. 7) —— Q・R48・49区検出。3間×3間のほぼ正方形プランを呈する規模で、間尺はすべて6.6尺(約200cm)を基準としている。南北軸はN-7°-Eの方向であり重複するSB66に近似している。柱穴の掘り方は不整形が多く径60~40cmぐらいで深さは浅い(本地域は地山面の削平がみられる場所にあたることも一因である)。柱穴配置は、東に2×3間の空間と西側に1×3間の空間を有し、部屋割りとも考えられる。主な出土遺物としては、a4から判読不明銭、b1から不明銅製品、b2から青磁皿、c1から永楽通宝・徳元〇と硯、c4から不明鉄製品と青磁稜花皿、d2から青磁碗が出土しており16世紀前半以前の廃絶と考えられる。(工藤清泰)

3. 竪穴建物跡

「竪穴建物跡」で扱うものは、竪穴形態を持つ遺構の中で、柱穴配置により上部構造が推定できる遺構である。竪穴形態を持つが、上部構造が不明な遺構については性格不明「竪穴遺構」として後述している。

ST246 (Fig.11-1)、Ch. 8-(a)(b) —— RS42区検出。東西440cm、南北380cm、深さ40cmの長方形プランを有する。棟通りに2本の柱穴がみられる。出土遺物は、青磁碗、染付皿、白磁皿、越前甕などの他に鉄釘、打根、銭貨、漆器等が出土している。SB70(旧)、ST279(旧)、と重複しており、出土遺物からは16世紀以後の廃絶と考えられる。なお、セクション図で2個の柱穴が遺構に伴っているが、これらについては、竪穴建物跡の柱穴の可能性はあるものの、確認はできない。また、セクション中の第1層が削られている部分は南北及び東西の断面のセクションをとった時のトレンチ跡であり、遺構とは関係しない。

ST247 (Fig.11-2)、Ch. 9-(a)(b) —— RS43区検出。東西490cm、南北500cm、深さ80cmの規模を有する。柱穴は、棟通りに4個存在するが、壁に沿う柱穴はみられない。西壁、南壁の一部で壁溝と思われるものがみられている。出土遺物は青磁碗・皿・盤、染付皿、白磁皿、珠洲播鉢、釘、鉄鏃、小札などがある。SB70(旧)、SX324(新旧不明)と重複しており、出土遺物と考え合わせると16世紀以後の廃絶と考えられる。

Fig. 10 内館竪穴建物跡配置図

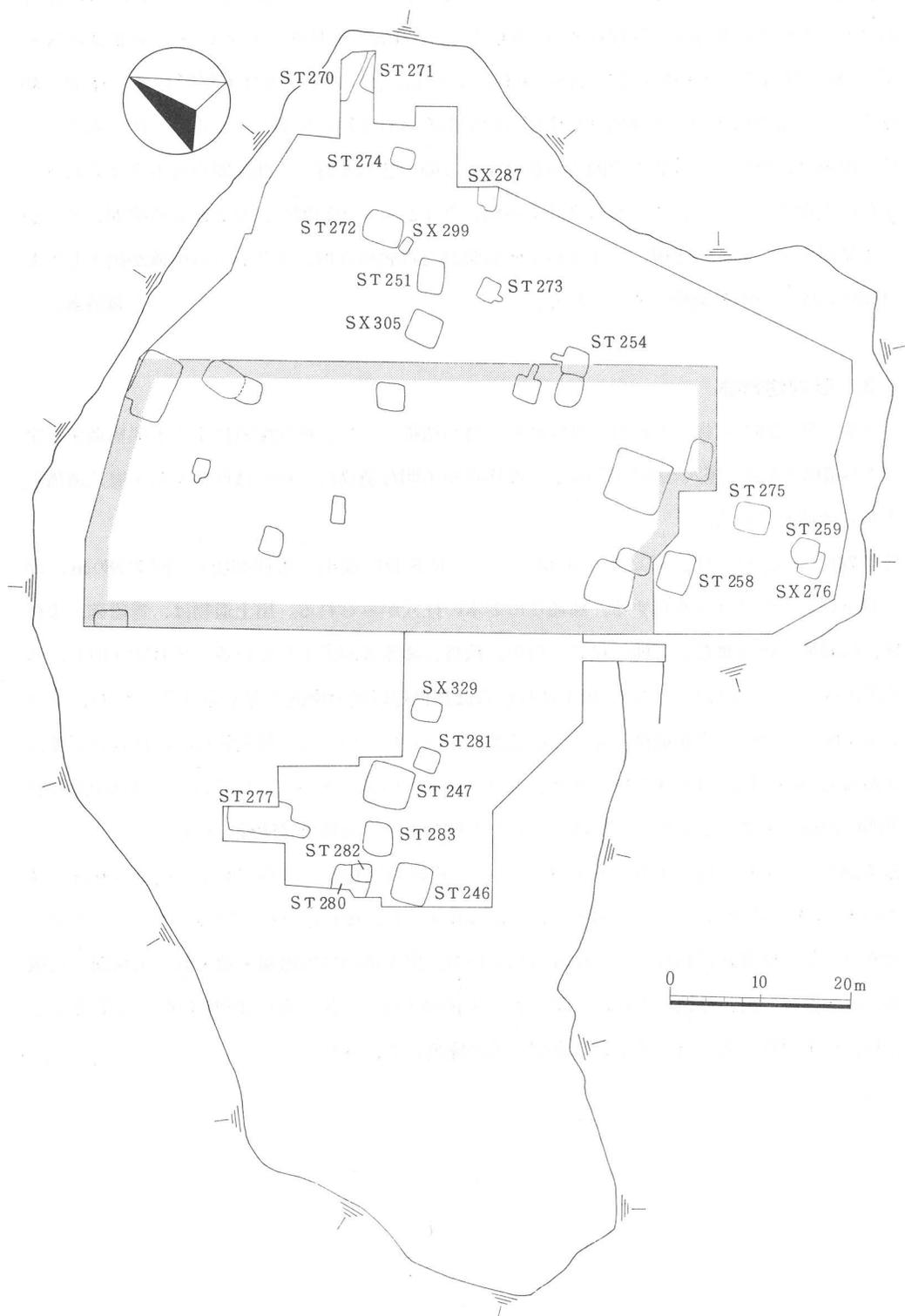
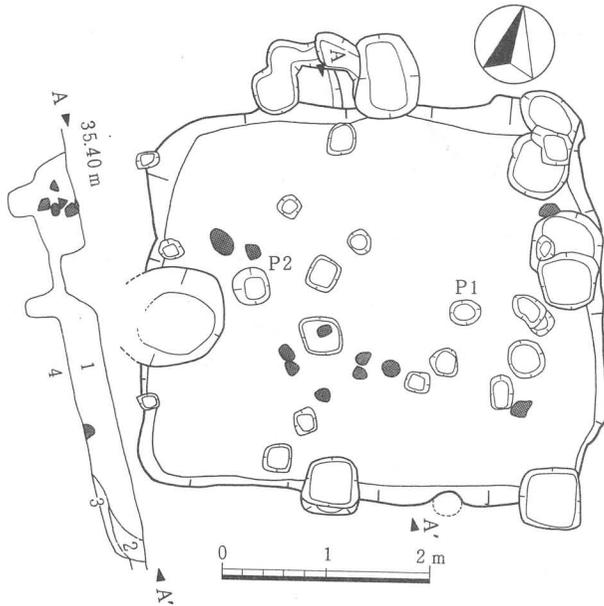
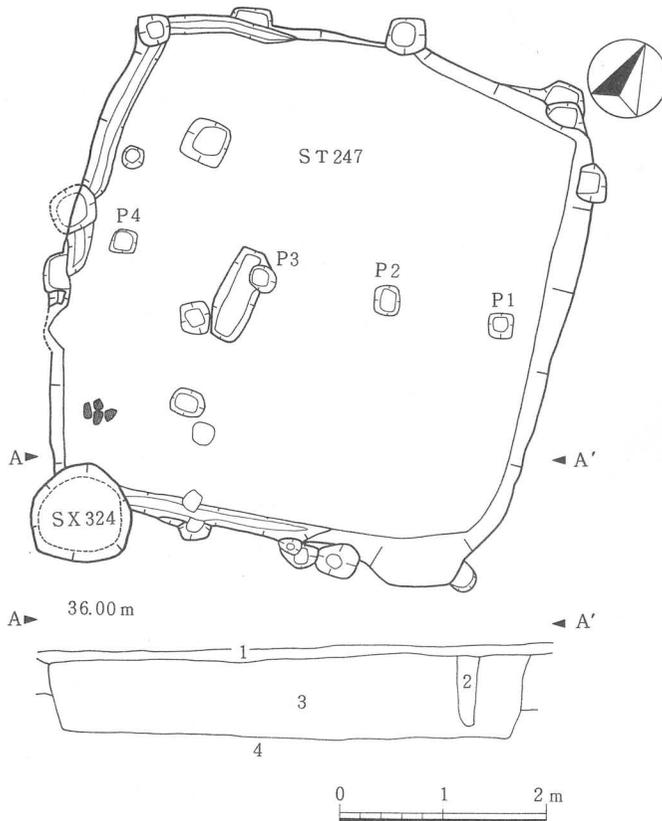


Fig. 11 竪穴建物跡 I

(1) S T 246 実測図



(2) S T 247・S X 324 実測図



Ch. 8

(a) S T 246 柱穴計測表

Pit No	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
1	不	30 × 24	51	
2	方	36 × 36	64	

(b) S T 246 覆土層序注記表

層序No	特 徴
1	黒色土 (10YR 2/1) に極小から大塊状の褐色砂質土 (10YR 4/6) を3%と、小塊状の炭化物を1%とにぶい黄褐色粘土 (10YR 5/3) を部分的に1%含む。
2	黒色土 (10YR 1.7/1) の単層。
3	黒色土 (10YR 2/1) に小塊状の褐色砂質土 (10YR 4/6) を1%含む。
4	地山。黄褐色砂質土 (10YR 5/6)。

Ch. 9

(a) S T 247 柱穴計測表

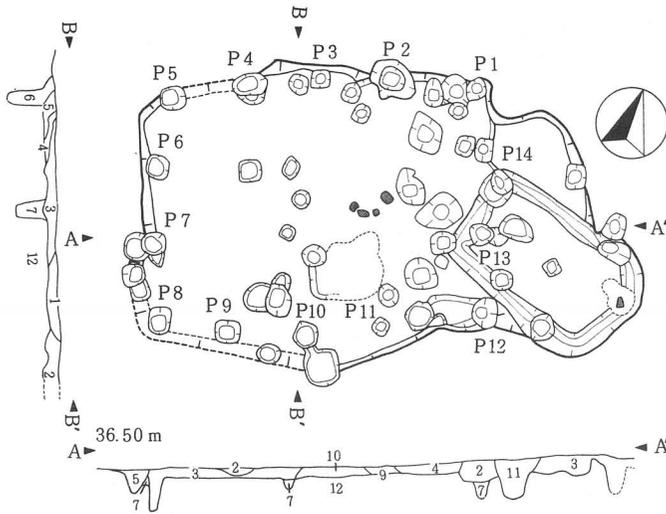
Pit No	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
1	方	25 × 24	50	
2	方	30 × 26	66	
3	円	28 × 26	57	
4	不	24 × 24	50	

(b) S T 247 覆土層序注記表

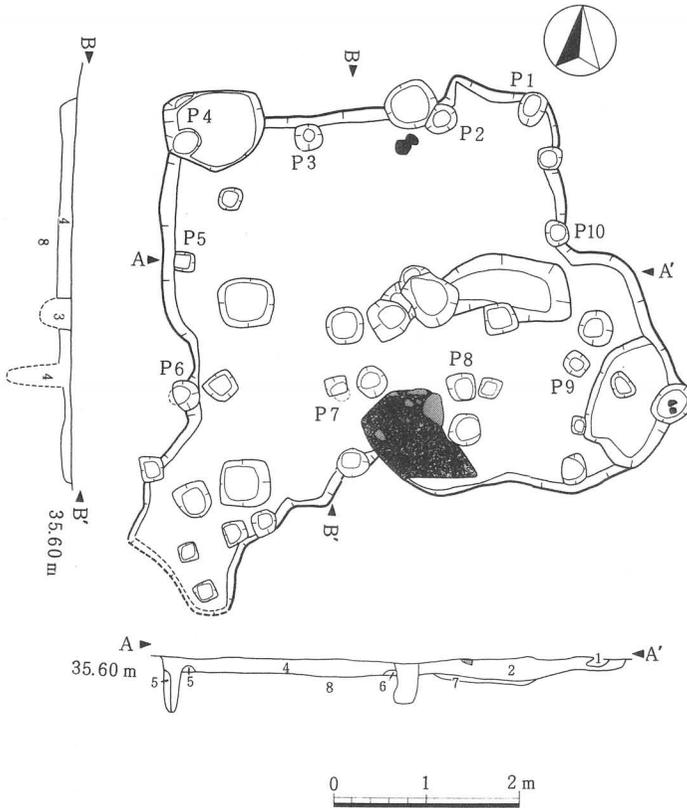
層序No	特 徴
1	黒褐色土 (7.5 YR 2/2)。しまりあり。
2	黒褐色土 (10YR 2/2)。しまりなし。
3	黒褐色土 (7.5 YR 2/2) に中ブロック状の明褐色砂質土 (10YR 6/8) が30%含まれる。
4	地山。黄褐色砂質土 (10YR 5/6)。

Fig. 12 竖穴建物Ⅱ

(1) ST 251 実測図



(2) ST 258・SF 69 実測図



Ch. 10

(a) ST 251 柱穴計測表

Pit No	形状	長径×短径(cm)	深さ (cm)	備 考
1	方	21 × 21	30	
2	不	28 × 26	26	
3	方	20 × 20	19	
4	不	37 × 24	35	
5	方	28 × 26	25	
6	方	26 × 23	36	
7	方	26 × 24	30	
8	方	29 × 24	25	
9	方	26 × 24	37	
10	方	26 × 26	37	
11	方	18 × 17	30	
12	不	32 × 28	28	
13	不	27 × 23	23	抜き取り痕
14	方	25 × 19	25	

(b) ST 251 覆土層序注記表

層序No	特 徴
1	黒褐色土 (7.5 YR 2/2) に、におい褐色粘土 (7.5 YR 5/3) が20%と明赤褐色粘土 (5 YR 5/8) を2%、炭化物を3%含む。
2	黒色土 (10 YR 2/1) に浅黄褐色粘土 (10 YR 8/3) と橙色粘土 (7.5 YR 6/6) を1%ずつ、明褐色砂質土 (7.5 YR 5/6) を15%含む。
3	黒褐色土 (7.5 YR 2/2) に、におい褐色粘土 (7.5 YR 5/3) が5%、橙色粘土 (7.5 YR 6/6) が1%と明褐色砂質土 (7.5 YR 5/6) をブロック状に3%含む。
4	におい褐色粘土 (7.5 YR 5/3) に黒褐色土 (7.5 YR 3/2) が20%と明褐色粘土 (5 YR 5/8) が20%と、明褐色砂質土 (7.5 YR 5/8) を2%と明赤褐色粘土 (2.5 YR 5/8) を1%含む。しまりあり。
5	黒褐色土 (10 YR 2/2) に明褐色砂質土 (7.5 YR 5/8) が20%と灰オリブ色パミス (5 Y 6/2) を3%含む。
6	黒色土 (10 YR 2/1) に明褐色砂質土 (7.5 YR 5/8) が20%と、灰オリブ色パミス (5 YR 6/2) と炭化物を1%ずつ含む。
7	明褐色砂質土 (7.5 YR 5/6) に黒褐色土 (10 YR 2/2) を7%含む。
8	黒褐色土 (10 YR 2/2) に、におい黄褐色粘土を10%と明褐色砂質土 (7.5 YR 5/8) を7%と炭化物を5%含む。
9	黒褐色土 (10 YR 2/2) に明褐色砂質土 (7.5 YR 5/8) をブロック状に5%炭化物を5%含む。
10	黒褐色土 (10 YR 2/2) に明褐色砂質土 (7.5 YR 5/8) を2%と炭化物を2%含む。
11	地山。明褐色砂質土 (7.5 YR 5/8)。

Ch. 11

(a) ST 258 柱穴計測表

Pit No	形状	長径×短径(cm)	深さ (cm)	備 考
1	方	38 × 30	58	
2	不	35 × 30	54	
3	方	31 × 29	59	
4	不	32 × 30	56	
5	方	27 × 22	39	
6	不	34 × 28	63	
7	方	24 × 20	53	
8	方	31 × 29	49	
9	方	26 × 25	69	
10	不	28 × 25	28	

(b) ST 258 覆土層序注記表

層序No	特 徴
1	黒色土 (10 YR 2/1) とにおい黄色砂質土 (2.5 Y 6/4) の混層。
2	黒色土 (10 YR 2/1) に黒色の灰 (10 YR 1.7/1) を3%と小塊の炭化物を1%含む。
3	黒色土 (10 YR 1.7/1) に小粒の黄褐色砂質土 (10 YR 5/6) を1%含む。
4	黒色土 (10 YR 2/1) に極小から中塊状の黄褐色砂質土 (10 YR 5/6) を5%と黒色の灰 (10 YR 1.7/1) を2%と小塊の炭化物を1%含む。
5	黒色土 (10 YR 2/1) と黄褐色砂質土 (10 YR 5/6) の混層。
6	暗褐色土 (10 YR 3/3)。
7	小から中塊状の黄褐色砂質土 (10 YR 5/6) に黒色土 (10 YR 2/1) を5%含む。
8	地山。黄褐色砂質土 (10 YR 5/6)。

ST251 (Fig.12-1)、Ch.10-(a)(b)——S 48・49区検出。東西380cm、南北300cm、深さ23cmの規模を有する。柱穴配置は東西4間、南北3間で東側に張り出しを持つ可能性があるが竪穴遺構(新旧不明)と重複しており確認できない。出土遺物は、床面から鉄滓が1点みられる。その他、ST251の遺物と思われるものに、染付碗がある。全体に遺物が少なく、時期は不明である。また、柱穴配置からは、遺構東半部で別の建物が構築されていた可能性も考えられる。

ST258 (Fig.12-2)、Ch.11-(a)(b) —— UV45区検出。東西440cm、南北320cm、深さ20cmの規模を有する。柱穴配置は東西3間、南北2間である。南壁西端に南西方向に張り出しを有する。南東部で竪穴遺構(新)と重複している。SF69の焼土遺構はその竪穴遺構と重複するものであり、ST258よりも新しいと思われる。出土遺物は床面直上から釘と大宋元宝がみられ、覆土中からは、青磁碗、美濃灰釉皿、産地不明播鉢、用途不明銅製品、紹聖元宝、治平通宝がみられた。なお、遺構確認作業時に出土した青磁碗、産地不明陶器碗、産地不明播鉢も遺構に伴う可能性がある。遺物からは15世紀の廃絶の可能性もある。重複する遺構としては、SB44(新)、SF69(新)がある。

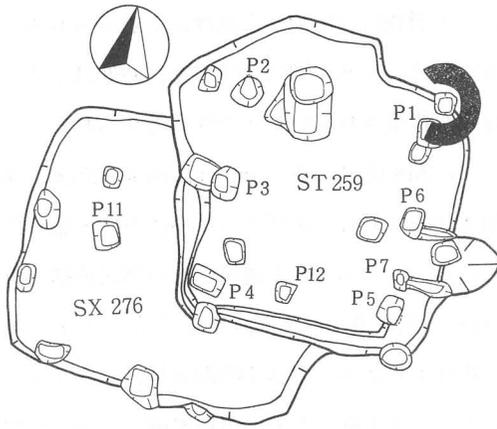
ST259 (Fig.13-1)、Ch.12、PL.4-(b) —— W45区検出。東西260(320)cm、南北260cm、深さ28cmの規模を有する。柱穴配置は東西1間、南北2間であるが、東西の間尺は約180cm、南北の間尺は約100cmで、平面形はほぼ正方形になる。東壁南側に張り出しを有し、出入り口施設用に柱を1本増し、壁溝を作っている。ST259の柱穴はPit1からPit7までである。南壁に沿って壁溝がみられる。南西部でSX276と重複するが新旧関係は不明である。また西半ではもう一つ別の遺構と重複していると思われるが、これも新旧関係は不明である。北東コーナーでSF71(新)と重複している。出土遺物は、青磁碗、瀬戸灰釉瓶子、産地不明陶器、釘、無文銭がみられる。遺物からは、15世紀代に廃絶した遺構の可能性もある。

ST270 (Fig.13-2)、Ch.13-(a)(b) —— R51区検出。調査トレンチに南壁のみが検出されたため、正確な規模は不明である(東西600cm以上、南北240cm以上、深さ20cm以上)。柱穴配置は、南壁に沿い3間が確認されているが、さらに西へもう1間延びる可能性がある。セクションにかかっている2個の柱穴は、竪穴建物跡に関係する可能性があるが、壁に沿った柱列との規則性がみられない。全体の柱穴配置が不明である現時点では竪穴建物跡の柱穴としては扱わない。出土遺物は、瀬戸灰釉浅鉢のほか、産地不明播鉢が数個みられる。遺構の覆土と思われる層序(セクション面)から出土した筭(Fig.55-267、PL.11-(b))もST270のものであろう。時期については不明である。

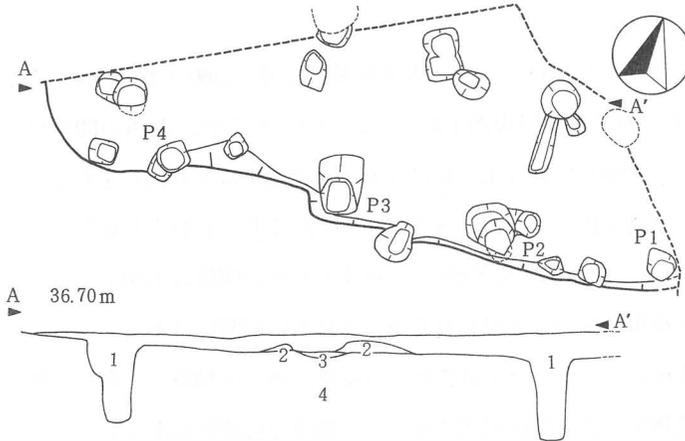
ST271 (Fig.13-3)、Ch.14-(a)(b) —— R51区検出。ST270と同様、トレンチにより北壁が検出されたもので正確な規模はつかめないが、東西310(420以上)cm、南北170cm以上、深さ60cm程度であろう。柱穴は北壁で東西方向2間、南北方向は東・西壁とも1間が確

Fig. 13 竪穴建物跡Ⅲ

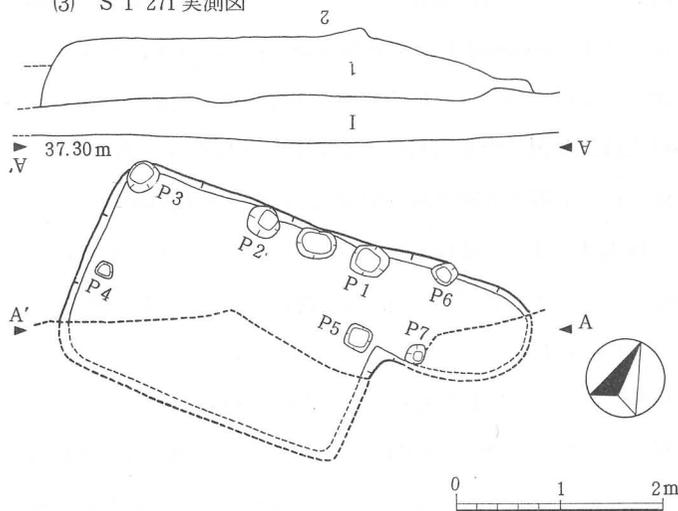
(1) ST 259・SX 276 実測図



(2) ST 270 実測図



(3) ST 271 実測図



Ch. 12
ST 259・SX 276 柱穴計測表

Pit No.	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
1	方	29×24	62	
2	不	30×27	52	
3	方	33×27	64	
4	方	34×23	42	
5	方	27×22	66	
6	不	28×21	53	
7	不	21×15	17	
11	方	27×25	56	ST276
12	方	20×17	21	"

Ch. 13
(a) ST 270 柱穴計測表

Pit No.	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
1	不	27×26	75	
2	不	34×31	104	
3	方	35×35	89	抜き取
4	方	30×28	65	

Ch. 13
(b) ST 270 覆土層序

層序 No.	特	徴
1	暗褐色土 (7.5 YR 3/3) に大～極小ブロックの黄橙色砂質土 (10 YR 8/8) を15%と小塊の炭化物を2%含む。	
2	黄橙色砂質土 (10 YR 8/8) に礫を15%含む。しまりなし。	
3	暗褐色土 (7.5 YR 3/3) に黄橙色砂質土 (10 YR 8/8) を小粒状に20%含む。	
4	地山。黄橙色砂質土 (10 YR 8/8)。	

Ch. 14
(a) ST 271 柱穴計測表

Pit No.	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
1	円	37×31	55	
2	円	34×33	36	
3	円	33×28	53	
4	不	16×15	24	
5	方	26×25	22	
6	不	23×23	21	
7	不	20×19	29	

Ch. 14
(b) ST 271 覆土層序注記表

層序 No.	特	徴
1	暗褐色土 (10 YR 3/3) に小～大ブロック状の明黄褐色砂質土 (10 YR 6/8) を15%と灰白色パミス (7.5 YR 8/1) と礫が3%ずつ、炭化物が1%含まれる。	
2	地山。明黄褐色砂質土 (10 YR 6/8)。	

認められ、東壁北端に張り出し及び張り出しに伴う柱穴が2本検出されている。出土遺物は染付皿一点のみである。16世紀に入ってから廃絶した可能性が高いと思われる。S T 270とは軸方向を同じくするが、両建物の間隔が狭いため同時期には存在しなかったと思われる。新旧関係は不明である。

S T 272 (Fig.14—(1)、Ch.15—(a)(b)) —— R 49区検出。東西360(520)cm、南北440cm、深さ24cmの規模を有す。柱穴配置は、東西1間、南北3間であるが、東西の1間は間尺が広く、南北の間尺の1間半から2間分ある。また、南北3間のうち、南端の1間は間尺が半間分しかなく、この建物跡は規模的には2間×2間半となっている。西壁北端には張り出しがあり、張り出しに伴う柱穴が、半間+1間検出された。出土遺物は、青磁碗、産地不明播鉢、釘、用途不明鉄製品、皇宋通宝、治平通宝、無文銭などがみられる。S E 130(新)と重複しているが、時期は不明である。

S T 273 (Fig.14—(2)、Ch.16—(a)(b)) —— S 48区検出。東西250cm、南北230cm、深さ30cmの規模を有する。柱穴配置は南北方向に2間、東西方向は1間であるが、南壁で等間隔に2個の柱穴が入り北壁でも対応する柱穴が認められることから、3間になる可能性も高い。柱穴の深さは約40cmであるが、南側のPit 4、Pit 5の間の2本は深さが約25cmであり、補助的な柱とも考えられる。出土遺物は、覆土内から産地不明播鉢、釘があるが、遺構確認の段階で出土した白磁皿、染付皿、中国褐釉壺、瀬戸大皿などもS T 273に関する遺物と考えられる。北部でS E 135(新)と重複し、西・北側に風倒木状の攪乱があるため、正確なプラン・規模が不明である。また、南壁には、壁溝と思われるものがみられる。16世紀以後の廃絶と思われる。

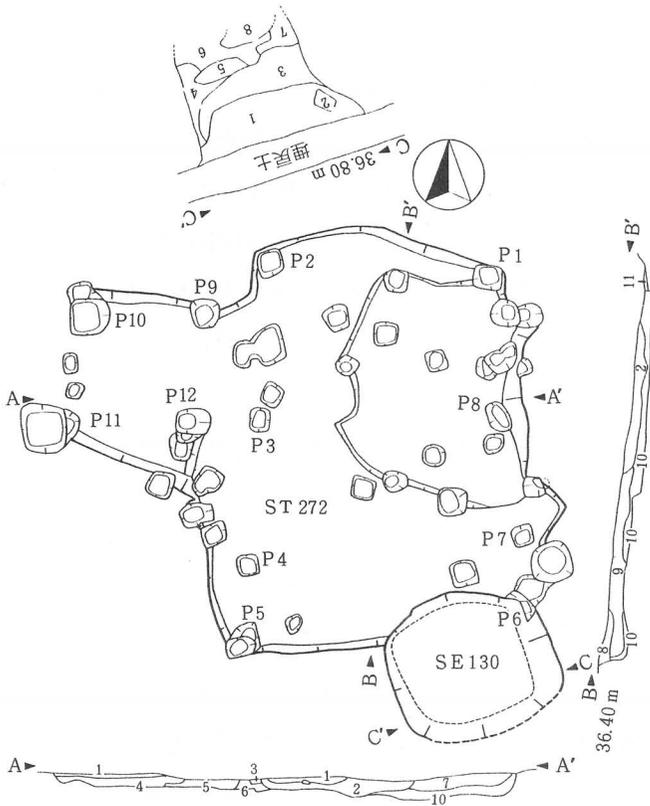
S T 274 (Fig.15—(1)、Ch.17—(a)(b)) —— R 50区検出。東西220cm、南北260cm、深さ24cmの規模を有する。柱穴配置は、東西2間、南北2間と推定されるが、確認されている柱穴は3個である。出土遺物は床面近くから青磁碗があり、覆土からは青磁皿、白磁皿、瀬戸鉄釉碗、羽口、洪武通宝、無文銭が出土した。このうち青磁皿と瀬戸鉄釉碗は二次焼成を受けている。遺物からは15世紀後半の可能性が考えられる。S X 277 B(旧)と重複しているが、S X 277 Aとの新旧関係は不明である。

S T 275 (Fig.15—(2)、Ch.18—(a)(b)) —— V 46区検出。東西330cm、南北400cm、深さ30cmの規模を有する。柱穴配置は、東西2間、南北2間で、中央にも柱穴がある総柱形態をとっていると思われる。出土遺物は青磁碗、青白磁陶枕?、瓦質手焙り、越前甕、産地不明播鉢、かわらけ、釘、鉄鏟、用途不明鉄製品がみられる。遺構南部にS B 60(新)が重複しており、礎石(根石)が残っている。また、北側ではS X 273と重複しているが、新旧関係は不明である。

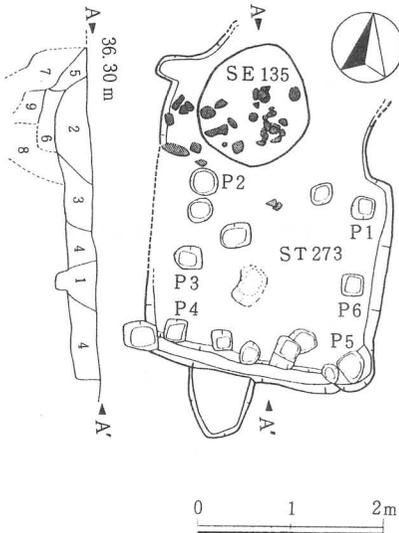
S T 277 (Fig.16、Ch.19—(a)(b)) —— Q 42区検出。東西370cm、南北710(906)cm、深さ36cmの規模を有する。柱穴配置は東西2間、南北3間と推定される。南壁西端に張り出し及

Fig. 14 竪穴建物跡Ⅳ

(1) ST 272・SE 130 実測図



(2) ST 273・SE 135 実測図



Ch. 15

(a) ST 272 柱穴計測表

Pit No	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
1	方	31 × 26	41	
2	方	28 × 27	56	
3	方	25 × 22	15	
4	方	23 × 23	46	
5	不	32 × —	20	
6	不	34 × —	47	
7	方	22 × 22	13	
8	不	36 × 23	21	
9	方	32 × 30	12	
10	方	43 × 40	13	
11	不	— × —	8	
12	方	32 × 28	45	

(b) ST 272・SX280 覆土層序注記表

層序No	特徴
1	黄灰色灰 (2.5 Y 6/1) と黒褐色土 (10Y R 3/2) の50%の混層。炭化物を1%含む。しまりあり。
2	黒褐色土 (10Y R 3/2) に黄灰色灰 (2.5 Y 6/1) が2%と小粒状の黄褐色砂質土 (10Y R 5/8) が3%含まれる。
3	黒褐色土 (10Y R 3/2) が30%と小粒状の黄褐色砂質土 (10Y R 5/8) が15%と灰白色バミス (7.5 Y R 8/1) が10%含まれる。
4	褐色土 (7.5 Y R 4/4) に小〜大ブロックの黄褐色砂質土 (10Y R 5/8) が15%と灰白色バミス (7.5 Y R 8/1) が3%と炭化物1%を含む。
5	黒褐色土 (10Y R 3/2) に褐色土 (7.5 Y R 4/4) が5%と小粒状の黄褐色砂質土 (10Y R 5/8) が5%と灰白色バミス (7.5 Y R 8/1) が2%と炭化物1%と褐灰色灰 (10Y R 4/1) が5%が含まれる。
6	黒褐色土 (10Y R 3/2) に小粒状の黄褐色砂質土 (10Y R 5/8) が5%と灰白色バミス (7.5 Y R 8/1) が2%と褐灰色灰 (10Y R 4/1) が5%と炭化物1%が含まれる。
7	黒褐色土 (10Y R 3/2) に大〜極大粒状の黄褐色砂質土 (10Y R 5/8) が7%と灰白色バミス (7.5 Y R 8/1) と礫と炭化物が1%ずつ含まれる。
8	黒褐色土 (10Y R 3/2) に小〜大ブロック状の黄褐色砂質土 (10Y R 5/8) が20%含まれる。
9	黒褐色土 (10Y R 3/2) に小〜大ブロック状の黄褐色砂質土 (10Y R 5/8) が7%と黄灰色灰 (2.5 Y 6/1) が15%と炭化物が1%が含まれる。
10	黒褐色土 (10Y R 3/2) と大ブロック状の黄褐色砂質土 (10Y R 5/8) の6 : 4の混層。
11	黄褐色砂質土 (10Y R 5/8)。しまりなし。
12	地山。黄褐色砂質土 (10Y R 5/8)。

(c) SE 130 覆土層序注記表

層序No	特徴
1	黒褐色土 (10Y R 2/2) に黄褐色砂質土 (10Y R 5/8) が極大粒状に7%と灰白色バミス (10Y R 8/1) が中〜大粒状に1%と炭化物を1%含む。
2	灰黄色灰 (2.5 Y 7/2) に明赤褐色土 (5 Y R 5/8) が極大粒状に5%が含まれる。
3	黒褐色土 (10Y R 2/2) に黄褐色砂質土 (10Y R 5/8) が極大粒状に10%、黄褐色土 (5 Y R 4/6) が極大粒状に1%と褐灰色灰 (10Y R 4/1) が30%と炭化物が1%と灰白色灰が塊状に10%が含まれる。
4	黒褐色土 (10Y R 2/2) に黄褐色砂質土 (10Y R 5/8) が1%と褐灰色灰 (10Y R 4/1) が2%含まれる。
5	黒褐色土 (10Y R 3/1) と、におい黄褐色砂質土 (10Y R 5/3) との混層に炭化物を1%含む。
6	黒褐色土 (10Y R 2/1) と褐灰色灰 (10Y R 4/1) の混層が、黄褐色土 (10Y R 8/3) をとり囲むように存在する。
7	黒褐色土 (10Y R 2/2) とにおい黄褐色砂質土 (10Y R 5/4) との混層に若干の褐灰色灰 (10Y R 4/1) と炭化物を含む。
8	におい黄褐色砂質土 (10Y R 5/4) と褐灰色灰 (10Y R 4/1) との混層に黄褐色砂質土 (10Y R 5/8) を極大粒状に50%含まれる。
9	地山。黄褐色砂質土 (10Y R 5/8)。

Ch. 16

(a) ST 273 柱穴計測表

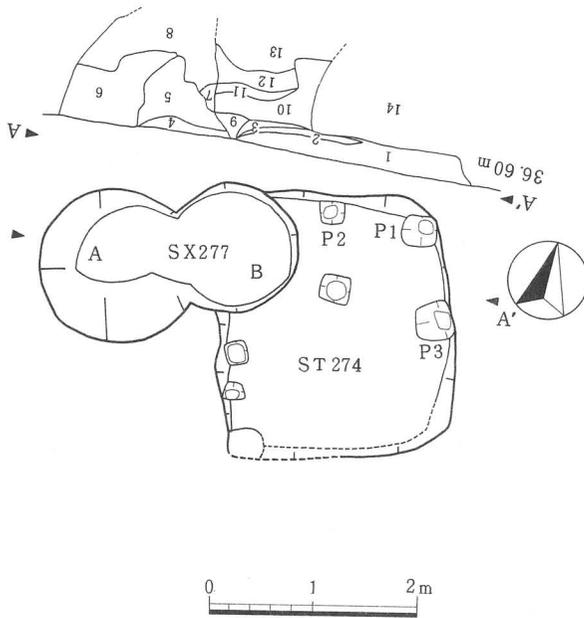
Pit No	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
1	方	25 × 25	50	
2	円	32 × 30	42	
3	不	32 × 28	35	
4	方	25 × 24	43	
5	不	31 × 28	44	
6	方	25 × 25	43	

(b) ST 273・SE 135 覆土層序注記表

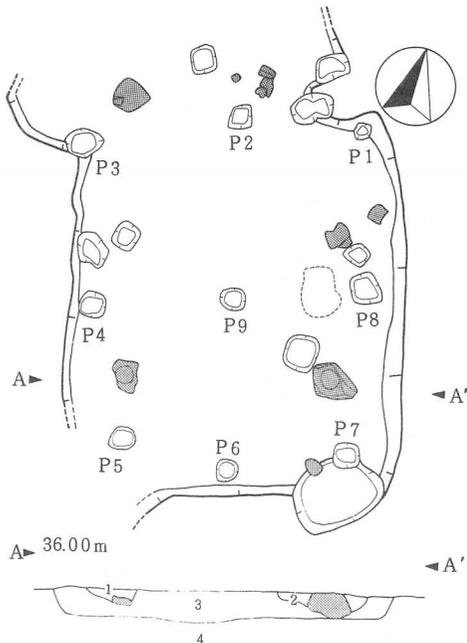
層序No	特徴
1	黒褐色土 (10Y R 2/2) と灰黄褐色土 (10Y R 5/2) との5対5の混層に明黄褐色砂質土 (10Y R 6/6) を中から大粒状に1%と炭化物を大粒状に少量含まれる。
2	黒褐色土 (7.5 Y R 2/2) に黄褐色砂質土 (10Y R 5/6) が小から極大粒状に3%とにおい黄褐色砂質土 (10Y R 6/8) を中から極大粒状に近い塊状に7%と炭化物を小粒状に3%が含まれる。
3	黒褐色土 (10Y R 3/2) に黄褐色砂質土 (10Y R 5/6) を小から大粒状に1%と黄褐色土 (10Y R 7/8) と灰黄色砂質土 (10Y R 6/2) が中から大粒状に1%と褐灰色灰 (10Y R 6/1) を少量と炭化物を大から極大粒状に1%が含まれる。
4	黒褐色土 (10Y R 2/3) に明黄褐色砂質土 (10Y R 6/6) を極小から極大粒状に15%と炭化物を中粒状に若干含まれる。
5	黒褐色土 (10Y R 2/3) とにおい黄褐色砂質土 (10Y R 7/3) と褐色土 (5 Y R 6/6) を極小から中粒状に3%が含まれる。
6	黒褐色土 (10Y R 3/2) に褐灰色灰を塊状に3%と炭化物を中粒状に若干含まれる。
7	黒褐色土 (10Y R 3/2) とにおい黄褐色砂質土 (10Y R 3/4) と褐色土 (10Y R 4/4) との5対3対2の混層に明黄褐色砂質土 (2.5 Y 7/6) を極大粒状に2%と炭化物を中から大粒状に若干含まれる。
8	黒褐色土 (10Y R 3/2) に黄褐色砂質土 (10Y R 5/6) を極小から小粒状に5%含まれる。
9	黒褐色土 (10Y R 2/2) とにおい黄褐色砂質土 (10Y R 7/4) を上層に大塊状に含まれる。
10	地山。黄褐色砂質土 (10Y R 5/6)。

Fig.15 竪穴建物跡 V

(1) ST 274・SX 277 実測図



(2) S T 275 実測図



Ch.17

(a) ST 274 柱穴計測表

Pit No	形状	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備考
1	方	34 × 30	58	
2	方	25 × 23	44	
3	不	39 × 36	56	

(b) S T 274・S X 227 A・B 覆土層序注記表

層序No	特 徴
1	黒褐色土 (10Y R 2/3) に黄褐色砂質土 (10Y R 5/6) が小から極大粒状に3%と炭化物が1%と灰白色灰 (7.5 Y 8/1) が薄い板状に散在している。
2	灰黄褐色灰 (10Y R 4/2) に炭化物を若干含む。しまりなし。
3	黒褐色土 (10Y R 2/3) と灰黄褐色灰 (10Y R 4/2) との混層に黄褐色砂質土 (10Y R 5/6) が小から大粒状に1%と炭化物を若干含む。
4	褐色砂質土 (10Y R 4/4) と黒褐色土 (10Y R 3/2) との7対3の混層。しまりややなし。
5	暗赤褐色土 (5Y R 2/3) に明褐色砂質土 (10Y R 6/6) を中から大塊状に2%と炭化物を若干含む。
6	黒褐色土 (7.5 Y R 2/2) に明褐色砂質土 (10Y R 6/6) を中から大塊状に2%と炭化物を若干含む。
7	暗褐色砂質土 (10Y R 3/3) と黄褐色砂質土 (10Y R 5/6) との5対5の混層。しまりなし。
8	黒褐色土 (10Y R 2/2) に黄褐色砂質土 (10Y R 5/6) が極大塊状に30%含まれる。
9	暗赤褐色土 (5Y R 3/2) に明褐色砂質土 (10Y R 6/6) が中粒状に1%含まれる。
10	黒褐色土 (10Y R 3/1) に明褐色砂質土 (10Y R 6/6) が大塊状に1%と炭化物が若干含まれる。
11	黄褐色砂質土 (2.5 Y 5/3) の単層。しまりなし。
12	黒色灰 (10Y R 1.7/1) に灰白色灰 (7.5 Y 8/1) が極厚い板状に10%と明赤褐色焼土 (2.5 Y R 5/8) が極大粒状に1%含み、黒色灰の層中に炭化物が少量含まれる。
13	にぶい黄褐色砂質土 (10Y R 7/4) に黒色土 (10Y R 2/1) を薄い板状に1%含まれる。
14	地山。黄褐色砂質土 (10Y R 5/6)。

Ch.18 (a) S T 275 柱穴計測表

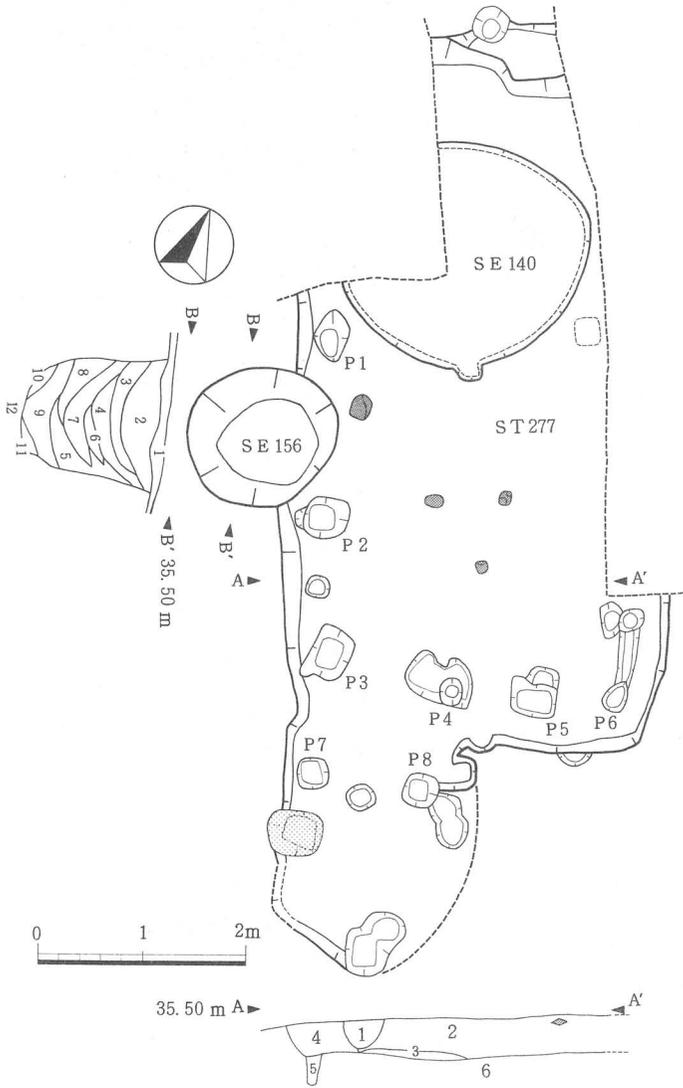
pit No	形状	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備考
1	不	17 × 17	7	
2	方	24 × 22	27	
3	不	37 × 28	26	
4	方	26 × 26	19	
5	不	25 × 23	27	
6	方	22 × 22	37	
7	方	26 × 25	17	
8	方	31 × 28	14	
9	方	24 × 22	18	

(b) S T 275 覆土層序注記表

層序No	特 徴
1	黒色土 (10Y R 2/1) に極小塊の炭化物を若干含む。
2	黒色土 (10Y R 2/1) に小粒の黄褐色砂質土 (10Y R 5/6) と極小塊の炭化物を若干含む。
3	黒色土 (10Y R 2/1) に極小から中粒の黄褐色砂質土 (10Y R 5/6) を15%と小塊の炭化物を2%含む。
4	地山。黄褐色砂質土 (10Y R 5/6)。

Fig. 16 竪穴建物跡VI

(1) S T 277・S E 156 実測図



Ch. 19 (a) S T 277 柱穴計測表

Pit No.	形状	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備考
1	不	34 × 24	—	
2	方	28 × 25	57	
3	方	40 × 33	77	
4	方	45 × 41	61	
5	不	50 × 38	67	
6	方	33 × 31	55	
7	方	35 × 33	45	
8	不	43 × 34	58	

(b) S T 277 覆土層序注記表

層序No.	特 徴
1	黒色土 (10 Y R 2/1) に黒褐色灰 (10 Y R 3/1) を3%と極小塊の炭化物を1%含む。
2	黒色土 (10 Y R 2/1) に極小粒から大塊状の黄褐色砂質土 (10 Y R 5/6) を2%と極小塊の炭化物を1%含む。
3	黒色土 (10 Y R 2/1) と黒褐色灰 (10 Y R 3/1) と灰黄褐色灰 (10 Y R 6/2) との混層に極小塊の炭化物を1%含む。
4	黒色土 (10 Y R 2/1) に小から中粒状の黄褐色砂質土 (10 Y R 5/6) を5%と極小塊の炭化物を1%含む。
5	黄褐色砂質土 (10 Y R 5/6) と黒色土 (10 Y R 2/1) との混層。
6	地山。黄褐色砂質土 (10 Y R 5/6)。

S E 156 覆土層序注記表

層序No.	特 徴
1	黒褐色土 (10 Y R 3/2) に灰黄褐色灰 (10 Y R 4/2) を大から極大粒に2%とにぶい黄褐色粘土 (10 Y R 5/4) を中粒状に2%と炭化物を極小塊に2%含む。しまりややあり。
2	黒褐色土 (7.5 Y R 2/2) に黄褐色砂質土 (10 Y R 5/6) を極小から極大粒状に5%と炭化物を極小塊に1%含む。
3	黒褐色土 (10 Y R 2/2) と黄褐色砂質土 (10 Y R 5/6) との6対4の混層。
4	黒褐色土 (7.5 Y R 2/2) に黄褐色砂質土 (10 Y R 5/6) を大粒状に1%と赤褐色焼土 (5 Y R 4/6) を大粒状に1%含む。
5	黒褐色土 (10 Y R 2/2) に黄褐色砂質土 (10 Y R 5/6) を中から極大粒状に7%含む。
6	黒褐色土 (10 Y R 2/2) と暗褐色砂質土 (10 Y R 3/3) の5対5の混層。
7	黒色土 (10 Y R 2/1) の単層。
8	にぶい黄褐色砂質土 (10 Y R 5/4) の単層。
9	黒褐色土 (10 Y R 3/1) に、にぶい黄褐色粘土 (10 Y R 5/4) を大から極大粒状に2%と黄褐色砂質土 (10 Y R 5/6) を小から極大粒状に5%含む。
10	暗褐色砂質土 (10 Y R 3/3) に黒褐色土 (10 Y R 3/1) を厚い板状に20%含む。
11	黄褐色砂質土 (10 Y R 5/6) 。しまりなし。
12	地山。黄褐色砂質土 (2.5 Y 5/3)。

び張り出しに伴う柱穴が確認される。南側の柱穴配置は、張り出しの影響で3間となっているが、柱穴の深さがPit4では若干たりず、補助柱的な要素が強い。出土遺物は、青磁鉢・碗・皿、白磁皿、美濃灰釉皿・鉄釉碗、瀬戸瓶子、珠洲甕・播鉢、越前甕、産地不明甕・播鉢、瓦質香炉、小札、鉄鏝、釘、鉄鍋、用途不明鉄製品、銅製高台、銅滓、政和通宝、咸平通宝、祥符元宝、元豊通宝、嘉祐通宝、天聖元宝、漆器などがみられる。重複関係はS E 140(旧)がみられるが、S E 156との新旧関係は不明である。15世紀後半廃絶の可能性が考えられる。

ST 280 (Fig.17-1)、Ch.20-(a)(b)、P L.5-(a) —— R 42区検出。東西340cm、南北430cm、深さ42cmの規模を有する。南北の棟通りに2個の柱穴が配置される。2個ともS B 71の柱穴と重複しているが新旧関係は不明である。またS T 282(旧)とS X 327(旧)と重複している。出土遺物には、青磁碗・皿、白磁皿、染付皿、美濃鉄釉壺、瀬戸灰釉瓶子、越前甕、瓦質碗 (Fig.49-169、P L.23-169)、産地不明甕・播鉢・無釉陶器、釘、用途不明鉄製品、銅製装飾具、銅滓、元祐通宝、皇宋通宝、祥符元宝、景祐〇〇、無文銭などがみられる。出土遺物からは16世紀に入ってから廃絶と考えられる。

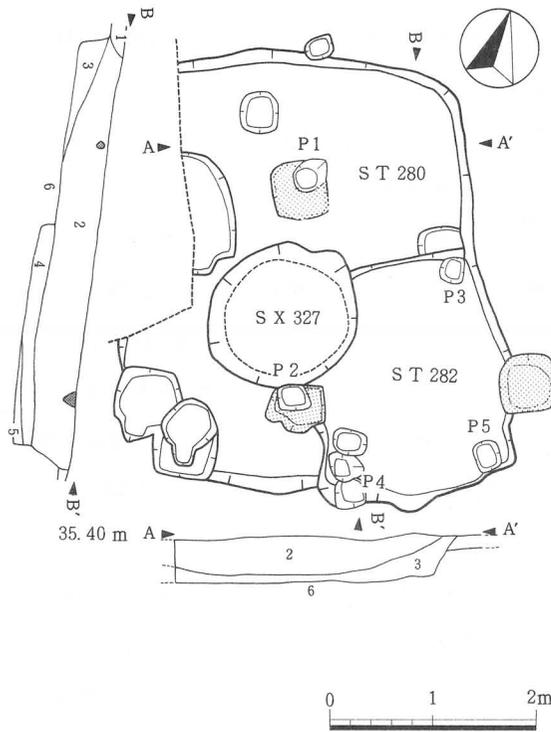
ST 281 (Fig.17-2)、Ch.21-(a)(b)、P L.5-(b) —— S 43区検出。東西244cm、南北252cm、深さ78cmの規模を有するほぼ正方形の遺構である。柱穴は四隅に配置されている。遺構中にみられる柱穴は、他の柱穴が深さ30cm以上あるのに対し、10cm程度の深さしかなく、また、位置も中心からずれているためS T 281に関する柱穴には入れなかったが、あるいは補助柱痕なのかもしれない。出土遺物には、青磁碗・盤、白磁皿、染付碗・皿、瀬戸卸皿、越前播鉢、珠洲系播鉢、産地不明播鉢、小刀、小札、三ツ目札、鉄鏝、釘、火箸、鋸、用途不明鉄製品、砥石、無文銭などがみられる。小型の堅穴建物跡であるが比較的深く、倉庫的な機能が考えられる。16世紀に入ってから廃絶と思われる、一時期に埋め戻された可能性が高い。

ST 282 (Fig.17-1)、Ch.20-(a)(b)、P L.5-(a) —— R 42区検出。東西190cm、本南北230cm、深さ60cmの規模を有する。柱穴は四隅に配置されるが、北西端の一個はS X 327と重複しているため(新旧関係不明)検出されていない。出土遺物には、白磁皿と釘がある。時期については不明である。形態・柱穴配置等S T 281との共通点が多く、S T 282についても倉庫的な機能が考えられる。

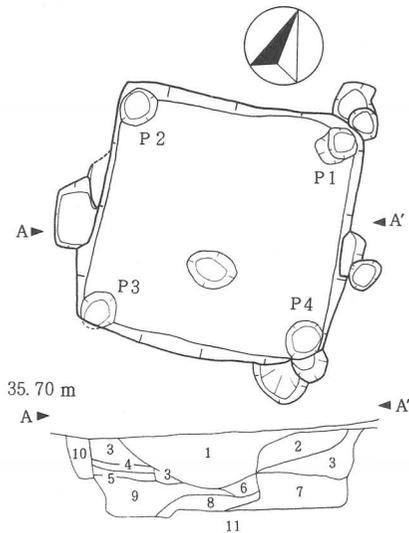
ST 283 (Fig.Ch.22-(a)(b)) —— R 42区検出。東西380cm、南北350(420)cm、深さ46cmの規模を有する不整形を呈している。柱穴は南北方向棟通りに3本配置されており、北壁中央部に張り出しと思われる部分があるが柱穴に接しており、張り出し・出入り口施設とは一概に断言できない。出土遺物には青磁碗・皿、白磁皿、染付碗・皿・水滴?、美濃灰釉皿、瓦質手焙り、産地不明鉢・播鉢、三ツ目札、火箸、釘、元豊通宝、無文銭、砥石などがみられる。新旧関係は、S B 71(旧)、S E 141(旧)であるが、S X 330との新旧関係は不明である。

Fig. 17 竪穴建物跡Ⅶ

(1) S T 280・282、S X 327 実測図



(2) S T 281 実測図



Ch. 20 (a) S T 280・282 柱穴計測表

Pit No.	形状	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備考
1	不	36 × 28	61	S T 280
2	方	29 × 26	41	"
3	方	26 × 24	51	S T 282
4	不	35 × 28	48	"
5	方	29 × 25	51	"

(b) S T 280・282 覆土層序注記表

層序No.	特徴
1	黒色土 (10 Y R 2/1) に極小から中粒状の黄褐色砂質土 (10 Y R 5/6) と小塊状の炭化物をそれぞれ1%ずつ含む。
2	黒色土 (10 Y R 2/1) に極小から中粒状の黄褐色砂質土 (10 Y R 5/6) を5%とにふい黄褐色粘土 (10 Y R 5/4) を全体的に3%と小塊状の炭化物を1%含む。
3	黒色土 (10 Y R 1.7/1) に中塊状の黄褐色砂質土 (10 Y R 5/6) と極小塊状の炭化物をそれぞれ1%ずつ含む。
4	黒色土 (10 Y R 2/1) に極小から中粒状の黄褐色砂質土 (10 Y R 5/6) を2%とにふい黄褐色粘土 (10 Y R 7/3) と小塊状の炭化物をそれぞれ1%ずつ含む。S T 282の覆土。
5	黒色土 (10 Y R 2/1) と黄褐色砂質土 (10 Y R 5/6) との混層。S T 282。
6	地山。黄褐色砂質土 (10 Y R 5/6)。

Ch. 21 (a) S T 281 柱穴計測表

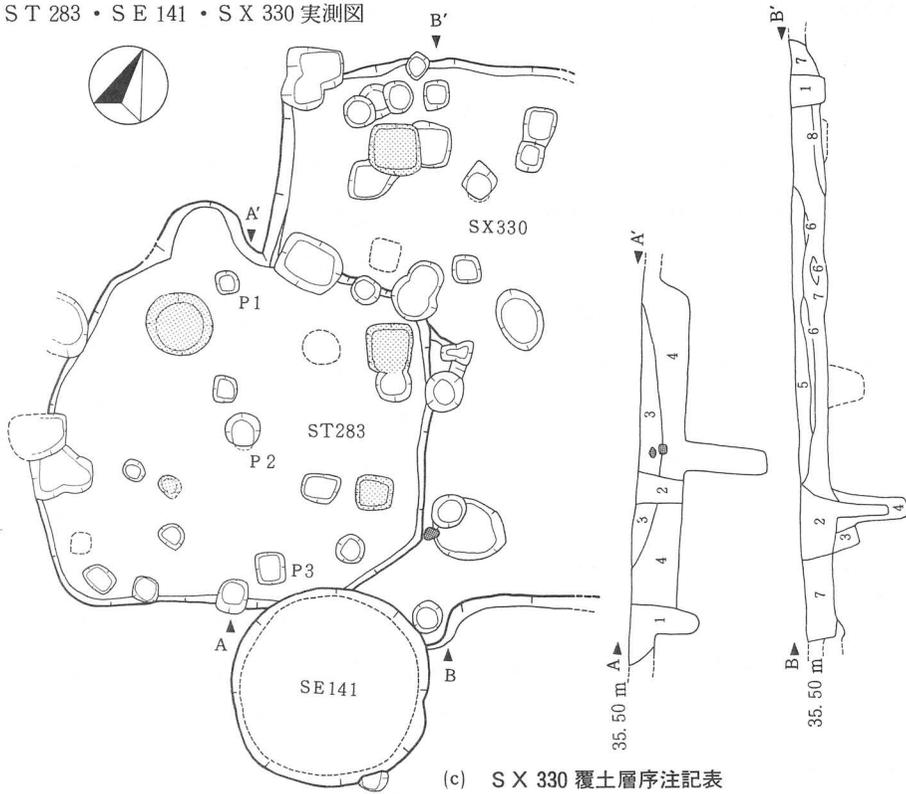
Pit No.	形状	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備考
1	不	31 × 28	38	抜き取痕
2	円	35 × 33	31	
3	円	37 × 35	37	
4	円	37 × 37	43	

(b) S T 281 覆土層序注記表

層序No.	特徴
1	黒褐色土 (10 Y R 2/2) に黄褐色砂質土 (10 Y R 7/8) が小から中粒状に2%含まれる。
2	黒色土 (10 Y R 2/1) ににふい黄褐色粘土 (2.5 Y 6/4) が中から大塊状に7%含まれる。
3	褐色土 (7.5 Y R 6/4) と黒色土 (10 Y R 2/1) との8対2の混層に黄褐色砂質土 (10 Y R 7/8) が小から大粒状に5%含まれる。
4	黒色土 (10 Y R 2/1) の単層。しまりあり。
5	黒色土 (10 Y R 2/1) に黄褐色砂質土 (10 Y R 7/8) が中から大塊状に15%含まれる。
6	黒色土 (10 Y R 2/1) に黄褐色砂質土 (10 Y R 7/8) が極小粒状に1%含まれる。
7	黄褐色砂質土 (10 Y R 7/8) の単層。しまりなし。
8	褐色土 (7.5 Y R 6/4) と黒色土 (10 Y R 2/1) との6対4の混層に黄褐色砂質土 (10 Y R 7/8) が小から大塊状に5%含まれる。
9	黒色土 (10 Y R 2/1) に黄褐色砂質土 (10 Y R 7/8) が小から大塊状に5%含まれる。
10	黒色土 (7.5 Y R 1.7/1) に黄褐色砂質土 (10 Y R 7/8) が小塊状に3%含まれる。
11	地山。黄褐色砂質土 (10 Y R 7/8)。

Fig. 18 竖穴建物跡Ⅶ

(1) ST 283・SE 141・SX 330 実測図



(c) SX 330 覆土層序注記表

層序No.	特 徴
1	黒褐色土 (10Y R 2/2) に黄褐色粘土 (10Y R 5/3) を20%含む。
2	黒色土 (10Y R 2/1) の単層。
3	黒色土 (10Y R 2/1) とにふい黄褐色砂質土 (10Y R 5/4) との混層。
4	にふい黄褐色砂質土 (10Y R 5/4) の単層。
5	黒色土 (10Y R 2/1) に小粒状の明黄褐色砂質土 (10Y R 6/8) を2%と極小塊の炭化物を1%含む。
6	黒色土 (10Y R 2/1) に褐灰色灰 (10Y R 5/1) を3%と小塊状の炭化物を1%含む。
7	黒色土 (10Y R 2/1) に小塊状の明黄褐色砂質土 (10Y R 6/8) と小塊状の炭化物をそれぞれ1%ずつ含む。
8	黒色土 (10Y R 2/1) に極小塊の炭化物を若干含む。
9	地山。黄褐色砂質土 (10Y R 5/6)。

Ch. 22

(a) ST 283 柱穴計測表

Pit No.	形状	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備 考
1	方	23 × 22	29	
2	円	34 × 34	88	
3	方	32 × 29	17	

(b) ST 283 覆土層序注記表

層序No.	特 徴
1	黒色土 (10Y R 2/1) に小粒状の黄褐色砂質土 (10Y R 5/6) を2%とにふい黄褐色粘土 (10Y R 4/3) と極小塊の炭化物をそれぞれ1%含む。
2	黒色土 (10Y R 2/1) に極小から中粒状の黄褐色砂質土 (10Y R 5/6) とにふい黄褐色粘土 (10Y R 4/3) と極小塊の炭化物をそれぞれ1%含む。
3	黒色土 (10Y R 2/1) に中から大粒状の黄褐色砂質土 (10Y R 5/6) を1%と小塊状の炭化物を1%と下層部に橙色焼土 (7.5Y R 6/6) を5%含む。
4	黒色土 (10Y R 2/1) に小から大粒状の黄褐色砂質土 (10Y R 5/6) を5%と小塊状の炭化物を2%含む。
5	地山。黄褐色砂質土 (10Y R 5/6)。

出土遺物からは16世紀の廃絶と考えられる。

S X 287 (Fig.19-1)、Ch.23) —— S 49区検出。東西240cm以上、南北260cm、深さ35cmの規模が確認されているが、東壁はまだ検出されていない。当初は竪穴遺構として扱ったが、方形のプランと柱穴がみられたため竪穴建物跡の項で報告する。柱穴は西壁の北端及び南端に配置されており、東壁でも同様な配置が考えられる。出土遺物には、白磁八角碗・皿、産地不明播鉢、土師質把手、鉄滓、元豊通宝、治平元宝、炭化米などがみられる。15世紀後半の廃絶の可能性がある。遺構内には、焼土が110cm×50cm程度の範囲でみられる。焼土の近辺で炭及び炭化米の集中している箇所がみられている。形態的にはS T 281、282のような小規模な竪穴建物跡であり、倉庫の用途が考えられるため、焼失家屋である可能性が高い。

S X 299 (Fig.19-2)、Ch.24-(a)(b) —— R S 49区検出。東西190cm、南北100cm、深さ66cmの規模を有する小型の建物跡である。柱穴は東西2間、南北1間が配置され、柱穴中央には柱痕が残っている。遺物は釘が2点出土したのみで、遺構存続時期は明確にしがたい。南側でS X 210(新)と重複している。

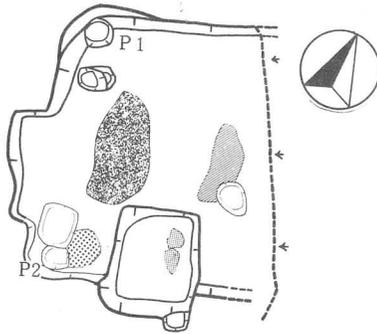
S X 276 (Fig.13-1)、Ch.12、P L. 4-(b) —— W 45区検出。東西300cm、南北270cm、深さ45cmの規模を有する。柱穴は、東西の棟通りに2本配置される。出土遺物には、鉄滓、無文銭、漆器などがみられる。北東コーナーでS T 259と重複するが、新旧関係は不明である。遺構存続時期についても明確にならない。

S X 305 (Fig.19-3)、Ch.25) —— S 48区検出。東西360cm、南北360cm、深さ(確認できず)の規模を有する。遺構の壁は検出できず、壁溝痕により規模を把握した。柱穴は四隅に配置され、壁溝と思われる施設は二重又は一重でほぼ正方形を形作っている。覆土も明確ではないため、出土遺物中でS X 305に存するものも判断しかねるが、染付小壺、鉄鏝、釘、聖宋元宝、宣○通宝など遺構確認作業時に出土した遺物が考えられる。時期の推定は困難である。

S X 329 (Fig.19-4)、Ch.26) —— S 44区検出。東西240cm以上、南北320cm、深さ20cmの規模を有する。S F 75(焼土遺構・新)が遺構東側に重複しているため、東壁は確認していない。平面形は方形であるが、柱穴配置は不明である。竪穴建物跡の可能性が高いものとして、ここで報告しておく。出土遺物には、青磁盤、染付皿、越前甕、産地不明播鉢、小札がある。16世紀の廃絶の可能性がある。

Fig.19 竪穴建物跡Ⅸ

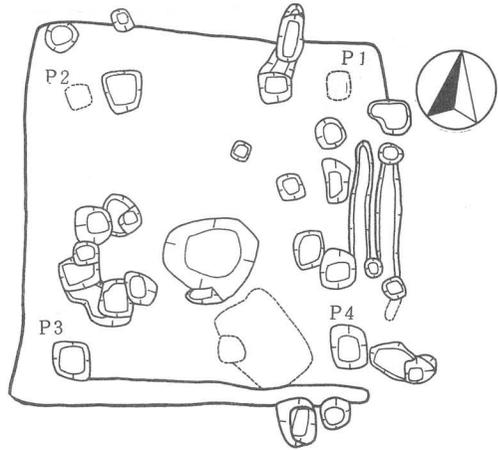
(1) S X 287 実測図



Ch.23 S X 287 柱穴計測表

Pit No	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
1	不	29 × 27	38	
2	不	26 × 22	50	

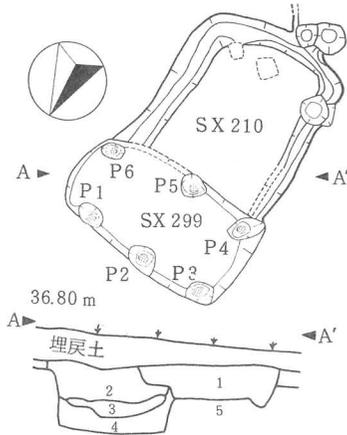
(3) S X 305 実測図



Ch.25 S X 305 柱穴計測表

Pit No	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
1	(方)	(28) × (23)	—	
2	(不)	(23) × (23)	15	
3	不	37 × 36	34	
4	方	43 × 35	14	

(2) S X 210・299 実測図



Ch.24

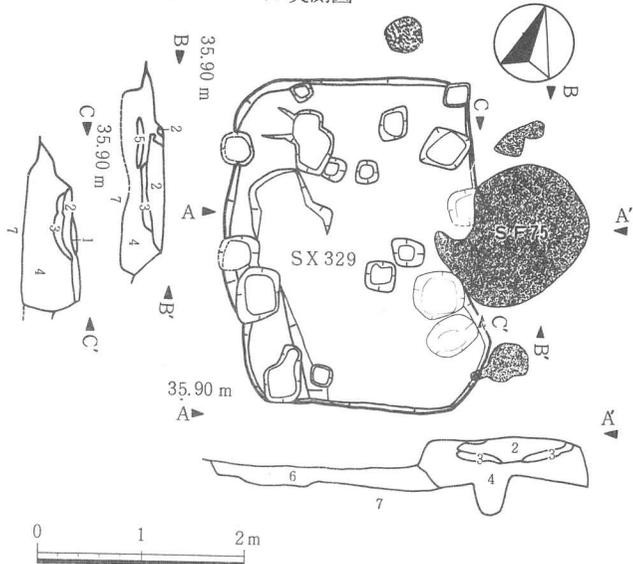
(a) S X 299 柱穴計測表

Pit No	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
1	不	26 × 21	16	
2	不	28 × 24	25	
3	不	26 × 20	20	
4	不	31 × 20	16	
5	不	23 × 23	15	
6	不	23 × 17	—	

(b) S X 299・210 覆土層序注記表

層序No	特 徴
1	黒色土 (10Y R 2/1) に極小から中粒の明黄褐色砂質土 (10Y R 6/6) を10%と白色パミスを2%と中粒の炭化物を2%含む。しまりあり。
2	黒色土 (10Y R 2/1) と大塊状の明黄褐色砂質土 (10Y R 6/6) の混層に極小から小塊の炭化物と白色パミスを1%ずつ含み、にぶい黄褐色砂質土 (10Y R 5/3) を3%含む。
3	黒色土 (10Y R 2/1) と黒褐色灰 (10Y R 3/1) と灰白色灰 (10Y R 7/1) の混層。
4	褐色砂質土 (10Y R 4/4) と黒色土 (10Y R 1.7/1) との混層に大塊状のにぶい黄褐色粘土 (10Y R 6/4) を10%含む。
5	地山。明黄褐色砂質土 (10Y R 6/6)。

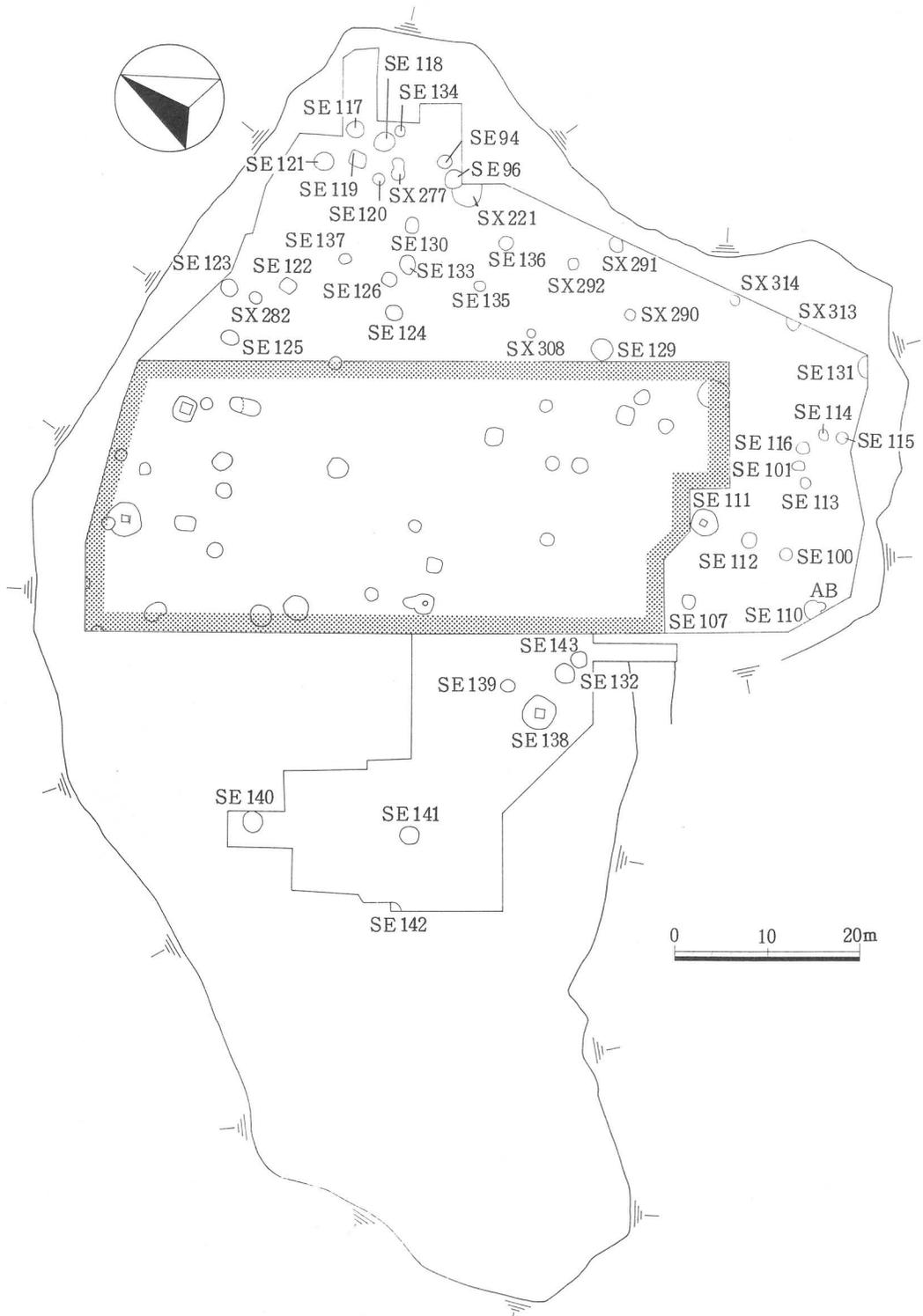
(4) S X 329・S F 75 実測図



Ch.26 S F 75・S X 329 覆土層序注記表

層序No	特 徴
1	黒褐色土 (10Y R 2/2) とにぶいオリブ黄色焼土 (5Y 6/3) との混層。
2	橙色焼土 (5Y R 6/8) とにぶいオリブ黄色焼土 (5Y 6/3) とにぶい褐色焼土 (7.5 Y R 5/4) と黒褐色灰 (10Y R 3/1) との混層。しまりあり。
3	黒色灰 (10Y R 1.7/1) ににぶい褐色焼土 (7.5 Y R 5/4) を1%含む。
4	黒色土 (10Y R 2/1) に極小から中粒状の明黄褐色砂質土 (10Y R 6/6) を2%と褐灰色灰 (10Y R 6/1) と極小塊の炭化物を1%含む。
5	にぶい黄褐色砂質土 (10Y R 5/4) と黒色土 (10Y R 2/1) との混層。
6	黒色土 (10Y R 2/1) に極小粒のにぶい黄褐色砂質土 (10Y R 5/4) を3%と小塊の炭化物と橙色焼土 (5Y R 6/8) を1%含む。
7	にぶい黄褐色砂質土 (10Y R 5/4)。

Fig. 20 内館井戸跡配置図



4. 井戸跡

本年度報告の井戸跡では、隅柱横棧型の井戸木枠を有する井戸が2基（S E 111・138）検出された。その他、特徴あるものには井戸内にカマド状の焼土を有するもの（S E 121）などがある。検出された井戸跡の平面規模は、長径92cm短径88cmから長径375cm短径355cmまでと、個体により差がみられる。直径の小さなものについては、調査時に作業が困難で危険度も増すため、確認面から100cmまでの掘り下げで終了している。以下、各井戸跡の概要を記してゆく。なお、遺構規模のうち深さの()内は、掘り下げを中止した時点での深さを示している。

S E 96（Fig.21—(1)）—— S 50区検出。長径225cm、短径200cm、深さ（47）cm。S X 221と重複するが、新旧関係は不明。出土遺物なし。時期不明。

S E 100（Fig.21—(2)）—— W 45区検出。長径143cm、短径130cm、深さ（20）cm。遺構のプランを確認した程度である。時期不明、出土遺物なし。重複遺構なし。

S E 101（Fig.21—(3)、Ch.28）—— W 46区検出。長径145cm、短径95cm、深さ（100）cm。楕円形のプランを有する。前年度に遺構を確認し、埋め戻してあったものを掘り下げた。粘土の薄い広がり第2層の焼土上面にみられた。出土遺物には、白磁皿（口禿）、珠洲系播鉢、釘、棒状鉄製品がある。15世紀後半廃絶の可能性がある。

S E 102（Fig.21—(4)、Ch.29）—— R 47・48区検出。長径145cm、短径130cm、深さ（115）cm。出土遺物に美濃灰釉皿、瀬戸灰釉卸皿、唐津皿があることから、城館末期（16世紀末）の廃絶と考えられる。

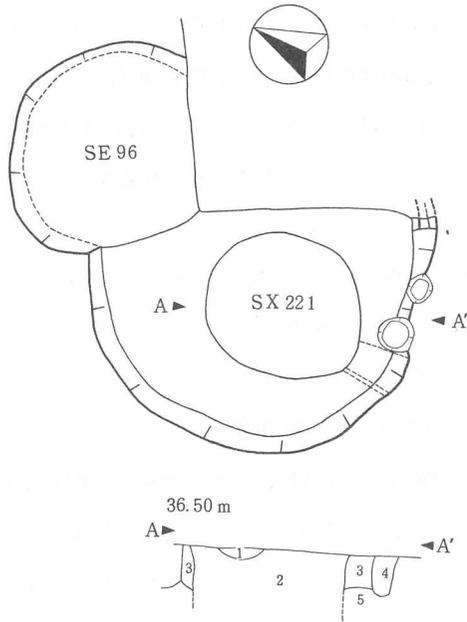
S E 107（Fig.21—(5)）—— U V 45区検出。長径148cm、短径138cm、深さ（37）cmの規模を有する。遺構東側で柱穴と重複しているが、新旧関係不明。覆土中から染付碗が1点出土している。

S E 110A・B（Fig.23—(1)、Ch.31）—— W 45区検出。2基の井戸跡が重複しているため、北側の大きな方をA、南側の小規模なものをBとして報告する。なお、新旧関係はA（旧）B（新）となっている。Aは長径（216）cm、短径180cm、深さ（88）cmで、南西側の壁は確認していない。また、南東部もBに切られているため壁は調査した段階では検出されなかった。出土遺物には、青磁碗・皿、白磁皿、刀子、釘、用途不明鉄製品、漆器、ほたて貝、不明骨などがある。Bは長径（96）cm、短径88cm、深さ（88）cmであるが、北西部の¼がAと重複しており、明確な壁を確認することができなかった。出土遺物には、青磁碗、瀬戸灰釉壺、無文銭がみられる。Bの覆土上面より暗緑色一部白濁する釉のかかった碗が出土している。比較的新しい製品であるとすれば、Bは城館期より新しいのかもしれない。時期については、A・Bともに不明である。

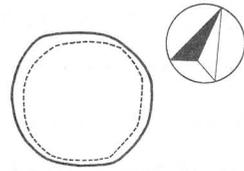
S E 111（Fig.22—(1)(2)、Ch.30. P L. 6—(a)）—— V 46区検出。長径290cm、短径270cm、深さ370cmの規模を有する。井戸内に床から165cm程度まで隅柱横棧型の木枠を有してい

Fig. 21 井戸跡 I

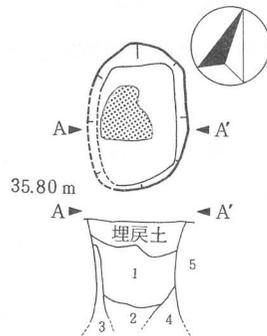
(1) SE 96・SX 221 実測図



(2) SE 100 実測図



(3) SE 101 実測図



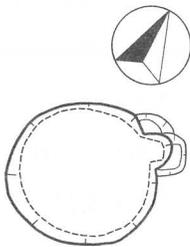
Ch. 27 SX 221 覆土層序注記表

層序No	特 徴
1	にぶい黄褐色粘土 (10Y R 4/3) と黒褐色土 (10Y R 3/2) とが8 対2の混層。
2	黒褐色土 (10Y R 3/2) と灰黄褐色灰 (10Y R 4/2) とが6 対4の混層ににぶい黄褐色粘土 (10Y R 4/3) が中から大粒状に1%と炭化物を若干含む。
3	黒褐色土 (10Y R 2/2) に明黄褐色砂質土 (10Y R 7/6) が大から極大粒状に1%含む。
4	黒褐色土 (10Y R 2/3) に明黄褐色砂質土 (10Y R 6/6) が中から大粒状に1%とにぶい黄褐色粘土 (10Y R 5/3) が大塊状に1%と炭化物を若干含む。
5	地山。黄褐色砂質土。

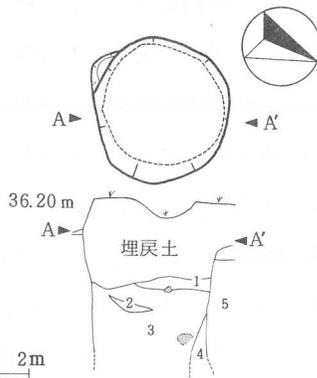
Ch. 28 SE 101 覆土層序注記表

層序No	特 徴
1	黒色土 (7.5 Y R 2/1) に黒色灰 (N 2/0) を帯状に15%と小粒のにぶい黄褐色灰 (10Y R 1/2) を2%と極小から小塊の炭化物を2%極小粒の黄褐色砂質土 (10Y R 5/6) を1%含む。湿性あり。
2	褐色焼土 (10Y R 4/6) と明黄褐色焼土 (10Y R 6/6) の混層に炭化物1%含む。
3	黒色土 (7.5 Y R 2/1) に小粒のにぶい黄褐色灰 (10Y R 7/2) を10%含む。しまりなし。
4	黒色土 (7.5 Y R 2/1) と浅黄色砂質土 (2.5 Y 7/4) と黄褐色砂質土 (10Y R 5/6) の混層に炭化物1%含む。
5	地山。黄褐色砂質土 (10Y R 5/6)。

(5) SE 107 実測図



(4) SE 102 実測図

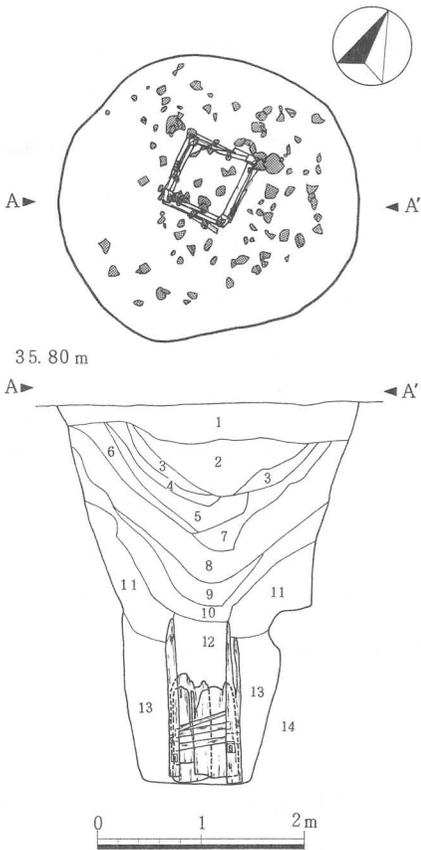


Ch. 29 SE 102 覆土層序注記表

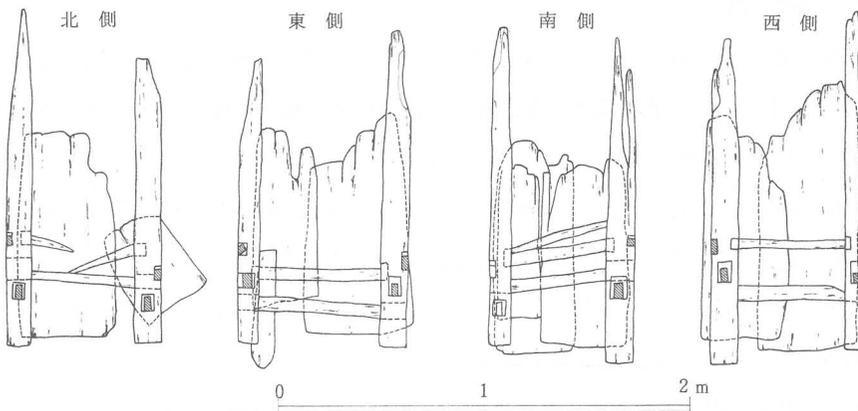
層序No	特 徴
1	にぶい黄褐色粘土 (10Y R 4/3)。
2	黒褐色土 (10Y R 2/2) と暗褐色砂質土 (10Y R 3/3) の混層に大塊状の炭化物を1%含む。
3	黒褐色土 (10Y R 2/2) に暗褐色砂質土 (10Y R 3/3) が3%と褐灰色灰 (10Y R 5/1) を5%と中から大塊状の炭化物を2%含む。下層部にいきしだい湿性有り。
4	黒褐色土 (10Y R 2/2) と暗褐色土 (10Y R 3/3) との混層湿性有り。
5	地山。明黄褐色砂質土 (10Y R 6/6)。

Fig.22 井戸跡Ⅱ

(1) S E 111 実測図



(2) S E 111 井戸樁実測図



Ch. 30 SE111 覆土層序注記表

層序No.	特 徴
1	黒褐色土 (10YR 2/3) に灰色灰 (5Y 4/1) を3%と明黄褐色土 (10YR 6/8) を極小粒状に2%と灰白色パミス (7.5 YR 8/1) を極小粒状に1%と炭化物を2%含み、小石1%を含む。
2	黒褐色土 (10YR 2/3) に褐灰色灰 (10YR 4/1) を15%と明黄褐色砂質土極小粒状に1%と小石を1%含む。しまりなし。
3	灰色灰 (5YR 4/1) と黒褐色土 (10YR 2/3) とに黄褐色灰 (10YR 7/2) との7対2対1の混層。
4	黒褐色土 (10YR 2/3) に灰色灰 (5YR 4/1) を3%と炭化物を2%含む。
5	黒褐色土 (10YR 2/2) に灰白色パミス (7.5 YR 8/1) を中から大粒状に2%と炭化物を大塊状に1%含む。しまりなし。
6	黒褐色土 (10YR 2/3) に黒褐色灰 (2.5 Y 3/1) を2%と褐色粘土 (10YR 4/4) を極小粒状に2%と炭化物を1%含む。
7	黒褐色土 (10YR 2/3) に褐色粘土 (10YR 4/4) と灰色灰 (10Y 5/1) をそれぞれ10%ずつと褐灰色灰 (5YR 4/1) を7%含む。しまりなし。
8	褐灰色灰 (5YR 4/1) に灰黄色灰 (2.5 Y 7/2) が極厚い板状に30%含む。
9	黒褐色土 (10YR 2/3) に褐灰色灰 (5YR 4/1) が10%とに黄褐色灰 (10YR 5/3) を大塊状に1%含む。
10	黒褐色土 (10YR 2/2) に明褐色砂質土 (10YR 6/8) を20%と褐灰色灰 (5YR 4/1) を10%含む。
11	黒褐色土 (10YR 2/2) に小から中粒状の明褐色砂質土 (10YR 6/8) を2%含む。
12	明黄褐色砂質土 (10YR 6/8) に黒褐色土 (10YR 2/2) を20%含む。
13	黒褐色土 (10YR 2/2) にに黄褐色砂質土 (10YR 7/3) を小から中粒状に2%含む。
14	地山。黄褐色砂質土 (10YR 6/8)。

る。横棧が枠の下端から60cmほどの間に3段組まれている。掘り方は、急角度のV字形で壁の崩壊はあまりみられない。覆土層序観察からは、第13層で枠を固定し、11層で木枠の裏ごめを行う構築課程、井戸廃棄後の埋め戻し（2層から10層）、地形を行った1層、と各工程がある程度推定できる。遺物出土状況は、床面近くから茶臼が2点、同じく木枠内から染付皿、瓦質手焙り、産地不明播鉢がみられる。11及び13層からの遺物の出土はない。埋め戻し・地形の層からは、青磁碗・皿、白磁皿、染付碗・皿（碁笥底皿を含む）、美濃灰釉皿・壺、瀬戸鉄釉碗・壺、瀬戸灰釉壺、越前甕、産地不明播鉢、瓦質手焙り、小刀、鉄鏃、鉄鍋、釘、多孔鉄製品、棒状鉄製品、鞋、銅針、溶解物、羽口、臼、硯、漆器などや、直径1.8cm程の五円玉状の用途不明土製品、熙寧元宝、元祐通宝、無文銭、不明骨などが出土している。出土遺物からは16世紀後半の埋め戻しと考えられる。重複関係ではS D92（旧）がある。

SE 112（Fig.23—(2)、Ch.32）—— V 45・46区検出。長径190cm、短径157cm、深さ（150）cmの規模を有する。東側の壁が若干崩れた感がある。出土遺物には、染付皿、美濃灰釉皿、瓦質手焙り、珠洲系壺、土師器羽釜、小札、釘、聖宋元宝などがある。16世紀に入ってから廃絶と考えられる。

SE 113（Fig.23—(3)、Ch.33）—— W 46区検出。長径125cm、短径105cm、深さ（83）cmの規模を有する。遺物は東半部より主に出土した。青磁碗、白磁皿、染付碗、美濃灰釉大皿・折縁皿、産地不明皿、釘、元豊通宝、洪武通宝、無文銭などが出土しており、16世紀後半に廃絶された遺構と考えられる。

SE 114（Fig.23—(4)、Ch.34）—— W 47区検出。長径142cm、短径118cm、深さ（100）cmの規模を有する。出土遺物には、青磁碗、溶解物、刀子、鉄滓がある。時期不明。

SE 115（Fig.24—(1)、Ch.35）—— W 47区検出。長径130cm、短径130cm、深さ（110）cmの規模を有する。ほぼ円形のプランと推定される。明確に覆土中から出土した遺物はないが、遺構確認作業の際出土している青白磁陶枕？、美濃灰釉皿、産地不明播鉢、釘がSE 115に依る可能性がある。時期不明。

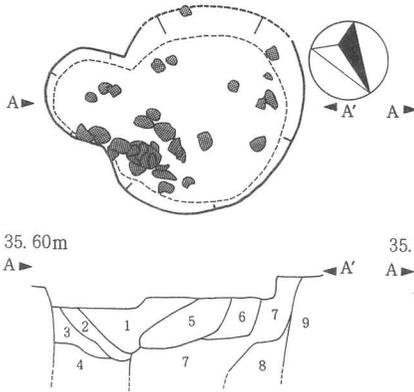
SE 116（Fig.24—(2)、Ch.36）—— W 46・47区検出。長径153cm、短径135cm、深さ（110）cmの規模を有する。出土遺物には、青磁碗・皿、白磁皿、瀬戸灰釉瓶子、産地不明播鉢、坩堝、溶解物、釘、永楽通宝、硯、茶臼がある。15世紀後半に廃絶した可能性がある。

SE 117（Fig.24—(3)、Ch.37）—— R 50区検出。長径197cm、短径175cm、深さ（100）cmの規模を有する。出土遺物には、白磁小坏、鋏、刀子がある。時期不明。

SE 118（Fig.25、Ch.40、P L. 6—(b)）—— R 50区検出。長径235cm、短径215cm、深さ440cmの規模を有する。本年度、底面まで掘り下げた井戸跡は3基ある。この井戸跡は直径も比較的大きく、出土遺物が多量であったため掘り下げた。井戸枠は検出されないいわゆる

Fig. 23 井戸跡Ⅲ

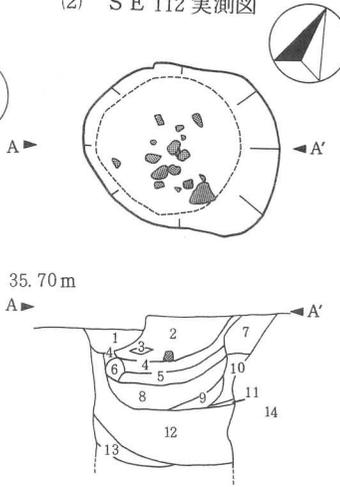
(1) S E 110 実測図



Ch. 31
S E 110 A・B 覆土層序注記表

層序No	特 徴
1	黒褐色土 (10 Y R 3/1) に明褐色土 (7.5 Y R 5/6) の小粒が 2% と炭化物を 3% と褐灰色灰 (7.5 Y R 4/1) の中塊が 5% 含まれる。
2	黒褐色土 (10 Y R 2/3) に灰白色パミス (10 Y R 8/2) を中から大粒状に 1% と炭化物を 3% 含む。
3	黒褐色土 (7.5 Y R 2/2) に灰白色パミス (10 Y R 8/2) を小から中粒状に 2% と炭化物を 1% 含む。
4	黒褐色土 (5 Y R 2/2) に炭化物を 5% と黄褐色砂質土 (7.5 Y R 7/8) を小から中粒状に 3% 含まれる。
5	黒褐色土 (10 Y R 2/3) に炭化物を 1% と黄褐色砂質土 (7.5 Y R 7/8) を小から中粒状に 1% 含まれる。
6	黒褐色土 (10 Y R 2/3) に炭化物を 8% と黄褐色砂質土 (7.5 Y R 7/8) を極小粒状に 12% について黄褐色粘土 (10 Y R 6/4) が小粒状に 1% 含まれる。
7	黒褐色土 (10 Y R 2/3) に黄褐色砂質土 (7.5 Y R 7/8) が中から大粒状に 5% と炭化物を 3% と灰白色パミス (10 Y R 8/2) を小粒状に 1% 含まれる。
8	黒褐色土 (7.5 Y R 2/2) に炭化物を 1% と黄褐色砂質土 (7.5 Y R 7/8) を極小粒状に 2% 含まれる。
9	地山。黄褐色砂質土 (7.5 Y R 7/8)。

(2) S E 112 実測図

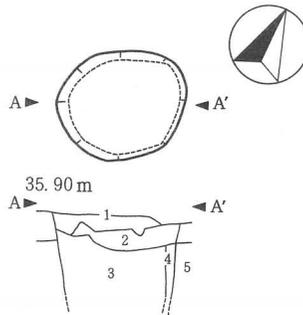


Ch. 32

S E 112 覆土層序注記表

層序No	特 徴
1	黒褐色土 (7.5 Y R 2/3) に黄褐色砂質土 (10 Y R 5/8) が極小から大粒状に 30% と褐灰色灰 (10 Y R 5/1) が大塊状に 1% と炭化物が中粒状に 1% 含まれる。(埋土84年度調査分)
2	黒褐色土 (7.5 Y R 2/2) に褐色粘土 (7.5 Y R 4/3) が小粒状に 1% と明褐色土 (5 Y R 5/8) が小粒状に 1% と灰黄褐色灰 (10 Y R 4/2) が極大塊状に 1% と下層に炭化物が多く含まれる。
3	褐灰色灰 (10 Y R 5/1) と明褐色灰 (7.5 Y R 5/8) との混層。
4	黒褐色土 (7.5 Y R 2/2) に褐色粘土 (7.5 Y R 4/3) が小粒状に 1% と明褐色土 (5 Y R 5/8) が小粒状に 1% と明黄褐色パミス (10 Y R 7/6) が上部に中板状に混入している。
5	暗褐色粘土 (7.5 Y R 3/3) とについて褐色土 (7.5 Y R 6/4) が極大から中粒状の混層に赤褐色土 (2.5 Y R 4/8) が極大から中粒状に含まれ黒褐色土 (7.5 Y R 3/1) が中ほどに厚い板状に含まれる。しまりあり。
6	黒褐色土 (10 Y R 2/2) に炭化物が中粒状に 2% 含まれる。しまりなし。
7	黒褐色土 (10 Y R 2/3) に黄褐色砂質土 (10 Y R 5/6) が中粒状に 1% と炭化物が中粒状に 1% 含まれる。
8	黒褐色土 (10 Y R 2/3) に暗褐色粘土 (7.5 Y R 3/3) が大塊状に 1% と赤褐色土 (2.5 Y R 4/8) が 1% 含まれる。
9	について黄褐色砂質土 (10 Y R 6/4)。しまりなし。
10	黒褐色土 (7.5 Y R 2/2) に暗褐色粘土 (7.5 Y R 3/3) が中粒状に 1% と灰白色パミス (2.5 Y 6/2) が小粒状に 1% 含まれる。
11	明黄褐色砂質土 (10 Y R 6/8) が 50% に黒色土 (10 Y R 2/1) が 50% 層状に含まれる。
12	黒褐色土 (10 Y R 2/2) に炭化物が 2% と明褐色砂質土 (10 Y R 6/8) が 1% について黄褐色砂質土 (10 Y R 6/4) が極小粒状に 3% 含まれている。しまりあり。
13	黒褐色土 (7.5 Y R 3/2) に炭化物が中粒状に 1% 含まれる。
14	地山。黄褐色砂質土 (10 Y R 5/6)。

(3) S E 113 実測図

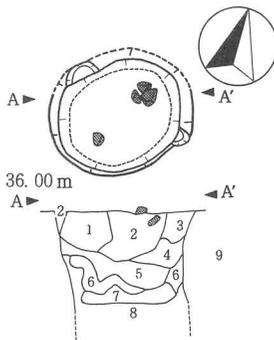


Ch. 33

S E 113 覆土層序注記表

層序No	特 徴
1	黒褐色粘土 (10 Y R 3/2) に褐色土 (5 Y R 6/8) に黄褐色パミス (10 Y R 8/6) と炭化物を 1% 含む。
2	黒褐色土 (10 Y R 2/2) に暗褐色灰 (N 3/0) を 20% と黒褐色土 (10 Y R 3/2) を 2% と中粒状の赤褐色砂質土 (5 Y R 4/8) を 1% と灰白色パミス (5 Y R 8/2) を 1% と炭化物を 1% 含む。
3	黒褐色土 (10 Y R 2/2) に小粒の赤褐色砂質土 (5 Y R 4/8) と褐色土 (5 Y R 6/8) と小粒の黄褐色砂質土 (10 Y R 6/8) と炭化物をそれぞれ 1% ずつ含む。
4	黒褐色土 (10 Y R 2/2) に灰白色パミス (10 Y R 8/2) を 15% と小粒の黄褐色砂質土 (10 Y R 8/8) を 1% 含む。
5	地山。赤褐色砂質土 (5 Y R 4/8)。

(4) S E 114 実測図



Ch. 34

S E 114 覆土層序注記表

層序No	特 徴
1	黒褐色土 (10 Y R 2/2) に褐灰色灰 (7.5 Y R 4/1) が極大粒状に 1% と黄褐色砂質土 (10 Y R 5/6) と暗褐色粘土 (7.5 Y R 3/3) が小から中粒状に 1% と明黄褐色パミス (10 Y R 7/6) と灰白色灰 (7.5 Y R 8/2) が 1% と炭化物が小から大粒状に 2% 含まれる。しまりやあり。
2	暗赤褐色土 (5 Y R 3/2) に黄褐色砂質土 (10 Y R 5/6) が中から極大粒状に 7% と炭化物が中粒状に 2% 含まれる。
3	黒褐色土 (10 Y R 2/2) と暗褐色粘土 (10 Y R 3/3) との混層。しまりやなし。
4	黒褐色土 (10 Y R 2/2)。しまりなし。
5	黒褐色土 (7.5 Y R 2/2) に黄褐色砂質土 (10 Y R 5/6) が 1% と黒色灰 (7.5 Y R 2/1) が下層にいくほど多く混入している。しまりやなし。
6	黒褐色土 (5 Y R 3/1) と黄褐色砂質土 (10 Y R 5/8) との混層。しまりなし。
7	黄褐色砂質土 (10 Y R 5/8)。しまりなし。
8	黒褐色土 (7.5 Y R 2/2)。
9	地山。黄褐色砂質土 (10 Y R 5/6)。

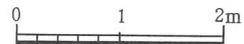
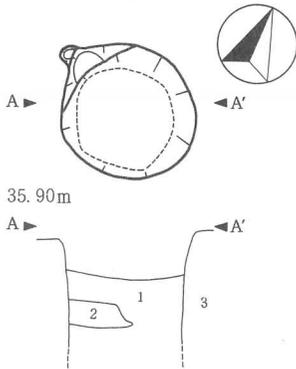


Fig.24 井戸跡IV

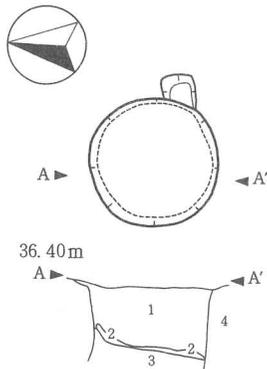
(1) S E 115 実測図



Ch. 35
S E 115 覆土層序注記表

層序No	特	徴
1	黒褐色土 (5 Y R 2/1) に黄褐色砂質土 (10 Y R 5/6) が大から極大粒状に5%と暗褐色粘土 (7.5 Y R 3/3) が極大粒状に1%含まれる。	
2	暗赤褐色土 (5 Y R 3/2) に明黄褐色砂質土 (10 Y R 6/8) が中板状に含まれ赤褐色糜土 (5 Y R 4/6) が中粒状に1%含まれる。	
3	地山。黄褐色砂質土 (10 Y R 5/6)。	

(5) S E 120 実測図

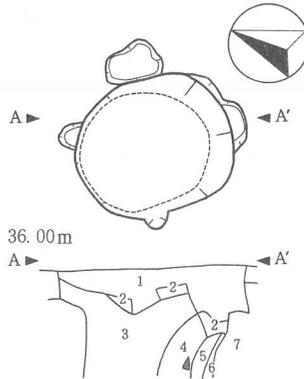


Ch. 39
S E 120 覆土層序注記表

層序No	特	徴
1	黒褐色土 (5 Y R 2/2) に褐色砂質土 (10 Y R 4/6) が極小から極大粒状に3%と明赤褐色糜土 (2.5 Y R 5/8) 極大粒状に1%と灰白色灰 (10 Y R 7/1) を極うすい板状に含み炭化物を若干含む。	
2	褐色砂質土 (10 Y R 4/6) の単層。	
3	黒褐色土 (10 Y R 2/2) に褐色砂質土 (10 Y R 4/6) を極小から小粒状に1%と浅黄色砂質土 (2.5 Y 7/3) 中粒状に1%含む。	
4	地山。褐色砂質土 (10 Y R 4/6)。	



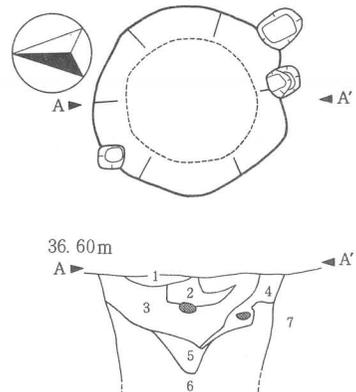
(2) S E 116 実測図



Ch. 36
S E 116 覆土層序注記表

層序No	特	徴
1	黒色土 (10 Y R 2/1) に極小から小粒状の浅黄褐色灰 (10 Y R 8/3) を5%と極小から小塊の炭化物を2%と小粒の明黄褐色砂質土 (10 Y R 6/8) を1%含む。しりりあり。	
2	黒色土 (10 Y R 2/1) と小塊から中塊の明黄褐色砂質土 (10 Y R 6/8) の混層。	
3	黒色土 (7.5 Y R 2/1) に極小粒状の明黄褐色砂質土 (10 Y R 6/8) と極小粒状の浅黄褐色灰 (10 Y R 8/3) と極小塊の炭化物をそれぞれ2%と黒褐色灰 (10 Y R 3/1) を部分的に3%含む。	
4	黒色土 (7.5 Y R 2/1) に極小から小粒状の明黄褐色砂質土 (10 Y R 6/8) を5%と浅黄褐色灰 (10 Y R 8/3) を5%と灰白色灰 (10 Y R 8/2) を1%と炭化物を1%含む。	
5	黒色土 (7.5 Y R 2/1) にふい黄褐色砂質土 (10 Y R 7/2) を30%含む。	
6	黒色土 (7.5 Y R 2/1) と黒褐色土 (10 Y R 3/1) との混層。	
7	地山。明黄褐色砂質土 (10 Y R 6/8)。	

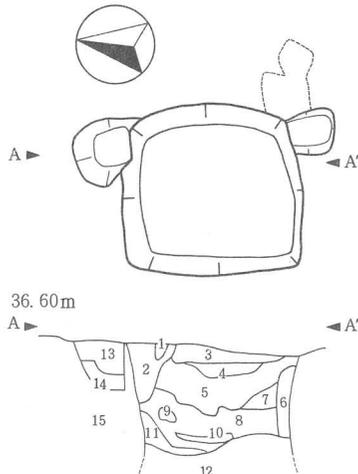
(3) S E 117 実測図



Ch. 37
S E 117 覆土層序注記表

層序No	特	徴
1	暗褐色土 (10 Y R 3/3) に小から中ブロックの黄褐色砂質土 (10 Y R 5/8) が5%と灰白色パミス (10 Y R 8/1) が1%含まれる。しりりあり。	
2	暗褐色土 (10 Y R 3/3) に微粒子状の明黄褐色砂質土 (2.5 Y 7/6) が40%含まれる。	
3	黒褐色土 (5 Y R 2/1) に微粒子状の明黄褐色砂質土 (2.5 Y R 7/6) が5%と小ブロック状の黄褐色砂質土 (10 Y R 5/8) が7%と礫が7%含まれる。	
4	黒褐色土 (10 Y R 2/2) に礫を2%含む。	
5	黒褐色土 (5 Y R 2/1) に小ブロック状の黄褐色砂質土 (10 Y R 5/8) が15%と礫が1%含まれる。	
6	黒褐色土 (10 Y R 2/2) に黄褐色砂質土 (10 Y R 5/8) が中板状に交互に入っている。	
7	地山。黄褐色砂質土 (10 Y R 5/6)。	

(4) S E 119 実測図



Ch. 38
S E 119 覆土層序注記表

層序No	特	徴
1	黒褐色土 (10 Y R 3/2) の単層。しりりなし。	
2	暗褐色土 (7.5 Y R 3/2) に黄褐色砂質土 (10 Y R 5/6) を中から大粒状に15%と炭化物を若干含む。	
3	黒褐色土 (7.5 Y R 3/2) に黄褐色砂質土 (10 Y R 5/6) を中から大粒状に10%と灰白色灰 (7.5 Y R 8/2) を中板状に3%と炭化物を3%含む。	
4	黒褐色土 (10 Y R 2/2) と黒褐色灰 (10 Y R 3/1) とが7対3の混層に炭化物を若干含む。	
5	黒褐色灰 (10 Y R 3/1) と黒色土 (10 Y R 1.7/1) と褐色灰 (10 Y R 4/1) と黒色土 (10 Y R 2/2) の5対1対2対2の混層に明褐色糜土 (7.5 Y R 5/6) を中から極大粒状に1%と炭化物を若干含む。しりりなし。	
6	黒褐色土 (10 Y R 2/3) とふい黄褐色砂質土 (10 Y R 4/3) との混層に黒色土 (10 Y R 2/2) を大塊状に1%と黄褐色砂質土 (10 Y R 5/6) を中から大粒状に1%含む。	
7	黒褐色土 (10 Y R 2/2) と黒褐色灰 (10 Y R 3/1) が9対1の混層に炭化物を若干含む。	
8	黒褐色土 (10 Y R 2/2) に黒褐色灰 (10 Y R 3/1) を10%と明褐色糜土 (7.5 Y R 5/6) を小から大粒状に1%と炭化物を若干含む。	
9	褐色土 (10 Y R 4/4) の単層。	
10	褐色糜土 (7.5 Y R 4/4) と明赤褐色糜土 (5 Y R 5/6) との混層をとり囲むように黒褐色土 (10 Y R 1.7/1) が存在する。	
11	明黄褐色砂質土 (10 Y R 6/6) と黒褐色土 (10 Y R 2/2) が6対4の混層。	
12	黒色土 (10 Y R 1.7/1) と黒褐色灰 (10 Y R 3/1) と暗褐色 (10 Y R 3/4) と褐灰白灰 (10 Y R 4/1) が4対3対2対1の割合の混層。	
13	黒褐色土 (7.5 Y R 3/1) に黄褐色砂質土 (10 Y R 5/8) を小から中粒状に1%と灰白色パミス (10 Y R 8/1) を中粒状に1%と炭化物を若干含む。	
14	暗褐色砂質土 (10 Y R 3/4) の単層。しりりなし。	
15	地山。黄褐色砂質土 (10 Y R 5/6)。	

素掘りの井戸跡である。遺物は主に第1層から第8層に集中しているが、第24層の上部でも集中している部分が見られた。第24層の遺物は、ほとんどが染付皿（Fig.25—71・76・79・82・84・85・86）である。また、遺物の出土状態からは、第24層土が壁面の崩落土であり、使用不能になった井戸跡を一時期に埋め戻したものと考えられる。前出以外の出土遺物としては、青磁碗・皿（陵花皿含む）、白磁皿（内湾、端反り含む）、染付碗・皿・小型の菊皿（Fig.25—83）、珠洲系播鉢、産地不明播鉢、瓦質手焙り、小札、鉄鏃、鉄鋏、芋引金、鉄鍋、火箸、かすがい、釘、用途不明鉄製品、鉄滓、小柄の柄、目貫金具、用途不明銅製品、開元通宝、聖宋元宝、元豊通宝、永樂通宝、熙寧〇〇、無文銭、漆器、砥石、石臼、茶臼、硯などがみられる。16世紀の廃絶と思われる。陶磁器類は播鉢・瓦質手焙りを除いてすべて中国製のみであり、美濃・瀬戸等の製品が伴出してない。当遺構における瓦質手焙りの出土遺物中に占める率は他遺構と比較して高いようである。他遺構との重複なし。

SE 119（Fig.24—(4)、Ch.38）—— R 50区検出。長径175cm、短径168cm、深さ（115）cmの規模を有する。隅丸方形のプランを有する井戸跡である。出土遺物には、羽口、釘、用途不明鉄製品、鉄滓、炭化米がある。時期を決定できるような遺物が出土していないため使用年代は不明である。

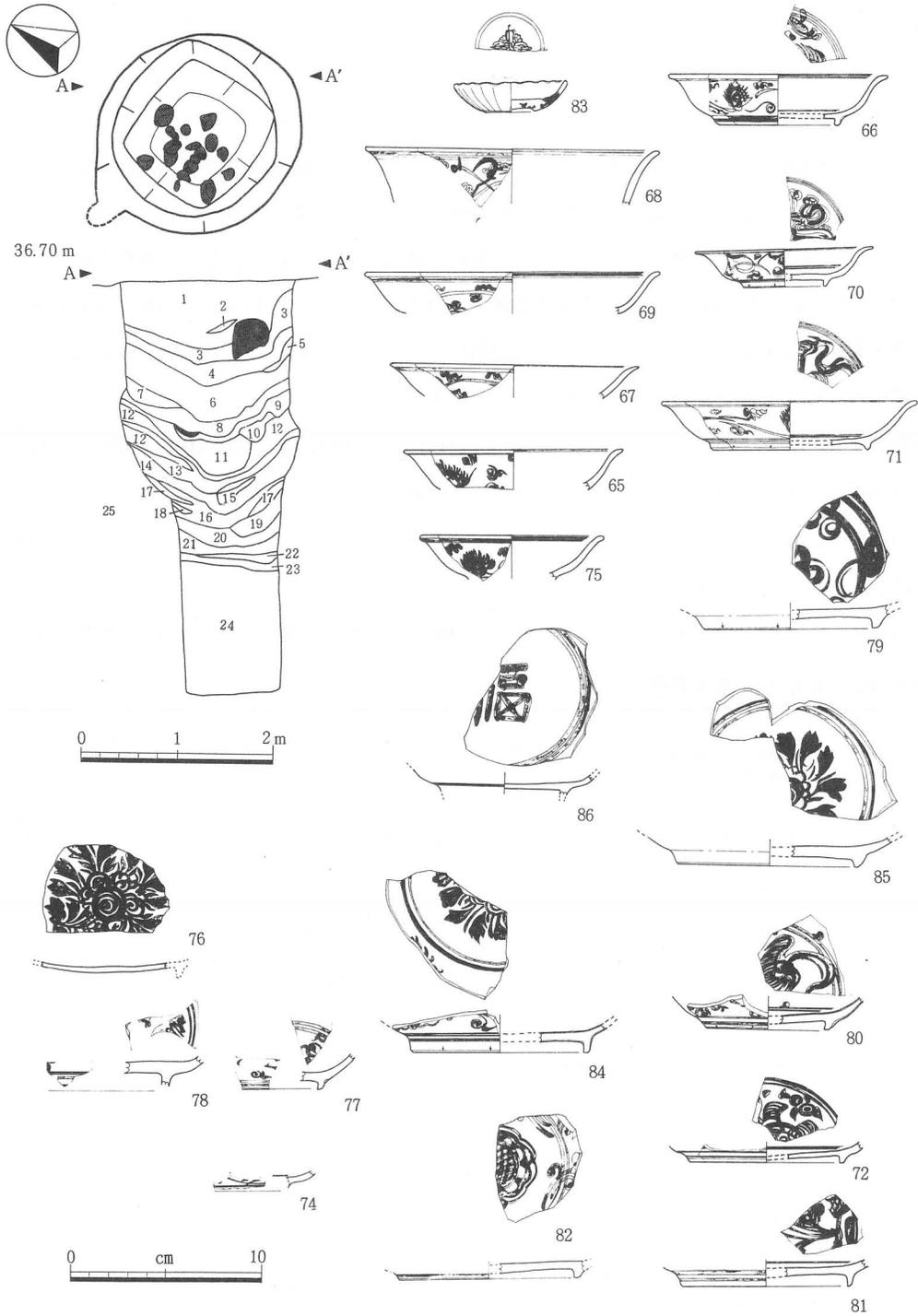
SE 120（Fig.24—(5)、Ch.39）—— R 50区検出。長径125cm、短径123cm、深さ（80）

Ch. 40 SE 118 覆土層序注記表

層序 No	特 徴
1	黒褐色土（7.5 YR 2/2）に黄褐色砂質土（10YR 5/6）を中粒状に1%と褐灰色灰（10YR 4/1）を中板状に1%と炭化物を大から極大粒に3%含む。
2	灰黄褐色土（10YR 6/2）と橙色焼土（5YR 6/6）と炭化物の混層。
3	極暗褐色土（7.5 YR 2/3）にぶい黄褐色砂質土（10YR 6/3）を小から極大塊状に3%と炭化物を中粒状に1%含む。しまりややあり。
4	黒褐色土（10YR 3/1）にぶい黄褐色砂質土（10YR 6/3）を中塊状に1%と明褐色土（7.5 YR 7/1）をうすい板状に1%と黒色灰（10YR 2/1）をうすい板状に1%と黄褐色砂質土（10YR 5/6）を小粒状に1%と炭化物を中から大粒状に1%含む。
5	褐色砂質土（10YR 4/6）と黒褐色土（10YR 3/2）が4対6の混層。
6	黒褐色土（10YR 2/2）に暗褐色砂質土（10YR 3/3）を極厚い板状に3%と黄褐色砂質土（10YR 5/6）が中粒状に1%と黒色灰（10YR 1.7/1）が中板状に2%と炭化物を大から極大粒状に5%含む。
7	褐色砂質土（10YR 4/6）と黒褐色土（10YR 3/2）が8対2の混層。
8	黒褐色土（10YR 2/3）に黄褐色砂質土（10YR 5/6）を5%と炭化物を大粒状に3%含む。
9	黒色土（10YR 2/1）と炭化物の混層に褐灰色灰（10YR 5/1）が厚い板状に10%混入している。
10	黄褐色砂質土（10YR 5/8）の塊層。
11	黒褐色土（10YR 2/2）にぶい黄褐色砂質土（10YR 5/3）が小から中塊状に1%と黄褐色砂質土（10YR 5/6）が大粒状に1%と炭化物を大粒状に1%含む。
12	明黄褐色砂質土（10YR 6/8）と黒褐色土（10YR 2/2）の9対1の混層。しまりなし。
13	黒色土（7.5 YR 2/1）に黄褐色砂質土（10YR 5/6）が1%と暗褐色砂質土（10YR 3/3）が左側の壁から極厚い板状に中央部まで10%混入している。しまりなし。
14	にぶい黄褐色砂質土（10YR 6/3）の単層。しまりなし。
15	黒色土（10YR 2/1）。
16	黒色土（7.5 YR 2/1）に黄褐色砂質土（10YR 5/6）が大粒状に1%と暗褐色砂質土（10YR 3/3）も大粒状に1%含まれ下層にぶい黄褐色土（10YR 5/3）が厚い板状に10%含まれる。
17	黄褐色砂質土（10YR 5/6）。しまりなし。
18	浅黄色砂質土（2.5 Y 7/3）。しまりなし。
19	にぶい黄褐色砂質土（10YR 6/3）。しまりなし。
20	明黄褐色砂質土（10YR 7/6）。しまりなし。
21	黒色土（10YR 1.7/1）の中央部に褐灰色灰（10YR 4/1）がごく厚い板状に30%含まれる。
22	にぶい黄色砂質土（2.5 Y 6/3）。しまりなし。
23	灰黄色砂質土（2.5 Y 7/2）と黒色土（2.5 Y 2/1）が7対5の混層。しまりなし。
24	灰黄色砂質土（2.5 Y 7/2）。しまりなし。
25	地山。黄褐色砂質土（10YR 5/6）。

Fig.25 井戸跡 V

S E 118 実測図及び出土染付実測図



cmの規模を有する。平面形はほぼ円形を呈している。出土遺物には覆土から用途不明銅製品、永楽通宝、〇〇元宝がみられる。また、覆土上面ではあるが、白磁皿、染付碗、釘、洪武通宝などもS E 120に伴う可能性がある。16世紀の廃絶の可能性はある。

S E 121 (Fig.26—(1)、Ch.41、P L. 7—(a))——Q R 50区検出。長径210cm、短径195cm、深さ(120)cm。確認面から20cm程下がった覆土中に、焼土遺構(S F 73(新)、後述)が重複して作られている。出土遺物には、青磁碗・皿、瀬戸灰釉瓶子、珠洲系播鉢、釘、用途不明鉄棒、鉄滓、溶解物、漆器、皇宋通宝などがある。なお、遺構覆土層序中第7層以下がS E 121の覆土と思われる。

S E 122 (Fig.26—(2)、Ch.42)——Q 48区検出。長径165cm、短径157cm、深さ(93)cmの規模を有する。平面形は方形に近く、内部に集石がみられた。出土遺物には、珠洲系播鉢、鉄滓、土師器把手などがある。時期不明。

S E 123 (Fig.26—(3)、Ch.43)——P Q 48区検出。長径200cm、短径185cm、深さ(138)cmの規模を有する。出土遺物は、青磁碗・盤、染付皿、産地不明播鉢、釘、鉄滓、用途不明鉄製品、洪武通宝、元豊通宝、無文銭、炭化米などである。16世紀の廃絶と考えられる。

S E 124 (Fig.26—(4)、Ch.44)——R 48区検出。長径185cm、短径170cm、深さ(130)cmの規模を有する。出土遺物には、青磁碗・皿(陵花皿を含む)、白磁皿、染付碗・皿、美濃灰釉皿、瀬戸灰釉卸皿・鉄釉壺、越前甕・播鉢、珠洲系壺、瓦質手焙り、坩堝、かわらけ、小札、釘、用途不明鉄製品、銅滓、無文銭などがある。東西にある柱穴(旧)は掘立柱建物跡になる可能性がある。

S E 125 (Fig.27—(1)、Ch.45)——P Q 48区検出。長径190cm、短径177cm、深さ(116)cmの規模を有する。出土遺物には、土師器(把手付)、用途不明銅製品があるが、覆土上より出土している鉄鍋、用途不明鉄棒もS E 125の遺物と考えられる。S X 296(新)と西側で重複している。時期不明。

S E 126 (Fig.27—(2)、Ch.46—(a))——R 48・49区検出。長径162cm、短径160cm、深さ(118)cmの規模を有する。確認面から110cm程度掘り下げた段階で壁がほぼ水平に崩落している。出土遺物には、青磁碗・皿・瓶子耳?、白磁皿、染付碗・皿、美濃灰釉皿・褐釉碗、坩堝、瓦質手焙り、鉄鏝、釘、用途不明鉄角棒、銅鋳、洪武通宝、無文銭、用途不明銅製品、不明骨などがある。16世紀の廃絶と考えられる。遺構東側でS X 284(旧)と重複している。

S E 127 (Fig.27—(3)、Ch.47)——R 49区検出。長径137cm、短径120cm、深さ(40)cmの規模を有する。出土遺物は第1層からのみで、染付皿、火打金、毛抜がある。遺構南側でS X 286(旧)と重複している。16世紀の廃絶の可能性はある。

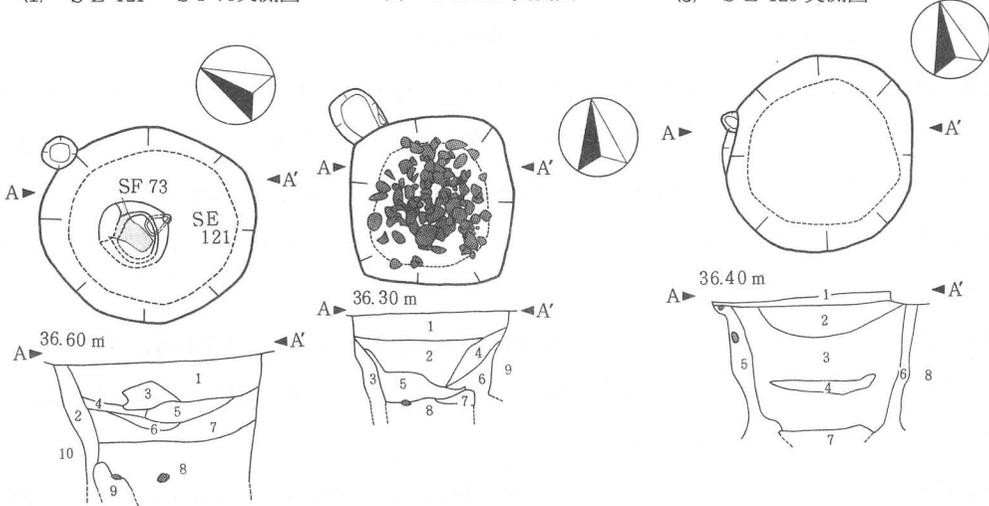
S E 128 (Fig.28—(1)、Ch.48)——U 48区検出。長径245cm、短径225cm、深さ(200)cm

Fig. 26 井戸跡VI

(1) SE 121・SF73実測図

(2) SE 122 実測図

(3) SE 123 実測図



Ch. 41 SE 121 覆土層序注記表

層序No	特 徴
1	黒褐色土 (10Y R 2/2) に黄褐色砂質土 (10Y R 5/8) がブロック状に1%と黄褐色土 (2.5 Y 5/4) が大粒状に1%含む。
2	黒褐色土 (7.5 Y R 3/1) に灰白色火山灰 (7.5 Y R 8/2) が中粒状に30%含まれる。下層しまりなし。
3	明黄褐色焼土 (10Y R 7/6) の単層。(かまど)。
4	黒褐色土 (10Y R 3/2) にぶい黄褐色砂質土 (10Y R 7/4) が大粒ブロック状に1%含まれる。
5	黒褐色土 (10Y R 2/2) に浅黄褐色砂質土 (10Y R 8/3) が小粒状に1%と黄褐色砂質土 (10Y R 5/8) が1%含まれる。
6	灰白色灰 (10Y R 8/1) の単層。
7	黒褐色土 (10Y R 2/2) に黄褐色砂質土 (10Y R 5/8) が中粒状に2%と灰白色火山灰 (10Y R 8/2) が中粒状に1%と黒色灰 (5 Y 2/1) が中粒状に若干含まれる。
8	黒褐色土 (10Y R 2/2) に灰白色 (10Y R 8/2) が大塊状に2%と黄褐色砂質土 (10Y R 5/8) が極大粒状に2%含まれる。
9	黒褐色土 (10Y R 2/2) に黄褐色砂質土 (10Y R 5/8) が若干と炭化物を1%含む。
10	地山。黄褐色砂質土 (10Y R 5/8)。

Ch. 42 SE 122 覆土層序注記表

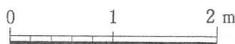
層序No	特 徴
1	黒褐色土 (10Y R 2/2) に明褐色砂質土 (7.5 Y R 5/6) が2%と灰白色パミス (2.5 Y 8/1) が上層部に若干の混層。しまりあり。
2	黒色土 (7.5 Y R 1.7/1) に灰白色砂質土 (7.5 Y 7/1) がブロック状に1%明褐色砂質土 (7.5 Y R 5/6) がブロック状に1%と黒色灰 (5 Y 2/1) が若干含む。しまりなし。
3	黒色土 (7.5 Y R 1.7/1) と灰黄色砂質土 (2.5 Y 7/2) が50%の混層。しまりなし。
4	黒褐色土 (2.5 Y 3/2) に灰白色砂質土 (2.5 Y 8/2) が30%の混層に明褐色砂質土 (7.5 Y R 5/8) を1%と若干の炭化物を含む。
5	黒色土 (7.5 Y 2/1) に灰白色灰 (7.5 Y 8/1) 上部と下部に1%と灰色灰 (7.5 Y 5/1) が30%と灰黄色砂質土 (2.5 Y 8/2) を2%と明褐色砂質土 (7.5 Y R 5/6) と炭化物を若干含む。
6	黒色土 (10Y R 2/1) に灰黄色砂質土 (2.5 Y 8/2) が2%にぶい黄褐色粘土 (10Y R 6/4) が大塊状に局所に含まれる。
7	黒色土 (7.5 Y 2/1) に灰白色砂質土 (2.5 Y 8/2) が50%含まれる。しまりなし。
8	黒色土 (7.5 Y 2/1) に褐色砂質土 (10Y R 4/6) が中央部に中板状に含まれる。
9	地山。明褐色砂質土 (7.5 Y R 5/6)。

Ch. 43 SE 123 覆土層序注記表

層序No	特 徴
1	ぶい黄褐色土 (10Y R 4/3) に小粒の炭化物が2%含まれる。しまりあり。
2	ぶい黄褐色土 (10Y R 4/3) と黒褐色土 (10Y R 2/3) の混層に極小から小粒のぶい黄褐色粘土 (10Y R 6/4) と (10Y R 7/3) が各2%ずつと小粒の炭化物を1%含む。
3	黒色土 (7.5 Y R 7/1) と黒褐色土 (10Y R 2/3) の混層に極小粒のぶい黄褐色粘土 (10Y R 6/4) (10Y R 7/3) 炭化物を若干含む。
4	黒色土 (7.5 Y R 7/1) と黒褐色土 (10Y R 2/3) の混層に灰黄褐色焼土 (10Y R 4/2) が大塊状に5%と黄褐色砂質土 (10Y R 5/8) が中から極大粒状に5%と炭化物を若干含む。
5	褐色土 (10Y R 4/4) に極小から大塊状のぶい黄褐色砂質土 (10Y R 6/3) が40%含む極小から小粒の黄褐色砂質土 (10Y R 5/8) を2%と極小粒の炭化物を若干含む。しまりなし。
6	褐色土 (10Y R 4/4) に小粒のぶい黄褐色砂質土 (10Y R 6/3) が2%と極小の黄褐色砂質土 (10Y R 5/8) を3%極小の炭化物を若干含む。(下層部になり次第もろくなる)
7	灰黄褐色砂質土 (10Y R 4/2) の混層。
8	地山。ぶい黄褐色砂質土 (10Y R 6/3)。

Ch. 44 SE 124 覆土層序注記表

層序No	特 徴
1	黒褐色粘土 (10Y R 3/2) に褐色粘土 (10Y R 4/4) と暗褐色粘土 (10Y R 3/3) を大塊状に1%と暗赤褐色焼土 (5 Y R 3/6) を小粒状に1%と炭化物を1%含む。しまりあり。
2	黒褐色粘土 (10Y R 3/2) と黒褐色土 (7.5 Y R 3/1) との混層に炭化物を1%含む。しまりあり。
3	黒褐色土 (7.5 Y R 3/1) に黄褐色砂質土 (10Y R 5/8) を中粒状に1%と炭化物を少量含む。
4	黒褐色土 (10Y R 2/2) に黄褐色砂質土 (10Y R 5/8) が大から極大粒状に15%含む。
5	黒褐色土 (10Y R 2/2) に黄褐色砂質土 (10Y R 5/8) が極小粒状に1%と炭化物を含む。
6	地山。黄褐色砂質土 (10Y R 5/8)。



(4) SE 124 実測図

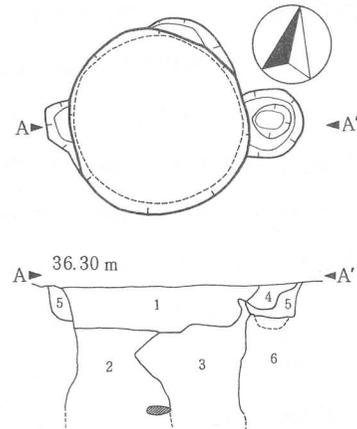
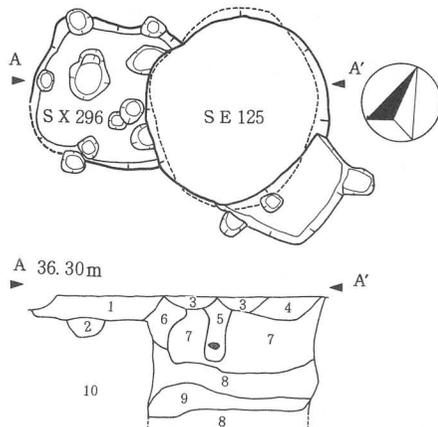


Fig. 27 井戸跡Ⅶ



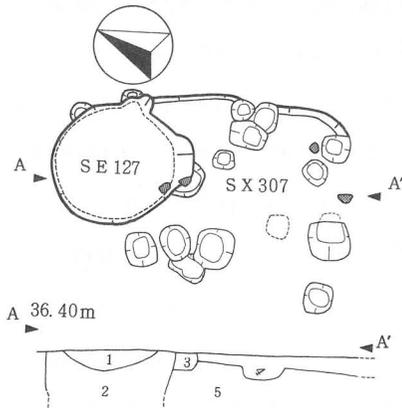
(1) SE 125・SX 296 実測図

Ch. 45

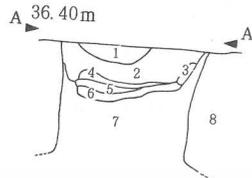
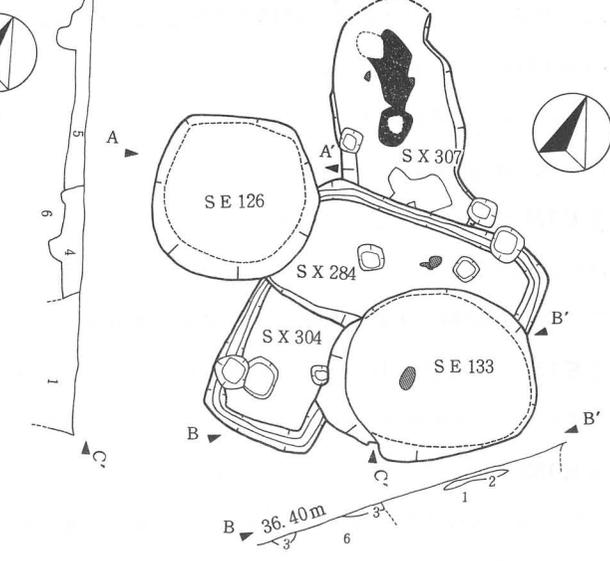
SE 125・SX 296 覆土層序注記表

層序No	特 徴
1	暗褐色土 (10Y R 3/3) に黒褐色灰 (10Y R 3/1) と明黄褐色砂質土 (10Y R 6/8) が極小から大粒状に1%と明赤褐色焼土 (5Y R 5/8) が極小粒状に1%と炭化物を2%含む。しまりあり。
2	暗褐色土 (10Y R 3/3) に黒褐色灰 (10Y R 3/1) が5%と炭化物を1%含む。しまりあり。
3	黒褐色土 (10Y R 3/2) に灰白色パミス (10Y R 8/2) が中から大粒状に1%と炭化物を含む。しまりあり。
4	黒褐色土 (10Y R 2/2) に黄褐色砂質土 (10Y R 5/8) が極小から小粒状に1%と灰白色パミス (10Y R 8/1) を1%と炭化物を1%含む。しまりあり。
5	黒褐色土 (10Y R 2/2) に褐色砂質土 (10Y R 4/6) が極小から小粒状に1%と炭化物を1%含む。
6	黒褐色土 (10Y R 2/2) と黒褐色灰 (10Y R 3/1) との混層。
7	灰黄褐色砂質土 (10Y R 4/2) に黒褐色土 (10Y R 3/1) が中から大塊状に20%と褐色砂質土 (10Y R 6/4) が中から大粒状に1%とに黄褐色砂質土 (7.5 Y 7/3) が中塊状に3%含まれる。しまりややなし。
8	灰黄褐色砂質土 (10Y R 4/2) と黒褐色土 (10Y R 3/1) との混層に黄褐色砂質土 (10Y R 5/8) が大粒状に1%とに黄褐色砂質土が大塊状に1%含まれる。
9	に黄褐色砂質土 (10Y R 4/3) に黒褐色土 (10Y R 3/1) が中から大塊状に5%と褐色砂質土 (10Y R 6/4) が中から大塊状に1%とに黄褐色砂質土 (7.5 Y 7/3) が中塊状に1%含まれる。しまりややなし。
10	地山。黄褐色砂質土 (10Y R 5/8)。

(3) SE 127 実測図



(2) SE 126・133
SX 284・304・307 実測図



Ch. 46

(a) SE 126 覆土層序注記表

層序No	特 徴
1	灰黄褐色粘土 (10Y R 4/2) に明褐色粘土 (7.5 Y 5/6) が中粒状に2%と中から大粒状に2%と灰黄色粘土 (2.5 Y 6/2) が中塊状に1%と灰白色パミス (2.5 Y 8/1) が極小から小粒状に1%と炭化物を1%含む。しまりあり。
2	黒褐色土 (7.5 Y R 2/2) と褐色粘土 (10Y R 4/4) の混層に黄褐色砂質土 (10Y R 5/8) を大塊状に1%と黄褐色砂質土 (10Y R 5/6) を中粒状に1%と灰白色パミス (2.5 Y 8/1) が小粒状に1%と炭化物を2%含む。しまりあり。
3	灰黄褐色粘土 (10Y R 4/2) 単層。しまりあり。
4	黒褐色粘土 (10Y R 3/2) に黒褐色土 (10Y R 3/1) が極うす板状に2%と明褐色粘土 (7.5 Y 5/6) を小粒状に3%含む。しまりあり。
5	黒褐色土 (10Y R 2/2) に黒褐色粘土 (7.5 Y R 3/2) 10%の混層に炭化物を1%含む。
6	黒褐色粘土 (10Y R 3/2) に褐色粘土 (7.5 Y R 4/6) とに黄褐色砂質土を大粒状に1%ずつと炭化物を1%含む。
7	黒褐色土 (10Y R 2/2) に黒褐色粘土 (7.5 Y R 3/2) を大塊状に5%と黒色土 (7.5 Y 2/1) を2%と炭化物を1%含む。
8	地山。黄褐色砂質土 (10Y R 5/6)。

(b) SE 133・SX 284・304・307 覆土層序注記表

層序No	特 徴
1	黒色土 (10Y R 2/1) に小粒状の褐色砂質土 (10Y R 4/6) を2%と極小塊の炭化物を1%含む。
2	明黄褐色砂質土 (10Y R 6/8)。
3	黒色土 (10Y R 1.7/1)。
4	黒色土 (10Y R 2/1) に小粒状の褐色砂質土 (10Y R 4/6) と黒褐色灰 (10Y R 3/1) と極小塊の炭化物をそれぞれ1%ずつ含む。しまりあり。
5	黒褐色土 (10Y R 2/2) に橙色焼土 (7.5 Y R 6/6) を2%と小塊状の炭化物を1%含む。しまりあり。
6	地山。褐色土 (10Y R 4/4)。

Ch. 47

SE 127・SX 307 覆土層序注記表

層序No	特 徴
1	黒褐色土 (10Y R 2/2) に黒色灰 (N2) を2%とに黄褐色粘土 (10Y R 5/3) を2%と極小塊の炭化物を1%含む。しまりあり。
2	黒褐色土 (10Y R 2/2) に極小塊から中塊状の炭化物を3%と黒色灰 (N2) を3%とに黄褐色灰 (10Y R 7/2) を2%含む。
3	黒色土 (10Y R 2/1)。
4	黒色土 (10Y R 2/1) に小粒の褐色砂質土 (10Y R 4/6) と極小塊の炭化物をそれぞれ1%含む。しまり非常に強い。
5	地山。褐色土 (10Y R 4/6)。



の規模を有する。遺物は上層からのみ出土している（主に第3層付近）。染付皿、かわらけ、羽口、縄文時代の石棒が出土しており、その内、かわらけは、8点（他遺物はすべて破片1点のみ）の出土があり、注目される。遺構南側でS X 289（旧）と重複している。16世紀代の廃絶か。

SE 130（Fig.14—(1)、Ch.15—(b)）—— R 48区検出。長径170cm、短径108cm、深さ（110）cmの規模を有する。隅丸方形に近い平面形を有しており、出土遺物には、白磁碗、用途不明鉄製品がある。時期不明。

SE 131（Fig.28—(2)、Ch.49）—— W47・48区検出。長径230cm、短径不明、深さ（110）cmの規模を確認する。未調査部分にかかっているため、プラン、規模とも不明である。出土遺物には、青磁皿、美濃灰釉皿、鏝状用途不明鉄製品がある。時期不明。

SE 132（Fig.28—(4)）—— T 44区検出。長径228cm、短径215cm、深さ（10）cmの規模を有する。プランを確認したのみである。出土遺物には白磁皿（端反皿）、釘がある。時期不明。

SE 133（Fig.27—(2)、Ch.46—(b)）—— R 49区検出。長径200cm、短径163cm、深さ（15）cmの規模を有する。出土遺物には、瀬戸灰釉卸皿、漆器、不明骨がある。遺構北側と西側でそれぞれS X 284（旧）、S X 304（旧）と重複する。瀬戸灰釉卸皿については確認面からの出土であり、SE 133に付随しない可能性もある。時期不明。

SE 134（Fig.28—(3)、Ch.50）—— R 50区検出。長径124cm、短径120cm、深さ（85）cmの規模を有する。平面形はほぼ円形で小型の井戸跡。出土遺物には、確認面から半月形用途不明鉄製品がある。時期不明。

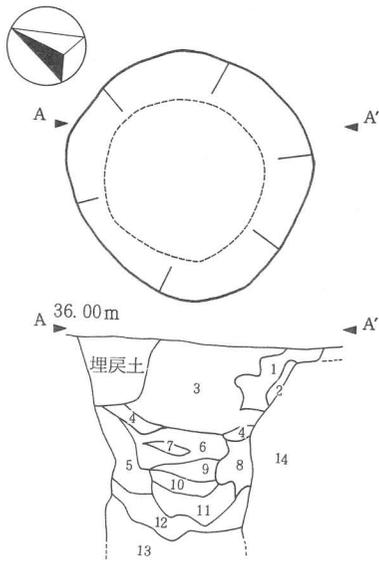
SE 135（Fig.14—(2)、Ch.16—(b)）—— S 48区検出。長径135cm、短径118cm、深さ（10）cmの規模を有する。S T 273（旧）の北壁で重複している。覆土からは用途不明鉄製品、鉄滓が出土している。また、遺構確認作業の際出土した遺物で、SE 135に伴う可能性のあるものとして、釘、毛抜鋏がある。時期は、重複関係から16世紀の廃絶と思われる。

SE 136（Fig.28—(5)、Ch.51）—— S T 49区検出。長径153cm、短径145cm、深さ（100）cmの規模を有する。出土遺物には、青磁碗、白磁皿、染付碗、瀬戸灰釉壺、釘、洪武通宝、開元通宝、永楽通宝、元豊通宝、無文銭が出土している。16世紀の廃絶と思われる。

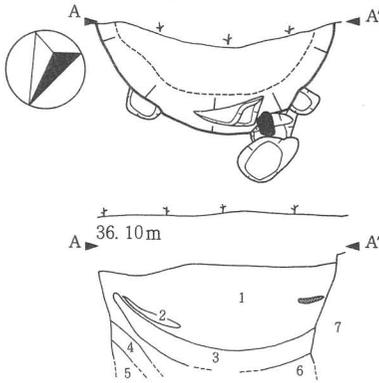
SE 138（Fig.29—(1)(2)、Ch.52、P L . 8 ・ 11（c～g））—— T 43・44区検出。長径375cm、短径355cm、深さ310cmの規模を有する。隅柱横棧型の木枠を有する。木枠は130～140cm残存している。隅柱は床面に密着していない。横棧は三段までみられる。セクション図では、木枠内の土と構築時の裏込め土が表層付近まで明確に分かれている。木枠上部が腐朽してから埋め戻す井戸跡が多い中で、SE 138は木枠が残っている時点で埋め戻しを行っている可能性が高い。出土遺物は、木枠の裏込め部分から、青磁碗・大皿・皿、瀬戸鉄釉碗、瀬戸灰釉皿、越前甕、瓦質手焙り、珠洲系播鉢、釘、鉄鍋、銅皿？、砥石などがあり、木枠内からは青磁碗・皿、

Fig. 28 井戸跡Ⅶ

(1) S E 128 実測図



(2) S E 131 実測図



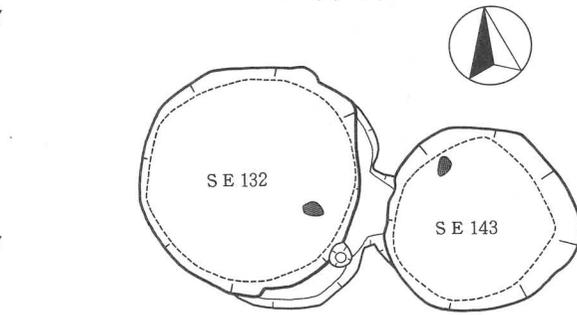
Ch. 49
S E 131 覆土層序注記表

解序No	特	徴
1	黒褐色土 (10Y R 3/2) と暗褐色土 (10Y R 3/4) の混層に小塊から大塊状の炭化物を5%多量含む。 (7.5 Y R 7/6) を2%多量含む。中粒の灰白色パミス (2.5 Y 8/1) を1%含む。	
2	灰白色灰 (10Y R 7/1)。	
3	褐灰色灰 (10Y R 4/1)。	
4	暗褐色土 (10Y R 3/4) に小塊の灰白色パミス (2.5 Y 8/1) を2%含む。	
5	黒褐色土 (10Y R 2/2) に小塊の灰白色パミス (2.5 Y 8/1) と小塊の炭化物を各々1%含む。	
6	褐色土 (10Y R 4/6) と褐灰色灰 (10Y R 4/1) の混層に浅黄褐色焼土 (10Y R 8/3) を2%含む。	
7	地山。明黄褐色砂質土 (10Y R 6/6)。	

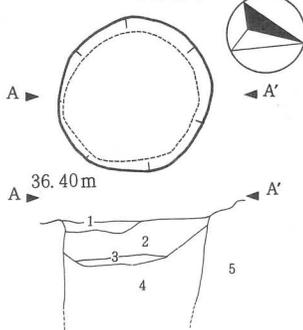
Ch. 48
S E 128 覆土層序注記表

解序No	特	徴
1	黒褐色土 (10Y R 2/2) とに黄褐色土 (10Y R 4/3) と褐灰色灰 (10Y R 4/1) とが4対1対1の混層に黄褐色土 (10Y R 7/3) が大塊状に5%多量中央部に褐色焼土 (10Y R 4/4) とに黄褐色土 (10Y R 5/3) が2対2の割合で含まれる。	
2	黒色土 (10Y R 2/1) に黒褐色土 (10Y R 3/1) が若干含まれる。	
3	黒褐色土 (10Y R 2/2) に明赤褐色土 (5Y R 5/6) が中から大粒状に1%とに黄褐色土 (5Y R 5/3) が中粒状に1%と褐色砂質土 (10Y R 4/6) が中粒状に1%と炭化物を若干含む。	
4	黒褐色土 (10Y R 2/2) と褐灰色灰 (10Y R 6/1) と黒褐色土 (10Y R 3/1) とが3対6対1の混層に明赤褐色土 (5Y R 5/3) が小から中粒状に1%を含む。	
5	黒褐色土 (10Y R 2/2) と褐灰色灰 (10Y R 4/1) との9対1の混層に明赤褐色土 (5Y R 5/6) と褐色砂質土 (10Y R 4/6) とが中粒状に1%と炭化物を若干含む。	
6	褐灰色灰 (10Y R 4/1) と黒褐色土 (10Y R 3/1) と重灰色土 (2.5 Y 4/1) とが5対3対2の混層に黄褐色土 (10Y R 6/2) が上部に厚い板状に5%と明赤褐色土 (5Y R 5/6) が中から大塊状に1%とに黄褐色粘土が大塊状に1%と炭化物を若干含む。しまりやなし。	
7	浅黄色土 (2.5 Y 7/3) と灰黄灰色土 (10Y R 4/2) とに黄褐色土 (10Y R 6/3) とが8対1対1の混層。しまりやなし。	
8	黒褐色土 (10Y R 2/2) と黒褐色土 (10Y R 3/1) とが5対5の混層に黄褐色土 (10Y R 4/2) が大塊状に1%含まれる。しまりやなし。	
9	黒褐色土 (10Y R 2/2) と黒褐色土 (10Y R 3/1) とが7対3の混層。	
10	褐灰色土 (10Y R 4/1) と暗褐色土 (10Y R 3/3) と黒色土 (10Y R 1.7/1) とが7対2対1の混層。しまりやなし。	
11	黒褐色土 (10Y R 3/1) と灰白色土 (10Y R 8/1) と黒褐色土 (10Y R 3/2) と黒色土 (10Y R 1.7/1) とが4対3対2対1の混層に明赤褐色土 (5Y R 5/6) を大粒状に1%含む。しまりやなし。	
12	黒色土 (10Y R 1.7/1) と褐灰色土 (10Y R 4/1) と黒褐色土 (10Y R 2/2) とが6対3対1の混層の下層に灰白色土 (10Y R 1.7/1) が若干板状に5%と暗褐色砂質土 (10Y R 3/4) が大粒状に1%含まれる。しまりやなし。	
13	黒褐色土 (10Y R 2/2) に黒褐色土 (10Y R 1.7/1) が1%と暗褐色砂質土 (10Y R 3/4) が大粒状に1%含まれる。	
14	地山。黄褐色砂質土 (10Y R 5/8)。	

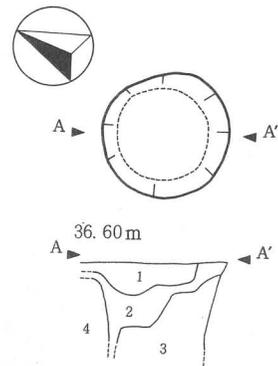
(4) S E 132・143 実測図



(5) S E 136 実測図



(3) S E 134 実測図



Ch. 50
S E 134 覆土層序注記表

解序No	特	徴
1	黒褐色土 (10Y R 3/2) に淡黄色砂質土 (2.5 Y 8/4) を大粒状に1%と黄褐色砂質土 (10Y R 5/8) を小から中粒状に1%含まれる。	
2	黒褐色土 (10Y R 3/1) とに黄褐色砂質土 (10Y R 6/2) とに黄褐色砂質土 (10Y R 5/8) の4対4対2の混層。しまりやなし。	
3	黒褐色土 (10Y R 2/2) に明黄褐色砂質土 (10Y R 7/6) と淡黄色砂質土 (2.5 Y 8/4) を中から大粒状に7%含む。	
4	地山。黄褐色砂質土 (10Y R 5/8)。	

Ch. 51
S E 136 覆土層序注記表

解序No	特	徴
1	黒褐色土 (7.5 Y R 2/2) に黄褐色砂質土 (10Y R 5/6) が小から大粒状に1%含まれる。しまりやなし。	
2	黒褐色土 (10Y R 3/2) に黄褐色砂質土 (10Y R 5/6) が小から大粒状に1%とに黄褐色土 (10Y R 4/3) が大塊状に1%と赤褐色土 (5Y R 4/6) が小から中粒状に1%と下層に褐灰色土 (10Y R 5/1) が中粒状に3%含まれる。しまりあり。	
3	に黄褐色砂質土 (10Y R 7/3) の単層。	
4	黒褐色土 (10Y R 2/2) に黄褐色砂質土 (10Y R 5/8) が中から大粒状に2%と炭化物を少量含む。しまりあり。	
5	地山。黄褐色砂質土 (10Y R 5/6)。	

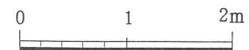
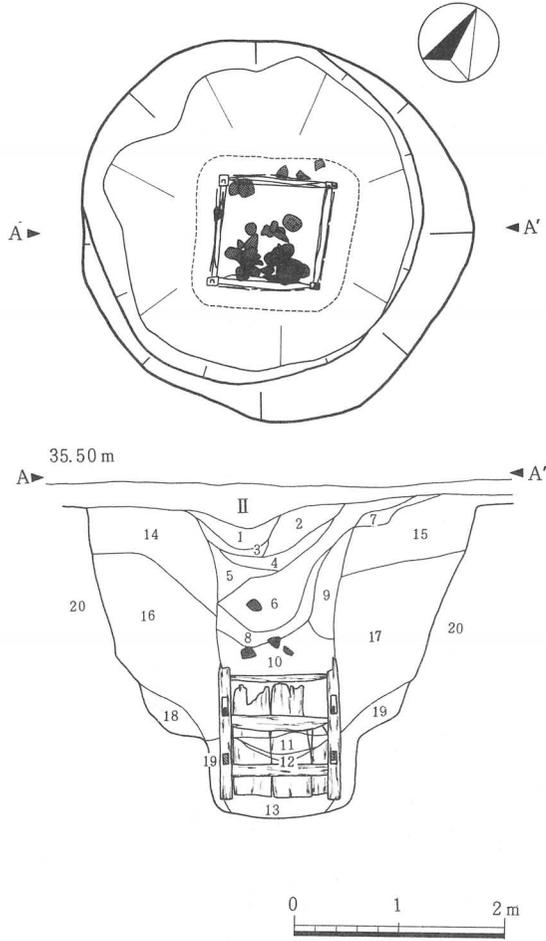
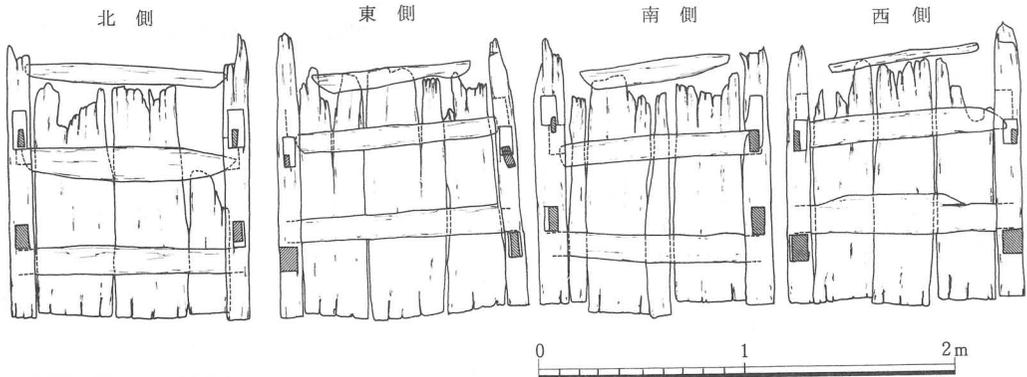


Fig. 29 井戸跡Ⅸ

(1) S E 138 実測図



(2) S E 138 井戸粹実測図



Ch. 52 SE 138 覆土層序注記表

層序No	特 徴
II	黒褐色土 (10 Y R 2/2) に黒褐色粘土 (10 Y R 3/2) が中塊状に1%と炭化物を少量含む。
1	黒褐色土 (10 Y R 2/2) に黒色灰 (10 Y R 1.7/1) と褐色灰 (10 Y R 5/1) が5%ずつと炭化物を若干含む。
2	黒褐色土 (10 Y R 2/2) に褐色砂質土 (10 Y R 4/4) を薄い板状に3%と炭化物を若干含む。しまりややあり。
3	黒色灰 (10 Y R 1.7/1) と褐色灰 (10 Y R 5/1) と黒褐色土 (10 Y R 2/2) との5対3対2の混層。
4	黒褐色土 (10 Y R 2/3) に灰黄褐色粘土 (10 Y R 4/2) を中から大粒状に7%と炭化物を若干含む。土壌が酸化し赤褐色 (5 Y R 4/6) を程している。
5	黒褐色粘土 (10 Y R 2/3) と灰黄褐色粘土 (10 Y R 4/2) と黒褐色土 (10 Y R 2/2) との6対2対2の混層に炭化物を若干含む。しまりあり。
6	黒褐色土 (10 Y R 2/2) に暗褐色粘土 (10 Y R 3/3) が中から大粒状に5%と灰白色パミス (7.5 Y R 8/1) が中粒状に3%と炭化物を若干含む。しまりあり。
7	黒褐色土 (10 Y R 2/3) に、にぶい黄褐色粘土 (10 Y R 4/3) が小から大粒状に20%と黒色灰 (10 Y R 1.7/1) と炭化物を少量含む。
8	黒褐色粘土 (10 Y R 3/2) と灰黄褐色粘土 (10 Y R 4/2) とにぶい黄色粘土 (2.5 Y 6/3) との6対3対1の混層。しまりあり。土壌が若干酸化し褐色 (7.5 Y R 4/6) を程している。
9	黒褐色土 (10 Y R 2/2) に黒色灰 (10 Y R 1.7/1) を中から大粒状に1%と黄褐色砂質土 (10 Y R 5/8) を3%と炭化物を若干含む。
10	灰黄褐色粘土 (10 Y R 4/2) に黒褐色粘土 (10 Y R 3/1) が中から大塊状に3%と炭化物を若干含む。しまりあり。
11	黒褐色粘土 (10 Y R 2/2) にオリブ色粘土 (5 Y 6/6) とにぶい黄褐色粘土 (10 Y R 4/3) が大塊状に5%と黒色灰 (10 Y R 1.7/1) が3%とワラを若干含む。しまりあり。
12	オリブ色粘土 (5 Y 6/6) に黒褐色粘土 (10 Y R 2/2) を大塊状に30%含む。
13	黒色土 (10 Y R 1.7/1) に黒色灰 (10 Y R 1.7/1) が10%とカヤが多量に混入している。
14	黒褐色土 (10 Y R 2/3) に褐色砂質土 (10 Y R 4/6) と黄褐色砂質土 (10 Y R 5/6) が中から大粒状に7%と灰白色パミス (7.5 Y R 8/1) と淡黄色パミス (2.5 Y 8/3) が小から中粒状に3%と炭化物を若干含む。
15	黒褐色土 (10 Y R 2/2) に黄褐色砂質土 (10 Y R 5/6) と灰白色砂質土 (10 Y R 8/2) を大から極大粒状に1%と黒色灰 (10 Y R 1.7/1) を極大粒状に1%と炭化物を若干含む。
16	黒褐色土 (10 Y R 2/2) に暗褐色土 (10 Y R 3/3) と暗褐色砂質土 (10 Y R 3/3) の混層が極厚い板状に10%と褐色砂質土 (10 Y R 4/4) が大塊状に3%と灰白色パミス (7.5 Y R 8/1) を中粒状に1%と炭化物を若干含む。しまりややあり。
17	黒褐色土 (10 Y R 2/2) と暗褐色砂質土 (10 Y R 3/4) との5対5の混層に黄褐色砂質土 (10 Y R 5/6) を大粒状に3%と炭化物を若干含む。
18	黒褐色細砂 (7.5 Y R 3/2) に黒褐色土 (10 Y R 2/2) が中粒状に3%と白色パミス (7.5 Y R 8/1) を中粒状に7%含む。
19	黒色土 (7.5 Y R 2/1) に暗褐色砂質土 (10 Y R 3/4) が極小粒状に1%と炭化物が若干含まれる。
20	地山。黄褐色砂質土 (10 Y R 5/6)。

白磁皿、染付碗・皿、越前甕、珠洲系播鉢、埴塙、小札、鎧の縁金具、小柄、釘、銭貨、漆器、木槌、折敷、箸、桃の種、縄文時代の石斧がある。この遺物出土状態をみると、井戸構築時の木枠裏込めに染付が一点も含まれず、廃棄時の埋め戻し土には含まれていることが注目され、また裏込め部で出土している瀬戸灰釉皿は、口縁部にのみ施釉されているものであることなどから、井戸構築は15世紀後半であり、廃絶期は16世紀に入ってからの可能性が高いものと思われる。また、井戸木枠内は一時期の埋め戻しである。これは、枠内出土の青磁碗（Fig.40—7、P.L.13—7）が第5層から第13層までの出土破片を接合したものであることから証明される。

SE 139（Fig.30—(1)、Ch.53）—— S T 44区検出。長径165cm、短径145cm、深さ（120）cmの規模を有する。出土遺物は、青磁碗、美濃灰釉鉢、越前甕、鉄鏃、鏢状用途不明鉄製品、釘、鉄滓、漆器がある。セクションでは深さ120cmまで単層であり、一時埋め戻しをした可能性が高い。時期不明。

SE 140（Fig.16）—— Q 42区検出。長径245cm、短径220cm、深さ（5）cmの規模を有する。S T 277（新）と重複している。プランを確認したのみでほとんど掘り下げていない。出土遺物は青磁碗1点のみ。時期不明。

SE 141（Fig.18）—— R S 42区検出。長径195cm、短径190cm、深さ（35）cmの規模を有する。遺構北側でS T 283（新）と重複している。出土遺物には、染付碗（口縁鉄釉）、白磁皿、無釉陶器甕、鉄鏃、三ツ目札、小札、鎧の胸板、釘、判読不能銭貨がある。16世紀の廃絶と思われる。

SE 142（Fig.30—(2)）—— R 41区検出。樹木保護のため調査できず規模不明。白磁皿、釘の出土があるが時期不明。重複関係なし。

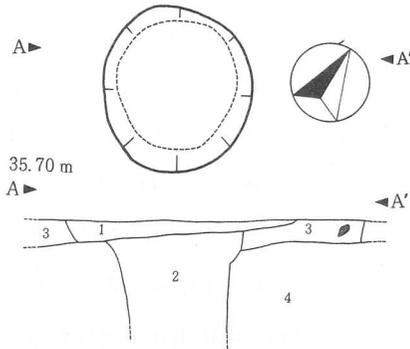
SE 143（Fig.28—(4)）—— T 44区検出。長径186cm、短径180cm、深さ（41）cmの規模を有する。出土遺物には青磁碗、白磁皿、溶解物、釘がある。時期不明。S E 132との新旧関係も不明である。

S X 221（Fig.21—(1)、Ch.27）—— S 49・50区検出。長径162cm、短径143cm、深さ（42）cmの規模を有している。外縁にさらに直径320cm程度の竪穴遺構がある。井戸跡は竪穴遺構の覆土から掘り込んで構築されている。この竪穴遺構と井戸跡の関係は不明。染付皿、珠洲系播鉢が出土しており、16世紀前半に廃絶された可能性が考えられる。

S X 277（Fig.15—(1)、Ch.17—(b)）—— R 50区検出。S X 277は東西2つの遺構が重複しているため、西側をA（新）、東側をB（旧）と仮称して報告する。Aは長径155cm、短径150cm、深さ（105）cmの規模のほぼ円形を呈する遺構である。出土遺物には瀬戸灰釉大皿がある。また、Bは長径130cm、短径120cm、深さ（100）cmの規模でAと同様、ほぼ円形を呈している。出土遺物には溶解物、釘などがある。いずれも時期不明。

Fig. 30 井戸跡 X

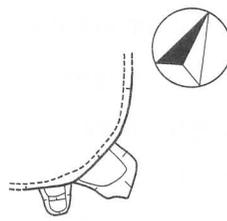
(1) S E 139 実測図



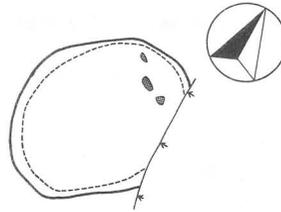
SE 139 覆土層序注記表

層序No	特	徴
1	黒色土 (10Y R 2/1) に灰黄褐色灰 (10Y R 6/2) を全体的に5%含む。	
2	黒色土 (10Y R 2/1) に灰黄褐色灰 (10Y R 6/2) を全体的に10%と小塊状の炭化物を1%と極小粒の明黄褐色砂質土 (10Y R 6/6) を1%含む。	
3	黒色土 (10Y R 2/1) に、い黄褐色粘土 (10Y R 6/4) を3%と褐灰色灰 (10Y R 6/1) を5%と極小から小塊状の炭化物を2%含む。	
4	地山。黄褐色砂質土 (10Y R 5/6)。	

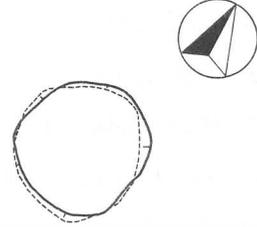
(2) S E 142 実測図



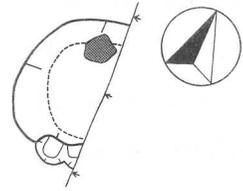
(4) S X 291 実測図



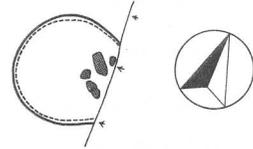
(3) S X 282 実測図



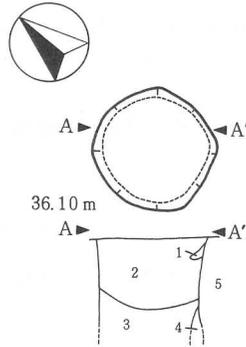
(5) S X 313 実測図



(6) S X 314 実測図



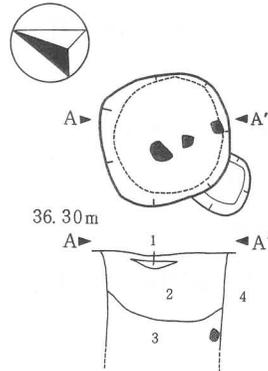
(7) S X 290 実測図



SX 290 覆土層序注記表

層序No	特	徴
1	黄褐色砂質土 (10Y R 5/6) の単層。	
2	黒褐色土 (10Y R 2/3) に極小粒状の灰白色パミス (10Y R 8/2) を、3%と極小塊の炭化物を含み、下層部上面に、中粒状に、い黄褐色粘土 (10Y R 5/3) を3%含む。しまりあり。	
3	黒色土 (10Y R 2/1) に、い黄褐色灰 (10Y R 7/2) を3%と極小塊の炭化物を1%含む。しまりなし。	
4	灰黄褐色砂質土 (10Y R 4/2) の単層。	
5	地山。黄褐色砂質土 (10Y R 5/6)。	

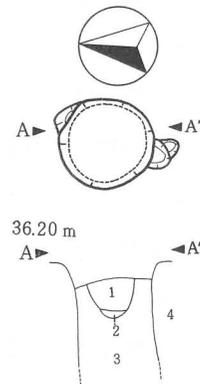
(8) S X 292 実測図



SX 292 覆土層序注記表

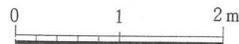
層序No	特	徴
1	黒色土 (10Y R 2/1) と褐灰色灰 (10Y R 4/1) との混層。	
2	黒褐色土 (10Y R 2/2) に中塊状の黄褐色砂質土 (10Y R 5/6) を1%と褐灰色灰を全体的に2%と極小から中塊状の炭化物を2%含む。灰白色灰 (10Y R 8/2) も2%含んでいる。しまりあり。	
3	黒褐色土 (10Y R 2/2) に中から大塊状の灰白色砂質土 (2.5 Y 7/1) を5%と中粒状の灰黄褐色砂質土 (10Y R 6/2) を2%と極小から中塊状の炭化物を3%含む。しまりあり。	
4	地山。黄褐色砂質土 (10Y R 5/6)。	

(9) S X 308 実測図



SX 308 覆土層序注記表

層序No	特	徴
1	黒褐色土 (10Y R 2/2) に極小塊の炭化物を1%含む。しまりあり。	
2	黒褐色土 (10Y R 2/2) と褐灰色灰 (10Y R 4/1) と灰黄褐色灰 (10Y R 6/2) の混層。	
3	黒褐色土 (10Y R 2/2) に極小塊の炭化物を1%と小粒のい黄褐色砂質土 (10Y R 7/2) を20%含む。	
4	地山。明黄褐色砂質土 (10Y R 6/6)。	



S X 282 (Fig.30—(3)) —— Q 48区検出。長径130cm、短径120cm、深さ(110)cmの規模を有する。出土遺物には、白磁八角碗、青磁碗、瀬戸灰釉瓶子、火箸、釘、用途不明鉄製品がある。陶磁器の3片はいずれも二次焼成を受けている。15世紀後半の廃絶の可能性がある。

S X 290 (Fig.30—(7)、Ch.54) —— U 48区検出。長径120cm、短径115cm、深さ(90)cmの規模を有する。出土遺物には、青磁皿、白磁皿、染付碗・皿、釘などが出土している。16世紀の廃絶の可能性がある。

S X 291 (Fig.30—(4)) —U 49区検出。長径190cm、短径150cm、深さ(45)cmの規模を有する。不整形の平面を呈する遺構である。出土遺物には、青磁碗、小札、鉄鏃、釘、溶解物、判読不能銭貨がある。S B 68の柱穴と重複していると思われるが、新旧関係等不明である。時期不明。

S X 292 (Fig.30—(8)、Ch.55) —— T 49区検出。長径140cm、短径125cm、深さ(95)cmの規模を有する。出土遺物には、青磁碗、越前系播鉢、かすがい、釘、鉄鍋、鉄砲の玉、砥石がある。100cm程掘り下げた段階では壁がしっかりしていた。16世紀の廃絶の可能性が高い。

S X 308 (Fig.30—(9)、Ch.56) —— T 48区検出。長径92cm、短径88cm、深さ(100)cmの小規模なほぼ円形の遺構。出土遺物には青磁碗、染付皿、漆器(PL.33—330)、釘などがある。青磁碗、漆器の一部に火を受けた痕跡が残っている。16世紀の廃絶の可能性がある。

S X 313 (Fig.30—(5)) —— W 48区検出。長径(140)cm、短径不明、深さ(67)cmの規模を確認した。東側が未調査部にかかったため正確な規模・プランを確認していない。出土遺物には染付碗が1点ある。16世紀の廃絶の可能性がある。

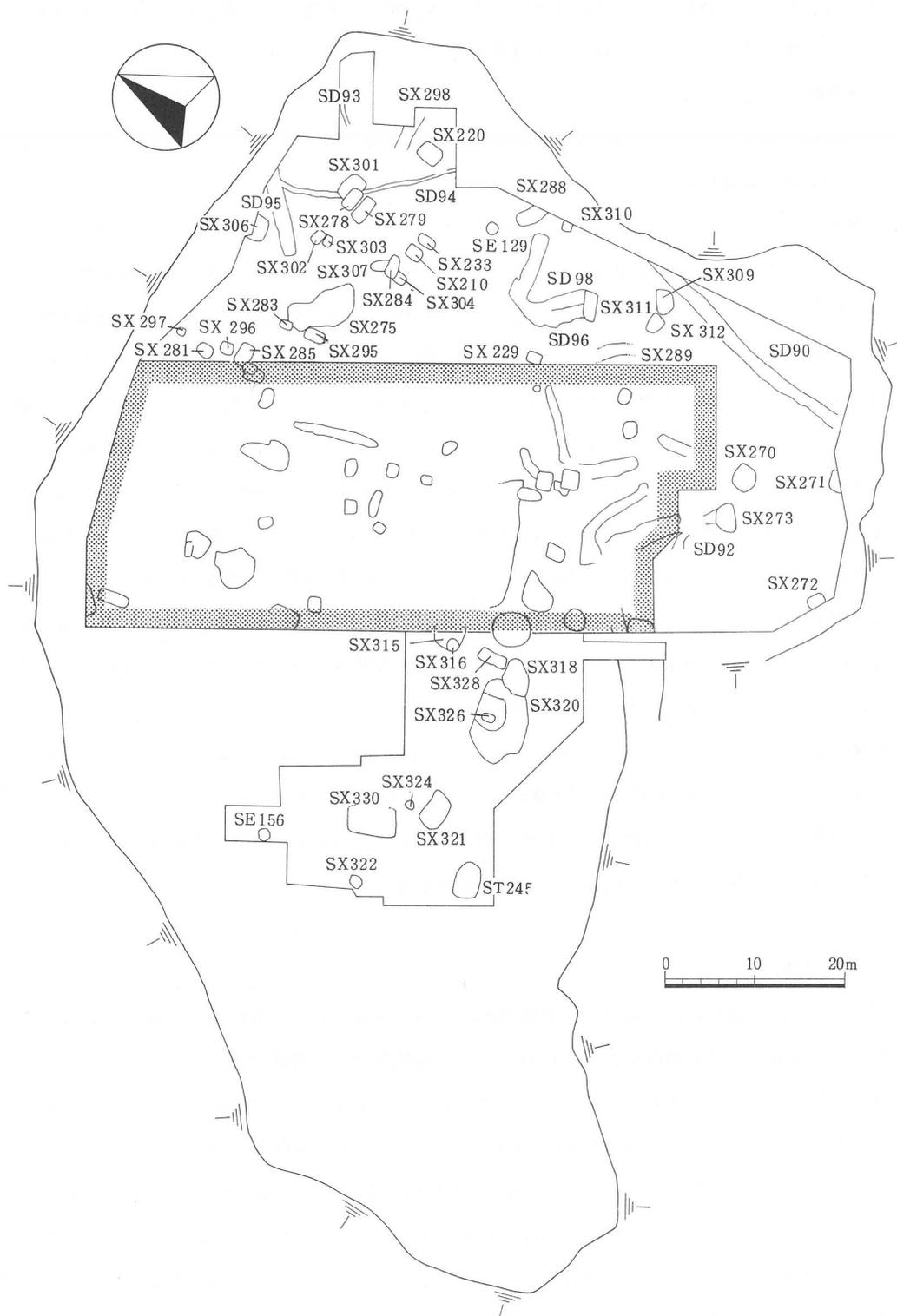
S X 314 (Fig.30—(6)) —— V 48区検出。長径108cm、短径不明、深さ(68)cmの規模を確認した。S X 313同様東側が未調査部にかかっているため、規模・プラン共に不明である。出土遺物には釘が1点あるが、確認面から出土している折縁口縁の美濃灰釉皿も遺構に伴う可能性がある。(16世紀後半に廃絶された可能性がある。)

5. 溝跡

溝跡には、城館期に伴う溝跡と城館期以前のものともみられる。城館期の溝跡は、概ね幅が狭く、直線的に延びる傾向がある。これに対して城館期以前の溝跡は幅が広く、L字やU字に曲折することもある。また、延びる方向についても、城館期のものは館の形状、建物跡の軸方向に関係しているのに対し、城館期以前のは延びる方向が無作為である。

S D 90 (Fig.32、Ch.57) —— U V 48区、W 47区検出。幅140cm、深さ60cmで、北東から南西へ約27mの規模を確認した。遺物は南端部を中心に出土している。青磁碗、白磁碗・皿・八角碗、美濃灰釉皿、産地不明播鉢・皿、瓦質手焙り、伊万里皿、須恵器篋書壺、釘、銅滓、鉄滓が出土しているが、すべてがS D 90に伴うとは考えられない。南端で掘立柱建物跡等と重

Fig. 31 内館堅穴遺構・溝跡配置図



複している可能性が高い。時期不明であるが、16世紀以前とみてよいと思われる。

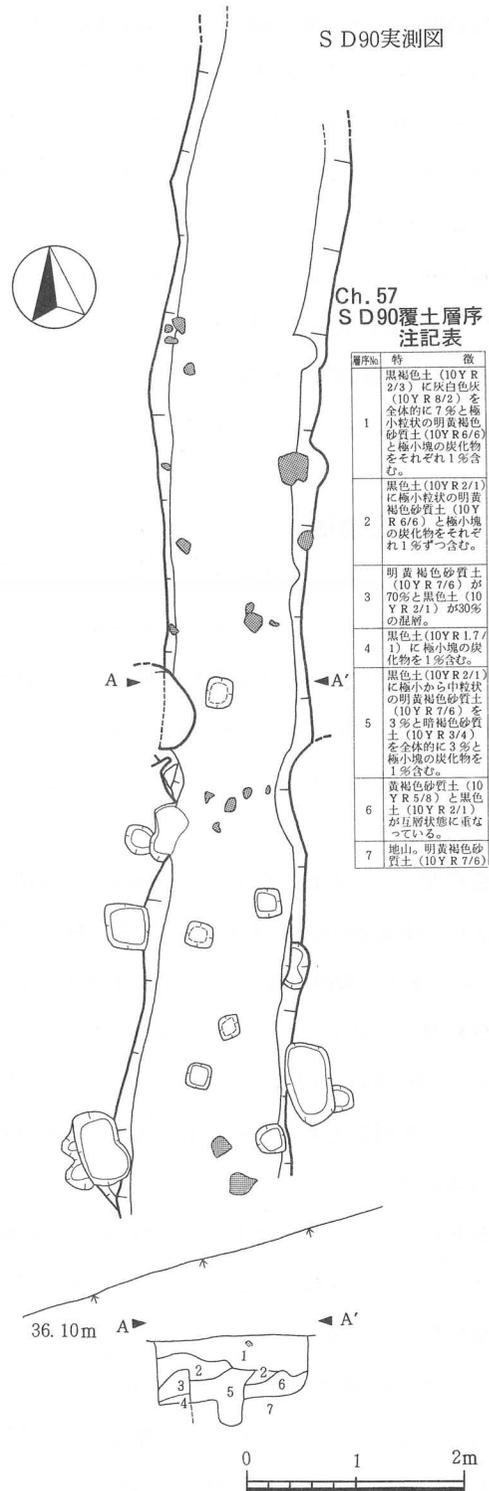
SD92 —— V45・46区検出。幅114cm、深さ15cmの規模を有する。西から南へと約7mを確認した。西端でS T258、南端でS X273と重複するが、新旧関係は不明である。溝跡中央部ではS E111（新）と重複している。出土遺物には、白磁皿、瓦質手焙り、かわらけ等がある。時期は不明である。

SD93 —— R50区検出。幅38cm、深さ8cmの規模を有する。東西に延びる溝跡で約2.6mを確認した。溝跡西端でS E117（新）と重複し、東端ではS T270と重複する（新旧関係不明）出土遺物は1点もない。時期不明だが、規模、延びる方向から城館期の可能性も考えられる。

SD94 —— Q R49区、S50区検出。幅60cm、深さ30cmの規模を有する。グリッドの境界上を南北に延びる溝で、約20mを確認した。重複関係は北端でS D95、S B66と、また、その南側でS X301・278と、さらに南端でS E94とがみられるが、いずれも新旧関係は不明である。出土遺物は釘が1点のみである。時期不明であるが、遺構の規模と延長方向から城館期の溝跡の可能性も考えられる。

SD95 —— Q49区検出。幅176cm、深さ26cmの規模を有する。北東から南西へ延びる溝跡であり、南西端には明確な立ち上がりが見られる。約10mの長さを確認した。遺構の重複関係は、S D94、S B63・66・73とがみられるが、いずれも新旧関係は不明である。出土遺物には、青磁碗、釘がある。柱穴等が多く重複しているこ

Fig.32 溝跡



とから、出土遺物がS D95に伴わない可能性もある。時期不明。

SD96——T48・49区検出。幅154cm、深さ14cmの規模を有する。東から西へ延び、ほぼ直角に曲折して南へ延びる溝跡で約16mを確認した。S D98（新）と曲折部で交差し、南端でS X311（新旧関係不明）と重複する。また、S B68（新？）の柱穴数個と重複している。出土遺物は、土師器坏、釘、自然石（めのう）がある。時期は不明であるが、城館期以前の溝跡の可能性が高い。

SD98——T48区検出。幅160cm、深さ12cmの規模を有する。S D96と並行して東側を南北に延びるが、北端部は東へゆるく曲がりS D96と交差して北へ延び立ち上がる。S D96（旧）、S X311（新旧関係不明）、S B68（新？）と重複する。出土遺物なし。時期不明だが、城館期以前の溝跡の可能性はある。

6. 焼土遺構

焼土の広がり、範囲を焼土遺構としてとらえ、報告する。浪岡城跡検出の焼土遺構は概ね焼土の広がりのみで、カマド等の形態をとらないものが大多数である。しかし、今年度検出のS F73は小型ながら中空で焚口、煙道状の部分もみられる特異なものである。また、このS F73が廃棄された井戸の中、検出面から70cm程度下がった部分に構築されていたことも注目される。しかし、貧弱であり、実用に供したとは思えず、カマド以外の用途も考慮する必要があるであろう。

SF70——W45区検出。長径94cm、短径70cm、厚さ約20cmの規模を有する。南側に粘土の広がり東北200cm、南北150cmの規模で検出されている。粘土の広がり焼土遺構との関係は不明である。規模を確認したのみで未調査。出土遺物、遺構の重複関係ともになし。時期不明。

SF71（Fig.13—(1)）——W46区検出。長径80cm、短径55cm、厚さ24cmの規模を有する。S T259（旧）の北東コーナーで重複している。中心部分に柱穴（新）が掘られている。柱穴による欠損部を考慮すると半円状になると思われる。規模確認のみ、未調査。出土遺物なし。時期不明。

SF72——P48区検出。長径142cm、短径98cmの規模を確認した。南西部で柱穴（新）と重複している。規模を確認したのみであり未調査。出土遺物なし。時期不明。

SF73（Fig.26—(1)）——QR50区検出。長径68cm、短径38cm、高さ25cmの規模を有する。S E121内の深さ一70cm程度に設置されている。中空で、北側の大きめの穴、南東側に小さな穴がみられる。それぞれ焚口、煙道に見立てると、小カマド状を呈する遺構である。前述のとおり、カマドとするには貧弱であるため、他の用途を考える必要があるであろう。覆土中からは溶解物が1点出土している。時期は、S E121が15世紀の可能性を有するため、S F73は

それ以後の廃絶となる。

S F 74 —— S 44区検出。長径78cm、短径46cmのもの、長径35cm、短径28cmのもの、長径41cm、短径13cmの3つの焼土遺構からなっている。近接して、南西側にS F 75、その南側にS F 76、77と配置されている。これら4者の関係も考慮する必要があると思われる。規模を確認したのみである。出土遺物なし。重複関係なし。時期不明。

S F 75 (Fig.19—(4)) —— S 44区検出。長径142cm、短径118cmの規模を有する。隅丸方形形状を呈するが、西端で柱穴(新)と重複しており形が崩れている。S X 329(旧)の東壁で重複している。出土遺物には元符通宝、土師器坏がある。重複関係から16世紀の廃絶と考えられる。

S F 76 (Fig.19—(4)) —— S 44区検出。長径68cm、短径38cmの規模を有する。S F 75同様に、S X 329(旧)の南東壁で重複している。出土遺物なし。重複関係から16世紀の廃絶と考えられる。

S F 77 —— S 44区検出。長径66cm、短径24cmの規模を有する。東西に延びるひょうたん形を呈している。規模を確認したのみであり未調査。出土遺物、重複関係なし。時期不明。

S F 64 (Fig.12—(2)) —— V 45区検出。長径 138 cm、短径100cmの規模を有する。S T 258の南側に位置する。S T 258と重複する竪穴遺構(旧)と重複しているが、S T 258との新旧関係は不明である。また、南東部でS B 44(新)と重複している。規模を確認したのみである。出土遺物なし。時期不明。

7. 竪穴遺構

ここでは、遺構の平面形が不定形である、上部構造が推定できない、などの遺構や土坑状の遺構など、使用目的や構築形態の不明な性格不明遺構を一括してとり上げてゆく。

S X 210 (Fig.19—(2)、Ch.24—(b))——R S—49区検出。東西151cm、南北(160)cm、深さ20cmの規模を有する。北部でS X 299(旧)と重複しているが遺構確認作業時に遺構範囲が確認できなかったため、正確な規模は不明である。南・東・西の各壁には壁溝と思われる溝が巡っている。出土遺物には、染付皿、皇宋通宝、用途不明鉄製品がある。16世紀の廃絶の可能性はある。

S X 270 (Fig.33—(1)、Ch.58)——V 46区検出。東西290cm、南北270cm、深さ36cmの規模を有する。浅い播鉢状に、中央が若干深くなっている。出土遺物には、覆土中より青磁碗、白磁碗・皿、かわらけ、釘があるが、覆土上の、確認時に出土している青磁碗・陵花皿、産地不明播鉢、釘、目貫金具、政和通宝、嘉泰元宝、銅滓もS X 270に伴う遺物である可能性が高い。時期不明。

S X 271 (Fig.33—(2)、Ch.59)——W 46区検出。東西(240)cm、南北(110)cm、深さ70cmの規模を確認した。出土遺物には、青磁碗・大皿、白磁皿、珠洲系播鉢、釘などがある。南側が未調査であり、正確な規模は不明。15世紀後半に廃絶された可能性もある。

S X 272 (Fig.33—(3)、Ch.60)——W 45区検出。規模不明、柱穴の重複している場所である可能性がある。出土遺物なし。時期不明。

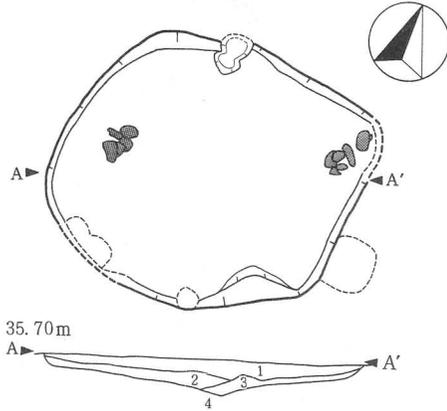
S X 273 (Fig.34—(1)、Ch.61)——V 46区検出。東西310cm、南北不明、深さ30cmの規模を確認した。南側でS T 275、北側でS D 92と重複しているため規模・形態ともに不明。出土遺物には、白磁皿、瓦質手焙りがある。時期不明であるが、遺構中(セクションベルト中)の石がS B 60に伴う礎石とすると、S B 60よりも古い可能性がある。前出S T 275・S D 92との新旧関係不明。

S X 275 (Fig.35、Ch.66—(a))——Q R 48区検出。東西470cm、南北730cm、深さ50cmの規模を有する。二つの不定形土坑が繋がった様な形の遺構である。1層としてはほぼ全面に粘土を張った層がみられた。遺物の出土数・種類が多量だったため特に慎重に調査を進めたが、床面から昭和25年銘の10円玉が出土したため、現代の攪乱と結論した。なお、出土遺物には、青磁碗・皿、白磁皿、染付碗・皿・小坏、瀬戸灰釉皿・鉄釉碗、美濃灰釉皿・鉄釉皿、志野皿、越前甕、瓦質手焙り、産地不明播鉢、埴塙、産地不明無釉陶器、土師器甕、新磁器碗、ガラス、おはじき、鉄鏝、鎌、鉄鍋、釘、用途不明鉄製品、鉄滓、キセル、用途不明銅製品、溶解物、開元通宝、嘉祐通宝、元祐通宝、無文銭、一銭、10円、火打石等がある。S X 283(旧)と重複している。

S X 278 (Fig.34—(3)、Ch.62)——R 49区検出。東西268cm、南北130cm、深さ25cmの規模を有する。長方形の平面を呈する、土坑状の浅い遺構である。S X 278覆土中からは、小

Fig.33 竪穴遺構 I

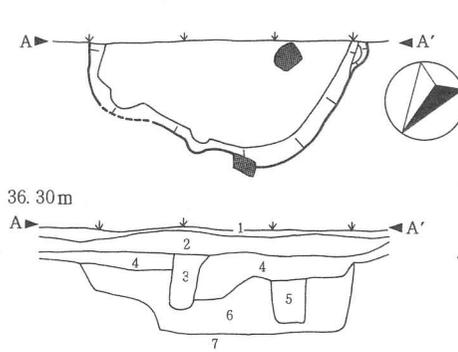
(1) S X 270 実測図



Ch. 58 S X 270 覆土層序注記表

層序No	特	徴
1	黒褐色土 (10 Y R 3/1) に灰白色 (10 Y R 8/1) の灰を50%極小塊から小塊の炭化物を2%と褐色土 (10 Y R 4/6) を1%含む。	
2	黒褐色土 (10 Y R 3/1) に極小粒から中粒の褐色土 (10 Y R 4/6) を30%と炭化物を若干含む。	
3	黒色土 (10 Y R 2/1) に極小粒から小粒の褐色土 (10 Y R 4/6) を15%含む。	
4	地山。黄褐色砂質土 (10 Y R 5/6)。	

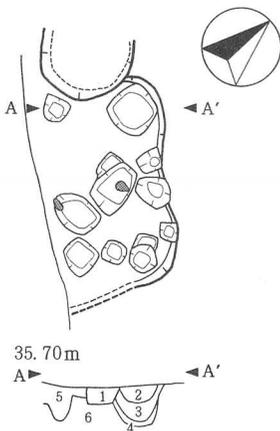
(2) S X 271 実測図



Ch. 59 S X 271 覆土層序注記表

層序No	特	徴
1	84年度調査埋土。	
2	褐色土 (7.5 Y R 4/3) に明赤褐色焼土 (5 Y R 3/8) が中粒状に1%と灰白色パミス (10 Y R 8/1) と炭化物が中粒状に2%含まれる。しまりあり。	
3	褐色粘土 (7.5 Y R 4/4) と黒褐色土 (7.5 Y R 3/2) の混層で下層にいく程しまりが強く炭化物が中から極大粒状に3%含まれる。	
4	黒褐色土 (10 Y R 3/2) に黄褐色砂質土 (10 Y R 5/6) が2%と淡黄色パミス (2.5 Y 8/3) が極小から極大粒状に1%と炭化物が極小から大粒状に3%と黄灰色灰 (2.5 Y 5/1) が含まれる。	
5	黒褐色土 (10 Y R 2/2) に炭化物が極小から大粒状に5%含まれる。	
6	黒褐色土 (10 Y R 3/2) に黄褐色砂質土 (10 Y R 5/8) が大から極大粒状に15%と黄灰色灰 (2.5 Y 5/1) が1%と淡黄色パミス (2.5 Y 5/1) が小から大粒状に1%と炭化物が極小から極大粒状に3%含まれる。	
7	地山。黄褐色砂質土 (10 Y R 5/6)。	

(3) S X 272 実測図



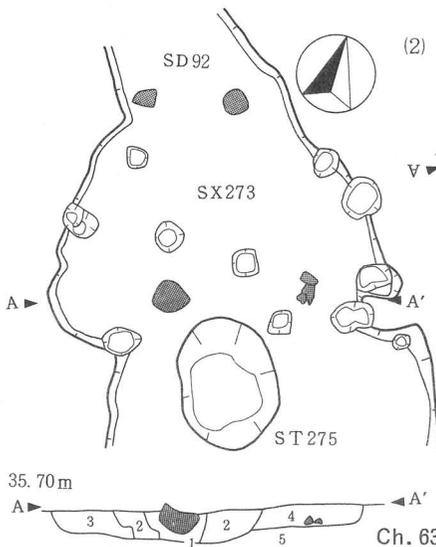
Ch. 60 S X 272 覆土層序注記表

層序No	特	徴
1	暗褐色土 (7.5 Y R 3/3) に灰色灰 (10 Y 6/1) が30%と橙色砂質土 (7.5 Y R 6/8) を中粒状に1%含む。	
2	暗褐色土 (7.5 Y R 3/3) に橙色砂質土 (7.5 Y R 6/8) を小粒状に20%と炭化物を1%含む。	
3	暗褐色土 (7.5 Y R 3/3) に灰色灰 (10 Y 5/1) を20%含む橙色砂質土 (7.5 Y R 6/8) を小粒状に1%と炭化物を1%含む。	
4	暗褐色土 (7.5 Y R 3/3) に橙色砂質土 (7.5 Y R 6/8) の50%の混層。	
5	暗褐色土 (7.5 Y R 3/3) に橙色砂質土 (7.5 Y R 6/8) が極小粒状に2%含まれる。	
6	地山。黄褐色砂質土 (10 Y R 5/6)。	



Fig. 34 竪穴遺構Ⅱ

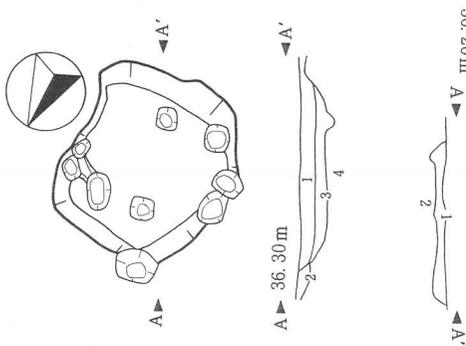
(1) S X 273 実測図



Ch. 61
SX273 覆土層序注記表

層序No	特	徴
1	黒褐色土 (10 Y R 2/2) に白色パミスと極小塊の炭化物を1%含む。	
2	黒褐色土 (10 Y R 2/2) に極小から小粒の黄褐色砂質土 (10 Y R 5/6) を3%、褐灰色灰 (10 Y R 4/1) と極小から小塊の炭化物を1%含む。しまりあり。	
3	黒色土 (10 Y R 2/1) に極小から小粒の黄褐色砂質土 (10 Y R 5/6) を2%と白色パミスと極小塊の炭化物を1%ずつ含み、に黄褐色粘土 (10 Y R 4/3) が部分的に入り込んでいる。	
4	黒色土 (10 Y R 2/1) に極小塊の炭化物と白色パミスを含み1%ずつ含む。	
5	地山。明黄褐色砂質土 (10 Y R 6/6)。	

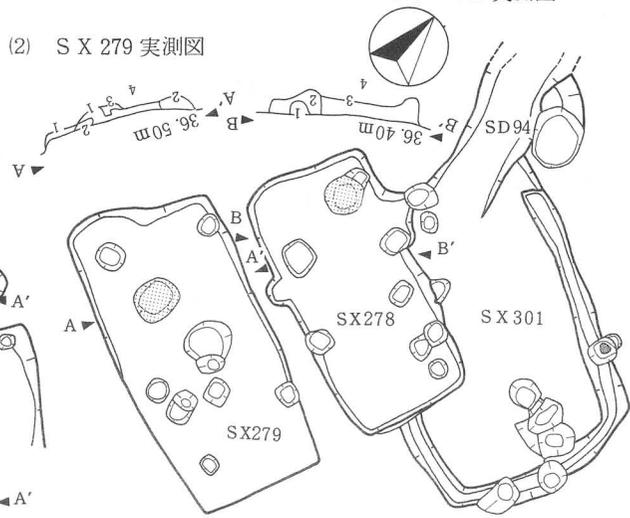
(4) S X 281 実測図



Ch. 64
SX281 覆土層序注記表

層序No	特	徴
1	灰黄褐色土 (10 Y R 4/2) にに黄褐色砂質土 (10 Y R 5/4) が極小から大粒状に1%と灰白色パミス (2.5 Y 8/1) が極小粒状に1%と炭化物が1%と褐灰色灰 (10 Y R 6/1) を少量含む。	
2	黒褐色土 (10 Y R 3/2) に黄褐色砂質土 (10 Y R 5/4) を極大粒状に20%含む。	
3	灰黄褐色土 (10 Y R 4/2) と褐灰色灰 (10 Y R 6/1) の50%ずつの混層。	
4	地山。黄褐色砂質土 (10 Y R 5/6)。	

(2) S X 279 実測図



Ch. 63
SX279 覆土層序注記表

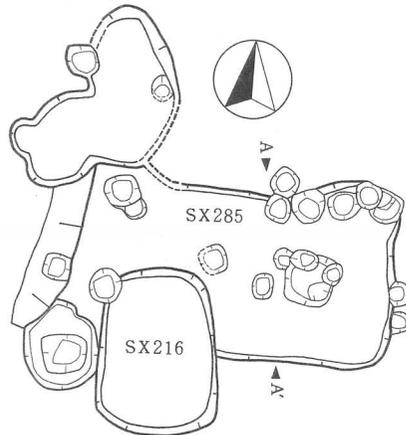
層序No	特	徴
1	灰黄色灰 (2.5 Y 6/2) に黄褐色砂質土 (7.5 Y R 7/8) が小ブロック状で1%炭化物を1%含む。	
2	暗褐色土 (10 Y R 3/3) に黄褐色砂質土 (7.5 Y R 7/8) が小ブロック状で2%に灰白色パミス (2.5 Y 8/2) と礫と炭化物を各1%ずつ含む。しまり強し。	
3	黄褐色砂質土 (7.5 Y R 7/8)。しまりなし。	
4	地山。黄褐色砂質土 (7.5 Y R 7/8)。	

(3) S X 278・301 実測図

Ch. 62
SX278 覆土層序注記表

層序No	特	徴
1	に黄褐色粘土 (10 Y R 5/3)。	
2	暗褐色土 (7.5 Y R 3/3) に黄褐色砂質土 (7.5 Y R 7/8) を中粒から極小粒に10%と灰白色パミス (2.5 Y 8/2) を微粒子状に5%と小さい礫を7%含む。しまりあり。	
3	暗褐色土 (7.5 Y R 3/3) に黄褐色砂質土 (7.5 Y R 7/8) を大粒から極小粒で10%と灰白色パミス (2.5 Y 8/2) を微粒子状に5%と小さい礫を7%含む。しまりあり。	
4	地山。黄褐色砂質土 (7.5 Y R 7/8)。	

(5) S X 285 実測図



Ch. 65
SX285 覆土層序注記表

層序No	特	徴
1	黒褐色土 (10 Y R 2/3) に明黄褐色砂質土 (10 Y R 6/6) が中から大塊状に7%と灰白色灰 (2.5 Y 7/1) が薄い板状に3%と炭化物を1%含む。	
2	地山。黄褐色砂質土 (10 Y R 5/6)。	



札1点が出土している。S B66(新?)の柱穴が遺構中に見られており、また北側でS X301(旧)と重複している。時期不明。

S X279 (Fig.34-②、Ch.63) —— R49区検出。東西315cm、南北150cm、深さ22cmの規模を有する。西壁南側がふくらんだ状態の長方形を呈している。東壁については明確な壁が検出できずに、なだらかに立ち上っている。遺構内にS B66の柱穴があるが新旧関係は不明である。明確に覆土中より出土した遺物はないが、遺構確認作業中出土した染付皿、白磁皿などは遺構に伴う可能性がある。時期不明。

S X281 (Fig.34-④、Ch.64) —— P48区検出。東西180cm、南北200cm、深さ25cmの規模を有する。出土遺物には用途不明鉄製品が1点みられるのみであり、時期等については不明である。なお、遺構南北軸上に2個の柱穴が検出されており、何らかの上部構造が存在した可能性も考えられるものである。

S X283 (Fig.35、Ch.66-b) —— Q48区検出。東西95cm、南北140cm、深さ35cmの規模を有する。長方形の掘り込みである。出土遺物は覆土中より青磁皿が1片ある。S X283南東コーナーでS X275(新)と重複している。時期は不明である。

S X284 (Fig.27-②、Ch.46-c) —— R48・49区検出。東西(237)cm、南北105cm、深さ20cmの規模を有する。出土遺物は釘1点のみである。この箇所はS X284を中心に、北側でS X307(旧)、南側でS E133(新)及びS X304、西側でS E126と重複しているが、遺構間の総合的な新旧関係は不明である。北壁・東壁に壁溝状の溝が見られる。時期不明。

S X285 (Fig.34-⑤、Ch.65) —— Q48区検出。東西(178)cm、南北168cm、深さ12cmの規模を確認した。西壁は昭和59年度調査のS X216・217等と重複しており(新旧関係不明)規模・形態は明確ではない。出土遺物は、覆土中から新磁器碗が1片検出されており、時的には新しい遺構である可能性もある。

S X288 (Fig.36-①) —— T49区検出。長軸不明、短軸170cm、深さ8cmの規模を確認した。東側が未調査区であるため、遺構の形態・規模は把握できない。北西から南東に向かって、スロープ状に下がる形をとるため、西壁は落差を検出できず、東壁付近での深さを記載している。遺構内にS B68の柱穴が存在するが新旧関係は不明である。出土遺物には、赤絵皿、珠洲系播鉢、苧引金、釘、至大通宝、判読不明銭、加工石、炭化米などがみられる。16世紀の廃絶の可能性はある。

S X295 (Fig.35-①、Ch.66-a) —— Q R48区検出。東西142cm、南北210cm、深さ15cmの規模を有する。東壁に柱穴によるものと思われる形態の変化がみられるが、ほぼ方形の遺構と思われる。東側にS X275(新)があり、その第1層の粘土層がS X295にもかかっている。出土遺物は覆土から用途不明鉄製品が1点出土しているのみである。遺構上面から新磁

Ch. 66 (a) SX 275・295覆土層序注記表

層序No.	特 徴
1	にぶい黄褐色粘土 (10Y R 5/4) と暗褐色粘土 (10Y R 3/3) の混層に小粒の礫と小塊の炭化物が2%ずつ含まれる。
2	にぶい赤褐色土 (5 Y R 4/4)。
3	黄褐色粘土 (10Y R 5/6)。
4	黒褐色土 (10Y R 2/2) に中～小粒の明黄褐色砂質土 (10Y R 6/8) が25%含まれる。
5	黄灰色灰 (2.5 Y 6/1)。
6	にぶい黄褐色粘土 (10Y R 5/4) と黒褐色土 (10Y R 2/3) の混層に炭化物を1%含む。しまりあり。
7	明黄褐色粘土 (10Y R 6/6) と褐色粘土 (10Y R 4/4) の混層に炭化物を1%含む。
8	褐色土 (10Y R 4/4) に部分的ににぶい赤褐色土 (5 Y R 4/4) と黒褐色土 (10Y R 2/3) が3%ずつ入り込んでいる。
9	黒褐色土 (10Y R 3/2) に極小から中塊状のにぶい黄褐色粘土 (10Y R 5/4) が30%含まれる。
10	黒褐色土 (10Y R 2/3) に小～中ブロック状の明黄褐色砂質土 (10Y R 6/8) が25%と礫が2%含まれる。
11	暗褐色土 (10Y R 3/3) ににぶい黄橙色パミス (10Y R 7/2) が極小粒で3%と大ブロック状の明黄褐色砂質土 (10Y R 6/8) が1%含まれる。
12	褐色土 (10Y R 4/4)。しまりあり。(SX 295 覆土)
13	にぶい黄褐色土 (10Y R 4/3) に微粒子の褐灰色パミス (7.5 Y R 8/1) を3%含む。しまりあり。(SX 295 覆土)
14	褐色土 (10Y R 4/4) に暗灰黄色灰 (2.5 Y 5/2) を3%含む。しまりあり。(SX 295 覆土)
15	暗灰黄色灰 (2.5 Y 5/2) に小塊の炭化物を1%含む。(SX 295 覆土)
16	暗褐色土 (10Y R 3/4) に小粒の明黄褐色砂質土 (10Y R 6/8) と礫と小塊の炭化物をそれぞれ1%ずつ含む。(SX 295 覆土)
17	暗褐色土 (10Y R 3/4) に中ブロック状の明黄褐色砂質土 (10Y R 6/8) を5%と炭化物を1%含む。しまりあり。(SX 295 覆土)。
①	褐灰色灰 (10Y R 4/1)。
②	黄褐色粘土 (10Y R 5/6) とにぶい赤褐色土 (5 Y R 4/4) と黒褐色土 (10Y R 2/3) の混層。
③	黒褐色土 (10Y R 2/3)。
18	地山。明黄褐色砂質土 (10Y R 6/8)。

(b) SX 283覆土層序注記表

層序No.	特 徴
1	黒褐色土 (10Y R 2/2) と黒褐色土 (10Y R 3/2) の混層に明褐灰色灰 (5 Y R 7/1) を10%と黄褐色砂質土 (10Y R 5/6) を大塊状に1%と炭化物を若干含む。
2	明褐灰色灰 (5 Y R 7/1) と褐灰色灰 (5 Y R 4/1) の混層に黄褐色砂質土 (10Y R 5/6) を極大粒状に1%含む。しまりなし。
3	褐灰色灰 (5 Y R 4/1) に明褐灰色灰 (5 Y R 7/1) が10%と黄褐色砂質土 (10Y R 5/6) が大から極大粒状に1%含む。
4	地山。黄褐色砂質土 (10Y R 5/8)。

Ch. 73 (a) SX 320、SE 139

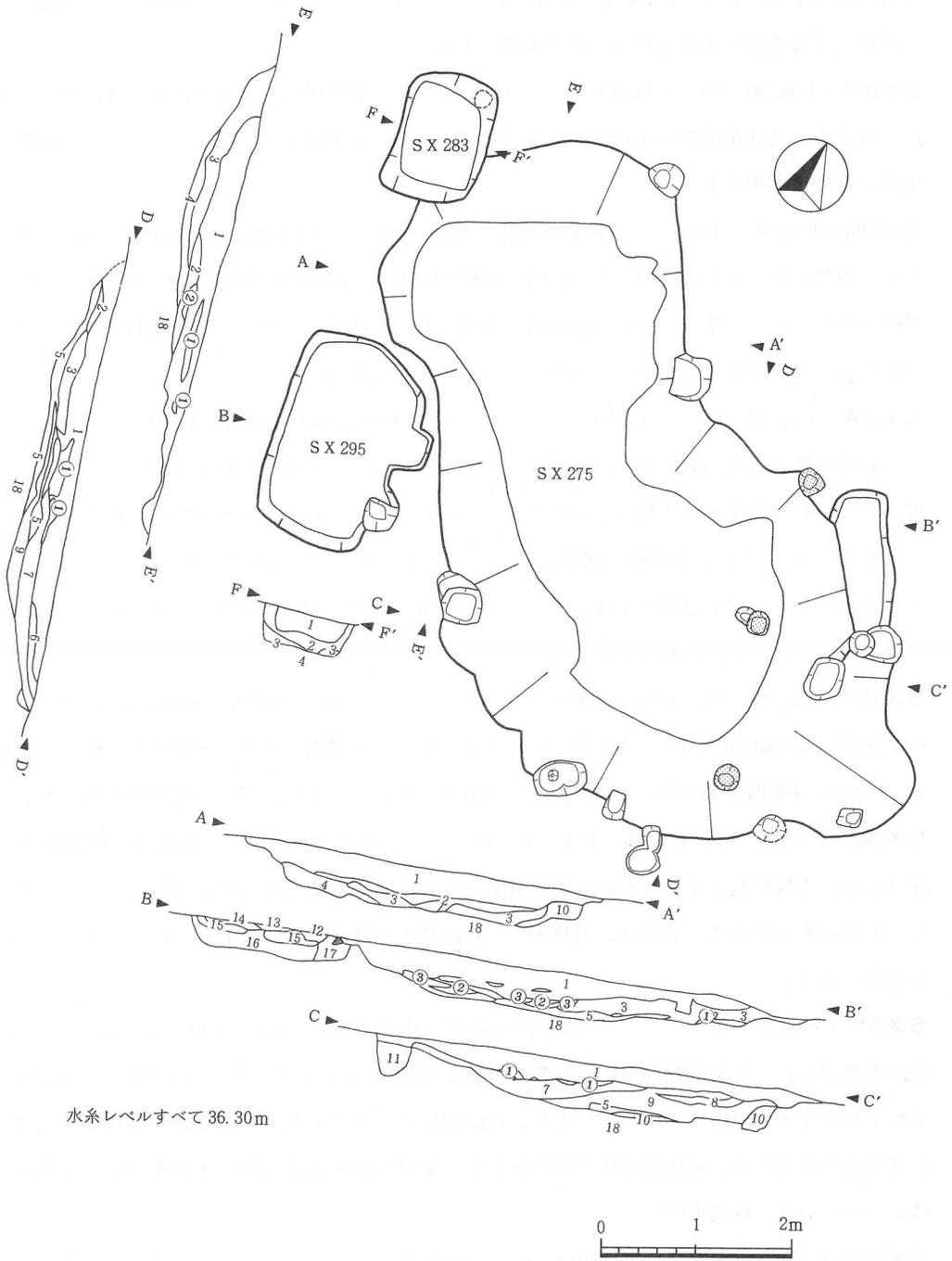
層序No.	特 徴
1	黒色土 (10Y R 2/1) ににぶい黄橙色粘土 (10Y R 6/4) を1%含む。
2	黒色土 (10Y R 2/1) に灰黄褐色灰 (10Y R 6/2) を全体的に5%含む。
3	黒色土 (10Y R 2/1) に灰黄褐色灰 (10Y R 6/2) を全体的に10%と小塊状の炭化物を1%と極小粒の明黄褐色砂質土 (10Y R 6/6) を1%含む。
4	黒褐色土 (10Y R 2/2) に黒褐色粘土 (10Y R 3/2) を中塊状に1%と炭化物を1%含む。
5	黒色土 (10Y R 2/1) ににぶい黄橙色粘土 (10Y R 6/4) を3%と褐灰色灰 (10Y R 6/1) を5%と極小から小塊状の炭化物を2%含む。
6	黒色土 (10Y R 2/1) に極小粒状の黄褐色砂質土 (10Y R 5/6) を3%と極小塊の炭化物を1%含む。
7	地山。黄褐色砂質土 (10Y R 5/6)。

(b) SX 328 覆土層序注記表

層序No.	特 徴
1	黒色土 (10Y R 1.7/1) に小粒状の黄褐色砂質土 (10Y R 5/6) と小塊の炭化物をそれぞれ1%とにぶい黄橙色粘土 (10Y R 7/3) と明赤褐色焼土 (5 Y R 5/8) をそれぞれ若干含む。
2	地山。黄褐色砂質土 (10Y R 5/6)。

Fig. 35 竖穴遺構Ⅲ

(1) S X 275・283・295 実測図



器の皿が出土しているが、前述のように、現代の攪乱であるS X 275の粘土層の中に含まれていた可能性が高いため、伴出遺物とは認めない。時期不明である。

S X 296 (Fig.27—(1)、Ch.45) — P Q 48区検出。東西(135)cm、南北136cm、深さ15cmの規模を有する。S X 296の東側でS E 125(旧)と重複している。出土遺物には、鉄鏝、漆の被膜(又は漆紙)がみられる。時期不明である。

S X 297 (Fig.36—(2)、Ch.67) —— P 48区検出。東西86cm、南北102cm、深さ29cmの規模を有する。ほぼ楕円形の土坑状を呈する遺構である。遺物は出土していない。柱穴との新旧関係、時期は不明である。

S X 298 (Fig.36—(4)) —— R 50区検出。東西不明、南北140cm、深さ23cmの規模を確認した。西側でS T 274と重複している(新旧関係不明)。東側は未調査区のため、東西方向の規模は不明である。確認した形態からは、溝跡となる可能性が大きい。出土遺物には、用途不明鉄製品、鉄滓が床面直上からみられる。時期は不明である。

S X 301 (Fig.34—(2)、P L .10—(上)) —— R 49・50区検出。東西(310)cm、南北210cmの範囲を確認した。深さ不明。内館は、公園・運動場として利用されてきたため、平場の整地が行なわれ、削平・盛土部分がいたる所でみられる。このため、S X 301では確認状態ですでに覆土が削りとられ、壁溝状に溝が巡っているのみであった。南西コーナーでS X 278(旧)と、北西コーナーでS D 94と重複している(S D 94との新旧関係は不明)。表土除去作業時から遺物の出土はなく、時期は推定できない。

S X 302 (Fig.36—(3)、Ch.68、P L .10—(a)) —— Q R 49区検出。東西157cm、南北107cm、深さ22cmの規模を有する。長方形に近い土坑状を呈する遺構である。南壁西端で柱穴と重複しているが、新旧関係は不明。遺物は釘が1点出土したのみであり、遺構の時期は不明である。

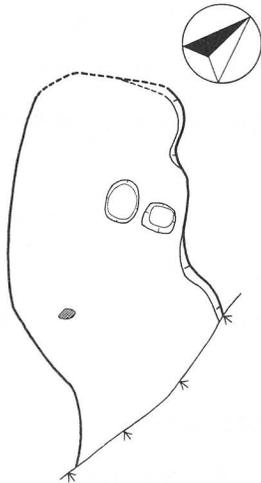
S X 303 (Fig.36—(3)、Ch.68、P L .10—(a)) —— R 49区検出。東西122cm、南北86cm、深さ21cmの規模を有する。方形の土坑状遺構を呈し、北側に隣接するS X 302を一回り小さくした形態のものである。遺物は、遺構床面から産地不明揺鉢が1片出土している。遺構の時期は不明である。

S X 304 (Fig.27—(2)) —— R 48・49区検出。東西122cm、南北(140)cm、深さ不明の範囲を確認した。S X 301同様に、壁溝状の溝が残存するのみである。S E 133・S X 284とそれぞれ東壁・北壁部で重複しているが、新旧関係は不明である。出土遺物中明確にS X 304に伴うものはないが、遺構確認作業時に出土した染付小碗・瓦質手焙りは遺構に伴う可能性が残るものである。時期不明。

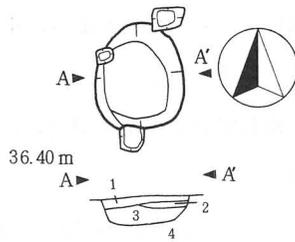
S X 306 (Fig.36—(5)) —— Q 49区検出。東西280cm、南北不明、深さ不明の範囲を確認した。S X 301同様壁溝状の溝が東側・西側に南北方向に延びているものである。北側は未調

Fig.36 竪穴遺構IV

(1) SX 288 実測図



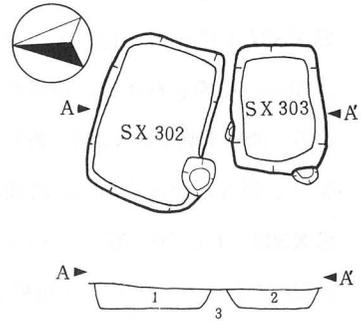
(2) SX 297 実測図



Ch.67 SX 297 覆土層序注記表

層序No	特 徴
1	暗褐色土 (10YR 3/4) に極小塊の炭化物を若干含む。
2	暗褐色土 (10YR 3/4) に小から中塊の明黄褐色砂質土 (10YR 6/8) を30%含む。
3	黒褐色土 (10YR 3/2)。
4	地山。黄褐色砂質土 (10YR 5/8)。

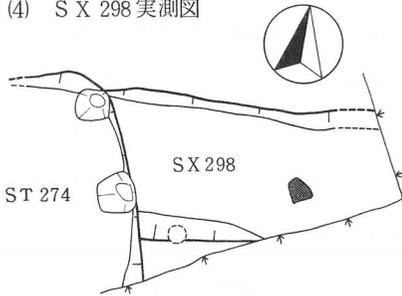
(3) SX 302・303 実測図



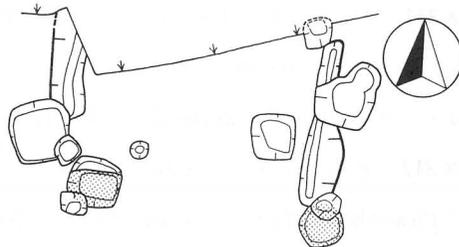
Ch.68 SX 302・303 覆土層序注記表

層序No	特 徴
1	黒色土 (10YR 2/1) に極小塊から中塊状の明黄褐色砂質土 (10YR 6/8) を15%含む。
2	黒色土 (10YR 1.7/1) に極小塊から中塊状の明黄褐色砂質土 (10YR 6/8) を7%含む。
3	地山。黄褐色砂質土 (10YR 5/6)。

(4) SX 298 実測図



(5) SX 306 実測図



Ch.69

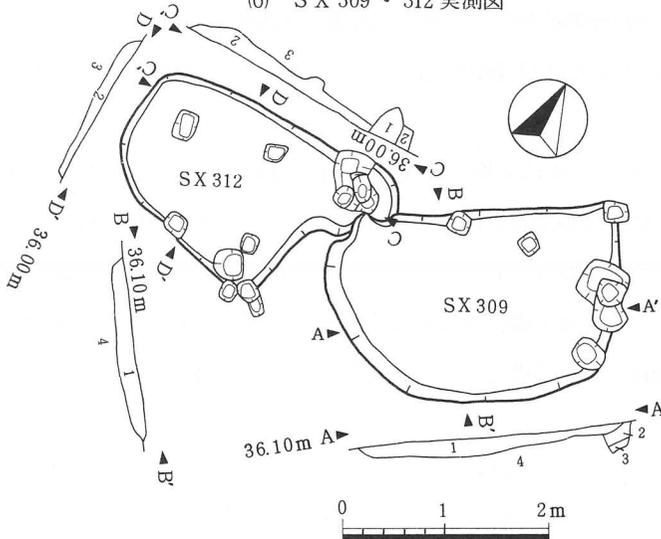
(a) SX 309 覆土層序注記表

層序No	特 徴
1	黒褐色土 (10YR 2/2) にぶい黄褐色灰 (10YR 4/3) を中から大粒状に1%と小から中粒状の炭化物を少量含む。
2	黒褐色土 (7.5YR 2/2) と褐色土 (7.5YR 4/4) と2対8の混層。しまりやなし。
3	黄褐色砂質土 (10YR 5/6) の単層。
4	地山。明黄褐色砂質土 (10YR 6/6)。

(b) SX 312 覆土層序注記表

層序No	特 徴
1	黒褐色土 (7.5YR 2/2) と暗褐色砂質土 (10YR 3/3) との5対5の混層に明黄褐色砂質土 (10YR 7/6) を極大粒状に1%と褐色砂質土 (10YR 3/4) を大粒状に3%含む。
2	黒色土 (10YR 2/1) に褐灰色灰 (10YR 5/1) を5%含む、黄褐色砂質土 (10YR 5/6) を極小から極大粒状に1%と明赤褐色焼土 (5YR 5/8) を極大粒状に若干と炭化物を若干含む。
3	地山。黄褐色砂質土 (10YR 5/6)。

(6) SX 309・312 実測図



査である。南側では溝が検出されなかったため形態・規模は不明であるが、その位置・軸方向からすると、S B66に付随する施設の可能性もある。明確に遺構に伴う遺物はないが、遺構確認作業時に染付皿が出土している。時期不明。重複している柱穴との新旧関係不明。

S X 307 (Fig.27—(2)、Ch.46—(c)) —— R 49区検出。東西120cm、南北(194)cm、深さ20cmの規模を有する。遺構覆土に、粘土・焼土が混入しており、粘土張り状の様相を呈している。遺構南側でS X 284(新)と重複している。出土遺物には、用途不明鉄製品、用途不明銅製品、硯などがみられる。時期不明。

S X 309 (Fig.36—(6)、Ch.69—(a)) —— U 48区検出。長径290cm、短径190cm、深さ18cmの規模を有する。北東から南西に延びる半月状のプランで、北西辺がほぼ直線になる。出土遺物は、覆土中から釘、茶臼があるが、確認面で出土した白磁皿も遺構に伴う可能性がある。遺構北半に東北に3個比較的小さな柱穴が並ぶが、これは、西側のS X 312方向へと延び、柵状になるものと思われる。新旧関係は北半の柱穴(旧)、S X 312とは新旧不明。時期は不明である。

S X 310 (Fig.37—(1)) —— T 49区検出。東西不明、南北116cm、深さ39cmの規模を確認した。東側が未調査のため、形態・規模は不明であるが、検出した部分はほぼ方形になる。覆土中より青磁皿、小札が出土している。南辺で重複している柱穴との重複関係不明。時期不明。

S X 311 (Fig.37—(2)、Ch.70) —— T U 48区検出。東西320cm、南北140cm、深さ10cmの規模を有する。S D96・98の2本の溝が延長してきた南端に位置する。S D96・98及び遺構南端で重複するS B68の柱穴との新旧関係は不明である。覆土中より砥石が1片出土している。時期不明。

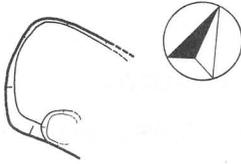
S X 312 (Fig.36—(6)、Ch.69—(b)) —— U 48区検出。東西202(270)cm、南北168cm、深さ10cmの規模を有する。東南に延びる不整形のプランを有する。東壁は南北に直線に延び、東壁北端が張り出し状に東側へ膨らむ。S X 309と東端が接するが、新旧関係は不明である。遺構北部に東側のS X 309方向に約90cm間隔で柱穴が並び、南部では西側から50～70cm間隔で柵状に柱穴が配されている。これらとS X 312の新旧関係は不明である。出土遺物は擦文土器、自然石がみられる。時期不明。

S X 315 (Fig.37—(3)、Ch.71) —— S 44区検出。東西不明、南北(310)cm、深さ23cmの規模を確認した。東半部は昭和59年度の調査区内にかかっているが、明確な遺構は検出されていない。床面が西側から東側へと緩やかなスロープを呈して昇っているため、東壁を確認できなかったものと思われる。覆土中より雁又鍬、漆器被膜が出土している。また、遺構確認作業時に検出した白磁皿、瀬戸灰釉鉢、釘も遺構に伴う可能性がある。S X 316(旧)と南西端で重複している。時期不明。

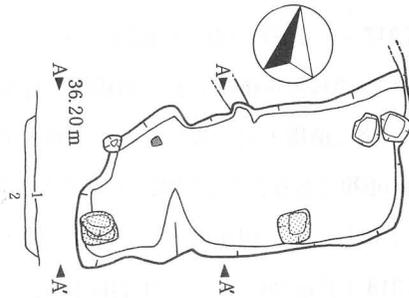
S X 316 (Fig.37—(3)) —— S 44区検出。長径140cm、短径130cm、深さ(55)cmの規模を有し、ほぼ円形を呈する。-55cmまでしか掘り下げていないが、さらに深くなる可能性があり、

Fig.37 竪穴遺構 V

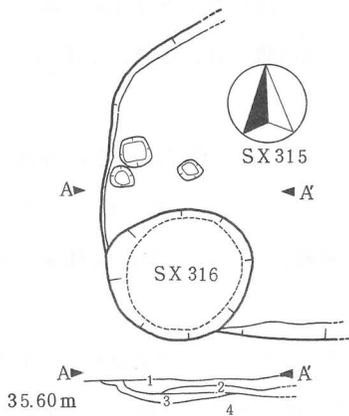
(1) SX 310 実測図



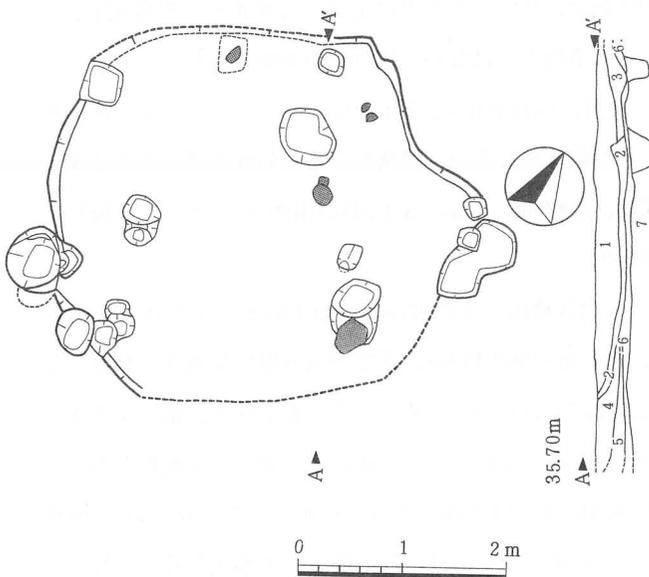
(2) SX 311 実測図



(3) SX 315・316 実測図



(4) SX 317 実測図



Ch. 70 SX 311 覆土層序注記表

層序No.	特 徴
1	黒褐色土 (10Y R 2/2) に褐色砂質土を中から大塊状と小から大粒状に5%と、にぶい赤褐色焼土 (5Y R 5/4) を極小から中粒状に2%と褐灰色灰 (10Y R 4/1) (10Y R 6/1) と炭化物を若干含む。
2	地山。明黄褐色砂質土 (10Y R 5/6)。

Ch. 71 SX 315 覆土層序注記表

層序No.	特 徴
1	黒褐色土 (10Y R 3/1) が55%と白色灰 (N 8/0) が20%と炭化物が小粒状に20%と明黄褐色砂質土 (10Y R 6/8) が小粒状に5%混入している。
2	白色灰 (N8/0) が帯状に走り部分的に炭化物と黒褐色土 (10Y R 3/1) が混入している。
3	黒褐色土 (10Y R 3/1) に15%の明黄褐色砂質土 (10Y R 6/8) が小粒状に混入している。
4	地山。明黄褐色砂質土 (10Y R 6/8)。

Ch. 72 SX 317 覆土層序注記表

層序No.	特 徴
1	黒褐色土 (7.5 Y R 3/1) に明黄褐色パミス (10Y R 7/6) を1%と灰白色灰 (10Y R 8/2) を5%と炭化物を1%含む。
2	黒褐色土 (7.5 Y R 3/1) と灰白色灰 (10Y R 8/2) との50%の混層に炭化物を3%含む。しまりあり。
3	黒褐色土 (7.5 Y R 3/1) に灰白色灰 (10Y R 8/2) を30%と明褐色砂質土 (7.5 Y R 5/8) を7%と炭化物を5%含む。
4	灰黄褐色粘土に明黄褐色粘土 (10Y R 6/6) を5%と炭化物を1%含む。しまりあり。
5	黒褐色土 (10Y R 3/1) と灰白色灰 (7.5 Y R 8/1) が20%と灰黄褐色粘土 (10Y R 4/2) が20%の混層に炭化物を1%含む。しまりあり。
6	黒褐色灰 (10Y R 3/1)。
7	地山。明黄褐色砂質土 (7.5 Y R 5/8)。

井戸等の機能も考えられる。また、S X 315（新）の南西端、床面の最も低くなる部分に構築されていることから、S X 315と同時期に水溜めの機能を有したとも考えられよう。出土遺物には、白磁皿、釘がみられる。時期不明。

S X 317 (Fig.37-4)、Ch.72) —— T 44区検出。東西350(430) cm、南北不明、深さ(40) cmの規模を確認した。遺構東半分が前年度の調査で検出されている。前年度の調査では南側の竪穴遺構と同一視していたためS T 255としていたが、本年度の調査により2つの竪穴遺構の重複であることが判明した(S X 317(新))。覆土中より、青磁碗、染付皿、越前甕、瓦質手焙り、釘、硯が出土している。出土遺物からは16世紀の廃絶と思われる。

S X 318 (Fig.38) —— T 44区検出。東西(458) cm、南北(290) cm、深さ10 cmの規模を確認した。平面形は不整形である。遺構北端でS E 139(旧)、西南端でS E 138(新)と重複している。出土遺物は、覆土から青磁碗・鉢、珠洲系壺、越前甕、釘、鉄鏝、皇宋通宝、漆器がみられる。15世紀の廃絶の可能性はある。

S X 320 (Fig.38、Ch.73) —— S T 43・44区検出。東西不明、南北不明、深さのみ35 cmを計った。北壁の一部が確認されたが、西・南・東壁は不明である。S E 138(新)、S E 139(旧?)、S X 326(新?)と重複している。覆土から青磁碗、白磁皿、瀬戸鉄釉壺、越前甕、釘、鉄鏝が出土している。15世紀の廃絶の可能性はある。

S X 321 (Fig.39-1)、Ch.74) —— S 42・43区検出。東西(400) cm、南北266 cm、深さ58 cmの規模を有する。遺構西端で井戸状の竪穴遺構(旧)と、南半部でS F 78(新)と重複している。遺物は主に東半分から出土している。特に出土密度が高いのは南東部の壁ぎわである。出土遺物は、青磁碗・皿・盤、白磁皿、染付皿、褐釉壺、瓦質手焙り、珠洲系甕、無釉陶器、産地不明播鉢、刀子、苧引金、釘、用途不明鉄製品、鉄滓、太刀の足金具、大観通宝、熙寧元宝、皇〇〇宝が覆土からみられる。床面直上からの遺物出土はない。16世紀の廃絶と思われる。

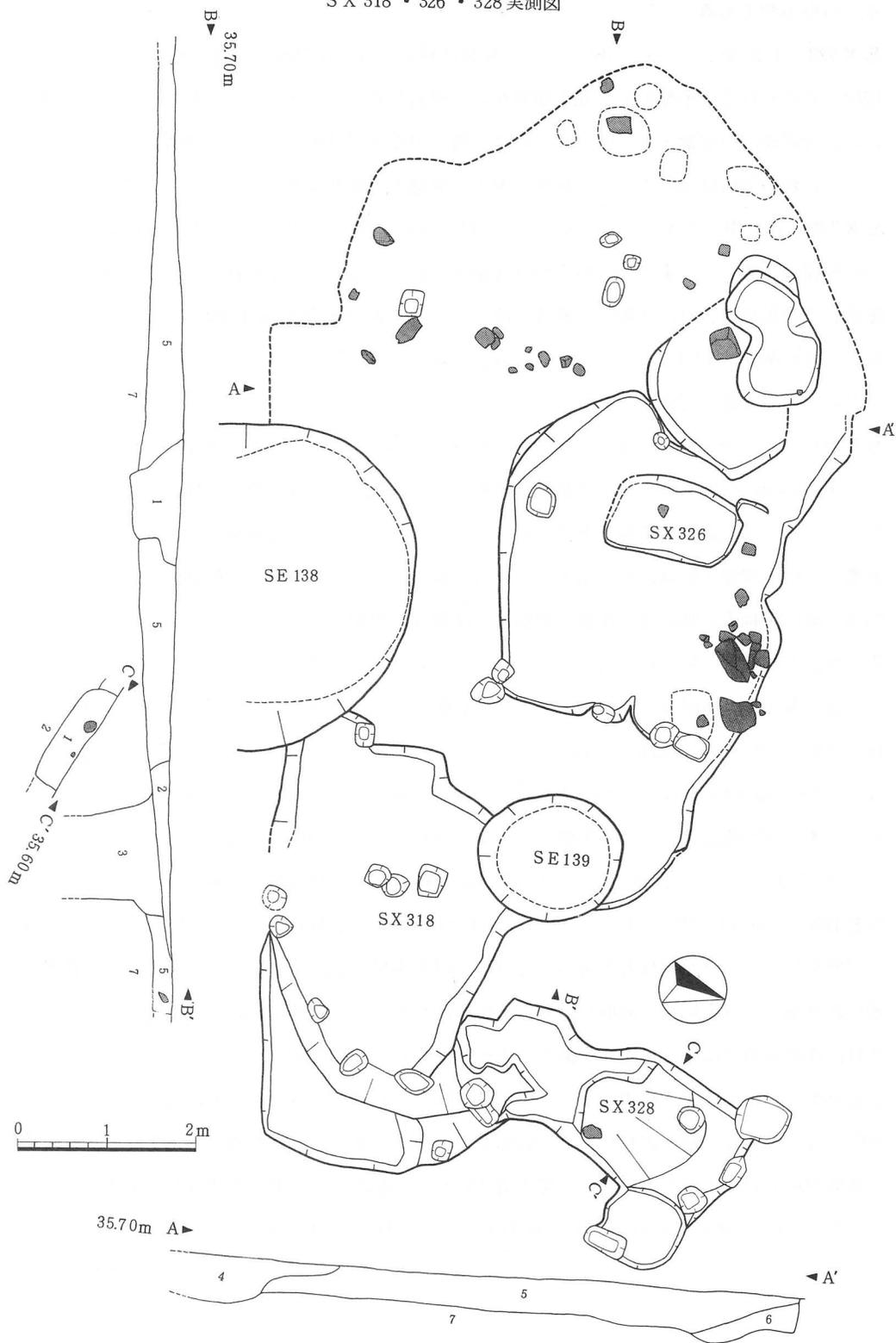
S X 324 (Fig.11-2) —— S 43区検出。長径100 cm、短径94 cm、深さ(30) cmの円形を呈する遺構である。さらに深くなり、井戸跡状になるが、遺構が小さく危険も伴うため作業を中止した。出土遺物には、白磁皿、練鉢、溶解物がある。S T 247の南西コーナーで重複しているが、新旧関係は不明である。時期不明。

S X 326 (Fig.38、Ch.73-a) —— S 44区検出。東西92 cm、南北148 cm、深さ10 cmの規模を有する。遺構覆土層序断面図からは、確認面で東西144 cm、深さ59 cmの規模が考えられる。しかし、グリッド杭が遺構南西コーナー上に設定されていたため、十分な表土除去、確認ができなかった。出土遺物はない。S X 320(旧)と重複しているため、16世紀の廃絶の可能性もある。

S X 327 (Fig.17-1) —— R 42区検出。長径150 cm、短径136 cm、深さ(37) cmの規模を有する円形の遺構である。深さは、さらに60 cm以上あり、井戸跡等の可能性も考えられる。

Fig. 38 竖穴遺構VI

S X 318 • 326 • 328 実測図



S T 280、S T 282と重複する（両者ともに新か？）。出土遺物には、白磁皿、釘が各2点ある。時期不明である。

S X 328 (Fig.38、Ch.73-(b))——S 44区検出。東西132cm、南北378cm、深さ35cmの規模と考えられる。不整形で、北半部分が南へ傾斜しており、スロープを形づくる。出土遺物には、青磁碗、白磁皿・八角碗、かわらけ、釘、用途不明鉄製品がある。南端でS X 318と接するが、新旧関係は不明である。15世紀後半の廃絶の可能性が考えられる。

S X 330 (Fig.18、Ch.22-(c))——R 42区検出。東西(320)cm、南北540cm、深さ32cmの規模を確認した。東壁の立ち上がりは検出されていない。出土遺物には、青磁碗・皿、白磁皿、美濃褐釉碗、釘、鉄鍋片、鉄滓、漆器がある。西壁南部でS T 283、S E 141と重複するが、新旧関係は不明である。また、S B 70(新)、S B 71(旧)の柱穴とも重複している。15世紀後半の廃絶の可能性がある。

S T 245 (Fig.39-(2)、Ch.75、PL.10-(c))——S 41・42区検出。東西420cm、南北282cm、深さ64cmの規模を有する。不整形の遺構である。南西部で別の竪穴遺構、電柱(新)と重複している。出土遺物が多種、多量であった。床面直上からは、青磁碗、美濃瀬戸灰釉皿、越前甕、産地不明甕・播鉢、釘が出土している。覆土からは、青磁碗、白磁皿、染付皿、美濃灰釉皿、瀬戸灰釉壺、越前甕、産地不明播鉢・鉄釉壺、埴塙、小札、針、釘、用途不明鉄棒、銅鋌、断読不能銭貨、無文銭、硯が出土している。また、前年度に若干掘り下げたが、その際には、青磁碗・皿、白磁皿、染付碗・皿、青白磁陶枕?、美濃灰釉皿、瀬戸灰釉壺、越前甕・播鉢、埴塙、小札、釘、鉄銭、元祐通宝、開元通宝、紹聖元宝等が出土していた。出土遺物からは、16世紀の廃絶の可能性が高いと思われる。なお、東壁はさらに拡張する可能性もあるため、トレンチで東壁確認を行ったが明確にならず、スロープ状に地山が立ち上ってゆく状態がみられたのみであった。そのため、トレンチ分は遺構規模・出土遺物ともに遺構には含めていない。

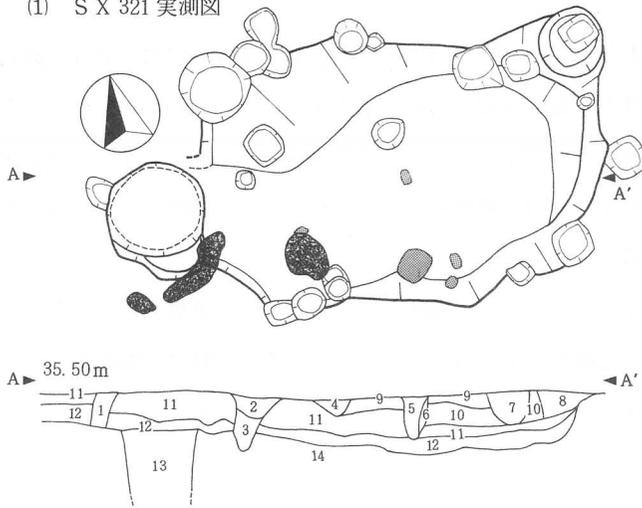
S E 129 (Fig.39-(3)、Ch.76)——S T 49区検出。東西140cm、南北134cm、深さ80cmの規模を有する。平面形は若干角がつく感じの円形を呈する。出土遺物は、覆土から青磁盤、瀬戸鉄釉碗、瓦質手焙り、溶解物、釘、銅製小皿がある。また確認面から出土している瓦質手焙り、鉄滓も遺構に伴う可能性がある。重複関係なし。時期不明。

S E 156 (Fig.16、Ch.19-(b))——Q 42区検出。長径148cm、短径136cm、深さ132cmの規模を有する。井戸跡と思われたが、底面が早い段階で検出されたため、S E 129とともに竪穴遺構の項で記載することにした。覆土第2層から、かわらけ、用途不明鉄製品が出土している。S T 277と重複しているが、新旧関係は不明である。時期不明。

(木村浩一)

Fig. 39 竖穴遺構Ⅶ

(1) S X 321 実測図

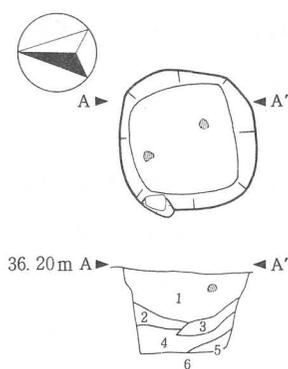


(2) S T 245 実測図

Ch. 75
ST 245 覆土層序注記表

層序No.	特	徴
1	黒褐色土 (10Y R 2/2) に黒色灰 (10Y R 2/1) を1%含む。	
2	黒褐色土 (10Y R 2/2) に小粒状の黄褐色砂質土 (10Y R 7/8) を25%と微粒子状の炭化物を1%含む。	
3	黒褐色土 (10Y R 2/2) に灰黄色砂質土 (2.5 Y 7/2) を中粒状に25%と黄褐色灰 (10Y R 3/4) を層状に15%と黒色灰 (10Y R 2/1) を7%と炭化物を小粒状に1%含む。	
4	黒褐色土 (10Y R 2/2) に黒色灰 (10Y R 2/1) を全体的に25%と炭化物を小粒状に1%含む。しまりなし。	
5	黒褐色土 (10Y R 2/2) に黄褐色砂質土 (10Y R 7/8) を小から中ブロック状に30%と黄褐色粘土 (10Y R 6/3) を1%含む。	
6	黒褐色土 (10Y R 2/2) に黄褐色砂質土 (10Y R 7/8) を小から中ブロック状に25%と黄褐色粘土 (10Y R 6/3) を1%と極小粒の炭化物を1%含む。	
7	地山。黄褐色砂質土 (10Y R 7/8)。	

(3) S E 129 実測図

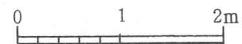
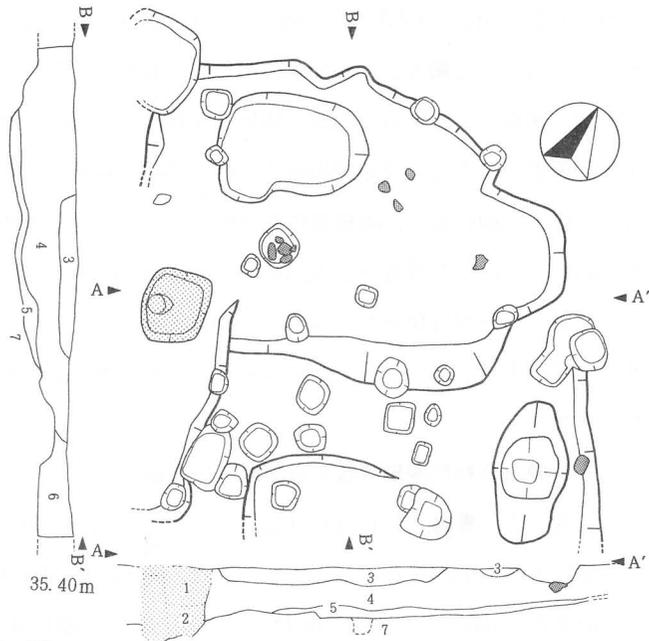


Ch. 76
SE 129 覆土層序注記表

層序No.	特	徴
1	黒褐色土 (10Y R 3/2) に灰白色灰 (10Y R 7/1) を全体的に10%と極小から大塊状の炭化物を3%と小粒~大粒状の明黄褐色砂質土 (10Y R 6/8) を2%含む。しまりあり。	
2	黒褐色土 (10Y R 3/2) と褐灰色灰 (10Y R 4/1) との混層に極小から中塊状の炭化物を1%含む。	
3	黒褐色土 (10Y R 3/2) と褐色砂質土 (10Y R 4/4) との混層に極小から中塊状の炭化物を1%含む。	
4	黒色土 (10Y R 2/1) に小粒状の明黄褐色砂質土 (10Y R 6/8) を2%と極小塊の炭化物を1%含む。	
5	黄褐色砂質土 (10Y R 5/8)。	
6	地山。黄褐色砂質土。	

Ch. 74
SX321 覆土層序注記表

層序No.	特	徴
1	黒色土 (10Y R 2/1) に小粒状の褐色砂質土 (10Y R 4/6) と極小塊の炭化物を1%含む。	
2	黒色土 (10Y R 2/1) に小粒状の褐色砂質土 (10Y R 4/6) を1%と黄褐色焼土 (7.5 Y R 6/4) を5%と極小塊の炭化物を1%含む。	
3	黒色土 (10Y R 2/1) に極小から中粒状の褐色砂質土 (10Y R 4/6) 3%含む。	
4	黒色土 (10Y R 2/1) に極小から大粒状の褐色砂質土 (10Y R 4/6) を30%含む。	
5	黒色土 (10Y R 2/1) において黄褐色粘土 (10Y R 5/3) を3%と明黄褐色焼土 (10Y R 6/6) と小塊状の炭化物を1%ずつ含む。	
6	黒色土 (10Y R 2/1)。	
7	黒色土 (10Y R 2/1) において黄褐色粘土 (10Y R 5/3) を5%と小塊状の炭化物を1%含む。	
8	黒色土 (10Y R 2/1) において黄褐色粘土 (10Y R 5/3) を2%と小塊状の炭化物を1%含む。	
9	黒色土 (10Y R 2/1) に小粒状の褐色砂質土 (10Y R 4/6) を20%含む。	
10	黒色土 (10Y R 2/1) に黒褐色灰 (10Y R 3/1) を2%と小塊状の炭化物を1%含む。	
11	黒色土 (10Y R 2/1) に黒褐色灰 (10Y R 3/1) を7%と黄褐色灰 (10Y R 7/2) と黒色灰 (10Y R 1.7/1) を2%と小塊状の炭化物と小粒状の黄褐色砂質土 (10Y R 5/6) をそれぞれ1%含む。	
12	黒色土 (10Y R 2/1) と黄褐色灰 (10Y R 7/2) と黒褐色灰 (10Y R 3/1) との混層に小塊状の炭化物を1%含む。	
13	黒色土 (10Y R 2/1) に極小粒から小粒状の褐色砂質土 (10Y R 4/6) を3%含む。	
14	地山。褐色砂質土 (10Y R 4/6)。	



IV 出土遺物

本年度の出土遺物数は、陶磁器類（土器も含む）約2,700点、鉄・銅製品約1,200点、銭貨約300点、石製品104点、木製品（漆器被膜も含む）71点、骨類17点、自然遺存体30点、皮革製品1点であった。発掘箇所が内館の辺縁部であったこと考慮すると、昭和59年度調査区の出土点数よりは減少しており、全体形を知り得る遺物も少ないため、一部の遺物については昭和59年度出土品も参考資料として掲載している。

遺物の出土状態については、Ⅲ章にて述べている箇所もあり、本章では遺構等にとらわれず出土遺物の全容が理解できるような記載を心がける。なお、主要な報告資料は、城館期のものとし、城館期以前および城館期以後のものについては、そのつど注意書きをする。

1. 陶磁器類

陶磁器類は、大別すると交易等による搬入品と地元産に二分類できる。しかし、浪岡城跡から出土するものについてみると、地元産と推定されるものは少量の土師質土器だけと考えられ、他のものはすべて搬入品とみなすのが妥当であろう。さらに、中国産品や国産品を問わず、浪岡周辺の窯場で生産されたものが皆無とすれば、日本海交易による搬入品ということになり、出土陶磁器のほとんどを舶載陶磁器（船に積載して運んだ陶磁器）として包括できると考えられる。以上の観点から、陶磁器類を分類する時、主要生産地による分類が現在の段階では基本的方向性を見いだし得るが、中国産等の場合筆者に生産地同定を成し得る力量はなく、従来使用していた名称別分類をおこなうことを御了承いただきたい。また日本産等についても、産地不詳の類が多いことから、その焼成・成形・器形等による製品別分類をおこなうことも了解いただきたい。

A. 搬入された陶磁器類で中国産等のもの

A-1 青磁（P.L.13・14、Fig.40・41、Ch.77）

青磁はすべて中国産と考えられるもので、碗360点、皿130点、盤14点、鉢類16点、香炉3点、他2点、計525点の破片が出土している。以下、器形別に記載する。

A-1-a 碗

青磁碗の主体を占めるのは胴部外面に線描蓮弁文を有する類と口縁が端反りする無文の類である。昭和59年まで調査した北館よりは内館の方が無文碗の出土比率が高い傾向を示す。

I類 胴部外面にやや荒めの鎬蓮弁文を有するもの。（1）口縁部片1点の出土だけで、推定径15cm、暗い黄緑色の釉調を呈し胎土は緻密な灰色である。胴部下半はややふくらみを有して高台に至ると思われる。

Ⅱ類 口縁が直行して立ち上がり口縁部外面に雷文帯を巡らすもの。二片の出土があった。

Ⅱ a類 雷文帯を篋工具等によって簡略に描き込み、同様の工具で内面に劃花文を描く。
施釉は肉厚で気泡が多く淡い青緑色を呈す。(3)

Ⅱ b類 雷文帯をスタンプ状工具で押し、黄緑色の釉調を呈するもの。(2)

Ⅲ類 内外面ともに一条の劃線等を除けば無文とみなし得るもの。

Ⅲ a類 口縁が直行して立ち上がるもの。個体数としてみた場合には10点前後の出土数しかなく、いずれも気泡の多い施釉がなされ、暗緑色・青緑色・灰緑色等の釉調がみられる。(4)は、推定口径18.2cm、高さ8.9cmを計り底を除いて高台まで深みのある青緑色釉が施される。また、内面口縁下3cm前後の部分から見込にかけて無数の擦痕が横位にみられ、本器物内で薬の調合や繊維質のものを搦するという行為がなされたと考えられる。

Ⅲ b類 口縁が外反か端反りして立ち上がるもの。30個体以上の出土があり、推定口径16~18cmぐらいのものが多い。焼成状態や釉調も多様で、褐色を呈する酸化青磁から暗緑色・黄緑色・青緑色・白濁気味の青灰色等の釉調が認められる。(5)は推定口径16.4cmを計り、胴部外面中央にロクロ整形痕が残って、細かい黒粒の混入する灰色素地に青灰色の釉が施されたものである。

Ⅳ類 胴部外面に蓮弁文を簡略化した細蓮弁文(剣先状蓮弁文・山形蓮弁文)を施すもの。

Ⅳ a類 蓮弁の表現が篋状工具による片刃彫りであり、明確な稜(鎬)を有せず谷の部分だけが明確なもの。良好な口縁部がないため弁先の状況は明らかでなく、おそらく剣先に近いものと考えられる。2片の出土があり暗緑色・青灰色の釉調を呈す。

Ⅳ b類 蓮弁の表現が線刻に近いもので、弁先が無作為な山形や弧状を呈し縦位の線刻も弁先の山や谷から無作為に施されている。20個体前後の出土があり、釉調は暗緑色・黄緑色・青灰色・青緑色等があり、内面見込上端に劃線文を施す例もみられる。推定口径は14cm前後のものと、(7)のように11.4cmを計る小型のものに大別でき、見込にスタンプ文のみられる(6)もある。(7)は畳付および高台内まで施釉しているが、(6)は畳付から底まで荒いケズリ痕が認められ、施釉はされていない。

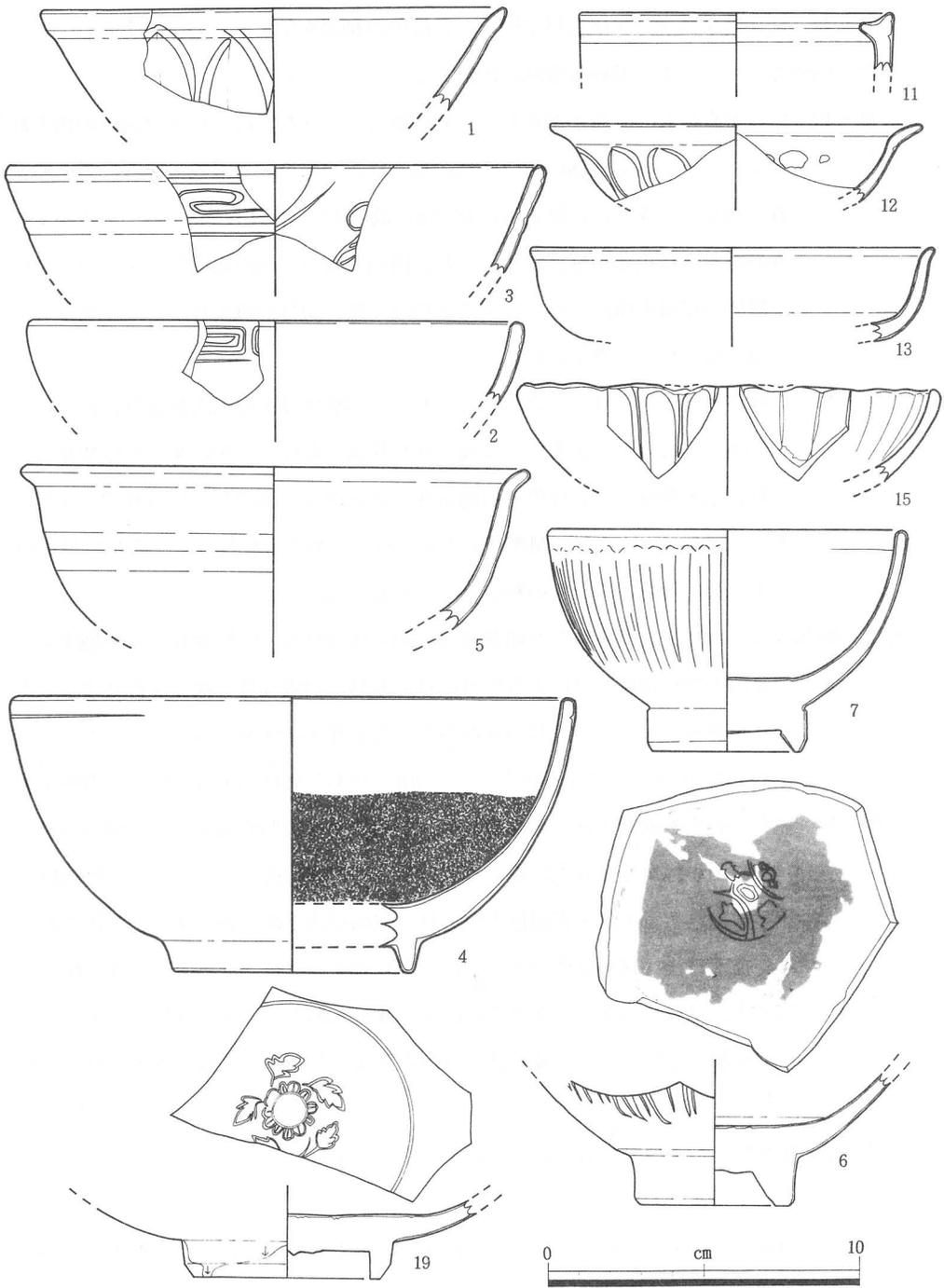
Ⅳ a類・Ⅳ b類ともに口縁は直行した立ち上がりを呈する。

A-1-b Ⅲ

青磁皿は、口縁が外反・端反りするものと、稜花形を呈するもの、および菊皿状のものに大別できるが、半数以上は稜花形のものである。

I類 口縁が外反し、胴部外面に片刃彫りによる不整形の蓮弁が描かれるもの。(12)一点

Fig.40 青磁実測図



の出土であり、推定口径12.0cmを計る。釉調は淡い青灰色を呈し部分的に釉がかからず素地の見えている箇所もあり、灰白色の良質な胎土である。

Ⅱ類 口縁が端反りし、胴部内外面ともに無文であるもの。なお底部が明確でないため見込等の文様については記述できない。推定口径13～16cmぐらいのものまであり5個体前後の出土があった。釉調は青灰色・青緑色・暗灰緑色等があり、胎土は灰色のものが多く。(13)は、推定口径13cm、青灰色の気泡の多い釉調を呈する例である。

Ⅲ類 口縁が稜花状を呈し、高台立ち上がり上端腰部で一度屈折し、口縁部へ向って緩く外反するもの。個体数として20個体前後の出土があった。

Ⅲ a類 内面・見込ともに無文であり、見込の中央部および高台裏・畳付の素地に施釉されず素地が露胎しているもの。(14)は推定口径13cm、器高3cmを計り、青灰色の薄い釉調に、一部酸化状態で褐色を呈する灰色の胎土である。

Ⅲ b類 内面口縁部に2～3条の波状櫛目文が施されているもの。釉調には暗青緑色・青灰色・灰緑色等がみられる。高台部は明確でない。

Ⅲ c類 内面口縁部に2～3条の波状櫛目文とその下胴部内面に劃花文を施すもの。1例出土し、酸化青磁特有の褐色胎土に黄緑色釉が認められる。

Ⅳ類 口縁から胴部にかけて菊花状のえぐりがきれいにみられるもの。(15)は推定口径13cmを計り、透明感のある白緑色の釉調に緻密な灰白色の胎土が認められる。

Ⅴ類 口縁形態は不明で、高台部のみのも。見込に印花文を有し、施釉が畳付までで高台裏が露胎している例(16)。見込中央に釉のふき取り等による露胎部分があり、施釉は畳付と高台裏の一部に及んでいる例(20)があり、本例に類似の皿が2点存在する。

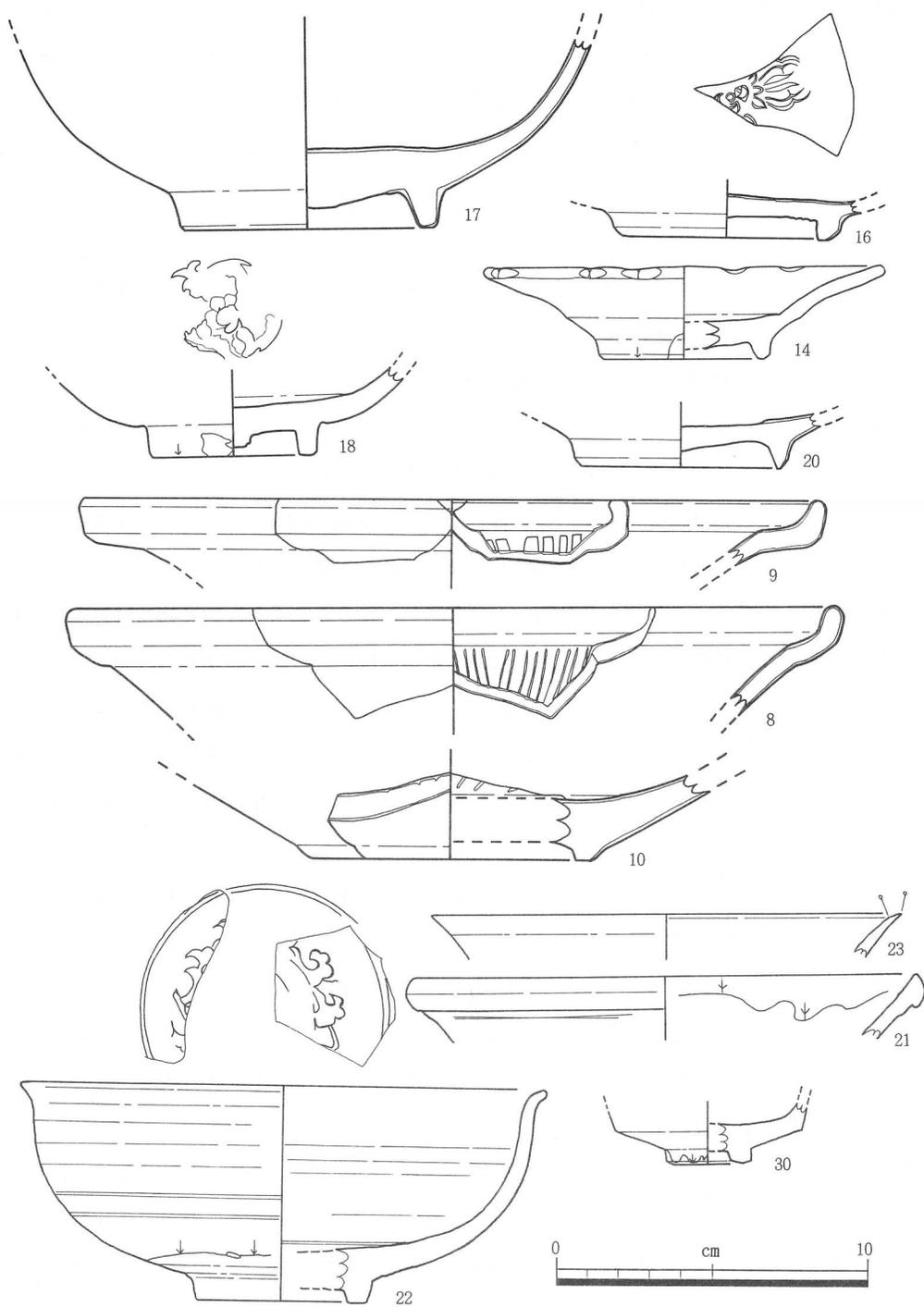
A-1-C 盤

青磁盤としたものは、推定口径20cm以上で器高が6cm前後のものをあて、大皿と称することも可能である。個体数では4～5個体が出土している。

Ⅰ類 口縁が折れた状態で立ち上がり、胴部内面に花卉状のえぐりが簡略化したヒダを縦位に施すもの。(9)は推定口径24.2cmを計り、透明度の高い青緑色の釉調に緻密な灰色の胎土がみられる。他に、暗青緑色の釉調で部分的に酸化状態の素地が認められるものも存在する。

Ⅱ類 口縁形態はⅠ類と同じであるが、胴部内面のヒダが線状に簡略化されたもの。(8)と(10)は同一個体と思われ、推定口径25.2cm、器高6.5cm前後、底径9.0cmを計る。濁りのある黄緑色の釉調で、胎土は緻密な灰色を呈するが部分的に酸化褐色を呈する所もみられる。施釉は畳付の一部を除いて全面施釉のようであるが、Ⅰ類の中には、底が露胎するものも存在する。

Fig.41 青磁・白磁実測図



A-1-d 鉢

青磁鉢は、底径が皿のように大きく安定し、胴部の立ち上がりから推定して皿ほどには器高が低くならないと思われるものを一括したため、碗形あるいは皿形となるものもあるかもしれない。口縁形態が不明であるため、高台部の特徴から分類する。

I類 高台裏が釉のふきとりのためか蛇の目状を呈し、他は畳付部からすべて施釉されるもの。(17)は深みのある暗青緑色の釉調で、最も緻密な青灰色の胎土を有している。接合した部分を見ると、貫入の度合に相違がみられ、破壊の状況や土中での状況によって貫入が違ってくるのであろうか。見込に劃線ないしはスタンプの痕跡はあるが明確に図示することはできなかった。底径8cmを計る。

II類 高台畳付から裏にかけて素地が露胎し、高台立ち上がり部に釉の流れが認められ、見込に印花文が施されるもの。(18)は緑灰色の釉調に黒色および灰色の胎土、(19)は淡い青緑色の釉調に荒い灰色の胎土を有し、底中央にケズリ残痕がトチン状に認められる。

A-1-e 香炉

青磁香炉は3片の出土であり、口縁形態のわかるものは2片である。

I類 口縁部外面に一条の劃線が巡り、内面に突起状の稜が一条巡るため蓋等を考慮した成形になっているもの。(11)は暗緑青色の釉調で、胎土は緻密な灰色、推定口径10cmを計る。

II類 口縁が単に円筒状の縁のようにストレートな立ち上がりを呈するもの。釉調は青緑色胎土は灰白色を呈する。口縁部内面に釉溜りが認められる。

以上の他に、壺の底と思われる破片も出土しているが、小片のため割愛する。

Ch. 77 青磁観察表

PL. No	Fig. No	遺物No	出土区	遺構名	層位	器形	釉調	胎土	文様	特徴	備考
13-1	40-1	P1763	Q42		II	碗	暗黄緑色	灰色	鑄蓮弁文		
13-4	40-4	P2021	T48	SX308	フク土	〃	青緑色	灰白色		内部に擦痕が多い	接着)
〃	〃	P2176	R43	ST247	〃	〃	〃	〃		〃	
13-8	41-8	P2658	Q47	SX211	〃	盤	緑黄色	灰色～橙色	内面に細い削り有り		1984年度出土
13-9	41-9	P2219	R42	ST280	〃	〃	青緑色	灰色	〃		
13-2	40-2	P2164	S42		II	下碗	黄緑色	白色	外面雷文		
13-3	40-3	P1917	S44		〃	〃	青緑色	白灰色	外面雷文、内面劃花文		
13-11	40-11	P128	S40		I	香炉	暗緑青色	灰色			
13-10	41-10	P2318	T44	SE138	フク土	盤	黄緑褐色	〃			接着)
〃	〃	P2319	〃	〃	〃	〃	〃	〃		〃	
13-5	40-5	P1493	T38		II	碗	青灰色	〃		口縁外反	

P.L.No	Fig. No	遺物No	出土区	遺構名	層 位	器形	釉 調	胎 土	文 様	特 徴	備 考
13-6	40-6	P 143	S42	ST245	フ ク 土	碗	青 緑 色	灰 色	蓮弁文、印花文		
13-7	40-7	P 2320	T44	SE138	"	"	青 灰 色	"	線描蓮弁文		接着
"	"	P 2376	"	"	セクション内フク土	"	"	"	"		"
"	"	P 2425	"	"	"	"	"	"	"		"
"	"	P 2433	"	"	椀内粘土層	"	"	"	"		"
"	"	P 2458	"	"	椀内フク土	"	"	"	"		"
"	"	P 2476	"	"	セクション内フク土	"	"	"	"		"
"	"	P 2477	"	"	フ ク 土	"	"	"	"		"
"	"	P 2478	"	"	"	"	"	"	"		"
"	"	P 2487	"	"	椀内フク土	"	"	"	"		"
"	"	P 2488	"	"	"	"	"	"	"		"
"	"	P 2494	"	"	"	"	"	"	"		"
"	"	P 2505	"	"	"	"	"	"	"		"
"	"	P 2506	"	"	"	"	"	"	"		"
14-12	40-12	P 2236	R42	ST280	フ ク 土	皿	"	灰 白 色	外面蓮弁文	口縁外反	接着
"	"	P 2590	"	ST283	"	"	"	"	"	"	"
14-13	40-13	P 2416	S42	pit内	"	"	"	"	"		
14-17	41-17	P 1804	Q42		Ⅱ	鉢	青 緑 色	青 灰 色		底部釉を拭きとってある	接着
"	"	P 1805	"		"	"	"	"		"	"
14-18	41-18	P 2507	R42	ST280	pit内フク土	"	緑 灰 色	灰 色			
14-14	41-14	P 964	W47		Ⅱ 下	皿	青 灰 色	灰色、赤褐色		見込み一部露胎	
14-15	40-15	P 721	"		Ⅱ	菊皿	白 緑 色	白 灰 色			
14-16	41-16	P 2106	R42	ST246	セクション内フク土	皿	淡青黄緑色	灰 白 色	見込み印花文		
14-19	40-19	P 817	W47		Ⅱ	鉢	青 緑 色	灰 色	見込み回線、花スタンプ		
14-20	41-20	P 1750	P42		"	皿	青 灰 色	白 色		見込みの釉を拭きとってある	

A-2 白磁 (P.L.15・16、Fig.41・42、Ch.78)

白磁はすべて中国産と考えられるもので、器形別にみると皿371点、碗24点、小坏他11点の破片数が出土している。製作年代からすると、13~14世紀の一群と15~16世紀の一群に分類が可能であり、城館期の製品は後者、前者は伝世品的性格を有していると考えている。

A-2-a 碗

白磁碗は、個体数とみた場合10点以内の出土であり、そのほとんどは13~14世紀のものである。つまり、城館期に白磁碗はほとんど搬入・使用されていないことになる。

I類 口縁が玉縁を呈し腰部の張りがなく直線的立ち上がりをするもの。(21)は推定口径17cmを計る大ぶりの碗で、灰白色の釉が所々に釉溜状に施され、灰白色の硬質感あふれる胎土が認められる。13~14世紀。1個体出土。

II類 口縁が外反した立ち上がりを示し、腰部が張りを有して高台にいたるもの。

II a 類 推定口径18cmを計り、暗灰色の釉調に堅緻な灰色の胎土を有し、胴部外面がくすんだ状態を呈するもの(24)。浪岡城跡Ⅷ P 92・Fig.42—183に掲載した白磁碗と同形のものとして推定される。

II b 類 碗と言うよりは鉢と言えるかもしれないが、口縁は薄手に成形されて外反し、内外面ともにロクロ整形痕が明瞭に残っている。(22・25・26)は同一個体と推定され、透明度の高い灰白色の釉調を呈し堅緻な灰色の胎土を有している。外面の施釉は腰部下端で止まり、高台部は素地を露呈している。見込には一条の劃線を回した中に印花文が施されており、推定口径17cm、器高7cmを計るものである。本類はいずれも13～14世紀の製品である。

III 類 口縁の素地が露胎するいわゆる口禿のものである。(23)は小片であるため碗かあるいは皿と考えられ、口縁は外反しながら尖った状態になっている。やや青味のある灰色の釉に白色に近い堅緻な胎土がみられる。推定口径15cmを計る。13～14世紀。

A-2-b 皿

白磁皿は大別すると口縁が内湾気味に立ち上がるものと口縁端反りのものがある。北館の調査においては後者が数量的に多かったが、内館においては前者の出土率が高くなる傾向を有する。今後、詳細に分析をする機会を得たいと思っている。

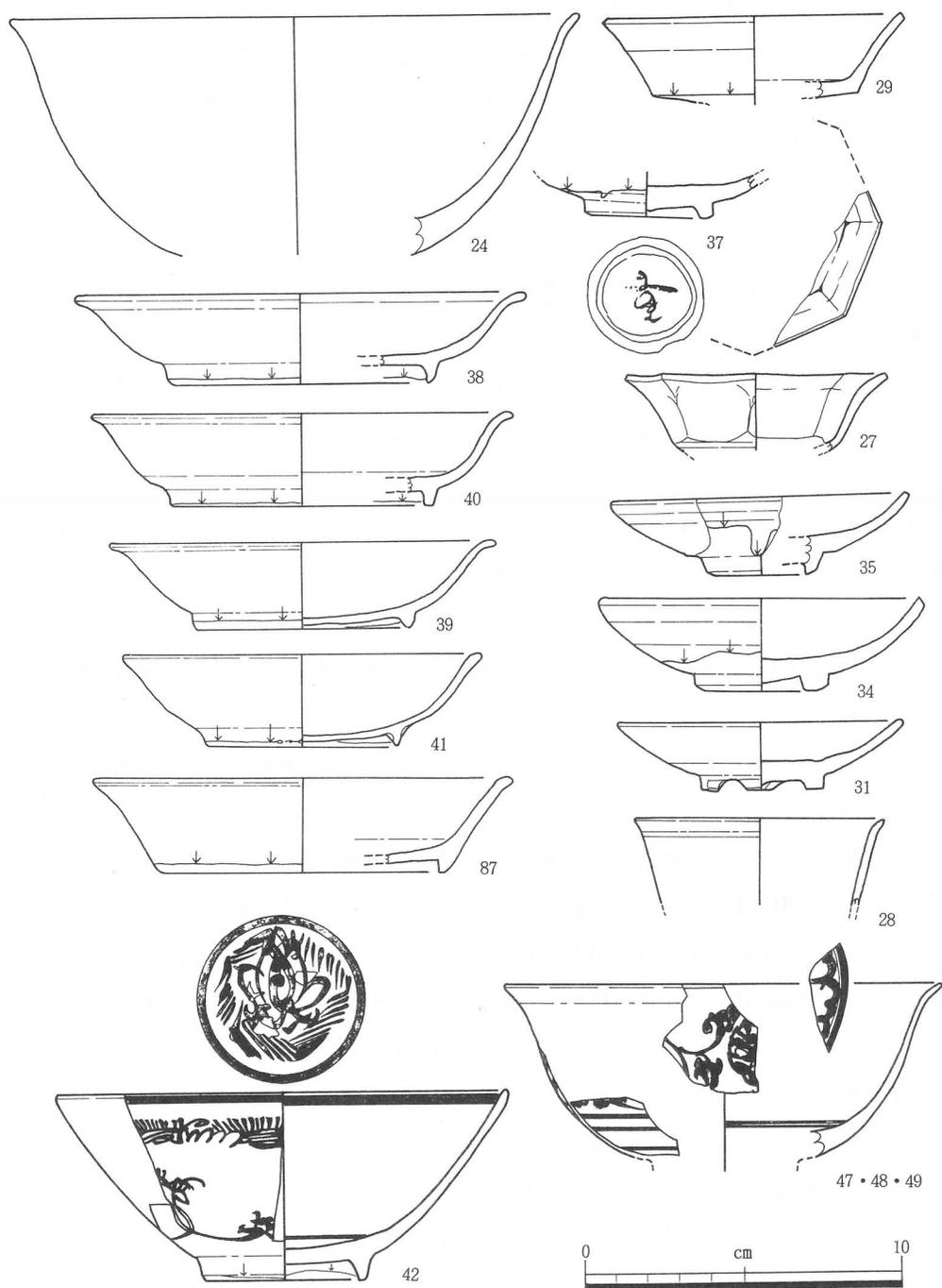
I 類 口縁が内湾気味に立ち上がるもの。本類は、素地が焼き上りによって硬質と軟質の二種(磁器質と陶器質)に分類できるけれども、単純に焼成温度の差による出来不出来の印象があるため、今回は細分していない。底部片から推定するに20個体前後の出土がある。

I a 類 高台の作りが四孤状に抉りを入れたもの。施釉にあたっては器面全体にかかるもの(31・32)と高台部上端で止まり高台部が露胎するものがみられる。見込部分には四箇所の重ね焼き痕が認められる。(31)は口径9.4cm、器高2.5cmを計り、光沢のある灰白色の釉調に堅緻な灰白色の胎土が認められる。(32)は推定口径9.5cmを計り、外面に茶色のくすんだ部分がみられる。

I b 類 高台の作りが丸形に削られたままのもの。本類には全面施釉はみられず、高台上端から口縁下端で施釉が止まり高台が露胎しているものだけである(33～37)。釉調は白色から白濁色まで個体によって特徴がある。(37)の底には墨書痕が認められ、漢字状の文字と考えられるが判読できない。

II 類 硬質薄手に成形され、口縁が端反りするもの。畳付の部分だけ施釉がなされず、他は全面施釉である。底部片および口縁部片から推定するに20個体前後の出土がある。推定口径は11～15cmのものが多く、器高は3cm前後である。

Fig. 42 白磁・染付実測図



II a 類 高台の立ち上がりのあと腰部が張り出して口縁にいたり端反りするもの。(38)は推定口径14.8cm、白色の釉調に白色の胎土を有する。(39)は推定口径12.4cm白色の胎土で、不透明な灰白色の釉調を呈する。(40)は推定口径13.4cm、畳付に砂の付着がみられ、釉のくぼみ等が所々に認められる。(41)は光沢のある白色の釉調で精選された白色の胎土を有している。

II b 類 高台の立ち上がりから腰部の張り出しをもたないで外反したまま口縁に至るもの。(87)はS E 118出土のもので、推定口径13cm、白色の釉調・胎土である。

III 類 口縁から胴部にかけて花卉状のへこみを有する、いわゆる菊皿と言われるもの。細片が多く判然としないが、2～3個体の出土がある。

A-2-C 小坏

白磁小坏には、前述皿のI類とII類に比定できる二種類に大別できるが、個体数としてみれば5個体以内の出土である。

I 類 高台から腰部にかけてほぼフラットな成形をした後、腰部で大きく屈折して外反しながら口縁に至るもの。施釉は外面腰部屈折部で止まり、高台部は露胎すると考えられる。

I a 類 いわゆる八角坏と言われる胴部を八角に面取りしたもの。(27)は、堅緻な白色の胎土にやや青味のある白色釉を施し、推定口径8.5cmを計る。

I b 類 胴部に面取りがなされず丸形を呈するもの。(29)は軟質な乳白色の胎土に緑がかかった白色透明釉を施しており、推定口径10cmを計り、屈折部から高台部にかけて素地が露胎したままロクロ整形の痕跡が顕著に認められる。(30)は小鉢としたが坏に近いものと思われ、施釉が高台立ち上がり部分まで施されているものである。高台の成形は、皿I類と同じである。

II 類 硬質薄手に成形され、胴部がほぼ直線的立ち上がりを呈した後に口縁が端反りするもの。(28)は推定口径8.0cmを計り、白色の胎土に白色の透明釉が施されている。

以上の他、小壺、陶枕等ではないかと推測される破片も存在するが、明確に中国産のものとの鑑定を受けていないため、報告は将来に譲ることとする。

Ch. 78 白磁観察表

P.L. No	Fig. No	遺物No	出土区	遺構名	層位	器形	釉調	胎土	文様	特徴	備考
15-21	41-21	P 887	V 46	SX 270	セクション内フタ土	碗	灰白色	灰白色		玉縁	接着, 1984年度出土
"	"	P 1428	"		II	"	"	"		"	"
15-27	42-27	P 2298	T 44	SX 318	フク土	八角小坏	白色	白色			
15-28	42-28	P 86	S 41		I	小坏	"	"		口縁やや外反	
15-32	—	P 594	T 44		"	皿	"	"		口縁内湾、削り高台	
15-33	—	P 554	S 46		"	"	"	乳白色		外面に釉止り有	1984年度出土
15-22	41-22	P 2533	R 42	SB 71	フク土	碗	灰白色	灰白色			
15-23	41-23	P 733	W 45		II	皿・碗	"	白色		口縁外反、口禿	
15-24	42-24	P 1045	P 48		I	碗	暗灰色	灰色			
15-29	42-29	P 1037	"		"	小坏	白色	乳白色			接着

PL.No	Fig.No	遺物No	出土区	遺構名	層位	器形	釉調	胎土	文様	特徴	備考
15-29	42-29	P2092	S49	SX287	フク土	小坏	白色	乳白色			接着
15-30	41-30	P1088	R48	SX275	床面	小鉢	"	白色			
15-34	42-34	P1891	T43		II	皿	白濁色	乳白色			
15-35	42-35	P1446	W46	SE113	フク土	"	白色	"		口縁内湾	
15-25	—	P1799	Q42		II	碗	灰色	灰色	回線、花文様	外面胴部下から無釉	
15-26	—	P212	R39		I	"	白濁色	乳黄色			1984年度出土
15-31	42-31	P1445	R50	SE118	フク土	皿	灰白色	灰白色		口縁内湾、削り高台	見込みに重ね焼痕
15-36	—	P2530	R42	ST283	床面直上	"	乳白色	乳白色			接着
"	—	P2542	"	"	フク土	"	"	"		口縁内湾	"
15-37	42-37	P2045	T49	SE136	"	"	白色	"		底部に墨書	
16-38	42-38	P745	W47		II	"	"	白色			
16-39	42-39	P749	"		"	"	"	"			
16-40	42-40	P1974	S42		"	"	"	"			
16-41	42-41	P2171	S43	ST281	フク土	"	"	"			接着
"	"	P2196	"		II	下	"	"			"
18-87	42-87	P2609	R50	SE118	フク土	"	"	"		高台が胴部から腹を有さずに形成	

A-3 染付 (P.L.16・17・18、Fig.42・43・44、Ch.79)

染付は、中国産と日本産のものがあり、後者には17世紀以降の近世・近代・現代の製作品も含まれている。今回は、中国産のものに限って報告し、日本産については、浪岡城の存続年代との関わりから後日改めて報告する。

中国産染付は、皿390点、碗87点、水注等5点の計482点の破片数が出土している。

A-3-a 碗

染付の碗は、その高台部成形からレンツェ碗とマントーシン碗およびその中間形の三種に分類可能であるが、口縁部片および底部片の観察からはレンツェ碗が多く、出土個体数は15個体前後である。

I類 口縁から高台部にかけて丸味のある緩い内湾形の立ち上がり呈し、見込部分が丸味を有した断面形を有するもの。(42)は、外面口縁部にくずれた波濤文帯、胴部にアラベスク状の連続文、見込に蓮花状文を一条の圏線内に描いている。施釉は、所々に露胎する凹があり、畳付には施されていない。推定口径14.2cm、器高6cmを計る。

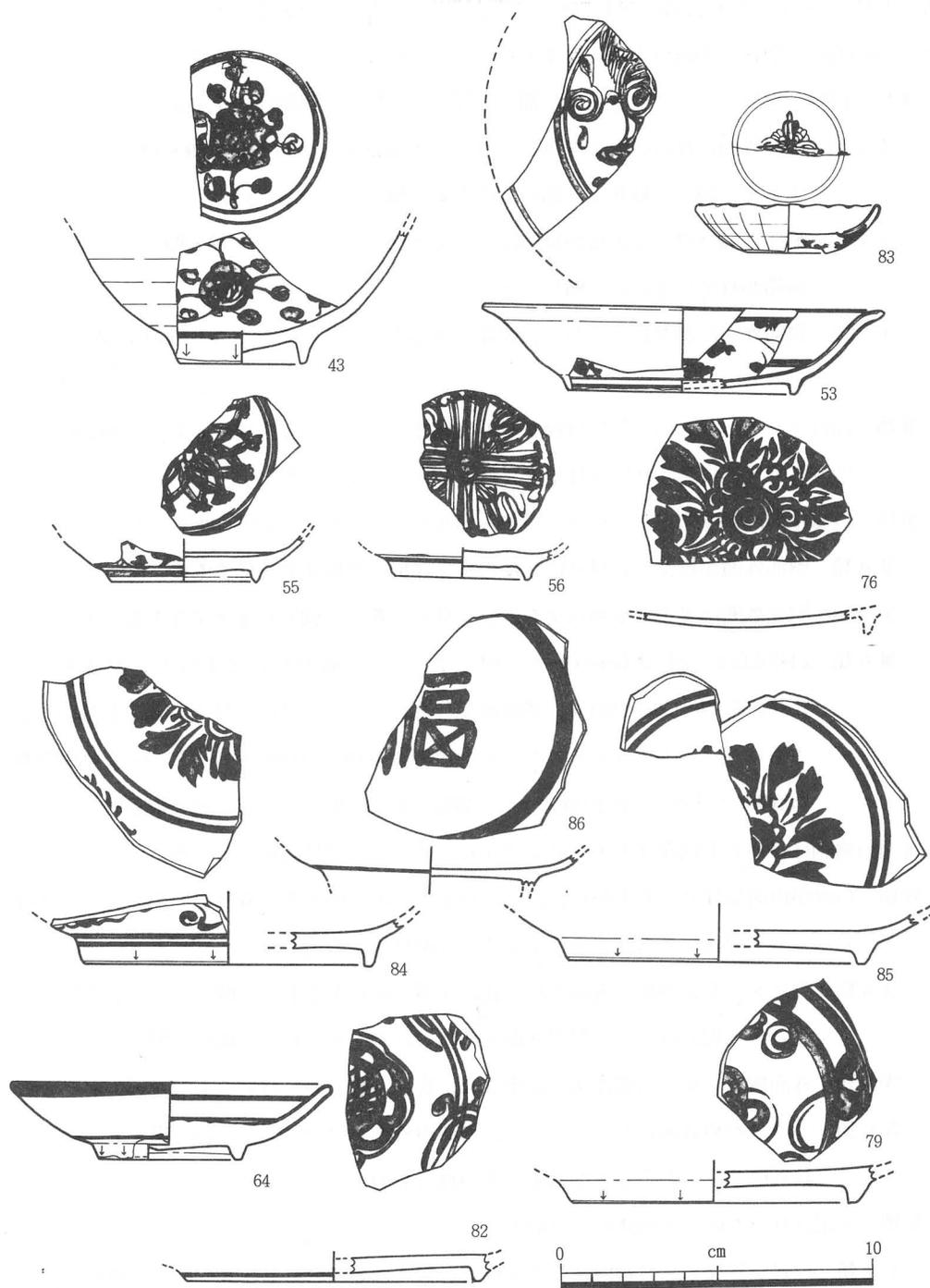
(43)は外面胴部と見込に牡丹文を描くもので(42)同様に施釉の凹がみられ畳付は露胎するが褐色を呈する。蓮子碗の類。

II類 口縁部はないが、底部片が1点あり、高台裏が丸味を有して見込方向に盛り上がるもの。底に「長(命富貴)」銘を有し、見込に蓮池人物文らしい文様がある。慢頭心碗の類。

III類 口縁が端反りし、見込面がフラットな状態でI類とII類の中間形のもの。(47・48・49)は同一個体と考えられ、口縁に暗褐色の口紅(鉄釉?)が回り、胴部内面は無文、胴部外面は呉須が所々で黒錆化した牡丹唐草文、見込に花卉状の文様が見られるものである。他に口縁部片には四方禪状の文様を施した例も存在する。

A-3-b 皿

Fig. 43 染付実測図



染付皿は、口縁形態・底部形態・文様等によって5分類に大別できる。特にS E 118出土の一括資料はまったく接合関係が認められないことから、破壊された後の一括廃棄資料として重要であり、一括して写真図版（P L . 18）で掲示した。推定口径は最小で6 cm前後の小皿から、10～14cm前後の中皿、20cm以上の大皿まで存在するが中皿としたものが大部分である。

I 類 口縁が端反りし、高台を有する皿。口縁・底部片から30個体以上の出土がある。

I a 類 胴部外面に牡丹唐草文を有し、見込に玉取獅子文（53・66・69・71・72など）や十字文（56）、輪花文（55）、花卉文（84）を有するもの。

I b 類 胴部外面は無文であるが見込に花卉文（85）、雲堂状文（79・82）、「福」の字が描かれているもの（86）。

I c 類 胴部外面に渦巻状文を有し、胴部内面および見込にアラベスク風の文様を施しているもの。

II 類 高台立ち上がりから一気に口縁まで外反気味の立ち上がりを呈するもの。胴部内外面は無文で見込に雲堂状の文様がみられる（54）。1個体出土。

III 類 口縁は内湾気味に立ち上がり、底が碁笥底を呈するもの。10個体前後の出土がある。

III a 類 胴部外面が無文で、見込にだけ吉祥文（57）や稔花文を描くもの。

III b 類 胴部外面に光芒文や列点文を施し、見込に花文（58）や文字文等を描くもの。

III c 類 口径6.0cm、器高1.6cmの小皿（83）で、口縁は輪花状に波をうち、胴部外面には花卉を意図したと思われる劃線が無作為に引かれ、見込には十字花文が描かれ、さらに見込立ち上がりには幅2 mm前後の釉の掻き取り痕が残っている。外面施釉は底部立ち上がりで止まり底にかけて露胎している。断面には漆の接合痕が残っている。

III 類の施釉はいずれも底部立ち上がりで止まり、底にかけては露胎している。

IV 類 口縁が内湾気味に立ち上がり、高台を有するもの。前述 I～III 類の呉須の発色よりは彩かでやや深味のある濃紺色を呈する。10個体前後の出土がある。

IV a 類 内外面ともに圈線のみ施され、底に「圃」銘のあるもの（62）。なお、本類に含まれると思われるが、胴部外面に波状の陰刻を施した口縁部片（61）もある。

IV b 類 外面無文、見込に蚊龍文等が施され、底に「圃」銘を有するもの（63）。

IV c 類 小片のため詳細はわからないが、胴部内外面および見込に、四方禪文、花卉文、牡丹唐草文、寿字文等を施すと思われるもの。

V 類 上記以外のもの。3個体前後の出土。

V a 類 口縁が外反し、口縁内面に四方禪文、胴部外面に唐草草花文を描く、推定口径20 cmを計る大皿（59・60）。非常に薄手の成形がなされている。

V b 類 口縁が斜行して立ち上がり、高台部の成形は荒く削り出しただけで、内外面とも

に回線だけが施されている。焼成が甘いためか陶質の胎土であり、施釉も高台上端で止まり畳付から底は露胎している(64)。類似した胎土・成形で口縁が外反する破片が一点存在する。

A-3-C 水注?

Fig.44-44に示したものはP.L.16-44・45・46の破片(同一個体と思われる)を推定復原したもので、耳の部分およびその取り付け部から水注等の機能を有する壺形の破片と思われる。呉須は濃紺色の発色を呈するが二次加熱のためか釉上に細かい凹凸が認められる。文様も詳細は不明であるが浪岡城跡ⅧP95、Fig.43-194で示した壺形の器形より若干大振りになるとと思われる。

Ch.79 染付観察表

PL. No	Fig. No	遺物No	出土区	遺構名	層	位	器形	釉・調	胎土	文様	特徴	備考
16-42	42-42	P 146	S42	ST245	フク土	碗	青白色	白灰色	アラベスク文、見込みに回線、蓮花文		接着	1984年度出土
"	"	P 2499	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"
16-43	43-16	P 815	W46			Ⅱ	"	白色	回線、青花、唐草文			
16-44	44-44	P 2513	R42	pit内	フク土	取手	"	"				
16-45	44-45	P 1958	S42			Ⅱ	水注	"	"	草花文		1984年度出土
16-46	44-46	P 1252	S48		埋土	"	"	"	回線、菊花文	耳の付着痕有、2次焼成		
16-47	42-47	P 2441	S43	SX 321	フク土	碗	白色	"	回線	口縁鉄釉		同一個体
16-48	42-48	P 613	R44			I	"	青白色	"			"
16-49	42-49	P 514	P44			"	"	"	回線、唐草、花文			"
17-53	43-53	P 2434	S43	SX 321	フク土	皿	"	"	回線、玉取獅子文			
17-57	44-57	P 1152	R49			Ⅳ	"	"	回線	碁笥底		
17-59	—	P 2594	R42	ST283	フク土	碗	淡青白色	乳白色	四方禪文			同一個体
17-60	—	P 2588	"	"	セクション内フク土	"	"	"	"			"
17-63	44-63	P 2026	S42			Ⅱ	皿	青白色	白色	回線、蟠螭文、「福」		接着 1984年度出土
"	"	P 2545	"	ST245	フク土	"	"	"	"			"
"	"	P 2126	"	"	"	"	"	"	"			"
17-54	44-54	P 1221	T49			Ⅳ	上	青白灰色	"	回線、花文		
17-58	44-58	P 2724	Q48		埋土	"	白濁色	乳黄色	回線、花文	碁笥底		
17-61	44-61	P 938	V46	SE 111	フク土灰層	"	透明	白色	回線、外面に暗文			
17-55	43-55	P 1220	T49			Ⅳ	上	青白色	"	回線、唐草、花文		
17-56	43-56	P 53	R41			I	"	"	"	回線、見込み十字花文		
17-62	44-62	P 2020	T49	pit内	フク土	"	青灰色	灰色				

PL. No	Fig. No	遺物No	出土区	遺構名	層位	器形	釉調	胎土	文様	特徴	備考
17-64	43-64	P 804	W47	皿	II	皿	青白濁色	赤褐色	回線		
18-65	25-65	P 1449	R 50	SE 118	フク土	"	青白色	白色	回線、牡丹唐草文	口縁やや外反	
18-66	25-66	P 1962	"	"	"	"	"	"	回線、玉取獅子文、牡丹唐草文	口縁外反	
18-67	25-67	P 1907	"	"	"	"	"	"	回線、牡丹唐草文	"	
18-68	25-68	P 1399	"	"	"	"	"	"	回線、草花文		
18-69	25-69	P 2610	"	"	"	"	"	"	回線、唐草文		
18-70	25-70	P 1538	"	"	"	"	"	"	回線、見込み十字花文、外面草花文	口縁外反	
18-71	25-71	P 1959	"	"	"	"	"	"	回線、牡丹唐草文、玉取獅子文	底部釉を一部拭きとってある	接着
"	"	P 1960	"	"	"	"	"	"	"	"	"
18-72	25-72	P 1963	"	"	"	"	"	"	回線、玉取獅子文		
18-73	—	P 1934	"	"	"	"	"	"	回線、唐草文、花文	口縁外反	
18-74	25-74	P 1675	"	"	"	"	"	"	回線		
18-75	25-75	P 1424	"	"	"	"	"	"	回線、牡丹唐草文		
18-76	43-76	P 1929	"	"	"	"	"	"	花卉文		接着
"	"	P 2065	T 48	SX 308	"	"	"	"	"		"
18-77	25-77	P 1450	R 50	SE 118	"	"	"	"	回線、草花文		
18-78	25-78	P 1377	"	"	"	"	"	"	回線		
18-79	43-79	P 2611	"	"	"	"	"	"	回線、唐草、見込み花文	2次焼成	
18-80	25-80	P 1933	"	"	"	"	"	"	回線、玉取獅子文、唐草、花文		
18-81	25-81	P 1964	"	"	"	"	"	"	回線、花樹文		
18-82	43-82	P 1930	"	"	"	"	"	"	回線、花樹文、唐草、花文		
18-83	43-83	P 1378	"	"	"	小皿	"	"	外面刻線、見込み十字花文	見込みに一条露胎部分有	接着痕有
18-84	43-84	P 1931	"	"	"	皿	"	"	回線、花卉文、唐草文		
18-85	43-85	P 1932	"	"	"	"	"	"	回線、花卉文	2次焼成	
18-86	43-86	P 1961	"	"	"	"	"	"	回線、見込み「福」の銘	"	

A-4 赤絵 (P L.16、Fig.44、Ch.80)

赤絵は2片の出土があり碗と皿がある。中国産。

A-4-a 碗 (P L.16-51)

Fig.44-51は推定口径12.8cmの碗形の口縁部片である口縁は外反して立ち上がり、内外面とも2条の圏線下に草花様の文様が施されているが、緑色・赤色顔料は脱色してくすみ色あせた状態になっている。

A-4-b 皿

Fig.44-52は推定底径10.4cmを計るやや大振りの皿高台片である。胎土や成形は、白磁皿Ⅱ類としたものに近似し、高台立ち上がり外面には花状の文様が赤褐色に近い赤色顔料と光沢のある点状の緑色顔料で描かれており、見込にも同様の顔料で花卉状の部分がみられる。

Ch.80 赤絵観察表

PL.No.	Fig.No.	遺物No.	出土区	遺構名	層位	器形	釉調	胎土	文様	特徴	備考
16-51	44-51	P2040	T49	pit内	フク土	碗	灰色	白灰色	回線		
16-52	44-52	P1219	"	S×288	"	皿	"	灰白色	回線、花文		

A-5 色絵染付 (P L.16、Fig.44、Ch.81)

染付として呉須文様を施した上に赤色・緑色顔料で再度文様を描いているものである。Fig.44-50は推定口径14.7cmの皿口縁部片であり、外面に呉須で圏線と唐草状の文様を施した上に雑な筆使いで赤色の圏線2条と草花状の文様が描かれ、内面には濃紺の圏線下に赤色の圏線および草花文さらに列点状の緑色顔料が置かれているものである。中国産であり、一片の出土。

Ch.81 色絵染付観察表

PL.No.	Fig.No.	遺物No.	出土区	遺構名	層位	器形	釉調	胎土	文様	特徴	備考
16-50	44-50	P253	R43		I	皿	灰白色	白色	青花の上に紅で回線		

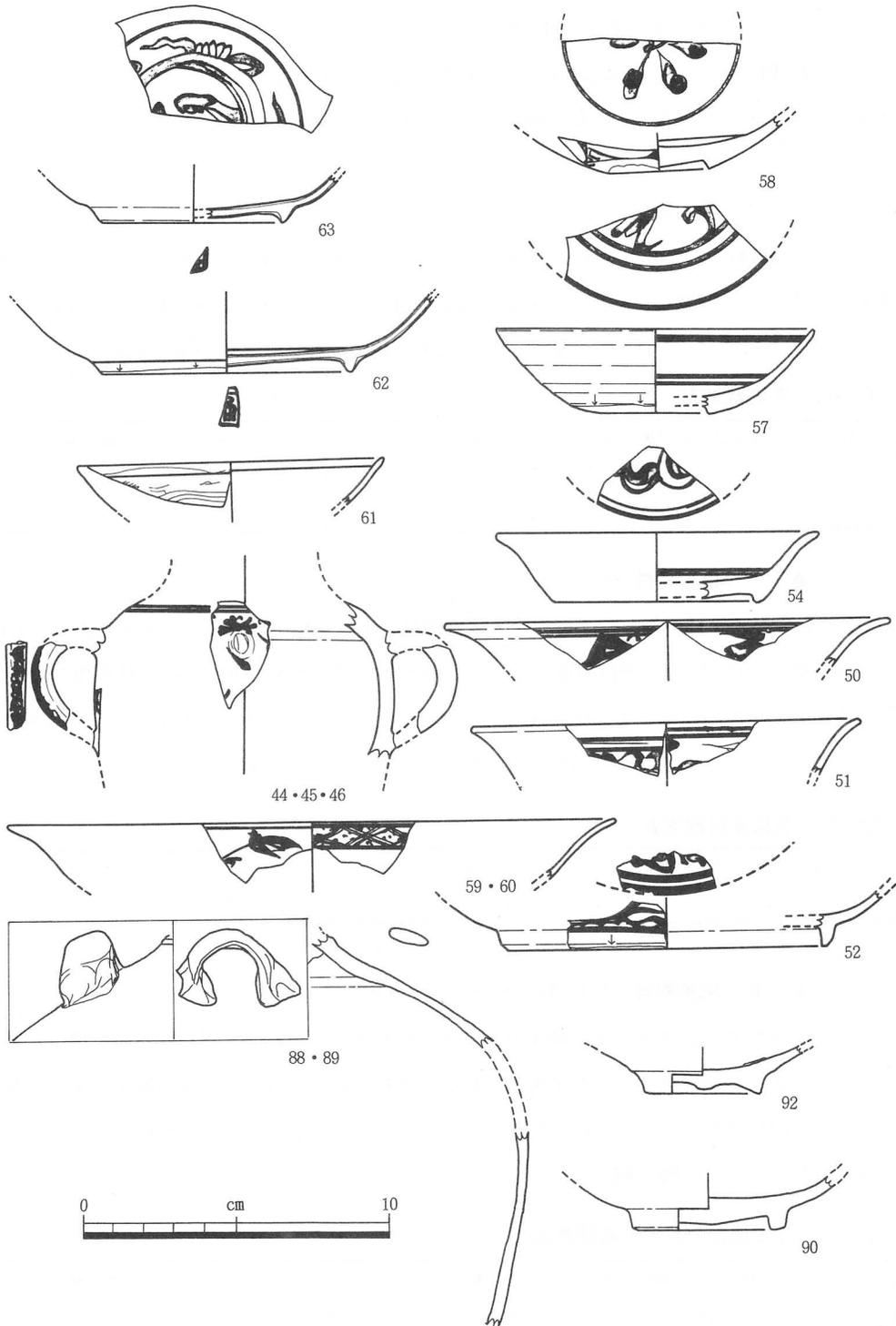
A-6 褐釉陶器 (P L.19、Fig.44、Ch.82)

12片の出土があり、すべて同一個体のもと思われる。耳が肩部と思われる所に横位に貼り付けられ、表面には斑状になった黄褐色の釉が施された壺である。内面は黄灰色を呈し、胎土は部分的に白粒砂を含んだ明灰色であり、器厚がすべて4mm前後と薄手に製作されているのが大きな特徴である。(88・89)

Ch.82 中国褐釉(呂宋)壺観察表

PL.No.	Fig.No.	遺物No.	出土区	遺構名	層位	器形	釉調	胎土	文様	特徴	備考
19-88	44-88	P1782	Q42		Ⅱ	壺	褐色、鉛色	灰色		耳付き	
19-89	44-89	P2297	T44	S×318	フク土	"	"	"			

Fig.44 染付・赤絵・色絵染付・中国襦袖・朝鮮実測図



A-7 朝鮮 (P.L.19、Fig.44、Ch.83)

朝鮮製の陶器は2片あり、碗と皿の器形がある。

A-7-a 碗

(91)は碗の胴部片で、丸味を有した湾曲で立ち上がり、光沢のある透明釉が施され胎土、器面ともに白粒砂・黒粒砂が全体に混入し、やや緑がかった灰色の色調を呈している。

A-7-b 皿

(92)は皿底部片で、畳付の一部に施釉が及ばない以外は全面施釉である。高台部の成形は削り出しによる工具の痕跡が明瞭で、整形はおこなわれない。胎土は白粒砂を含む堅緻な灰色を呈し、釉は光沢のある灰釉的な灰緑色の釉調を示す。見込と高台部に砂目積みの痕跡が認められる。

Ch.83 朝鮮観察表

PL.No	Fig.No	遺物No	出土区	遺構名	層位	器形	釉調	胎土	文様	特徴	備考
19-91	—	P 1720	R41		II	碗	灰青色	暗灰色			
19-92	44-92	P 1060	Q48		I	皿	灰緑色	灰色			

A-8 その他 (P.L.19、Fig.44、Ch.84)

おそらく中国産のものと推定されるが、焼成・成形・施釉が雑然としており明確に分類できかねるもの。(90)は皿底部片であり、乳黄灰色の胎土に、畳付上端まで流れのある青白濁色の釉が施されたものである。高台の成形は工具の削り痕が明瞭で、再調整はなされない。特に文様等が認められないことから、青磁の粗雑品とも思われるが判然としない。

Ch.84 不明陶器観察表

PL.No	Fig.No	遺物No	出土区	遺構名	層位	器形	釉調	胎土	文様	特徴	備考
19-90	44-90	P 988	W46	ST 259	フク土	皿	乳青白濁色	乳黄色			

B. 搬入された陶磁器で日本産のもの

B-1 瀬戸・美濃 (P.L.19・20・21・22、Fig.45・46・47、Ch.84・85)

瀬戸・美濃窯で生産されたものとしてはその施釉から、灰釉・鉄釉・長石釉・黄瀬戸釉の4種に大別できる。また、器種によっては胎土や施釉方法にも相違が認められることから、なるべく細分してそれぞれの個体数を顕現できるように努める。なお、瀬戸・美濃という言葉の使用については、瀬戸窯と美濃窯の区別が現段階では筆者にできかねることからの暫定的用語であると理解いただきたい。

B-1-i 瀬戸・美濃灰釉

瀬戸・美濃灰釉の製品としては、瓶子・壺・鉢・卸皿・皿・水滴・香炉・碗等の器種があり、それぞれの破片出土数は瓶子16点、壺13点、鉢9点、卸皿6点、皿182点、水滴3点、香炉2点、碗1点、他10点である。

B-1-i-a 瓶子

瓶子はすべて胴部の小片であるため全体形を推定できる資料はない。(93)は精選された灰色の胎土で器体外面に劃花文を描き、光沢のある淡い灰緑釉が施されている。内面には輪積みか巻き上げと思われる痕跡と横位の指ナデ痕が残っている。(94)は締め腰型瓶子の底に近い部分と推定され、内外面に輪積み痕が残り外面の施釉は部分的に茶色を呈する黄緑色で、内面には横位の指ナデ痕も残っている。胎土は良質な灰色を呈する。(97)は、外面に三筋を有する破片で外面の釉はほとんどが禿げ落ちて、灰色の胎土を露呈している。瓶子の個体数は4点前後と思われる。

B-1-i-b 壺

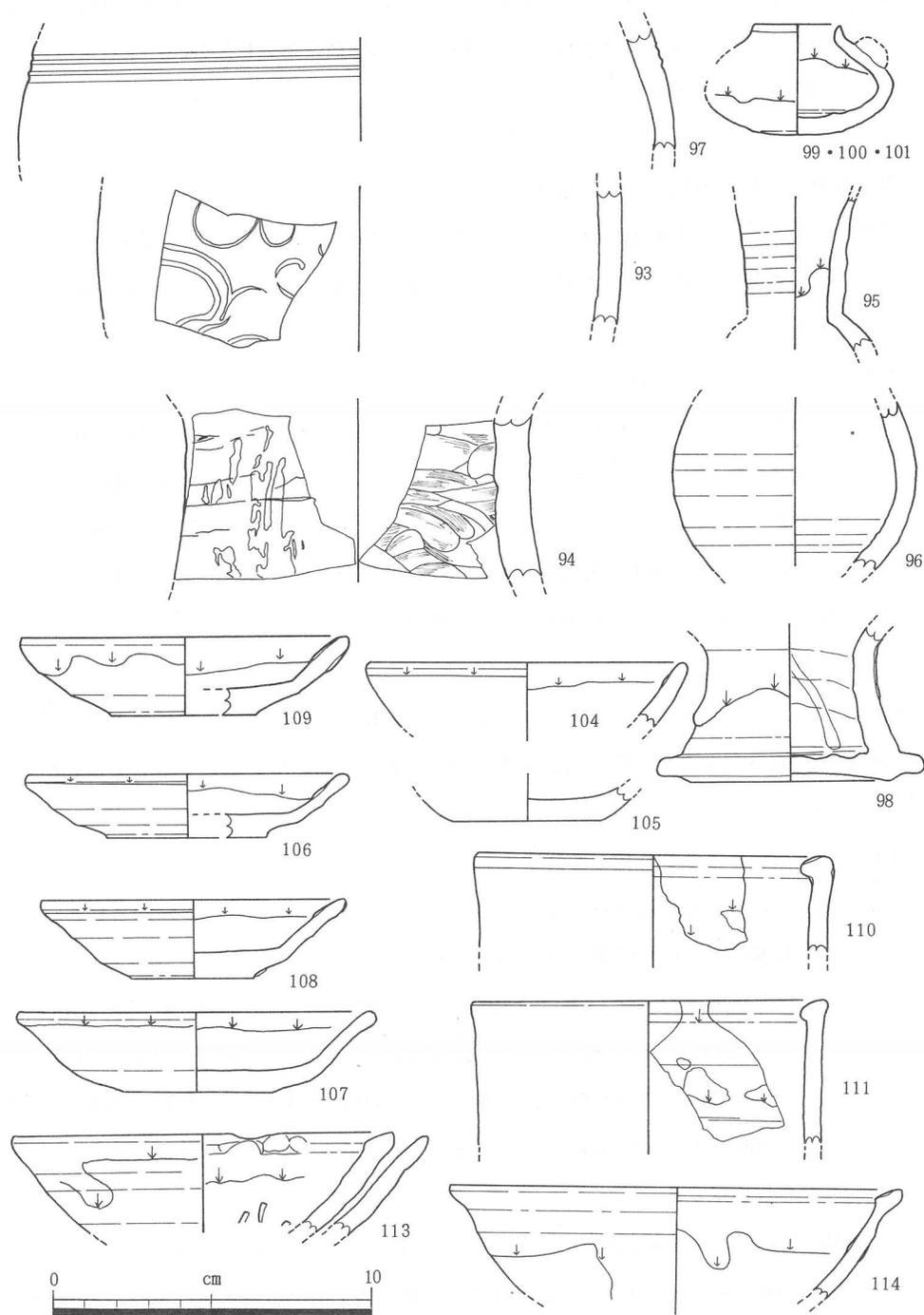
壺としたものの中には水注や花瓶等があるかもしれないが、いずれも全体形を推定するまでには至らぬため破片の特徴を記述する。(95)は頸部片であり口縁に向って緩く外反し下方には球形に近い胴部を有する花瓶と推定される。外面にはロクロによる引き上げ痕が残り二次加熱のためガラス質の黄緑釉がくすんだ灰緑色を呈する部分もある。内面は頸部取り付け部の上端で施釉が切れ釉溜りも認められる。また、頸部から胴部にいたる部分には工具によるロクロ痕がある。(96)は花瓶の胴部片と思われるもので、外面にはロクロ成形痕と黒味のある黄緑色釉が施され、内面にはロクロ指ナデ痕が認められる。(98)は底径8.4cmを計る花瓶状の底部片であり、回転糸切による切り離し痕と外側に強く凸帯した底辺縁部がある。ガラス質の黄緑釉が肉厚に底部立ち上がり部分まで垂れ下がり、内面底にも釉の落ち込みが認められる。以上の壺の胎土は、白色に近いものから灰色・黄白色と部分的に違う箇所も存在する。また、これらの他に、薄手に成形され内面に工具によるV字状のロクロ回転痕が存在するもの、内面に明瞭なロクロ指ナデ痕を有するもの等が存在する。

B-1-i-c 鉢

鉢の中には推定口径25cm以上の盤あるいは深皿とも言えるタイプと、推定口径20cm以下の小形のものがあり、いずれにも卸目を有するいわゆる卸皿と言われるものを内包しているため、今回は卸目の付けられていない類を一括した。(鉢という分類は本来適当ではないのかもしれないが、細片が多く全体形を知り得ないため御寛容願いたい。)

I類 口径25cm以上で口縁内面に突帯を有するもの。(200)は浪岡城跡Ⅷ P 97 Fig.44-217で示したものと同じであるが、本年度底に脚の付くことが確認されたので再度掲載したものである。口径35cm、底径16cm、高さは脚を除いて9.0cmを計り、外面の口

Fig. 45 瀬戸・美濃灰釉実測図



クロ痕はかなり密に引かれている。(115)は推定口径30.8cm、(116)は推定口径25.4cmを計るもので、どちらも灰白色の胎土に黄緑色の釉が施された口縁部片である。

Ⅱ類 口径20cm以下で口縁やや外側に開いた折縁状を呈するもの。(114)は推定口径14.2cmを計り、口縁下2cm前後まで内外面に黄緑色釉を施釉し部分的に垂れ下った所や釉溜りのみられる部分もある。

B-1-i-d 卸皿

卸皿は鉢と同様の分類が妥当である。

Ⅰ類 口径25cm以上と推定されるもの。(117)は内面胴部の限定された箇所に格子状の卸目を有すると考えられる破片で、縦位の卸目を深くV字状に入れた後、浅めに横位の卸目を入れている。

Ⅱ類 口径20cm以下の口縁内面に突帯を有するもの。(113)は片口の部分であり、内外面に重ね焼きの痕跡と思われる付着物が認められる。ガラス質の緑色釉が口縁付近にだけ施され、以下は露胎し内面に卸目を確認できる。外面にロクロ成形痕が存在する。

(118)はゆがみのある器形で、推定口径15cm、器高3.4cmを計る。施釉は、口縁下2cm前後の所まで黄緑色釉が施され、内面は黄灰色外面は灰色の素地が露胎している。底は回転糸切痕が雑然と認められ再調整はしていない。

B-1-i-e 皿

皿の中には高台を有せず糸切による切り離しだけの類と高台を有する類に2大別でき、施釉や口縁形から細分できる。一般に前者を窖窯期、後者を大窯期に比定して時間的差異があるとみられている。

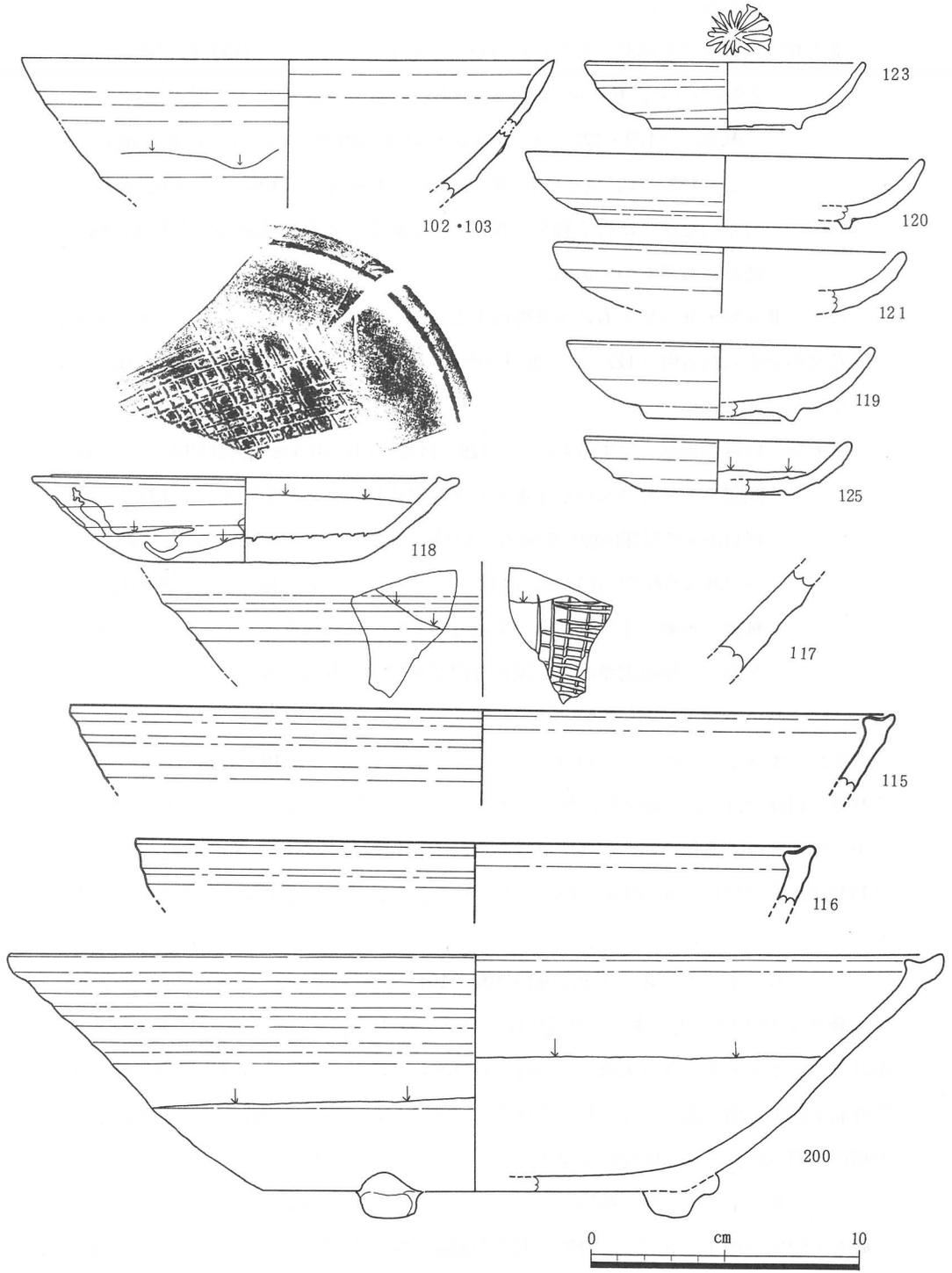
Ⅰ類 底が糸切による切り離しを呈するもの。

Ⅰa類 口縁がやや外反ぎみの立ち上がりをして、口縁の部分だけに施釉されるいわゆる縁釉皿の類。(106)は口径10.2cm、高さ2.0cm、底径5.0cmを計り、内面が煤けた状態になっている。(107)は口径11.4cm、高さ2.5cm、底径4.7cmを計り、二次加熱のためか釉が剥落して凹凸状を呈する。(108)は口径9.6cm、高さ2.5cm、底径3.8cmを計り、底部立ち上がりにトチン状の重ね焼き痕が残る。

(109)は口径10.4cm、高さ2.5cm、底径4.6cmを計り、内外面の釉下端が釉溜り状を呈する。

Ⅰb類 口縁がやや内湾気味の立ち上がりを呈し、外面は口縁だけの施釉であるが内面は口縁の部分が肉厚にその下から見込全般に薄く斑状の施釉がみられるもの。(104・105)は同一個体と思われ、推定口径10.2cm、胎土はⅠa類より軟質な乳黄色を呈している。

Fig.46 瀬戸・美濃灰釉実測図



Ⅱ類 削り出し等によって高台部を形成するもの。

Ⅱ a 類 口縁が端反りするもの。本年度は出土例が少なくなおかつ細片であるため図示できなかった。

Ⅱ b 類 口縁がやや内湾しながら直行して立ち上がるもの。(119)は口径11.6cm、高さ2.8cmを計り、乳灰色の胎土に黄緑灰色釉が全面に施され、底に輪ドチ痕が認められる。(120・121)は、黄灰色を呈する釉調の中に緑色の釉の流れが存在する。(123)は、見込に菊の印花文を有する例。(125)は、内面立ち上がり部分から見込にかけて釉をふき取って露胎しており、外面高台部上端に輪ドチ痕が認められるものである。

なお、Ⅱ a 類・Ⅱ b 類ともに可能性のある底部片に、見込中央からズレた部分に菊状の印花文が認められる例(122)と花卉状の印花文が認められる底径4.5cmの小皿片(124)がある。

Ⅱ c 類 口縁が折縁を呈するもの。(126)は推定口径10.5cmで胴部内面に約3cmほどの間隔をあけて3ないし4本のヒダを縦位にソギ入れている。(127)は、推定口径11.0cmで胴部内面に間隔なく縦位のヒダをソギ入れている。(128)は、ゆがみのある器形で口径12cmを計り、見込に釉ハギ、底に輪ドチの痕跡が残っている。釉調は黄瀬戸手に近いものである。本類の高台成形にあたっては外面立ち上りを削った後の調整がなく鋭角な段状を呈するものが多い。

B-1-i-f 香炉

香炉は、すべて筒形のもので口縁部片だけ出土している。(110・112)は同一個体と考えられ推定口径12.4cm、口縁部を内側に突き出した形状を呈し、ガラス質の緑色釉が施されているが二次加熱による釉の凹凸が各所に認められる。口縁部外面に一条の劃線が回っている。(111)は推定口径11.2cm、口縁内側に突き出しを有し、内面に緑色釉の振りかかりが認められる。

B-1-i-g 水滴(90・100・101)

水滴は1個体の出土である。推定口径2.8cm、推定器高3.5cm、推定胴部張り出し6.0cmを計り、つまみと注口部は欠落している。底は糸切り底であり、施釉は内面が口縁から肩部まで外面が胴張り出し部までなされ、他はすべて露胎している。釉調は、鉄分が混在したように黒褐色の列点がみられる灰緑色を呈する。

B-1-i-h 碗

碗も1個体の出土である。(102・103)は同一個体と推定され、その復元図がFig.46-102である。推定口径20cm前後で、口縁は内面がふくらみを有しながら直行して立ち上がる。

胴部は緩く内湾するようであり、外面は胴部途中で施釉が切れる。露胎している部分の調整はヘラ等によってなされており、釉調も淡い黄緑色を呈して一味違った特徴を有する。一般に平碗と言われる。

Ch. 84 瀬戸・美濃灰釉観察表

PL.No.	Fig.No.	遺物No.	出土区	遺構名	層位	器形	釉調	胎土	文様	特徴	備考
19-93	45-93	P 2289	T44	SX 320	フク土	瓶子	淡、緑色	灰色	劃花文		
19-96	45-96	P 189	T39		I	壺	黄緑色	"			
19-94	45-94	P 1624	T44		II	瓶子	淡黄緑色、茶色	"		輪積み痕	
19-97	45-97	P 2183	R42	ST278	フク土	"	淡黄緑色	"		内面黒色	
19-95	45-95	P 958	W46	SE116	"	壺	淡緑灰色	"		内面に釉止り	
19-98	45-98	P 819	Q42		II	"	黄緑色	乳黄色		糸切り底、釉止り	
19-99	45-99	P 2177	R43	ST247	床面直上	水滴	黄緑色、暗褐色	灰色			P 2566と同一個体
19-100	45-100	P 3085	O45	SX203	pit内フク土	"	緑黄色	"			1984年度出土
19-101	45-101	P 2566	R42	SX 330	セクション内フク土	"	黄緑色、暗褐色	"			P 2177と同一個体
20-102	46-102	P 2292	T44	SX 318	フク土	碗	淡黄緑色	乳灰色			
20-104	45-104	P 2112	S42	ST245	"	皿	"	乳黄色		外面胴部無釉	
20-106	45-106	P 2556	O46	SX 203	"	"	緑黄色	灰色		口縁上部のみ施釉 糸切り底	
20-107	45-107	P 791	Q47		II	"	黄緑灰色	"		口縁上部のみ施釉	接着 1984年度出土
"	"	P 3905	P,Q47	SX 206	フク土	"	黄緑褐色	"		回転糸切り底	"
20-108	45-108	P 3135	Q46	SX 225	"	"	一	"		糸切り底	"
20-109	45-109	P 817	Q47		II	"	暗緑色	灰白色		口縁上部のみ施釉 糸切り底	"
20-103	46-103	P 2261	T44	SX318	フク土	碗	淡黄緑色	灰色			
20-105	45-105	P 158	S42	ST 245	"	皿	"	乳白色		回転糸切り底	
20-110	45-110	P 1841	S43		II	香炉	緑黄色	灰白色	劃線	2次焼成	1984年度出土
20-111	45-111	P 18	R42		I	"	淡黄緑色	灰色			
20-113	45-113	P 1328	R48	SE124	フク土	卸皿	黄緑色	"		口縁部分のみ施釉 片口	
20-114	45-114	P 1776	Q42		II	浅鉢	"	"			
20-118	46-118	P 1131	R49		II	下卸皿	"	"		胴部中頃まで施釉 見込みに欄目	
20-112	—	P 2123	S42	ST247	フク土	香炉	淡黄緑色	"		2次焼成	
20-115	46-115	P 1383	R51	ST270	"	浅鉢	"	"			
20-116	46-116	P 1061	Q49		I	"	黄緑色	"			
20-117	46-117	P 1438	R48	SE102	フク土	卸皿	"	"			
26-200	46-200	P 455	R45		II	浅鉢	"	"			接着 1984年度出土
"	"	P 474	S45		I	"	"	"			"
"	"	P 480	"		"	"	"	"			"
"	"	P 1375	"	SF 53	フク土	"	"	"			"
"	"	P 1135	R48		I	"	一	"			"
"	"	P 2371	S44	SX315	フク土	"	一	"			"
21-119	46-119	P 1986	R43		I	皿	黄緑灰色	乳灰色		輪ドチ痕	
21-123	46-123	P 145	S42	ST245	フク土	"	"	灰色		輪ドチ痕、2次焼成	接着
"	"	P 154	"	"	"	"	"	"	見込み菊花スタンプ文	"	"
21-126	47-126	P 1680	Q41		II	ヒタ皿	黄緑色	"		折縁	
21-127	47-127	P 142	S39		I	"	"	"		"	
21-120	46-120	P1475B	T39		II	皿	乳黄色、黄緑色	乳黄色		口縁内湾	
21-121	46-121	P1475C	"		"	"	"	"		"	
21-122	47-122	P 1425	R48	SE102	フク土	"	黄緑色	乳灰色	見込みに印花文		
21-124	47-124	P 2734	Q48		埋土	"	"	乳白色	見込みに花のスタンプ文		
21-125	46-125	P 861	V46	SE111	フク土	"	"	乳灰色		見込み無釉	
21-128	47-128	P 1563	S39		II	"	黄白濁色	乳白色		"	接着
"	"	P 1564	"	"	"	"	"	"		輪ドチ痕有	"

B-1-ii 瀬戸・美濃鉄釉 (P.L.22、Fig.47、Ch.85)

瀬戸・美濃鉄釉の製品としては、碗58点、皿7点、壺13点、香炉等2点の破片数が出土している。

B-1-ii-a 碗

碗はすべて天目茶碗と通称される類である。口縁形態等から二類に大別できる。

I類 口縁がくびれを有した立ち上がりを呈するもの。

I a類 胴部下半の露胎部が鉄サビ状の付着のため、赤褐色の色調を呈するもの。(135)は、推定口径12.0cm、暗黒褐色の斑状の施釉がみられる。(136)は、推定口径10.8cm、黒褐色と赤褐色の釉が所々みられる。

I b類 胴部下半の露胎部が素地をそのまま露呈するもの。(137)は、推定口径11.4cm内外面ともロクロ痕が明瞭であり、釉調は飴釉に近い黒褐色を呈する。(138)と(139)はI a類かI b類のどちらに包括されるかわからないが、(138)は黄色の強い黒褐色、(139)は光沢のある漆黒色を呈する口縁部片である。

II類 口縁がくびれを有せずやや内湾して直線的な立ち上がりを呈するもの。(134)は、推定口径12.0cm、漆黒色の釉調で二次加熱のためか内外面の一部に釉の剥離がみとめられ、凸凹状を呈している。

B-1-ii-b 皿

皿はいずれも細片で図示していないが、口縁がやや外反気味に立ち上がるものと、直線的な立ち上がりを呈するものがあり、碗よりは茶褐色に近い釉調を呈するものが多い。個体数では3個体以内の出土である。

B-1-ii-c 壺

壺は、胴部片と底部片のみが細片で出土しており、漆黒色・飴釉に近い黒褐色・黒色と褐色の斑ら状を呈する釉調がある。(141)は推定底径9.0cmを計る糸切底の底部片であり、外面に黒褐色釉、内面に緑色がかかった列点状の釉が認められ、ロクロの挽き上げ痕が明瞭である。個体数は6個体前後と思われる。

B-1-ii-d 香炉

香炉は、1点だけの出土である。(140)は、口径5cmの小振りの筒形香炉と思われ、口縁が内側に丸味を有して折り返されている。胎土は堅緻な灰色、飴釉ぎみの黒色釉が外面にみられ、内面は口縁下2.5cm前後まで黒色と褐色の斑らの釉が施されている。口唇はかなり擦りへった状態に見える。

Ch. 85 瀬戸・美濃鉄釉観察表

PL.No.	Fig.No.	遺物No.	出土区	遺構名	層	位	器形	釉	調	胎	土	文	様	特	徴	備	考
22-134	47-134	P 2026	T46	pit 内		フク土	天目碗	黒鉄釉		灰	色				2次焼成		
22-137	47-137	P 1559	S39			II	"	褐		色	"						
22-140	47-140	P 1208	T49			I	香炉	黒	褐	色	"				口縁内側に玉縁		
22-139	47-139	P 2025	S49	SE 129		フク土	天目碗	"		"	"						
22-141	47-141	P 2545	T44	SX 320		セクション内 フク土	壺	暗黄緑色 褐		淡	灰	色					
22-135	47-135	P 1326	R48	SE 126		フク土	天目碗	褐		色	乳赤	褐色					接着
"		P 1294	"	"		"	"	"		"	"						"
22-136	47-136	P 1570	T39			II	"	黒	褐	色	灰	色					
22-138	47-138	P 1031	T48			I	"	黄	褐	色	乳	白	色				

B-1-iii 瀬戸・美濃志野（長石）釉（P L.21、Fig.47、Ch.86）

瀬戸・美濃志野釉のものは細片が多く、22片の出土をみたが底部・口縁部片の観察からは7個体前後の出土数と思われる。器種はすべて皿である。

I類 口縁が端反りし、全面に長石釉を施すもの。（129）は、推定口径13cm、器高2.4cm、高台径8.0cmを計り、白色の胎土に灰白色の釉を施し、底には輪ドチ痕、破損面は漆による接合痕が認められる。

II類 口縁が内湾ぎみに立ち上がり、全面に長石釉を施すもの。細片が多く図示できず。

III類 口縁部や底部がないため器形の形態はわからないが、長石釉下に筆による鉄絵が施されるもの。（130）は細片であるが、内面に灰色をする文様が描かれている。

Ch. 86 志野観察表

PL.No.	Fig.No.	遺物No.	出土区	遺構名	層	位	器形	釉	調	胎	土	文	様	特	徴	備	考
21-129	47-129	P 1474	T39			II	皿	白濁	色	乳	白	色			口縁外反、ドチ痕有 漆で接着してある		
21-130	—	P 24	Q42			I	"	白濁	色	灰	色	内面に鉄絵					

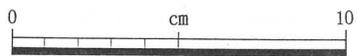
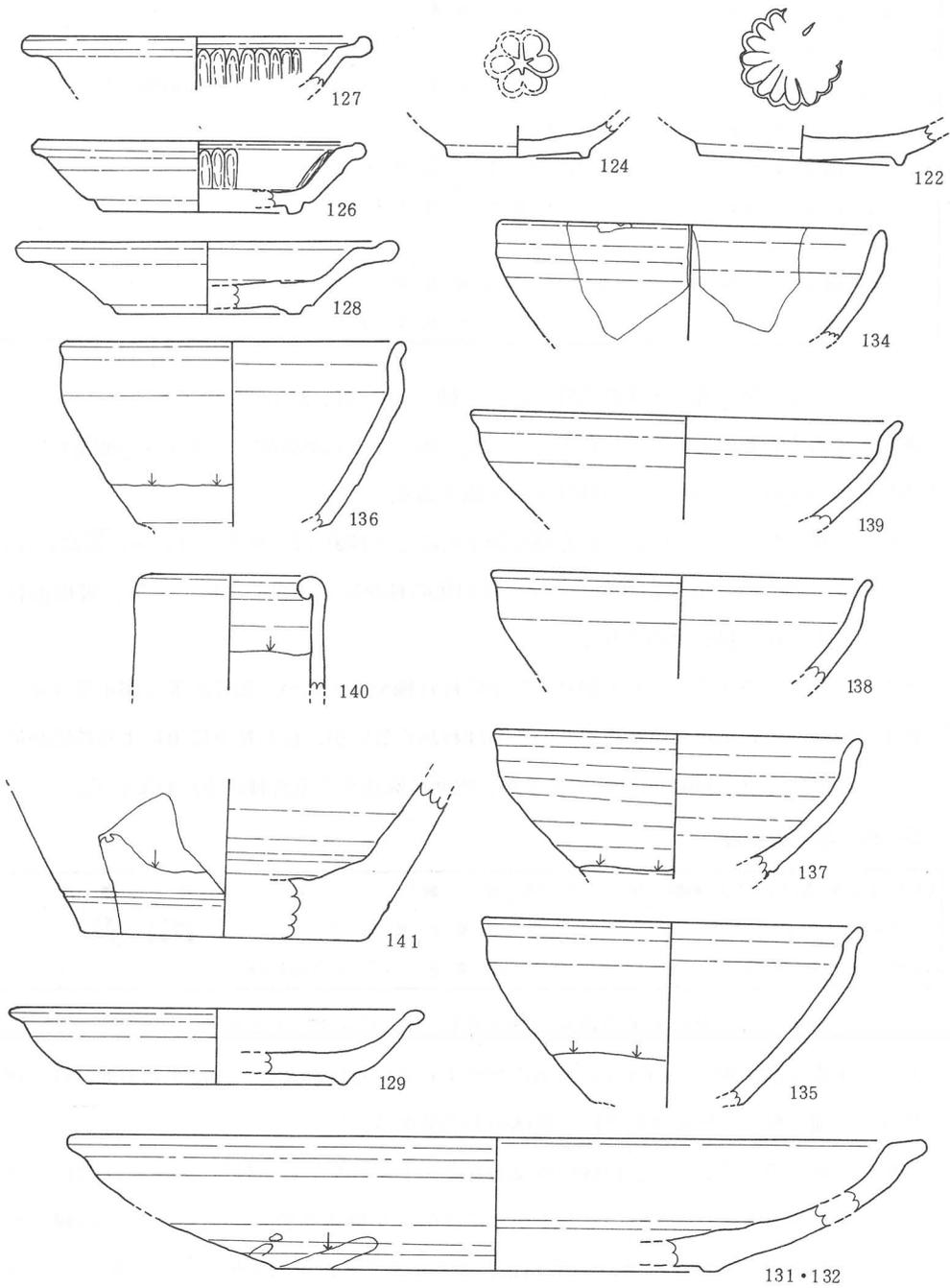
B-1-iii 瀬戸・美濃黄瀬戸釉（P L.21、Fig.47、Ch.87）

瀬戸・美濃黄瀬戸釉のものは5点の破片が出土しているけれども、後述する黄瀬戸様の破片以外は、大皿（盤）と推定される同一個体のものである。

I類 大皿（盤）の破片で、口縁は外反した立ち上がりを呈し（131）、高台は内側だけに削り込みを入れ胴部への立ち上がりには削りを施さず畳付から斜行して口縁に至る（132）ものである。胎土は乳白色、光沢をおさえた黄白色釉が全面に施され、外面胴部下半には釉のふきとり痕がみられ褐色を呈する胎土が露呈している。口径は27～28cm前後と考えられる。

II類 大皿（盤）の破片と考えられ、胎土はI類と同じ、釉調がやや光沢を有する黄緑色と

Fig.47 美濃・瀬戸灰釉・鉄釉実測図



白濁した部分がみられ、外面は胴部途中で釉が止まり内面は同位置で弧を描くようにヘラ状の工具で釉をふきとっている(133)。黄瀬戸に近い製品と考えられるが、釉調・施釉方法に疑問が残るためあえて黄瀬戸様のものでしておく。

Ch. 87 黄瀬戸手観察表

PL.No	Fig.No	遺物No	出土区	遺構名	層位	器形	釉調	胎土	文様	特徴	備考
21-131	47-131	P1618	T44		II	大皿	乳黄色	乳黄色		口縁外反	
21-132	47-132	P 39	Q42		"	"	黄白濁色	乳白色			
21-133	—	P1476	T39		"	"	"	乳黄色			接着
"	—	P1593	S39		"	"	"	"			"

B-2 唐津 (P.L.22、Fig.48、Ch.88)

唐津窯で生産されたものは、58点の破片が出土し碗2点以外はすべて皿である。施釉や口縁形態によって細分できる。

B-2-a 碗

碗は2片の出土だけであり、図示できたのは(151)だけである。(151)は底径5cmで高台の高さ1cmを計り、内面および高台外面まで若干濁りのある黄灰色釉を施し、暈付と高台内面は露胎している。高台内はケズリ痕が残っている。

B-2-b 皿

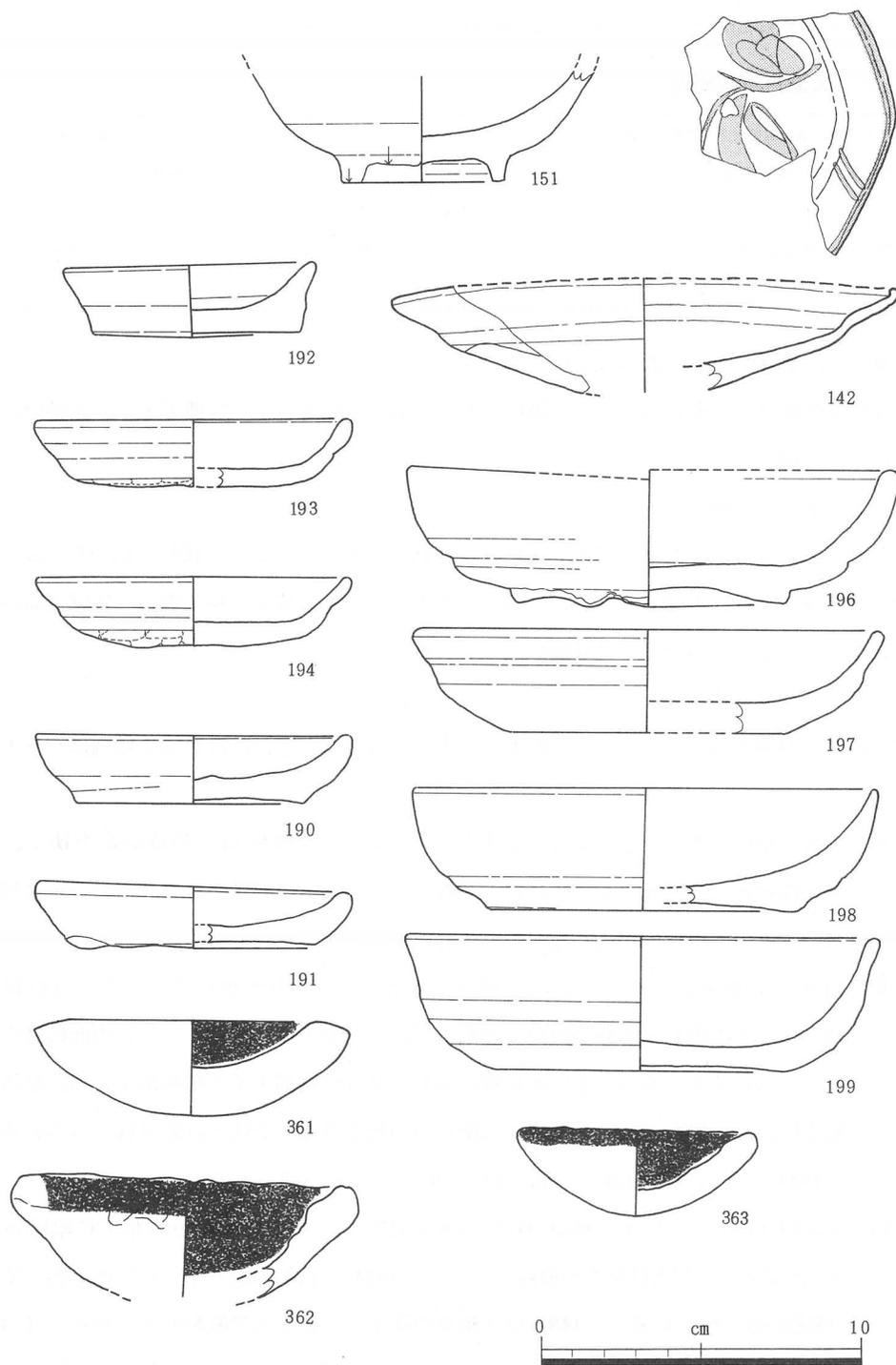
皿は高台の内側を荒く削っただけで無調整のものがほとんどで、口縁形態や釉調にバリエーションがある。

I類 口縁が指のつまみ出しによって波状を呈するもの。(143)は1単位の幅が狭く、口縁が黄褐色、内外面ともにそれ以下が青灰色を呈する白濁釉が施されている。(147)はつまみの1単位幅が広く光沢のある緑灰色の釉が施されている。

II類 口唇に鉄釉の口紅を施すもの。(142)は胴部上半で段状に折れて立ち上がり口縁を内側につまみ出して器体が四角に変形している。胎土は赤褐色を呈し、内面には鉄絵具による草花文を描いた上に灰色釉を施し、外面は胴部上半で施釉が止まる。見込に胎土目積みの痕跡が残る。(150)は暗灰色の釉下外面に葉状の鉄絵文様がみられる。(144)は灰白色の釉調で内面に文様等がみられない例である。

III類 上記以外のもので胎土・釉調の特徴のみを記する。(145)は灰色の胎土に暗灰色の釉調が認められ胎土目積みの痕跡がある。(146)は石英の混入する暗灰色の胎土で、白濁釉が施されている。(148)は赤褐色の胎土に、青灰色の施釉がみられる。(149)は灰褐色の胎土に、光沢のある深緑色の施釉がみられる。(152)は黄灰色の胎土に、透明感のある緑色釉が施され、内面に胎土目積みの痕跡がみられる。

Fig. 48 唐津・土師質土器・坩堝実測図



以上が、唐津の特徴であるが、本年度の出土品には砂目積みの痕跡を有するものはみられずすべて胎土目積みのものであった。

Ch 88. 唐津観察表

PL. No	Fig. No	遺物No	出土区	遺構名	層	位	器形	釉	調	胎	土	文	様	特	徴	備	考
22-142	48-142	P 1477	T39			II	皿	白	濁	色	明	黄	褐色	内面に鉄絵	胎土目		
22-143	—	P 2618	R48			埋	土	褐	濁	色	乳	灰	色		口縁がヒダ状に波うっている		
22-151	48-151	P 475	S45			II	碗	乳	黄	濁	灰	色	乳	黄	色		
"	"	P 2781	"	SE 81		フ	ク	土	"	"	"	"	"			接着	1984年度出土
"	"	P 1739	R41			II	"	"	"	"	"	"	"			"	"
22-146	—	P 547	T44			I	皿	白	濁	色	灰	色					
22-144	—	P 225	T39			"	"	褐	色	"	"	"			口縁に褐釉		
22-152	—	P 226	"			"	"	淡	黄	緑	色	黄	褐	色			
22-145	—	P 722	W47			II	"	褐	色	灰	色						
22-148	—	P 1833	Q42			"	"	青	白	濁	色	赤	褐	色			
22-147	—	P 575	S40			I	"	緑	黄	色	灰	色					
22-149	—	P 120	"			"	"	暗	緑	色	褐	色					
22-150	—	P 1665	T44			II	"	暗	褐	灰	色	明	褐	色	口縁と外面に鉄絵		

B-3 珠洲 (P L.24、Fig.50、Ch.89)

珠洲窯で生産されたと考えられる製品には、甕11点、播鉢31点、壺他10点の破片が出土している。ただし、珠洲と同定したものには、珠洲窯の製作技法を色濃くみせながらも明確に珠洲窯の製品であると認定できかねるいわゆる珠洲系と言われるものも包括している。珠洲系という名称を使用するにあたっては、今後各地における窯場の調査が進展した段階で慎重に対応したいと考え、浪岡城跡のような消費遺跡の場合現状では珠洲という名称で一括報告する。

B-3-a 甕

甕はすべて細片で出土しているため、図示しなかった。出土品には、「く」字状に折れる口縁部片、外面に叩き目を有する胴部片等がある。

B-3-b 播鉢 (P L.24-172~180、P L.26-201、Fig.50、Ch.89)

播鉢は、口縁形態と卸目の施法によって細分できるが、全体形を知り得る資料は1点だけ(201)である。

I類 口縁が丸味を有せず鋭角に削られた状態のもの。

I a類 口唇を外面向方に斜行させた状態で成形し、内面には20条程度の細かい櫛歯原体によって卸目が施され、施条単位は一定の間隔をあけている。(172)

I b類 口唇を平坦な状態で成形し、外面はやや外反するように立ち上がりを呈するもの(173)。残存部の内面に卸目はみられない。

II類 口唇を内傾させて、その部分に櫛歯による波状沈線を施すもの。

- II a 類 内面波状沈線施文部の直下が、指でつまみ出されたように内湾しているもの。
 (201) は推定口径38cm、高さ13.9cmを計り、底の切り離しは静止糸切りによる。内面の櫛歯原体は9条であり、間隔なく口縁下4cmの所から全体に施されているが、内面底の摩耗は激しい。口縁付近には藁灰による自然釉状の光沢が認められるけれども、他は白砂や小石を含む素地同様に暗灰色の色調を呈している。他に、本類に含まれるものとしては、(176) と (177) がある。
- II b 類 II a 類ほど顕著に内湾はしないが、櫛歯波状沈線の内面直下に段状のくびれを有するもの。内面の櫛歯原体は8～9条で間隔なく口縁下2cmの部分から施されている。(178) は、軟質で緑がかった灰色の色調を呈している。
- II c 類 内面櫛歯波状沈線の部分が幅広に成形され、その下はロクロによる成形痕はあるものの内湾した立ち上がりを有せず、直線的なつくりをするもの。(179) は、内面の櫛歯原体が9条のもので口縁下1.5～2.5cmの部分から間隔なく施されている。胎土・色調は暗灰色である。
- II d 類 櫛歯波状沈線下の内面では内湾気味の立ち上がりを有せず、斜行した立ち上がりに添って口縁幅が狭まり丸味のある口縁形を呈するもの。(175) は、内面の櫛歯原体施文にあたって口縁下2cm、4cm、5.5cmとバラつきがみられ、若干間隔のあいている部分もみられる。明灰色の胎土・色調を呈し、焼き締めは良好である。
- III 類 口縁の櫛歯波状沈線はみられず、口縁が若干外反気味の立ち上がりを呈するもの。内面の櫛歯原体は口縁下5cmの所から施されるが、櫛歯の間隔や施文技法が雑で、規画性のくずれが認められるもの。(180)
- IV 類 珠洲であるかどうか明確ではないが、口縁が丸味を有した肉厚なつくりをし、内湾して内面底にいたると思われる口縁部片。(174) 内面の櫛歯原体は8条以上でI類よりは大きく、II類よりは小形の櫛歯である。胎土は白砂・石英の混入する灰色で、器面は暗灰色の色調を呈している。

Ch. 89 播鉢観察表

PL. No.	Fig. No.	遺物No.	出土区	遺構名	層 位	胎 土	特 徴	備 考
24-181	50-181	P2317	T44	SE138	フク土	灰色	内面赤褐色、外面灰色～黒色、13条の卸目と片口有	
24-182	50-182	P 899	W47		II 下	黒 色	内面8本の卸目が波状に有	
24-183	50-183	P1064	Q50		I	〃	7条の卸目	
24-184	50-184	P2566	P47	SE 82	フク土	黒色、灰色	口縁に沈線	接着 } 1984年度出土
〃	〃	P2668	P46	SE 84	〃	〃	〃	〃 } 〃
24-185	50-185	P 476	P44		I	乳黄褐色	9条の卸目	

PL. No.	Fig. No.	遺物No.	出土区	遺構名	層位	胎土	特徴	備考
24-187	50-187	P1166	V46	SE111	フク土	暗灰色	9条の卸目、黒色処理	
24-188	50-188	P1408	T49	SX292	〃	赤褐色		
24-186	50-186	P2091	S49	SX287	〃	灰色		
24-189	50-189	P1136	R48		IV	茶褐色	11条の卸目	
24-172	50-172	P 931	R47		I	灰色		
24-175	50-175	P1977	S42		II	暗灰色	口縁に波状櫛目文	接着 1984年度出土
〃	〃	P1979	〃		〃	〃	〃	〃
24-177	50-177	P2143	O47		〃	〃	〃	〃
24-173	50-173	P1992	S44		〃	灰色		〃
24-176	50-176	P2135	R43	ST247	フク土	暗灰色	口縁に波状櫛目文	
24-178	50-178	P1358	R51	ST270	〃	灰色	〃	接着
〃	〃	P1397	R50	SE121	〃	〃	〃	〃
24-174	50-174	P1575	T39		II	暗灰色		
24-179	50-179	P2560	T44	SX318	床面直上	灰色	口縁に波状櫛目文、卸目が密である	接着
〃	〃	P2564	〃	〃	フク土	〃		〃
24-180	50-180	P2972	Q46	pit内	〃	暗灰色		
26-201	49-201	P 456	R45		II	〃	口縁に波状櫛目文	接着 1984年度出土
〃	〃	P2753	〃	SE 80	フク土	〃		〃
〃	〃	P2759	〃	〃	〃	〃		〃
〃	〃	P2761	〃	〃	〃	〃		〃
〃	〃	P2265	S43	SX320	床面直上	〃		〃
〃	〃	P2314	T44	SE138	フク土	〃		〃
〃	〃	P2553	〃	SX318	床面直上	〃		〃

B-4 越前 (PL.23・24、Fig.49・50、Ch.89・90)

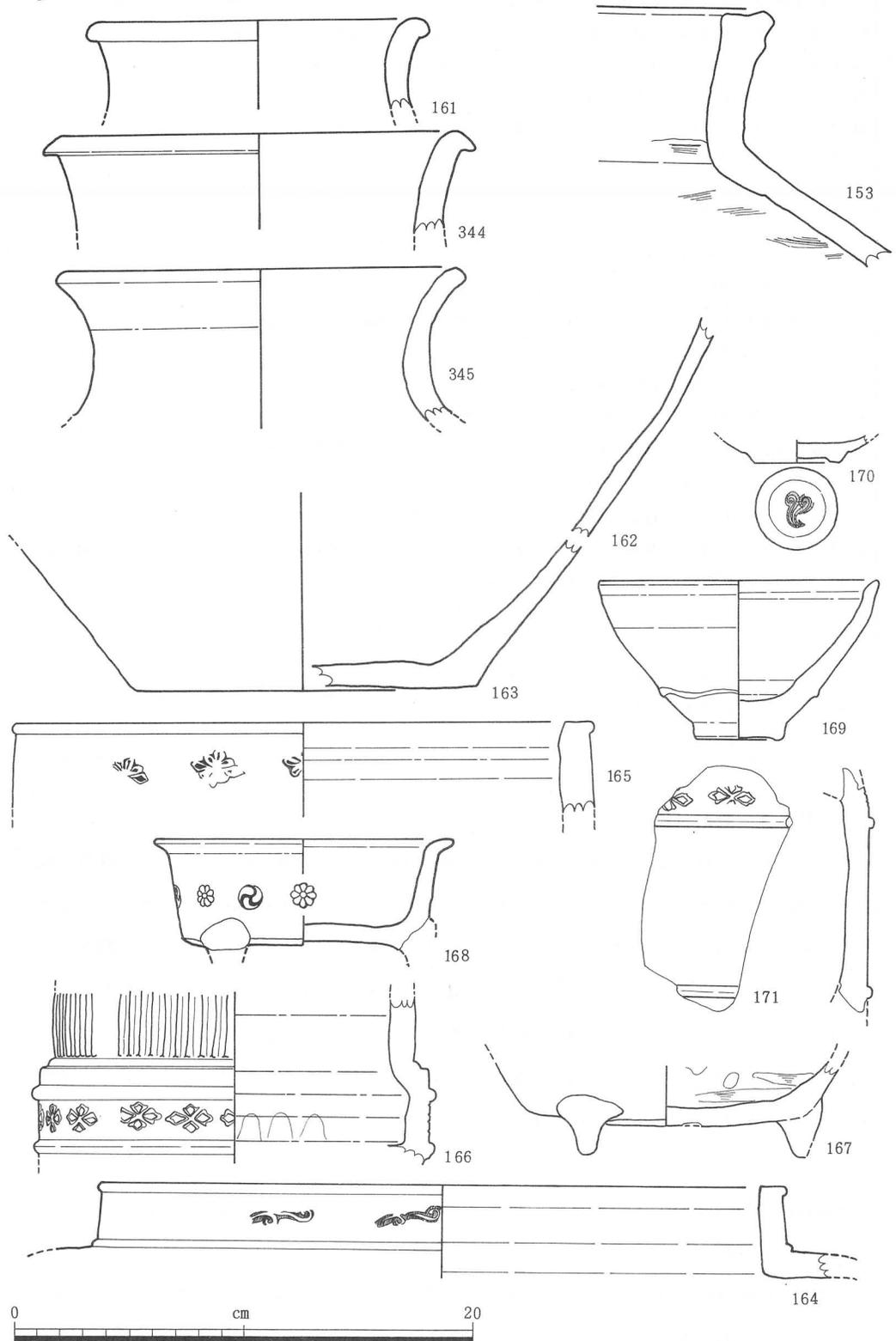
越前窯で生産されたと考えられる製品には、甕・壺と播鉢の器形があり、前者は144点、後者は14点の破片数が出土している。しかしながら、甕については口縁や底部の形態から推定すると個体数としては5～6個体と考えられ、大形品のために破片数が多くなり、破片数を単純に出土数としては置き替えられない。また、従来まで信楽ではないかとして扱っていた製品は、その確実性が乏しくなっており、越前の様相が濃いため越前系という名称で包括した。つまり、現状では越前の可能性を否定できないものの、類例が少なく今後の検討によって詳細な産地同定を行なわなければならない遺物である。

B-4-a 甕

越前甕は、口縁部の出土数から推定すると3～4個体と考えられ、口径60cm以上の大形品と40cm前後の二種類がありそうである。

I類 口径60cm以上で、口縁がほぼ直立した立ち上がりを呈し外面に口縁下2cmの所で一条の稜を有し胴部への張り出しは口縁下3.5cm前後の所から始まるもの(154)。この

Fig. 49 越前・瓦質土器実測図



類には胴部上半で「本」字と格子目を相互に配したスタンプを周回させるらしい(160)。

Ⅱ類 口径40cm前後で、外面口縁下2cmの部分で一条の稜を有し、胴部への張り出しは口縁下6cmの所から始まり肩の張ったような形態になるもの(153)。本類には地膚が鉄分によるためか赤褐色を呈し、厚めの灰釉が口縁から胴部上半に濃厚に認められる。(157・158・159)

Ⅲ類 口径40cm前後で、口縁部の内面に一条のくびれがありそれに対応して外面に一条の稜を有するもの。全体に灰釉が施され部分的に剥落している。(155・156)

B-4-b 壺

越前壺は、口径20cm以下のものを扱った。3～4個体と推定。

I類 口縁は比較的直線的に立ち上がり、外側につまみ出す形態のもの。(161・162・163)は同一個体の口縁部、胴部、底部であり、「浪岡城跡Ⅷ」(P106)では信楽の可能性があると報告したものである。(344)は外側へのつまみ出しが薄い鏝状になったもので表面に石英質の小石がふき出た状態になっている。

Ⅱ類 口縁部がゆるく外反しながら立ち上がるもので、大粒の石英と黒色砂がみられ、焼成の仕上がりがよく硬質感がある。(345)

B-4-c 播鉢

越前播鉢と考えたものは、(181)で示した片口部のみられる形態が典型である。片口部は親指を強く押圧しただけの単純な整形で、口縁内面に一条の沈線を巡らし13本の櫛歯原体による卸目を施している。焼成の仕上がりは甕等のように硬質なものは少なく、赤褐色から黄褐色の色調で軟質な出来上がりのものが多い。他の詳細については後日報告予定。

Ch.90 越前観察表

PL. No	Fig. No	遺物No	出土区	遺構名	層位	器形	胎土	特徴	備考
23-153	49-153	P 1732	R41		Ⅱ	甕	暗灰色	自然釉付着	
23-154	—	P 252	P45		〃	〃	灰色	内面茶色	接着 1984年度出土
〃	—	P 2677	〃		〃	〃	〃	〃	〃
23-161	49-161	P 538	S45		〃	壺	〃		〃
〃	〃	P 1153	T46		〃	〃	〃		〃
23-157	—	P 223	O45		〃	〃	〃	内面茶色、外面茶褐色、外面に押印有	〃
〃	—	P 2198	〃		〃	〃	〃		〃
23-155	—	P 2227	Q47		〃	〃	〃	内外面緑色と褐色の自然釉	〃
23-156	—	P 827	〃		I	〃	〃	〃	〃
23-162	49-162	P 3944	S45		Ⅱ	〃	褐灰色		接着 〃
〃	〃	P 956	V46	SX273	フク土	〃	〃		〃

PL. No	Fig. No	遺物No	出土区	遺構名	層	位	器形	胎土	特 徴	備 考
"	"	P2067	T44		II	下	"	"		"
"	"	P2565	"	SX318	フク土	"	"	"		"
23-159	—	P2163	S42	ST245	P i t内 フク土	"	灰 色	内面褐色、外面淡黄緑色の自然釉、外面付着物有		
23-158	—	P2124	"	"	フク土	"	灰 白色	内面褐色、外面暗緑色の自然釉	接着	"
"	—	P2162	"	"	"	"	"	"	"	"
23-160		P2167	O45		II	"	灰 色	内外面褐色、外面に「本」のスタンプ有		
"	—	P2914	O46	SE 86	フク土	"	"	"		
"		P3046	O45		IV	上	"	"		
23-163	49-163	P 484	S45		I	"	"		接着	1984年度出土
"	"	P2552	T44	SX318	床面直上	"	"		"	"
—	49-344	P 855	Q47		IV	上	甕	"	"	"
—	"	P1174	T49		I	"	"		"	"
—	49-345	P 559	T44		II	"	"			

B-5 産地不詳の擂鉢群 (PL.24、Fig.50、Ch.89)

すでに産地不詳の擂鉢については、「浪岡城跡Ⅶ」(P53・54)において北館出土品については分類しているが、いずれも全体形を知り得る資料でないため分類基準の甘さを指摘できる。内館においても、産地不詳の擂鉢は擂鉢全体の8割にも達し総量は多い。しかしながら北館と同様に全形を知り得る資料はなく、口縁部形態・焼成・成形上の特徴を述べ、後日に再検討する予定である。

(182)は、口縁を平坦に成形し、内面には8条の櫛歯原体によって口縁端から下半に斜行した施方をおこなっている。色調は暗灰色から黄灰色の斑状を呈し素地は黒灰色で砂質気味の軟質状況に焼き上っている。

(183)は、口縁内面をやや斜行して削り出し、外面胴部上端まで横位の調整痕が残り以下は無調整の状態である。色調は黒色、素地は(182)と同様に砂質ぎみの黒灰色を呈し、内面の櫛歯原体は先丸の7条原体で浅く入れている。

(184)は、口縁が鋸状に張り出す独特の口縁形態を呈し、口縁内面に同心円状の沈線を8条巡らしている。色調は黒色の表面下に灰色の薄い膜層のような部分があるため、地膚の剥落している部分は白灰色、他は黒灰色を呈する。胎土には多量の石英砂と白砂が混入している。

(185)は、口縁端を丸味のある成形とし横位の指ナデ痕が多用されている。櫛歯原体は先が鋭く尖った9条のもので比較的深めに入れている。色調は黒色気味だが、胎土は黄褐色の部分が多く白砂と石英砂が混入している。

(186)は、口縁をやや平坦に削り、内面に横位の波状櫛歯文を入れて縦位の卸目を施している。色調は黒灰色であるのに対し、胎土は白灰色で白砂・石英砂が混入している。

(187) は、口縁を角状に成形し、内外面ともに横位の指ナデ痕を明瞭に残している。色調は漆黒色であるが胎土は黒灰色で白砂・石英砂を混入している。

(188) は、口縁が内湾気味の立ち上がりを呈し、口縁外側でつまみ出し状の段を一条巡らしている。色調は暗灰色で、胎土は赤褐色で大粒の白砂が混入している。櫛歯原体は先丸の浅い卸目が4条だけ確認でき、備前的な製作技法と考えられる。

(189) は底部に糸切りにより切り離し痕と持ち上げた時の指頭痕が認められる。外面は横位の指ナデ痕が残り、内面の櫛歯は11条でV字状の先端と推定される。焼成は良質で、色調・胎土ともに赤灰色で硬質感のあふれる出来上がりである。

B-6 瓦器 (P L.23、Fig.49、Ch.91)

浪岡城跡で「瓦器」と称している土器は、使用機能が火鉢・香炉等と理解される一群の土器および壺形・碗形・他の器種を有している無釉の土器（素焼きの土器）を言っている。本年度の出土破片数102点のうち95点は火鉢・風炉の類、7点は香炉・碗の類であり、火鉢の破片が最も多い。

B-6-a 火鉢

火舎・火炉・火鉢・手焙り等と言われるもので形状から二種類に大別でき、さらにプロポーションによって細分できる。

I類 器形を上から見た場合円形を呈するもの。

I a類 口縁部が直立して立ち上がり、胴部は強く湾曲した張り出しを呈して底部に至るもの。脚を有するものもある。(165)は口縁部外面に八菱状のスタンプ文、(164)は両巴状のスタンプ文を有している。

I b類 口縁部の詳細はわからないが、胴部張り出しの下端に口縁部と同じ位の径を有する円筒部を有すると推定される器形。(166)は上方に算木状帯を巡らし、その下方に隆帯で区画された中に四菱状のスタンプ文を施している。

I c類 一般に風炉といわれる器形で、中空となった三足と窓を有する胴部が認められるもの。図示はできなかったが、一乗谷朝倉氏遺跡46次調査出土風炉（「一乗谷朝倉氏遺跡XV」）に近似した破片が出土している。

II類 器形を上から見た場合方形を呈するもの。

出土例は少ないが、(171)のように四菱状のスタンプ文が押圧されている例がある。なお器形上の特徴としては、口縁が内側に突き出しを有し、底面四隅に脚を取りつける事が多いようである。

B-6-b 香炉

香炉あるいは小鉢と推定される器形で、口径17cm以下の円筒形を呈するものである。

(167)は底径12.5cmを測り、三脚を有すると思われる底部片で、外面は黒色処理され光沢を有している。内面には指ナデ痕、外面には篋ナデ痕が認められる。

(168)は、口径13cm、高さ(脚部を除く)4.6cmを測り、三脚を有すると推定される。口縁部は外反して、胴部外面の中位に三巴文と八弁の輪花文を交互に押圧している。口縁部と外面胴部だけはミガキをかけているが、他は無調整である。同形の香炉で三巴文だけを推圧した破片が一点みられた。

B-6-C 碗

碗形は浪岡城跡で初現のものである。器形としては天目茶碗をそのまま真似たもので、(169)は、器高7.0cm、推定口径12.3cmを測り、釉止の部分は粘土紐を貼って隆帯状に表現している。内外面ともに丁寧にミガキをかけているが、部分によって暗灰色から明黄色まで色調のバラつきが認められる。(170)も碗形の底部と思われるが、あるいは火鉢等の胴部装飾部分かもしれない。高台状の円形内に二巴文のスタンプ文が施されている。堅緻な焼成状態を呈する。

Ch.91 瓦器観察表

PL.No	Fig.No	遺物No	出土区	遺構名	層位	器形	胎土	文様	特徴	備考
23-164	49-164	P 2541	R 42	SX330	フク土	手焙り	灰色	外面に雲流文	黒色研磨	
23-165	49-165	P 1789	Q 42		II	"	明黄褐色	外面に八菱形のスタンプ文		
23-167	49-167	P 2050	U 49	SB 68	フク土	香炉	灰色		黒色研磨、脚付	
23-169	49-169	P 2332	R 42	ST280	"	碗	乳灰色		高台有、黒色研磨	接着
"	"	P 2503	"	ST279	"	"	灰色		口縁やや内湾	"
"	"	P 2504	"	"	"	"	"			"
23-166	49-166	P 1855	"		II	手焙り	"	2条の隆帯の間に四菱花文	胴部算木状	
23-168	49-168	P 2328	Q 42	ST277	フク土	香炉	赤褐色	巴文と花のスタンプが交互にある	口縁外反	接着
"	"	P 2329	"	"	"	"	"	脚付		"
"	"	P 2535	"	"	床面直上	"	"			"
23-170	49-170	P 97	S 41		I	不明	暗灰色	スタンプ文有		
23-171	49-171	P 1281	V 46	SE111	フク土	手焙り	乳褐色	隆帯の下にスタンプ文有		

C. 地元で生産されたと考えられるもの

C-1 土師質土器(かわらけ) (PL.25、Fig.48、Ch.92)

浪岡城跡の調査で出土する土師質土器には、城館期の段階で使用したと思われる(現在のところ、明確に陶磁器と共伴する例や遺構への一括埋設・廃棄がなく、古代に使用された土師器・須恵器も地業等によって中世の遺構に混入することはなほだしいことから、あえてと思われるという言葉を使用する。)中世かわらけと、いわゆる古代の土師器があり、地業や遺構重複の攪乱によって混在した出土状態を呈するのが通例である。しかし、内館の調査によって出土する中世かわらけは、残存状況も比較的良好であり、古代の土師器成形とは一線を画す成形技法が

みられることから、数類に分けて報告する。なお、土師質土器（かわらけ）は39点の破片数が出土している。いずれも皿形の器形である。

I類 手づくねによる成形で、口径10cm前後、器高2cm前後の皿。外面胴部立ち上がりからは横ナデ、以下は指頭等による整形。内面は指ナデによって横方向に充分調整されている。(194)は、ススや油煙痕がみられることから灯明皿として使用したようで、(193)にはそれらの痕跡はない。

II類 回転糸切底を有することから、ロクロ成形と考えられるもので、口径8～10cm前後、器高2cm前後の皿。

II a類 ロクロ成形の後に、外面胴部および内面を指ナデによって調整をおこなうもの。
(190) (191)

II b類 外面底部立ち上がりの外反が少ないため、内厚な底部であり、ロクロ成形痕内内外面ともに明確にみられるもの。(192)

III類 回転糸切底を有し、口径15cm前後、器高3～4cm前後の大振り皿。

III a類 底の切り離し後に、底部立ち上がり部分を指頭などによって丸く調整するもの。内外面ともに横位の指ナデを施し、口縁部外側を外反気味に整形している。(197)は明黄褐色の色調に対し、(199)は暗灰色の色調で焼成も甘い。

III b類 底の切り離し後は無調整で、外面にロクロの挽き上げ痕を有するもの(198)や、胴部中頃で段を有するもの(196)がある。しかし、内面は横位の指ナデによって器面が平滑な状況を呈している。

以上の土師質土器は、いずれも微細な石英を混入する胎土を有し、比較的精選された良質の粘土を使用して焼成している。そのため、胎土観察だけからすれば同一箇所焼成されたと考

Ch. 92 土師質土器（かわらけ）観察表

PL. No.	Fig. No.	遺物No.	出土区	遺構名	層位	胎土	特徴	備考
25-190	48-190	P1717	U48	SE128	フク土	明黄褐色	糸切り底	
25-193	48-193	P1892	T43		II	〃	手づくね	
25-196	48-196	P1711	U48	SE128	フク土	〃	静止糸切り底	
25-198	48-198	P2374	T44	SE138	セクション内フク土	明黄赤褐色	糸切り底	
25-191	48-191	P2529	R42	SX330	Pit内フク土	乳黄色	〃	
25-194	48-194	P1913	U44		IV上	明黄褐色	手づくね	
25-192	48-192	P1258	T48		IV	〃	ロクロ使用痕、回転糸切り底	
25-197	48-197	P1712	U48	SE128	フク土	〃	糸切り底	接着
〃	〃	P1713	〃	〃	〃	〃		〃
〃	〃	P1714	〃	〃	〃	〃		〃
〃	〃	P1715	〃	〃	〃	〃		〃
25-199	48-199	P2380A	S44	SX328	セクション内フク土	灰色	回転糸切り底	

えられるが、成形上の相違や形状の相違が年代的なものであるのか地域的なものであるのか現在の段階では明確にしがたい。今後検討すべき課題の一つである。

C-2 埴塼 (Fig.48、Ch.93)

埴塼は、銅等を溶融する時の器で、底が丸い小型碗形の形状を有する。口径は、7.5cm (363) 10cm (361)、11cm (362) と10cm前後のものが最も多く、内面 (361) 及び内面と口縁付近まで溶融物が付着しているもの (362・363) がある。本年度の出土破片数は19点と北館との単位面積あたりの出土率と比較して少なく、他に埴塼本体はないが溶融物の残片が28点出土している。

C-3 羽口 (Ch.94)

小破片のため図示しなかったが18点の出土をみた。形態的には「浪岡城跡Ⅷ」P107で記述のものとはほぼ同じである。

Ch.93 埴塼観察表

PL. No.	Fig. No.	遺物No.	出土区	遺構名	層 位	胎 土	特 徴	備 考
—	48-362	P2307	T44	SE138	フク土	灰 色	溶解物付着	
—	48-363	P1548	S39		Ⅱ	〃	銅、赤銅付着	
—	48-361	P1419	R48	SE124	フク土	暗灰色	溶解物付着	

Ch.94 羽口観察表

PL. No.	Fig. No.	遺物No.	出土区	遺構名	層 位	胎 土	特 徴	備 考
—	—	P1381	R50	SE119	フク土	赤褐色		
—	—	P1955	Q41		Ⅳ 上	暗灰色	溶解物付着	

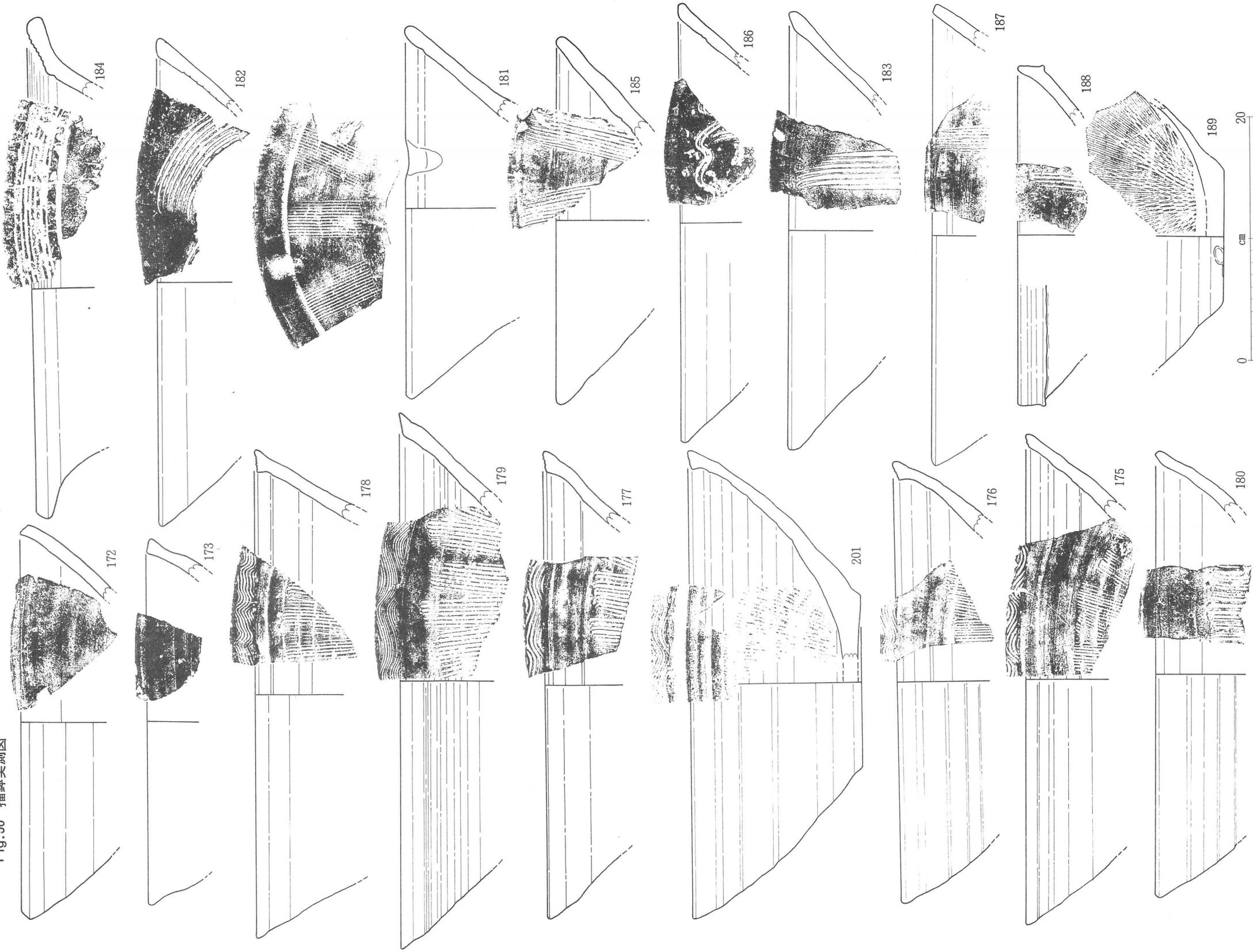
2. 鉄製品

鉄製品の出土数は、約1,085点であるが、若干地業の攪乱等によって年代の新しい製品が含まれている可能性があるため、城館期と推定されるもののみを取り上げる。その結果の出土品名と数は以下の通りである。

Ch.95 鉄製品集計表

名 称	数 量	名 称	数 量	名 称	数 量
角 釘	639	鉄	3	皿	1
鉄 鍋 破 片	52 (内耳3)	刀 (小刀含)	11	環状鉄製品	1
鍋 弦	1	針	3	棒状鉄製品	26
小 札	46	毛 抜 鉄	2	多孔鉄製品	2
鉄 鏃	44	鎌	2	長梯形鉄製品	1
火 箸	16	火 打 金	1	鉄 滓	62
か す が い	5	ナ タ 刀	1	不明鉄製品	117
鍔	6	碗	1	計	1,047
苧 引 金	3	燭 台	1		

Fig.50 插鉢実測図



出土鉄製品を概観すると、総出土量の61%が釘の類であり建築物の構築にあたって釘の使用頻度が高かったことが理解され、武器の中では各種形態の鉄鏃が4.2%と注目される。また、煮沸容器としての鉄鍋には吊耳および内耳の両形態が併用され、火箸の出土とともに、調理を考える上で貴重である。道具・工具の類では、苧引金、鋏、鎌、火打金など例年同様の出土量があるのに対し、燭台と推定される製品は浪岡城跡で初現である。また鉄滓が6%近くの出土率を示すことは、内館内においても工房跡の存在を推測せしめるものだけに今後は遺構との関連から追求する必要があると見られる。以下、項目別に詳述する。

2-a 武具

武具として主要なものは、刀、小札、鉄鏃である。しかし、刀の中には腰刀・小柄小刀・他のいわゆる小物だけであり、一般的な太刀や刀剣はみあたらない。また、当時は武士階級ではなくても通常腰や背中に小刀を身に付けていた事例があることから、武具の範囲に入れるべきか躊躇する点がある。今回は、利器という視点からあえて武具の項目に入れる。

2-a-1 刀 (P L.29、Fig.53)

出土品の中で全形を知り得るものは図示できた(352)と(257)だけである。(352)は全長23cm、刃部14cm、茎長9cmの平造りの小刀である。(257)は全長21.6cm、刃部7.7cm、茎部は木部が残っているため明確でないが14cm以上あると推定される。刃部が短かく茎部が2倍近く長いことから工具的使用の可能性が高い。

他の小刀片についてみると、刃先が鋭く尖り刃部にやや反りを有する長さ15cm前後の製品があり、茎に皮紐状のものを巻き付けた後に木柄を取り付けた例がみられる。他は(352)と同形態のものが大部分である。

2-a-2 小札 (P L.27、Fig.52)

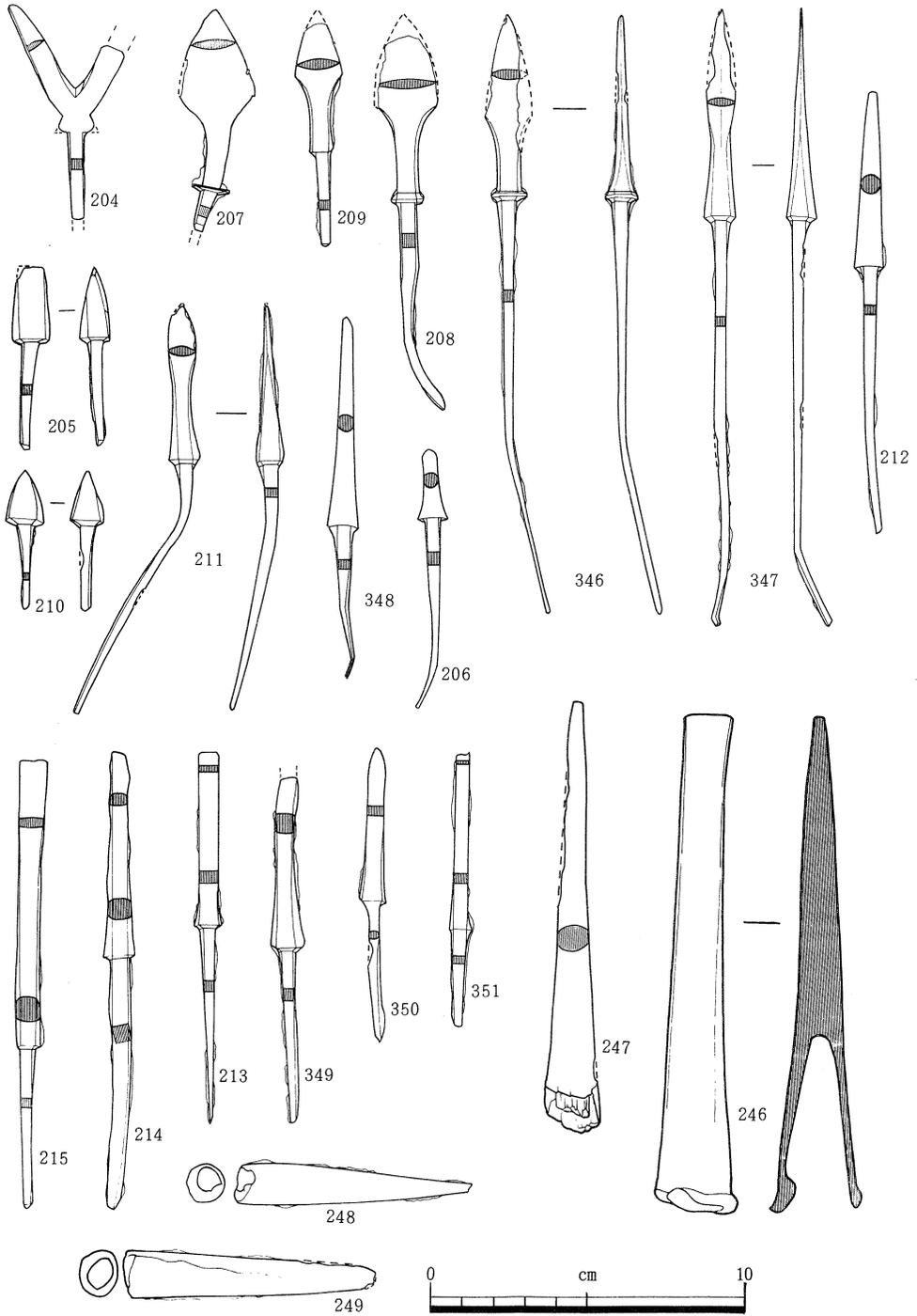
小札の形態は大別して、三目札、伊予札、碁笥頭札の三種類がある。出土数は、三目札4点、伊予札9点、碁笥頭札12点、不明21点である。

三目札は、長さ7.2cmのもの(216)と長さ5.7cmのもの(217)があり、幅はそれぞれ2.6cm前後である。破損品の中には(217)とほぼ同位置に孔がみられるものもあり、また幅3.1cmの広いものもみられる。竪穴建物跡や井戸跡の覆土から出土している。

伊予札は、長さ7.2cm幅2.0cm前後のもの(222~225)が多く、鍍金の激しいものを除けば上端部左側に意図的くぼみの認められるものがある。孔の明確な1点(222)をみると、右列7孔、左列6孔で上3個の孔が大きく穿たれている。他に、長さ6.6cm幅1.7cmの小形のもの(226)と、上辺の角度が緩い例(219)が存在する。

碁笥頭札は、長さ6.3~6.5cm幅2.0~2.3cm前後の例が多く(218・221・227・228)、長さ7.1cm幅2.7cmのやや大きめのものの二種類がある。孔は、ほとんどすべてが7孔2列

Fig. 51 鉄製品実測図(1)



のものであり、上3段までの孔が大きく穿たれている。

以上の小札の中には漆の塗付痕が認められる例がある。(216・218・223)

2-a-3 鍬 (P L. 27, Fig. 51)

鉄鍬は根と茎の形状からIV類に分類できる。

I類 いわゆる雁股といわれる先端が二方向に開いた鍬。茎は角形を呈する。(204)

II類 いわゆる平根といわれる根が剣先状を呈するもの。

II a類 根の幅が筥被部の幅より広く、比較的茎が短いもの。(207・208・209)

II b類 根の幅が筥被と同程度の幅若干広いぐらいで、茎の長さが根先から筥被までの約3倍の長さを有するもの。(211・346・347)

III類 根が丸の断面形を呈しているもの。

III a類 根の長さが約2cmであるのに対し茎がその3倍の6cm強の長さを有するもの。(206)

III b類 根の長さが5cm以上あり、茎の長さが5~8cm前後のもの。(348・212)

IV類 根が鑿状の形状を呈するもの。

IV a類 根の長さが2.5cm以内で肉厚な三角断面を呈するもの。(205・210)

IV b類 根の長さが最短でも5cm以上ある長頸のもの。(213・214・215・349・350・351)

2-a-4 その他

現在の所、武具なのか狩猟具・漁具なのか明確でない、通称「打根」と呼ばれる鉄製品がある。円錐状に先を尖らせ内側は中空となっていることから、中に木製の柄などをさしこみ、槍や鉞的な用途として使用したのであろうか。

(246)は、長さ16cmで先端が鑿先状を呈して、よく鍛えられた地金を使用している。

(247)は、長さ14cmで基部に木部が残存している。

(248)は、長さ7.5cm、(249)は長さ8cmの比較的短めのものである。

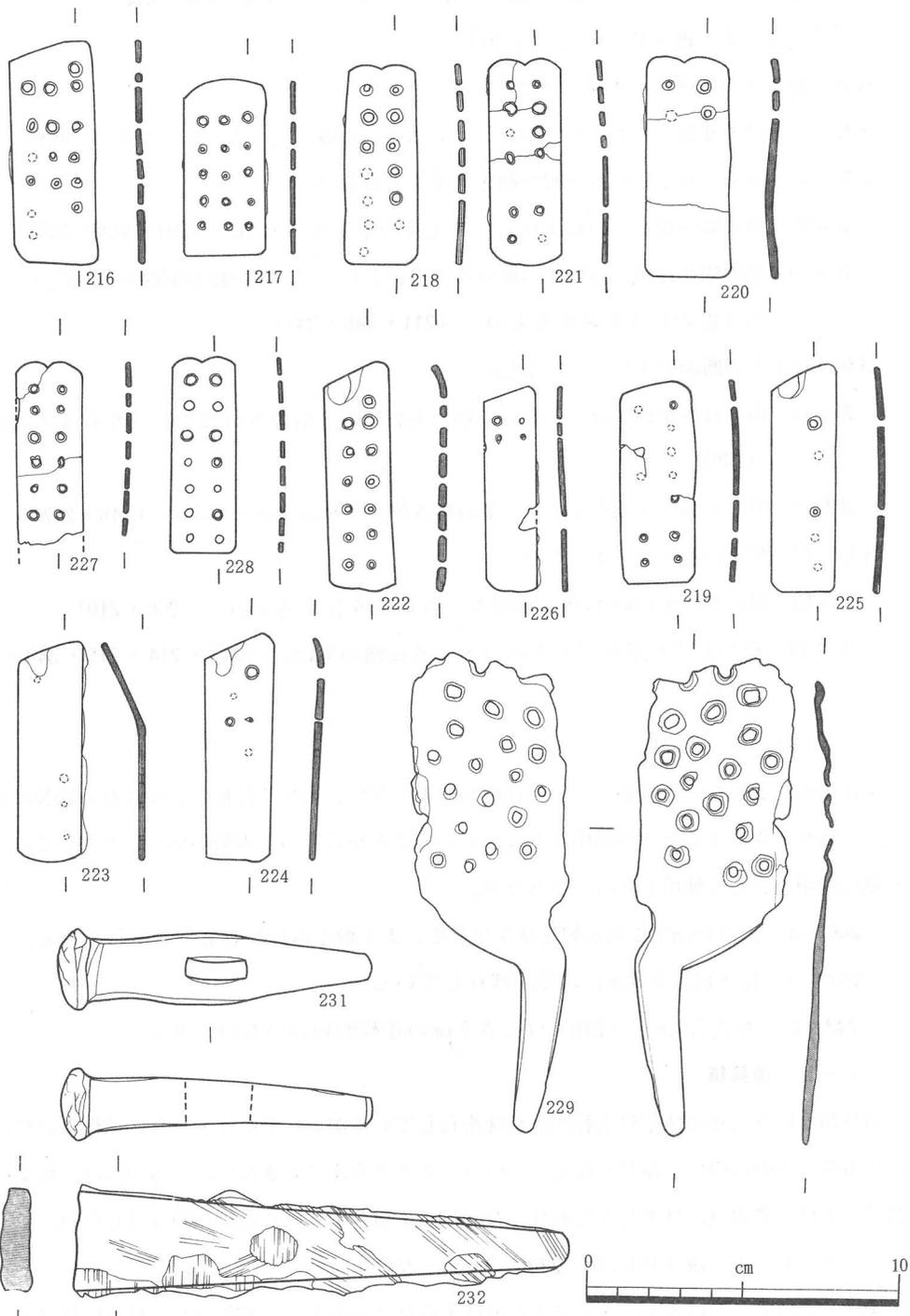
2-b 道具類

道具類という言葉の使用は広範囲な意味を有しているが、「物を作ったり、造作したり、または事をなすのに用いる器具の総称」ということでとらえておきたい。具体的には、建築具、農具、工具、煮沸具、灯火具等であり、今回は出土量も少ないことから細分はしない。

2-b-1 鎌 (P L. 28—230, Fig. 53—230)

鎌は2点出土しているが、図示できたのは1点だけである。(230)は、刃部長17.3cm、刃部幅5.0cm、柄幅は基部で2.0cm、先端残存部で1.1cmである。刃部にソリはみられず直線的で、最も使用度の高い柄基部に近い部分が磨耗している状況がよくわかる。柄部と刃部の角度

Fig. 52 鉄製品実測図(2)



は120°。

2-b-2 鉞刀 (P L.29-258、Fig.53-258)

刃部長22.2cm、刃部幅3.7cmと刃部が幅広に造作された刀であるため、鉞刀という名称を付し武具としてよりも工具の使用目的が濃いと考えられる。茎には木質柄が残存しており、基部の所は幅1.0cm、高さ0.4cmほど盛り上げて成形されている。基部から4.5cm前後の所に目釘穴らしい痕跡も認められるが腐植が激しく明確でない。茎の長さは約9cm前後とみられ、刃部の振りおろしを意図して製作されたらしい。重量190g。

2-b-3 苧引金 (P L.28-233・234、Fig.53-233・234)

苧の繊維を取る時の道具として木製柄にはめ込んで使用する。(233)は両側の突起部分に木質が残存している例で、刃部長約7.0cm、取り付け部までの幅2.0cm、厚さ0.24cmである。

(234)は刃部長約8cm、取り付け部までの幅1.8cm、両端に長さ1.5cm前後の突起が認められる。井戸や堅穴の覆土から出土しており、廃棄されたものらしい。

2-b-4 火打金 (P L.28-235、Fig.53-235)

1点のみの出土である。三角形で山形を呈する火打金で、山の頂部に紐穴を一孔穿ち、両端のかえしは一方だけにしかみられない。高さ4cm、幅8.6cm、厚さ0.4cmを測る。

2-b-5 鋏 (P L.29-250・251、Fig.53-250・251・353)

いわゆる和鋏と言われる鋏で、3点出土している。(250)は推定長約14cm、刃部長5.3cmの大きさで、握りの部分が長いのに対し、(251)は長さ12.3cm、刃部長5.3cmで握りの部分を短かく製作してある。他に、長さ4.6cmの刃部を有する破片(353)がみられる。鋏の出土も井戸跡や堅穴の覆土から出土しており廃棄されたものと考えられる。

2-b-6 燭台 (P L.29-252、Fig. 53-252)

残存長11.6cm、上部受皿まで3.2cmの差し込み棒があり、受皿は径4.0cm前後で12弁の輪花状を呈している。受皿の断面形は約2cmの平坦部から花弁が外反するような状態で辺縁部に至る。受皿以下の棒は断面が角形を呈し、長さ約7cmまで残っているが据え置き燭台か手持ち式の燭台かは判然としない。

2-b-7 毛抜鋏 (P L.28-243、Fig.53-243)

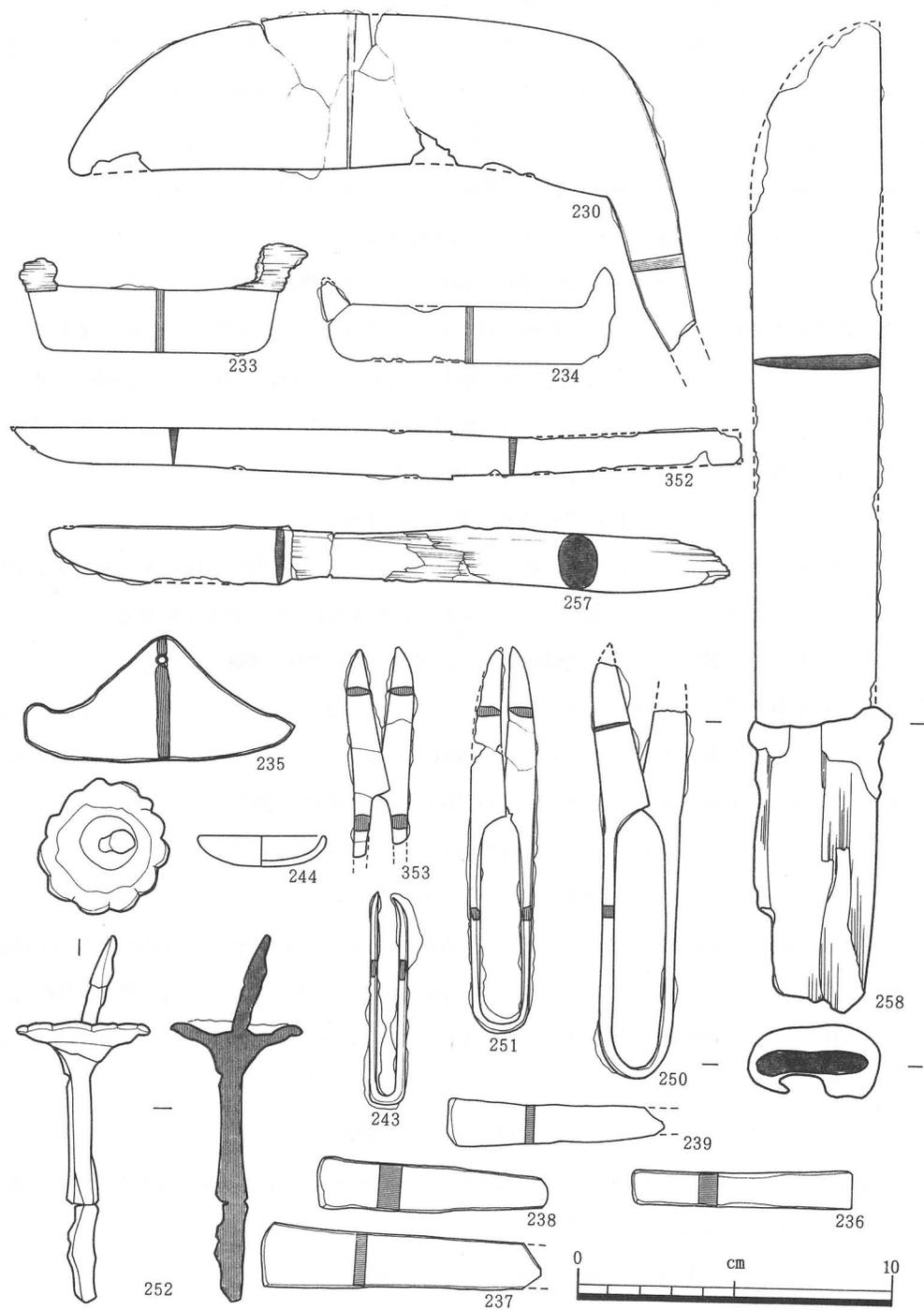
2点の出土であるが、図示したのは(243)だけである。長さ7.0cm、握り幅1.2cmの製品で、先端部は幅広に成形されている。

2-b-8 鉄皿 (P L.28-244、Fig.53-244)

径4.0cm、高さ0.85cmの小皿である。厚さは0.14cmで均一な印象を受けるが、錆化が激しいため、孔等の存在については明確でない。

2-b-9 鉄碗 (P L.28-245、Fig.54-245)

Fig. 53 鉄製品実測図(3)



推定径7.2cm、高さ2.9cmの小形丸碗である。口縁部がやや肉厚になった状態で緩いカーブを描きながら丸底にいたる。内面等に特に付着物などは認められない。

2-b-10 釘 (P.L.29-253~256、Fig.54-253~256)

釘は総数639本が出土している。うち完形品82本について長さをみると、1寸(～3.03cm)2本、2寸(～6.06cm)46本、3寸(～9.09cm)30本、4寸(～12.12cm)4本となり、破損品を含めても、2寸ないし3寸の釘の使用頻度が高かったことを指摘できる。頭部が、銀杏葉状に残る打ち込み前の製品はほとんどみられず、(253~256)のように頭部がL字状に叩かれた状態のものが大部分である。出土状態をみても、特に一定の場所に偏在する傾向はなく、各種の建物にくまなく使用していたと考えられる。

2-b-11 鋸(かすがい) (P.L.28-240~242、Fig.54-240~242、355・356)

5本の出土があった。叩き面の長さが4~4.5cmのものだけであり、その幅は0.7cm前後、厚さ0.3cm前後で、打ち込みの後のためか両端が外側に開いたり内湾しているものがある。

2-b-12 楔(くさび) (P.L.28-236~239、Fig.53-236~239)

楔状鉄製品と言うのが適切かもしれない。断面形がV字状を呈する鉄片であり、頭部幅が2cm(237)、1.5cm(238・239)、1.0cm(236)の大小がみられる。頭部は一様に叩かれた状態を示して偏平な状態になっており、その厚さの違いによっても使用器具・箇所の違いがあったものと推定される。

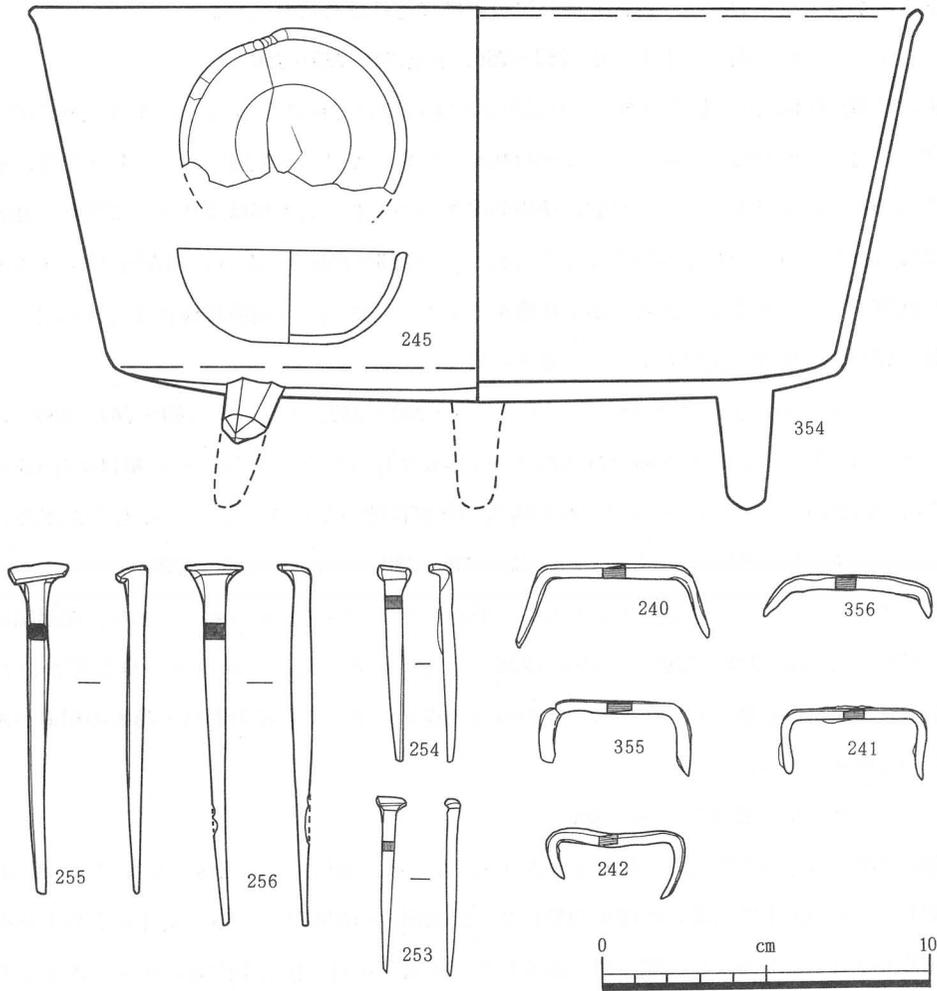
2-b-13 鍋 (Fig.54-354)

鍋には吊耳のものと内耳の二種類が存在する。しかし、図示した(354)を除けば、いずれも細片としての出土であるため図を割愛した。口縁部片の観察では、直行気味に立ち上がる類と胴部との境で一度内反りに開く類があるため、前者を吊耳、後者を内耳に比定できそうである。(354)はS E 118覆土から出土したものであり、高さ12cm、推定口径27.5cm、推定底径22cm、三脚を有すると考えられその脚の長さは3.5cmである。口縁部の吊耳部や湯口部分は錆化が激しく不明瞭であるため図示できなかった。

2-b-14 金槌? (P.L.28-231、Fig.52-231)

ゲンノウ・カナヅチ等の大工道具は、職人の手足と同様なものだけに出土例は少ない。(231)はS 39区第Ⅱ層から出土したもので城館期という確証は明確でないが図示しておく。長さ9.96cm、幅2.2cm、厚さ1.6cmで、叩面は湾曲して最大幅2.6cm×2.4cmの突き出し状を呈する。反対方向は一辺1.0cm前後の方形断面状にすぼまる。柄の取り付け孔は長辺1.8cm、短辺0.7cmであり、上端の方がやや広がって、楔等を打ち込みやすくなっている。重量は150gでよく鍛えられた鉄を使用していると観察される。

Fig. 54 鉄製品実測図(4)



2-b-15 多孔鉄製品 (P L. 28-229、Fig. 52-229)

一種のオロンガネ的な使用目的を有するものではないかと考えられる。(229)は幅5.0cm、長さ10cm以上と推定される平坦部と柄と思われる長さ5.5cmの茎部から成り、平坦部に一方から穿つ状態で現存19個の孔が認められる。穿孔は表裏で状況が違い、一方は穿った孔縁が盛り上がったままの状況であるため、卸金のような印象を受ける。孔は一見無作為な感じで穿っているようにも見えるが、横斜位に1列3個~4個を穿っている。類似の製品は大鰐町唐牛城(1)で出土している。

2-c その他の鉄製品等

2-c-1 棒状鉄製品

断面円形と方形の二種類が存在し、火箸等の断片と推定されるものが多い。

2-c-2 長梯形鉄製品 (P.L.28-232、Fig52-232)

いままでは、鋼状鉄製品の名称を符していたものであるが、近年各地の遺跡から出土する事例が多くなり、一考を要する遺物となった。(232)は、S T 277の床面直上から出土したもので、長さ15.7cm、最大幅3.6cm、最小幅1.1cm、厚さ0.8cmの長梯形を呈する。いずれの部分にも破損痕がみられないことからこの形状で一個の完成品とみなしえる。表面に木質の痕跡が残っているものの、その方向に一定性がなく柄等を取り付けたとは考えられない。現在の所、使用目的・使用方法については不明確であるが、出土例が東北北半を中心とした地域であることには注目しなければならないだろう。

2-c-3 鉄滓

鉄滓については詳細な識者の鑑定がなされていないので、多くを語ることはできないが、10cm前後の大形のスラグと5cm前後の小形のスラグに2分できる。前者には土砂等の付着が多くみられ、形状も土饅頭形あるいは楕形を呈していることから小鍛冶鉄滓と考えることができよう。

2-c-4 不明鉄製品

不明鉄製品としたものは、すべて破損品であることからその使用目的が不明な一群をさしている。形態的にみた場合、板状になったもの、輪状を呈するもの、棒状を呈するものなどが認められ、一部には孔を穿っているものも存在する。紙数の関係で図等は割愛する。

Ch.96 鉄製品観察表

PL.No	Fig.No	遺物No.	名 称	出土区	遺構名	層 位	計測値(長さ×幅×厚さ)cm	備 考
29-257	53-257	F 155	小 刀	W47	SE114	フ ク 土	刃部分 (21.59) × 1.74 × 0.24 柄部分 1.64 × 1.20	木製の柄付き
29-258	53-258	F 284	鉞 刀	S49		灰 層 内	刃部分 32.0 × 3.74 × 0.48 柄部分 4.18 × 2.10	〃
27-204	51-204	F 1040	鉄 鎌	S44	SX315	フ ク 土	根部分 (7.08) × 0.80 × 0.29 柄部分 0.54 × 0.43	雁股鎌
27-205	51-205	F 48	〃	R44		I	根部分 (5.84) × 1.20 × 1.14 柄部分 0.60 × 0.57	鑿根鎌
27-206	51-206	F 37	〃	R43		〃	根部分 (8.26) × 0.98 × 0.95 柄部分 0.55 × 0.53	〃
27-207	51-207	F 156	〃	W47	SE115	フ ク 土	根部分 (7.14) × 2.37 × 0.22 柄部分 0.55 × 0.56	銀杏葉鎌
27-208	51-208	F 261	〃	R48		IV	根部分 (11.83) × 1.93 × 0.28 柄部分 0.61 × 0.53	〃

PL.No	Fig.No	遺物No	名 称	出土区	遺構名	層 位	計測値(長さ×幅×厚さ)cm	備 考
27-209	51-209	F 611	鉄 鍬	Q42		II	根部分 (7.10) × 1.49 × 0.40	"
							柄部分 0.85 × 0.79	
27-210	51-210	F 1207	"	内館 表採			根部分 4.46 × 1.23 × 1.12	鑿根鍬
							柄部分 0.60 × 0.52	
27-211	51-211	F 272	"	R48		IV 上	根部分 (13.44) × 0.48 × 0.98	"
							柄部分 0.55 × 0.52	
27-212	51-212	F 550	"	S44		II	根部分 (14.06) × 1.02 × 1.02	"
							柄部分 0.51 × 0.44	
27-213	51-213	F 1067	"	S43	ST247	セクション内 フ ク 土	根部分 11.84 × 0.98 × 0.86	"
							柄部分 0.50 × 0.54	
27-214	51-214	F 1165	"	T44	SX318	フ ク 土	根部分 (14.70) × 1.04 × 1.04	"
							柄部分 0.70 × 0.61	
27-215	51-215	F 912	"	S43	ST281	"	根部分 (14.41) × 0.97 × 1.00	"
							柄部分 0.51 × 0.50	
27-216	52-216	F 1148	小 札	R42	SE141	セクション内 フ ク 土	(7.19) × 2.74 × 0.22	三目札
27-217	52-217	F 1186	"	"	ST283	フ ク 土	(5.70) × (2.58) × 0.23	"
27-218	52-218	F 1107	"	S42	ST245	セクション内 フ ク 土	6.49 × 2.29 × 0.22	碁筭頭札
27-219	52-219	F 167	"	V46	SE112	フ ク 土	6.46 × 2.36 × 0.26	伊予札
27-220	27-220	F 1083	"	S43	p i t 内	"	7.13 × 2.72 × 0.20	碁筭頭札
27-221	52-221	F 514	"	R50	SE118	"	6.60 × 2.41 × 0.14	"
27-222	52-222	F 857	"	S43	ST283	"	7.34 × 2.10 × 0.18	伊予札
27-223	52-223	F 800	"	S42	ST245	"	(7.10) × 2.16 × 0.24	"
27-224	52-224	F 1123	"	"	"	灰 層 下	(7.30) × 2.25 × 0.24	"
27-225	52-225	F 819	"	"	ST245	フ ク 土	(7.40) × 2.12 × 0.22	
27-226	52-226	F 964	"	Q42	SE137	"	6.58 × 1.70 × 0.22	伊予札
27-227	52-227	F 23	"	S42	ST245	"	(5.89) × 2.18 × 0.22	碁筭頭札
27-228	52-228	F 794	"	"	"	"	6.28 × 2.02 × 0.10	"
28-229	52-229	F 204	柄付多穴鉄製品	V46	SE111	"	(15.48) × 4.71 × 0.26	孔径 0.50 cm
							柄部分 1.26 × 0.55	
28-230	53-230	F 365	鍬	Q48	SX275	"	20.10 × 10.39 × 0.16	
28-231	52-231	F 546	カ ナ ズ チ	S39		II	9.96 × 2.60 × 2.44	柄をさしこむ部分 1.81 × 0.67 cm
28-232	52-232	F 1010A	長梯形鉄製品	Q42	ST277	床面直上	15.70 × 3.6 × 0.8	
28-233	53-233	F 439	苧 引 金	R50	SE118	フ ク 土	9.10 × 2.07 × 0.24	木片付着
28-234	53-234	F 293	"	T49	SX288	"	9.46 × 3.06 × 0.20	
28-235	53-235	F 721	火 打 ち 金	R49	SE127	"	8.58 × 3.94 × 0.39	
28-236	53-236	F 567	鍬状鉄製品	S43		II	7.00 × 1.13 × 0.76	
28-237	53-237	F 1176	"	Q42	SE137	セクション内 フ ク 土	(8.90) × 2.12 × 0.61	

PL No	Fig. No	遺物No	名 称	出土区	遺構名	層 位	計測値(長さ×幅×厚さ)cm	備 考
28-238	53-238	F 1001	鍔状鉄製品	T44	SE139	フク土	(7.40) × 1.84 × 0.92	
28-239	53-239	F 463	"	W47	SE131	"	(7.04) × 1.70 × 0.66	
28-240	54-240	F 520	かすがい	S38		II	5.96 × 2.46 × 0.77	
28-241	54-241	F 538	"	R50	SE118	フク土	(4.80) × 1.21 × 1.00	
28-242	54-242	F 461	"	T49	SX292	"	4.25 × 2.04 × 0.78	
28-243	53-243	F 744	毛 抜	S48	SE135	"	7.00 × 0.65 × 0.40	
28-244	53-244	F 1013	鉄 皿	Q42	SE137	"	径 高さ 厚さ 3.99 × 0.85 × 0.14	
28-245	54-245	F 621	鉄 碗	"		II	径 高さ 厚さ 7.18 × 2.86 × 0.41	
29-246	51-246	F 1005	打 根	R42	ST280	フク土	(16.08) × 0.82 × 0.72	
29-247	51-247	F 275	"	R48		IV 上	(13.82) × 1.70 × 1.52	
29-248	51-248	F 846	"	R42	ST246	フク土	(7.52) × 1.24 × 1.18	
29-249	51-249	F 704	"	"	"	"	径 (8.06) × 1.51	
29-250	53-250	F 488	鉄	R50	SE118	"	(13.40) × 1.37 × 0.34	
29-251	53-251	F 243	"	W46	SX274	セクション内 フク土	12.38 × 1.28 × 0.42	
29-252	53-252	F 907	燭 台	Q42	SE137	フク土	11.61 × 0.78 × 0.65	受皿部分 4.37 × 4.09 cm
29-253	54-253	F 685	角 釘	S42		II	頭部 身部 5.40 × 0.81 × 0.41	
29-254	54-254	F 446 A	"	R50	SE118	フク土	頭部 身部 6.02 × 0.88 × 0.52	
29-255	54-255	F 995	"	T44	SE138	"	頭部 身部 10.14 × 1.85 × 0.70	
29-256	54-256	F 640	"	"		II	頭部 身部 11.16 × 1.68 × 0.77	
—	54-354	F 637	鉄 鍋	R50	SE118	セクション内 フク土	径 高さ 厚さ 25.98 × 12.00 × 0.56	脚の径 1.70 cm
—	53-352	F 225	小 刀	W45	SE100B	フク土	(23.15) × 1.52 × 0.32	
—	51-346	F 605	鉄 鍬	R41		II	刃部分 19.25 × 0.75 × 0.70	鑿根鍬
							柄部分 1.16 × 1.22	
—	51-347	F 601	"	Q41		"	刃部分 (19.75) × 0.98 × 0.93	"
							柄部分 0.60 × 0.56	
—	51-348	F 785	"	R43		II 下	刃部分 (11.52) × 1.03 × 0.95	"
							柄部分 0.61 × 0.54	
—	51-349	F 196	"	V46	SX273	フク土	刃部分 (11.12) × 1.12 × 0.96	"
							柄部分 0.56 × 0.53	
—	51-350	F 784	"	S42		II 下	刃部分 (9.21) × 0.93 × 0.73	"
							柄部分 0.42 × 0.40	
—	51-351	F 227	"	V46	SE111 a	セクション内 フク土	刃部分 8.72 × 0.84 × 0.80	"
							柄部分 0.61 × 0.51	
—	53-353	F 448	鉄	R50	SE117	フク土	(6.68) × 1.05 × 0.44	
—	54-355	F 440	かすがい	"	SE118 a	"	4.72 × 2.22 × 0.77	
—	54-356	F 1093	"	S42		III 下	(5.20) × 0.63 × 0.45	

3. 銅製品

銅製品の出土数は81点であり、その内訳は以下の通りであるが、機能的には、武具・宗教具・工具等であり、武具の出土が圧倒的に多い。

Ch.97 銅製品集計表

名 称	個数	名 称	個数	名 称	個数	名 称	個数
足 金 具	1	目 貫 金 具	4	銅 皿	1		
釧	1	鍍 縁 金 具	4	香 炉	1	銅 鍋 ？	1
小 柄	7	八 双 金 具	1	六 器	2	針状銅製品	1
筭	5	八 双 鋌	2	盤 状 銅 製 品	2	銅 滓	11
小刀鞘金具	1	火 繩 挟 み	1	鋌	6	キ セ ル	1
袴	1	鉄 砲 玉	3	鏡	1	不 明	22
鞘 縁 金 具	1					計	81

3-a 武具

銅製品の場合、武具の主要な機能である殺傷・防禦の部分は鉄製でありそれを補助ないしは装飾性の強い部分に使用する事が多い。つまり、金具や揃え物・部品としての機能が多い。

3-a-1 足金具 (P.L.30-259、Fig.55-259)

太刀鞘を吊り下げる部分に使用する金具と考えられる。破損部の観察では、上端の紐通部分および鞘あてとなる左右の側面はそれぞれ成形後に接合している痕跡がみられ現存部から推定すると鞘の幅は約2cm程度であり、紐通部分は鉄の表面に銅鍍金したものと思われる。

3-a-2 縁金具 (P.L.30-260、Fig.55-260)

柄の縁に装着する金具と考えられる。天井部は楕円形を呈し、中央に背幅0.7cm、高さ2.1cmの二等辺三角形に近い孔があり、腰幅は1.5cmで両側面中央に釘打ち痕が認められる。地金は鉄のようであり銅鍍金がなされていると考えられる。

3-a-3 釧 (P.L.30-261、Fig.55-261)

鐔の基部を締める金具。内側の計測では背幅0.7cm、高さ2.8cmであり、鑄造りの刃にあてたと考えられる形状を呈している。幅は上端1.4cm、下端1.5cmで刃先の方が接合されておらず0.5mmほど若干のすき間があいている。

3-a-4 小柄 (P.L.30-275、Fig.55-275)

7点の出土がみられたが完形は(275)1点であり、他は細片である。(275)は刃部残存長6.1cm、柄長8.2cm、柄幅1.3cm、棟厚0.45cmを測る。地板に文様等は認められず、小口は茎部分を強く押し込んだためか縁がめくれた状態を呈する。

3— a— 5 筭 (P L . 30— 266 ・ 267 ・ 268 ・ 269 ・ 270、 F ig. 55— 266 ・ 267 ・
268 ・ 269)

5 点の出土があり、胴に紋を有する類とまったく認められない類に分けることができる。

I 類 胴の区画が明確にみられ、中央部に紋を配するもの。

I a 類 紋を地板に接合するのではなく、同時鑄造かあるいは打ち延しによって成形されているもの。(266)は、長さ22.2cmで胴には魚々子をまいた地板に長さ8.0cm、幅0.2cmの紋を配し、下の木瓜形上の眉形が明瞭にみられ、蕨手は金象嵌が施されている。表面上の観察ではあるが、素材がしっかりしているため緑青のふき出しがあまりみられず、漆黒色の光沢を放つ部分が多い。指ではじくと、チーンという透明感のある音を出す。

I b 類 紋を地板中央にはめ込む形態のもの。(267)は、長さ20.9cm、魚々子をまいた地板に扇を三ツ重ねにした文様を有する紋を接合している。紋は松状の文様とみられるが明確でない。木瓜形・眉形・蕨手も明瞭に残り耳搔は(266)と類似した状況である。(268)は長さ約21cm(折れ曲っているため計測値は16.6cmとなっている)竿は細身で胴は魚々子をまいた地板と紋を接合した径0.2cmの孔がみられる。木瓜形・眉形・蕨手も確認されるが表面の地膚が剥落している部分が多く、素材は精選されていない印象をうける。

II 類 薄手・細身に造作され、胴に文様装飾を施さないもの。(269)は耳搔の部分の欠いており、長さ13.5cm、厚さ0.15cmを測る。(270)も同様の竿・穂先部分と思われる。

3— a— 6 小刀鞘金具 (P L . 30— 262、 F ig. 55— 262)

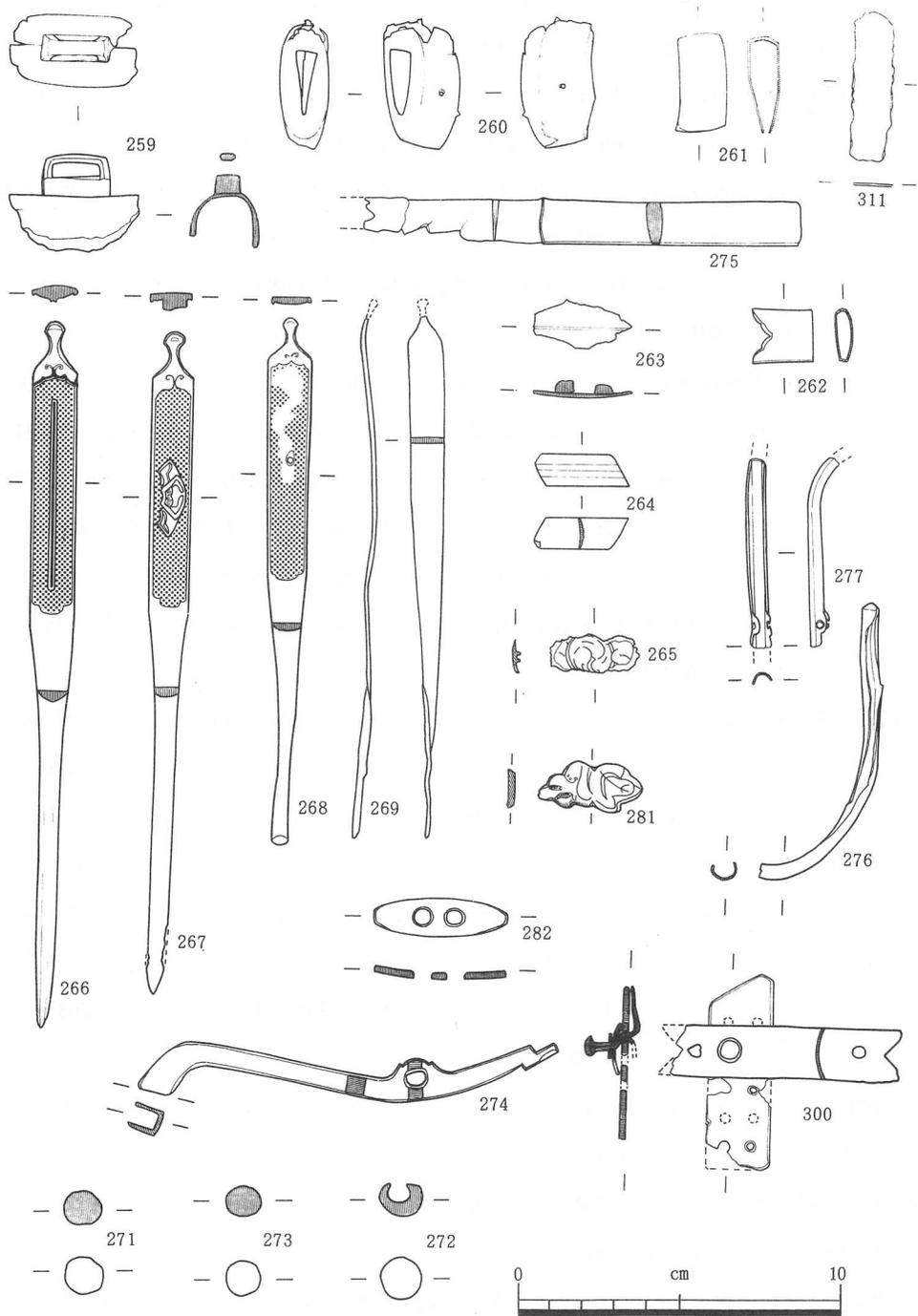
ちいさかたな
小刀の鞘あるいは柄の部分に装着する金具と考えられる。断面形は、高さ1.5cm、幅0.4cm(内径)で片側がややふくらみを有する先細長円を呈し、上端部に接合の痕跡がみられる。一方の縁の成形は途中に段を有するV字状の切れ込みを入れており、装飾的効果を意図している。

3— a— 7 目貫金具 (P L . 30— 263 ・ 264 ・ 265 ・ 281、 F ig. 55— 263 ・ 264 ・
265 ・ 281)

(263)と(264)については明確に目貫金具とは言えないかもしれない。(263)は扁平な板の外側に破断面があるためもっと大振りな金具であった可能性があり、二個の突起状付着物もその機能はわからない。(264)は形状が平行四辺形を呈し、表面に三条の沈線が引かれていた痕跡を確認できただけである。

(265)は裏面中央に目釘に対応する小突起が認められ、表面には刻線による花状の文様が描かれている。刻線の中には若干ではあるが金と思われる付着物痕がみられる。(281)は表面全体に金鍍金がなされ金色に輝やいている。そして刻線によって柏葉状の文様が描かれてい

Fig. 55 銅製品実測図 (1)

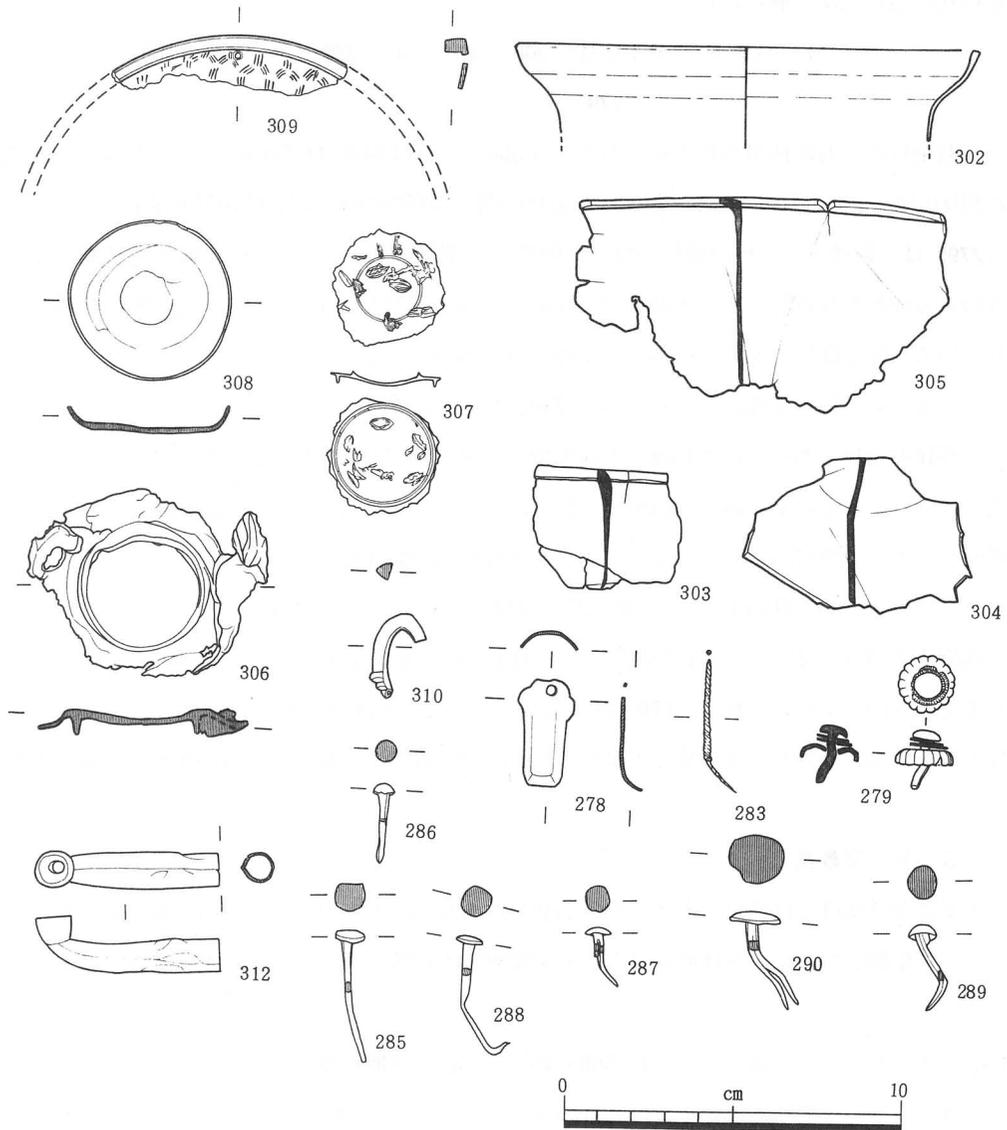


る。厚さ0.24cmで、(265)が0.08cmであったのと比較すれば、重量感のある製品である。

3-a-8 靴 (P.L.30-282、Fig.55-282)

鎧を着装する時にその紐の長さを調節したり固定するための金具。長さ4.1cm、幅1.2cmの長円形を呈し、中央に二個一対で径0.5cm強の孔が存在する。厚さ0.2cmで、比較的しっかりした造作がなされている。

Fig. 56 銅製品実測図(2)



3-a-9 鍔縁金具（P L.30-276・277、Fig.55-276・277）

鍔の胸板等の縁に廻らす金具と考えられる。厚さ0.2cm～0.5mmほどの板をU字状に成形し、（277）のように部分的に止め穴を設けるものもある。断片が多く、全体的なイメージはつかみにくい。

3-a-10 八双金具（P L.31-300、Fig.55-300）

「袖や胴の化粧板に打つ八双鉾の下に置く細長い装飾の板」（笹間1981）と考えられるもので、小札に打ち込まれた八双鉾とともに接合して出土した。推定長7.5cm、幅1.5cmの両端がV字状にカットされた「入八双」と言われるタイプのものである。八双鉾の二箇の孔とともに猪目状の透し穴が一個みられる。

3-a-11 八双鉾（P L.31-300、P L.30-279、Fig.55-300、Fig.56-279）

八双金具とともに使用される鉾である。（300）の鉾は頭部径0.7cmほどで、先端部を二股に割り広げて止めるものである。鉾と八双金具の間には径0.85cmの円盤状留具が装着している。（279）は、鉾頭下に三枚の留具が付いた例で、下部最大径1.7cmの留具は輪花状に盛り上がりのある成形がなされ、その上部の径1.2cmと1.0cmの留具は金鍍金を施し放射状に刻線を入れている。先端部は欠損しているため二股なのか不明である。

3-a-12 火縄挟み（P L.30-274、Fig.55-274）

火縄銃の器具である。長さ13cm、火縄を挟む部分はU字形に窪められた形で成形され、支点となる孔は、径0.5～0.6cmの不整円で上端に切り込みが入っている。末部は鍵形を呈し、一側面には多数の擦痕が認められることから、かなりの回数使用したのと考えられる。

3-a-13 鉄砲玉（P L.30-271～273、Fig.55-271～273）

鉄砲玉と推定されるものは3個出土し、径1.2cm前後の球状を呈し、重量は6.5gから5.7gまであり均一でない。特に（270）は一部が空洞になった部分があり、鑄造にあたって粗悪なものを使用していたとみなすことができる。成分分析はおこなっていないが鉛の可能性が高い。

3-b 宗教具

すでに浪岡城跡では仏具と考えられる銅製品が多数出土しており、それも密教系の遺物が多いことを指摘している。具体的には六器・金剛盤・香炉等であるが、本年度は約5点ほど出土している。

3-b-1 六器（P L.31-306・307、Fig.5-306・307）

六器というのは關伽器等のように高台の付いた台皿と高台の付いた鉢をもって一式（器）とするが、（306）は内側に鉢受けの隆帯圏がみられないことから鉢の類、（307）は高台とと

もに圈帯が存在することから台皿の類と推定される。

(306) は鑄つぶされた状況を呈し、高台部周縁は溶解状態が認められる。高台径は3.7cm、高台高0.6cmを測り、厚さも0.2cmとしっかりした造りの鉢と考えられる。

(307) は高台径3.1cm、高台高0.3cm、厚さは0.1cm以下と薄手に造作され、中央部が高台裏へ饅頭形にへこんだ状態となっている。稲藁や粃の付着が認められる。

3-b-2 香炉 (P L.31-305、Fig.56-305)

破損品であるため明確な形状はわからないが、口縁が内側に突き出し円筒形を呈するものと考えられる。厚さは0.1cm前後であり、推定口径15cm前後、高さ10cm前後と思われる。

3-b-3 鏡 (P L.31-309、Fig.56-309)

鏡は日常生活の調度品としても使用するが、古代・中世にあっては御正体として使用することが一般的であった。(309) は縁の内側に一孔を有し懸仏的に吊り下げて使用したことが推測されるため宗教具に入れた。推定径13.2cm、縁幅0.36cm、縁高0.72cmで、背文は三本の浮線をもって六角形(亀甲文)を連続する文様と考えられるが摩耗が激しく明確でない。表面にみられるスス状の付着物から二次加熱を受けていると思われる。

3-b-4 盤状銅製品 (P L.31-303・304、Fig.56-303・304)

盤とすれば金剛盤等が考えられる破片。(303) は縁が0.38cmと厚く造作され、その盛り上りの内面は裏面よりよく研磨されている。(304) は厚さ0.2cmで破断面しか確認できない。

3-b-5 その他

(302) は口縁部が内湾しながら立ち上がる鉢・香炉状の器物である。表面の腐植が強く所々に小空洞が認められ、凹凸した状態になっている。推定口径13.9cmを測る。

(310) は、断面形三角を呈し、小壺や水注の取手ないしは耳の可能性が高い。

3-c 道具類

3-c-1 皿 (P L.31-308、Fig.56-308)

口径4.9cm、高さ0.7cmの饅頭に近い形状をした小皿である。紐を通すような孔は発見されていないため、棹秤の受皿としては考えにくい。重量25.2gである。

3-c-2 鋌 (P L.31-284~290、Fig.56-285~290)

前述した八双鋌に類似した鋌が6点ほど出土している。しかし、頭部の形態および先端部の状態で二類に分類できる。

I類 頭部がきのこ状に丸く成形され、先端部は二股に分かれて孔を通した後に広げて固定するもの。(284・287・289・290)があり、頭部が最も大きい(290)は推定径1.6cm強、(289)は1.0cm、(287)は0.8cmで金鑄金が認められ、(284)は0.6~0.7cmの径を有している。先端部は2.0~3.0cmの長さで板状に成形した二股

を頭部中央に接合させている。

Ⅱ類 頭部が扁平な円盤状を呈し、先端部は1本の釘状を呈するもの。頭部は明確に円形にはならず、面取りしているもの(285)もあるが、径は約1.0cm弱、先端部の長さは4.0cmで規格性が認められる。(288)

3-c-3 針状銅製品(PL.30-283、Fig.56-283)

長さ約4.0cm、厚径0.2cmの先端が鋭く尖った製品で、体部にねじりの痕跡がある。

3-c-4 その他

(278)は、鞘等の縁金具のようにも見えるが、対照となる部分がないため明確でない。

(315)は、溶解状態となった鍍縁金具のようであるが明確でない。

(311)は、小柄がつぶれたように、二枚の板が重なる製品であり、使用目的はわからない。

3-c-5 銅滓(PL.31-313・314)

銅滓は11点出土している。(313)と(314)は比較的大型の銅滓で、製品であったものを鑄つぶした可能性も否定できない。

3-c-6 キセル(PL.31-312、Fig.56-312)

雁首の部分で、火皿の径は1.1cmで内面口縁を斜行気味に削っている。火皿下端と首部上面に接合痕が認められる。ラウ取り付け部の径は1.0cm弱で内部に木質のラウと思われる残痕がみられた。

Ch. 98 銅製品観察表

PL. No.	Fig. No.	遺物No.	名称	出土区	遺構名	層位	計測値(長さ×幅×厚さ)cm	備考
30-259	55-259	F 1074	足金具	S 43	S X 321	フク土	高さ 4.06 × 幅 2.25 × 厚さ 3.09 × 0.16	紐通し部分 2.22 × 0.86 × 1.40
30-260	55-260	F 908	縁金具	R 42	S T 280	"	3.90 × 1.45 × 0.19	7.60 g
30-261	55-261	F 1019	鏞	Q 42	S T 277	"	3.14 × 1.44 × 0.90	7.59 g
30-275	55-275	F 790	小柄	W 47		Ⅱ下	(13.71) × 1.37 × 0.36	19.71 g
31-311	55-311	F 539	小柄の柄?	R 50	S E 118	フク土	(4.80) × 1.21 × 0.10	
30-266	55-266	F 444	斧	S 48	pit内	"	22.20 × 1.37 × 0.48	重さ 47.82 g
30-267	55-267	F 398	"	R 51	S T 270	"	20.89 × 1.32 × 0.36	35.42 g
30-268	55-268	F 1129	"	R 42	S T 279	"	16.65 × 1.31 × 0.20	径 0.20cmの孔有
30-269	55-269	F 258	"	R 49		Ⅱ下	(13.50) × 1.21 × 0.15	
30-270	—	F 517	"	T 39		Ⅱ	(7.01) × 0.70 × 0.18	
30-262	55-262	F 735	小刀鞘金具	T 48	pit内	フク土	1.95 × 1.70 × 0.61	2.61 g
30-263	55-263	F 651	目貫金具?	R 50	S E 118	"	(3.06) × 1.46 × 0.38	
30-264	55-264	F 295	目貫金具	S 48		Ⅳ上	(2.94) × 1.07 × 0.14	
30-265	55-265	F 97	"	V 46	S X 270	フク土上面	(2.70) × 1.19 × 0.08	
30-281	55-281	F 305	"	S 48	S T 273	フク土	3.24 × 1.49 × 0.24	

60年度内報

PL No.	Fig. No.	遺物No.	名 称	出土区	遺構名	層 位	計測値(長さ×幅×厚さ)cm	備 考
30-277	55-277	F 905	緑 金 具	R42	S T 280	"	(5.96) × 0.67 × 0.54	
30-276	55-276	F 1016	"	T44	S E 138	"	(9.28) × 0.44 × 0.63	
31-300	55-300	F 248	ハ 双 金 具	R49		埋 土	(7.24) × 1.53 × 0.12	付着しているハ双 鍔の径 0.66cm
30-282	55-282	F 143	鞞	V46	S E 111	フ ク 土	4.12 × 1.22 × 0.22	孔径 0.57cm 4.98 g
30-271	55-271	F 1054	鉄 砲 玉	S43	S T 281	セクション 内フク土	1.24 × 1.10 × 1.06	6.5 g
30-272	55-272	F 466	"	T49	S X 292	フ ク 土	1.22 × 1.19 × 1.00	空洞 6.29 g
30-273	55-273	F 1110	"	R42	S T 279	"	1.11 × 1.08 × 0.95	5.74 g
30-274	55-274	F 95	火 縄 鉄	W47		I	13.00 × 1.07 × 0.90	孔径 0.65 × 0.52 32.97 g
31-305	56-305	F 807	香 炉	S42	S T 247	フ ク 土	(10.96) × (6.34) × 0.10	
31-302	56-302	F 1051	銅 鍋 ?	T44	S E 138	セクション 内フク土	(5.30) × (3.00) × 0.28	
31-303	56-303	F 783	盤	S42		II 下	(4.39) × (3.61) × 0.26	
31-304	56-304	F 664	"	S44		"	(6.70) × (4.66) × 0.22	
31-306	56-306	F 1141	六 器	Q42	S E 140	フ ク 土	7.03 × 6.60 × 0.16	溶解している
31-307	56-307	F 372	"	P48	S E 125	セクション 内フク土	(3.58) × 3.45 × 0.12	もみ、わら付着
31-309	56-309	F 234	銅 鏡 の 縁	"		I	(7.04) × 1.55 × 0.79	
31-308	56-308	F 743	小 皿	S49	S E 129	フ ク 土	4.94 × 4.85 × 0.86	重さ 25.21 g
31-284	—	F 884	銅 鍔	Q42	S E 137	"	身部 (3.60) × 0.34 × 0.18	
31-285	56-285	F 338	"	R48	S E 126	"	頭部径 身部径 (3.94) × 0.90 × 0.25	
31-286	56-286	F 902	"	R42	S T 280	"	2.44 頭部径 身部 × 0.62 × 0.26	
31-287	56-287	F 1053	"	S43	S T 281	セクション 内フク土	1.91 頭部径 身部 × 0.76 × 0.26	
31-288	56-288	F 29	"	S42	S T 245	フ ク 土	(3.43) × 0.84 × 0.24 頭部径 身部径	
31-289	56-289	F 292	"	R48	pit内	"	(2.14) × 0.98 × 0.30 頭部径 身部	
31-290	56-290	F 806	"	S42	S T 247	"	(3.25) × 1.64 × 0.33 頭部径 身部	
30-279	56-279	F 85	"	W46		II	(1.82) × 1.70 × 0.28 頭部径 身部	
30-283	56-283	F 124	針 状 銅 製 品	V46	S E 111	フ ク 土	(4.01) × 0.22 径	
30-280	—	F 399	円 形 緑 金 具	R50	S E 120	"	1.28 × 1.08 × 0.10	
31-312	56-312	F 429	キ セ ル	Q48	S X 375	床面直上	5.50 × 1.14 × 0.95	雁首、内部に木片が 入っている 9.88 g
30-278	56-278	F 519	不明銅製品	T38		II	3.35 × 1.62 × 0.09	孔径 0.27cm
31-315	—	F 353	"	R48	S X 275	フ ク 土	(5.82) × 0.48 × 0.43	内部に種子が入っ ている
31-310	56-310	F 951	"	T43	S X 320	"	(2.55) × 0.59 × 0.46	
31-313	—	F 157	銅 滓	W47	S E 115	"	5.18 × 1.64 × 0.23	14.48 g
31-314	—	F 114	"	"		II	4.53 × 4.02 × 1.03	32.30 g

4. 石製品

石製品は、城館期のものとして砥石28点、硯17片、茶臼16片、穀臼4片、石鉢1点があり、縄文時代と推定される石斧4点、石棒1点、未加工品1点と、時代不詳の加工石8点、自然石18点、軽石8点、けい化木4点を遺物として扱った。

4-a 文具

4-a-1 硯 (P L.32--313・314・315・316、Fig.57—313・314・315・316)

硯はいずれも小片にて出土している。形態的には長方硯と言われるもの(水野和雄1985)だけであり、内側の平面形と裏面の形態によって細分できるが、今回は完形および全形を知り得る資料がないため個別に報告する。

(313)は海部の一部であり、内側の平面形は楕円形あるいは頭部だけが楕円状を呈すると考えられ、裏面は袂り脚を有しているものである。表面は堅緻な灰白色を呈する。

(314)は、縁帯幅0.3cm、裏面袂り脚幅0.7cmのもので、表面は赤灰色から暗灰色の色調を呈している。

(315)は裏面の袂り脚と周辺部だけがみられ、縞文様を呈する暗緑色の石質である。

(316)は裏面平坦な長方硯で幅は4.9cm、砂岩系の明黄色を呈する石質であり、成形は稚拙で面の角度が一定でない。

4-b 道具・工具

4-b-1 砥石 (P L.32—317~325、Fig.57—317~325)

砥石は、一般に荒砥・中砥・仕上砥に分類されているが、浪岡城の出土品は材質による分類が明確でないため、使用金属器によって砥面の幅等が相違するという仮説のもとに、砥面幅によって分類する。

I類 砥面幅が2cm以下の小型の製品。(318)は断面長方形で、全四面を使用し、一面にはU字状の袂りが認められ頭部が丸いものを砥いだのであろうか。(322)は断面正方形に近く、四面は滑らかである。特に、砥面のへこみが少ない所をみると仕上砥として使用していたのであろうか。

II類 砥面幅が2cm以上3cm以内の製品。(320)は断面長方形を呈するが中央部は摩耗が著しく外側に比較して0.5cm以上も擦りへっている。砥面も一律な摩耗でなく部分的に平坦面や傾斜面を有しているため、多目的ないしは別製品の砥ぎに使用したと思われる。(323)は断面正方形を呈すが、四面の中央部が摩耗している他その角にあたる部分も四箇所砥面として使用した痕跡を残している。砥面は一律でない。(317)は厚さ1cmほどの扁平なもので、表裏と端を砥面として使用し、平滑な面と削り状に段を有する面が認められる。出土品の中では最も器面が緻細である。

III類 砥面幅が3cm以上のもの。(324)と(325)は断面形が一定せぬほど各所を砥面として使用し、特に中央部の摩耗は0.3~0.5cmほどで擦痕状のへこみが多くみられる。(319)は扁平な一面とその側面を砥面として使用し、縁にはV字状のきざみがある。

Fig. 57 石製品実測図(1)

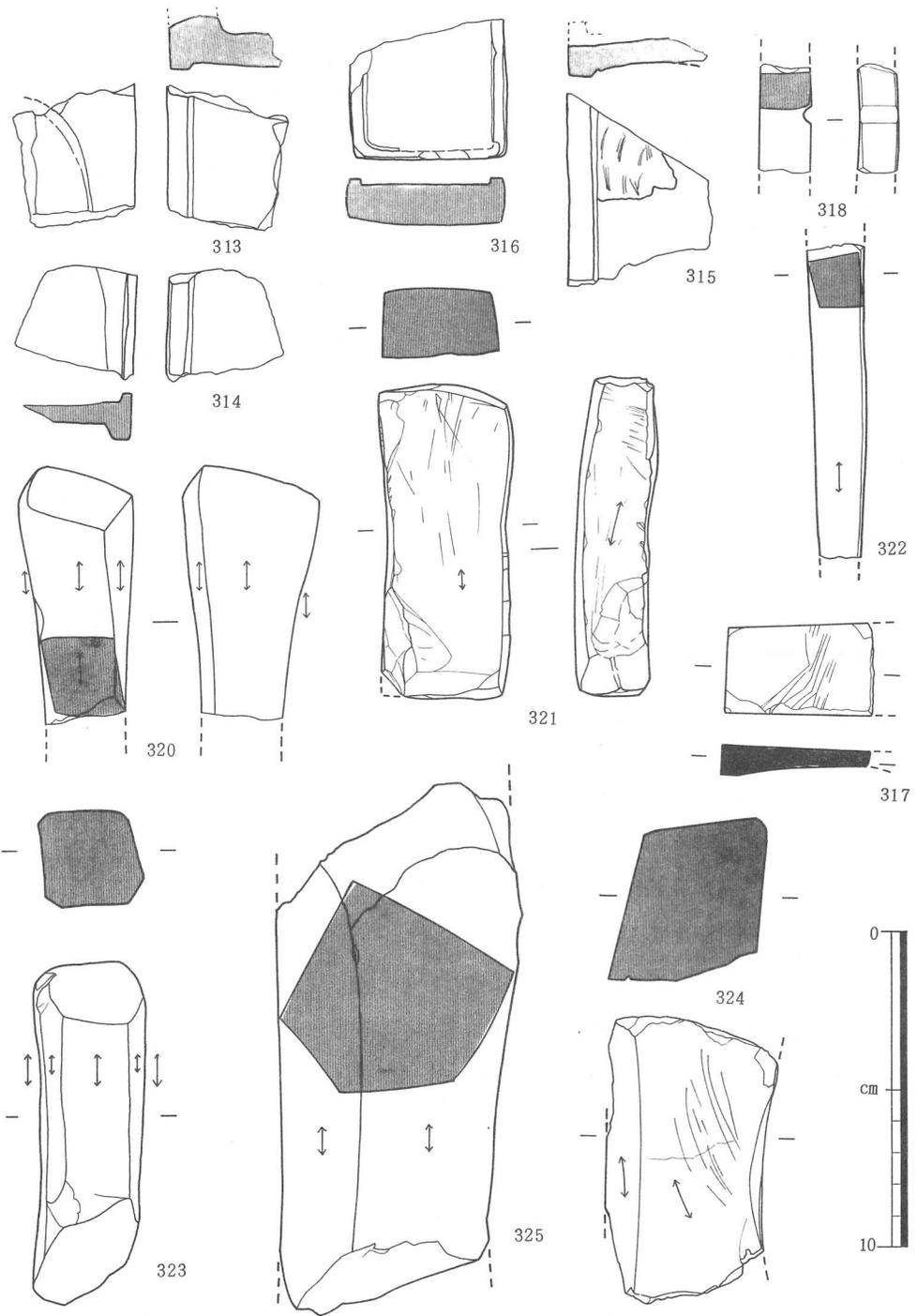
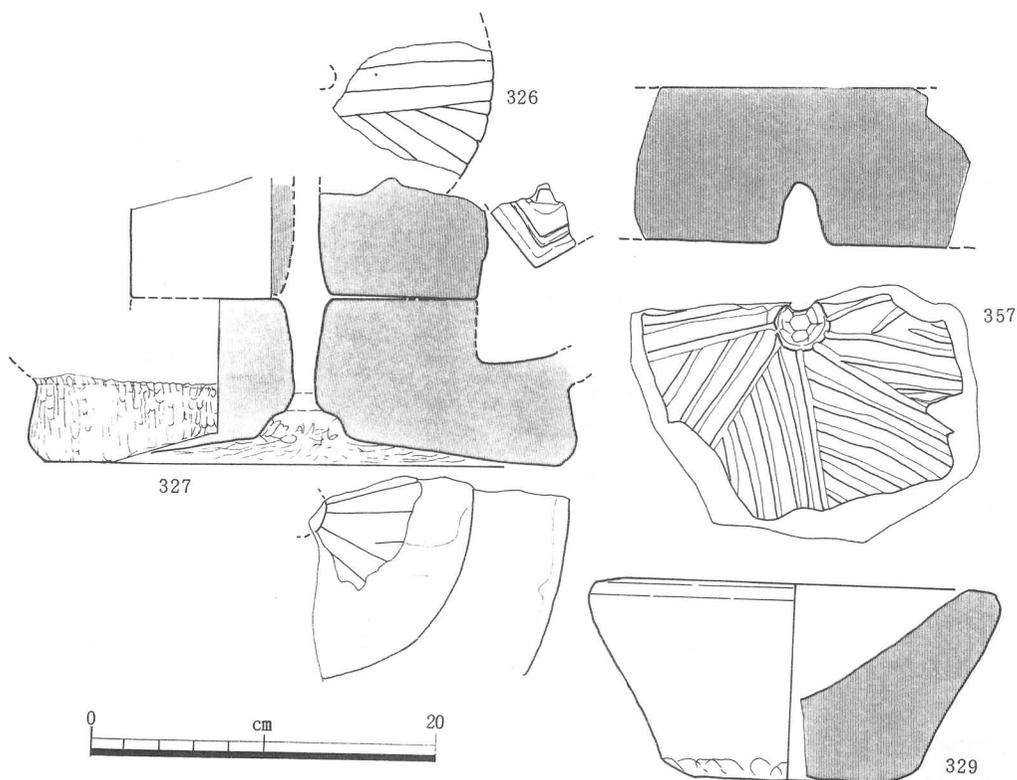


Fig. 58 石製品実測図(2)



(321) は扁平部の側面を多く砥面としているようで、表裏は凹凸している上に擦痕が多数認められる。側面の中央部はU字状に摩耗している。

4-b-2 茶臼 (P.L. 32-326・327・328, Fig. 58-326・327)

茶臼と穀臼の区別は断片からでは難しい点がある。一応、茶臼の場合は下臼に受皿がみられること(挽き臼の上手には受皿があるので茶臼だけとは限らない)、上臼の供給口が中央に位置していること、および器面を磨いて成形する事等を主な根拠としている。

上臼と推定されるものは2片出土し、(326)だけ図示した。(326)は上半を欠いているが推定径20cm強で挽き木孔の部分が菱形に造作され、主溝・副溝とも大部擦りへっているが中心孔より若干ズレた状態で掘り込まれている。同質・同径の下臼が(327)である。受け皿の部分を欠損しているため全体径はわからないが、台部内外面にはノミの成形痕が明瞭に認められ、研磨はなされていない。溝をみた限りでは中心部から放射状に伸びる主溝以外確認されず、副溝を施さなかった可能性が高い。

他に研磨を施した上臼片(328)や、受皿部分がある。

4-b-3 穀臼 (Fig.58-357)

穀臼は上臼の供給口が中心軸からズレているものを扱った。上臼は2点出土しているが図示したのは(357)だけである。外縁が欠損しているため径はわからないが、高さ(溝面からくぼみ面まで)は9.5cm、芯棒受けの孔は3.7cmの深さにえぐられている。溝は茶臼よりも幅広で8分割主溝に副溝が4~6本と規則的には配置していない。なお、浪岡城跡から出土する臼には正常目と逆目の臼が存在し、いかなる相違なのか今後の問題点である。

4-b-4 石鉢 (P.L.32-329, Fig.58-329)

石鉢の機能としては、こね鉢(調理)、手洗鉢(手洗い)、シデ鉢(灯火)等が考えられる。(329)は推定口径24cm、高さ11.5cm、深さ7.0cmを測り、全面にノミによる成形痕が認められるが内面の底に近い部分だけは使用のためか平滑な面になっている所もある。

※以上の石製品について、時間の都合上石質の鑑定がなされていないことを御了承いただきたい。後日にまとめて報告したいと思っている。

Ch.99 石製品観察表

PL.No.	Fig.No.	遺物No.	名称	出土区	遺構名	層位	計測値(長さ×幅×高さ)cm	特徴	備考
32-313	57-313	S 72	硯	S44		I	(4.45)×(3.82)×(1.72)		
32-314	57-314	S 11	"	S42	ST245	フク土	(3.58)×(3.78)× 1.50		
32-317	57-317	S 94	砥石	S43	ST281	"	(4.63)× 2.31 × 1.08		
32-318	57-318	S 90	"	"	"	"	(3.34)× 1.73 × 1.18		
32-315	57-315	S 79	硯	Q49	SB 66	"	(6.27)×(4.54)×(1.60)		
32-316	57-316	S 73	"	T44		II	(4.48)× 4.93 × 1.47		
32-319	—	S 43	砥石	R48	SE124	フク土	(6.00)× 5.43 × 1.64		
32-320	57-320	S 10	"	W46		I	(7.90)× 4.00 × 3.24	付着物有	
32-321	57-321	S 36	"	R48		"	10.10 × 4.00 × 2.24		
32-322	57-322	S 77	"	Q41		II 下	(9.91)× 1.80 × 1.60		
32-323	57-323	S 70	"	R42		II	(10.78)× 3.50 × 3.26		
32-324	57-324	S 78	"	Q41		II 下	(8.90)× 5.60 × 4.64	付着物有	
32-325	57-325	S 71	"	S44		II	(15.71)× 6.53 × 6.35		
32-326	58-326	S 51	茶臼	R48		IV 上	(10.55)×(9.00)×(6.65)	推定径 約20.0cm	上臼
32-327	58-327	S 40	"	V46	SE111	フク土	(21.07)×(14.78)×(9.08)	" 約32.0cm	下臼
—	58-357	S 76	石臼	S43		II 下	(18.96)×(14.34)× 9.36	孔径 約2.47cm	"
32-328	—	S 69	茶臼	Q42		II	(14.54)×(8.64)×(10.35)	推定径 約20.0cm	上臼
32-329	58-329	S102	石鉢	Q48	SX275	床面下粘土	(12.44)×(6.70)× 13.35		

5. 錢貨

出土した錢貨を鑄造時期・使用時期別に分類すると、(a)城館期の錢貨、(b)落城以後藩政期の錢貨、(c)明治以降現代までの錢貨と三期になる。内館については、城館期はもちろんの事、間接的ではあっても現代に至るまで人々の生活空間の一部であったことが、これら出土錢貨によっても理解できる。

a 城館期の錢貨 (Fig.60)

城館期の錢貨としては、Ch.100に示した如く、33種261枚が確認された。しかし、判読できた錢貨についてもそのすべてが中国本錢とは言い切れぬ面があり、鑄造年

代については、開元通宝（唐、621年）から洪徳通宝（明、1470年）までの時間幅と浪岡落城（1578年）までを包括した幅を推定しておきたい。特に無文錢として表記した小型・軽量の錢貨は私鑄錢の範囲に含まれる錢貨と考えられ、その出土率が23%近くを占めることにも注目しなければならない。その上で、銘文を有する錢貨についてみても、中国本錢の基本的重量が日本製の模鑄錢・私鑄錢に比較して高い数値を示すこと（沢田正昭1982）を根拠に以下の統計をとってみた。

Ch.101 錢貨重量統計表

名 称	資料 個数	最大 値(g)	最小 値(g)	平均 値(g)	名 称	資料 個数	最大 値	最小 値	平均 値
1 開元通宝	6	3.40	2.32	2.64	9 紹聖元宝	5	3.42	2.88	3.14
2 天聖元宝	3	3.50	2.78	3.03	10 聖宋元宝	4	3.58	3.22	3.22
3 皇宋通宝	8	3.06	2.28	2.66	11 洪武通宝	17	4.36	1.26	2.71
4 治平元宝	3	3.22	2.48	2.92	12 永樂通宝	10	3.95	2.10	2.88
5 政和通宝	4	3.32	2.01	2.57	13 無文錢	33	2.68	0.34	1.43
6 熙寧元宝	6	4.21	2.10	3.07	※重量計測には(株)エー・アンド・ディ社の高精度 上皿電子天びんE X3000AとAD-8116を使用 した。				
7 元豊通宝	8	3.31	1.99	2.68					
8 元祐通宝	11	3.99	1.66	2.93					

Ch.100 城館期の錢貨名称別一覧表

番号	名 称	枚数	出土率	番号	名 称	枚数	出土率
1	開元通宝	11	4.21	19	聖宋元宝	5	1.92
2	至道元宝	2	0.76	20	大観通宝	2	0.76
3	咸平元宝	1	0.38	21	政和通宝	4	1.53
4	景德元宝	1	0.38	22	至大通宝	2	0.76
5	祥符元宝	3	1.15	23	嘉泰通宝	1	0.38
6	祥符通宝	3	1.15	24	景祐元宝	3	1.15
7	天禧通宝	2	0.76	25	淳熙元宝	2	0.76
8	天聖元宝	3	1.15	26	至和元宝	1	0.38
9	皇宋通宝	12	4.59	27	洪徳通宝	1	0.38
10	嘉祐元宝	3	1.15	28	慶元通宝	1	0.38
11	嘉祐通宝	4	1.53	29	洪武通宝	23	8.81
12	治平元宝	3	1.15	30	永樂通宝	11	4.21
13	治平通宝	2	0.76	31	朝鮮通宝	1	0.38
14	熙寧元宝	10	3.83	32	鉄 錢	1	0.38
15	元豊通宝	11	4.21	33	無文錢	60	22.99
16	元祐通宝	12	4.59	34	判読不能	53	20.31
17	紹聖元宝	6	2.30				
18	元符通宝	1	0.38		計	261	100%

その結果、平均値が2.5g以下のものは無文銭だけとなり、1.43gという平均値は私鑄銭の可能性が極めて高いことを示している。さらに最大値と最小値の幅をみると、1.0g以下が天聖元宝・皇宋通宝・治平元宝・紹聖元宝・聖宋元宝だけであり、洪武通宝のように3.10gの幅がみられるとその中に中国本銭と模鑄銭が混在していると考えざるを得ないようである。今後は、素材・范型・加工痕・形状等の総合判断による分類が重要と考えられる。

b 落城以後藩政期の銭貨

寛永通宝が3点出土している。いずれも遺構等に伴うものでなく、表土に近い層位からの出土である。(Ch.103)

c 明治以降現代までの銭貨

鑄造年代をみると明治9年の一銭から昭和26年の十円までみられる。特に昭和26年造の十円はS X 275の床面直上から出土しており、覆土出土の昭和16年造一銭とともに遺構の廃棄が昭和26年以後であった根拠となりえる。またS X 278についても大正11年造一銭を覆土から出土している点から、大正11年以後の廃棄と考えざるを得ず、表土層周辺から出土する銭貨とともに、明治・大正・昭和の初期まで内館が多分に人々の集合する場であったと考えられるのである。(Ch.104)

Fig.59 銭貨計測模式図

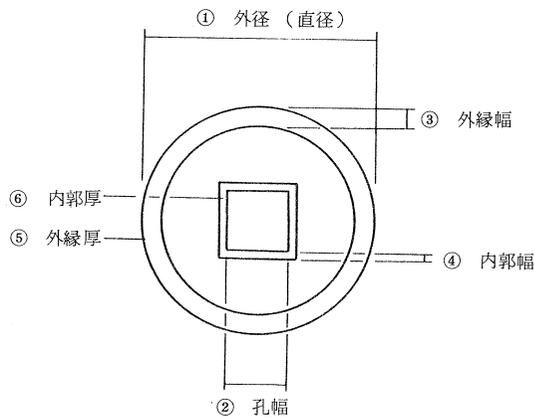
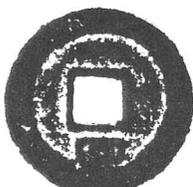


Fig. 60 錢貨拓影圖

開元通寶	咸平元寶	景德元寶	祥符通寶	天禧通寶
				
天聖元寶	景祐元寶	皇宋通寶	至和元寶	嘉祐通寶
				
治平元寶	熙寧元寶	元豐通寶	元祐通寶	紹聖元寶
				
元符通寶	聖宋元寶	大觀通寶	政和通寶	至大通寶
				
朝鮮通寶	永樂通寶	淳熙元寶	慶元通寶	洪武通寶
				
無文錢	無文錢			
				

Ch. 102 城館期の銭貨計測表

No.	C No.	名 称	出土区	遺構名	層 位	外 径 (直径) cm	外縁幅 cm	外縁厚 cm	内郭幅 cm	孔 幅 cm	内郭厚 cm	重 量 (g)	備 考
1	C 1	判読不能	S 42		II	2.46	—	0.13	—	0.66	—	3.08	
2	C 2	無 文 銭	"	ST 245	フ ク 土	1.36	—	0.10	—	0.60	—	0.17	
3	C 3	"	"	"	"	2.14	—	0.13	—	0.66	—	1.59	
4	C 4	"	"	"	"	—	—	0.08	—	0.67	—	0.25	
5	C 6	"	"	"	"	—	—	0.08	—	—	—	0.09	
6	C 7	判読不能	"	"	"	2.20	—	0.10	—	0.64	—	1.19	
7	C 8	洪武通宝	"	"	"	2.28	0.34	0.16	0.11	0.49	0.13	3.06	
8	C 9	熙寧元宝	"	"	"	2.42	0.23	0.16	0.08	0.74	0.12	1.74	
9	C 10	判読不能	T 38		I	2.25	0.20	0.10	0.14	0.64	0.10	1.67	
10	C 12	洪武通宝	R 39		"	2.42	0.16	0.12	0.05	0.56	0.12	2.61	背文「浙」
11	C 20	○宋通宝	R 44		"	—	0.28	0.12	0.08	—	0.10	1.04	
12	C 21	判読不能	"		"	2.23	0.20	0.09	0.08	0.71	—	1.51	
13	C 24	皇○通宝	P 44		"	—	0.23	0.10	0.15	—	0.09	0.94	
14	C 25	洪武通宝	"		"	2.43	0.16	0.15	0.12	0.58	0.14	2.62	
15	C 27	元祐通宝	W 46		"	2.39	0.26	0.13	0.07	0.66	0.14	3.99	
16	C 29	永樂通宝	V 45		"	2.50	0.20	0.14	0.07	0.58	0.11	3.05	
17	C 30	紹聖元宝	"		"	2.34	0.30	0.15	0.14	0.60	0.10	2.87	
18	C 31	政和通宝	V 46	S X 270	フ ク 土	2.43	0.28	0.10	0.06	0.60	0.08	1.99	
19	C 32	嘉泰通宝	"	"	"	2.53	0.20	0.10	0.10	0.65	0.12	2.70	
20	C 33	嘉祐元宝	W 45		II	2.64	0.34	0.16	0.06	0.78	0.14	3.57	
21	C 34	聖宋元宝	V 45		埋 土	2.46	0.22	0.15	0.12	0.63	0.13	3.60	
22	C 35	熙寧元宝	W 46		III 上	2.4	0.21	0.12	0.09	0.66	0.12	3.04	
23	C 38	景德元宝	W 45		II	2.46	0.21	0.13	0.04	0.66	0.12	3.08	
24	C 40	嘉祐元宝	W 47		"	2.39	0.24	0.12	0.09	0.62	0.11	2.02	
25	C 41	無 文 銭	"		"	—	—	0.06	—	—	—	0.43	
26	C 42	○宋○○	"		"	—	0.29	0.12	0.08	—	0.13	0.88	
27	C 43	判読不能	"		"	2.43	0.28	0.12	—	0.60	—	1.87	
28	C 44	元豊通宝	"		"	2.31	0.20	0.14	0.04	0.62	0.15	3.21	
29	C 45	皇宋通宝	"		"	2.46	0.31	0.12	0.10	0.70	0.10	2.48	
30	C 46	元豊通宝	"		"	2.45	0.26	0.14	0.08	0.56	0.13	3.31	
31	C 47	○武通○	V 46	SE 111	フ ク 土	—	0.19	0.13	—	—	—	1.35	
32	C 48	無 文 銭	"	"	"	1.86	—	0.06	—	0.72	—	0.74	
33	C 49	景祐元宝	W 45	S X 272	"	2.50	0.29	0.10	0.08	0.59	0.10	2.67	
34	C 50	判読不能	V 45	SE 112	"	2.36	—	0.12	—	0.66	—	3.46	
35	C 51	熙寧元宝	V 46	SE 111	"	2.36	0.18	0.10	0.10	0.70	0.12	2.46	
36	C 52	無 文 銭	"	"	フ ク 土 灰層	2.31	—	0.10	—	0.69	—	1.58	
37	C 53	元祐通宝	"	"	"	2.20	0.25	0.08	0.10	0.60	0.07	1.67	
38	C 54	開元通宝	"	"	"	2.52	0.23	0.12	0.06	0.68	0.12	2.38	背文「一」
39	C 55	景祐元宝	W 47	Pit内	フ ク 土	—	—	0.09	—	0.70	0.09	1.39	
40	C 56	無 文 銭	"	"	"	2.36	—	0.13	—	0.59	—	2.57	
41	C 57	"	"	"	II 下	2.13	—	0.07	—	0.70	—	1.50	
42	C 58	洪武通宝	W 46	SE 113	フ ク 土	2.04	0.26	0.20	0.09	0.54	0.17	3.66	

No.	C No.	名 称	出土区	遺構名	層 位	外 径 (直径) cm	外縁幅 cm	外縁厚 cm	内郭幅 cm	孔 幅 cm	内郭厚 cm	重 量 (g)	備 考
43	C 59	○祐元宝	W46	SE 101	埋 土	—	0.20	0.10	0.10	—	0.10	0.94	
44	C 60	元豊通宝	"	SE 113	フ ク 土	2.30	0.29	0.11	0.07	0.60	0.10	2.27	
45	C 61	皇宋通宝	V45	SD 91	"	2.46	0.24	0.13	0.10	0.63	0.13	2.69	
46	C 62	洪武通宝	V46	SE 111	"	—	0.09	0.09	—	—	—	1.26	
47	C 63	○○元宝	"	"	"	—	0.26	0.10	0.10	—	0.06	0.94	
48	C 64	判読不能	W47	Pit内	フ ク 土	2.30	0.27	0.10	—	0.67	0.10	2.00	
49	C 66	紹聖元宝	U48		I	2.38	0.29	0.16	0.10	0.62	0.12	3.40	
50	C 67	淳熙元宝	W46	SX 274	フ ク 土	2.44	0.24	0.14	0.09	0.65	0.14	3.20	背文「十」[四]
51	C 68	熙寧元宝	"	"	"	2.44	0.20	0.12	0.08	0.70	0.11	2.26	
52	C 69	無 文 銭	"	ST 259	"	2.19	—	0.12	—	0.76	—	1.61	
53	C 70	"	"	SX 274	"	2.12	—	0.12	—	—	—	1.41	
54	C 71	"	"	"	"	2.20	—	—	—	0.70	—		} 4.75 } 伴出
55	C 72	判読不能	"	"	"	2.44	—	—	—	—	—		
56	C 73	淳○○宝	"	"	"	—	0.20	0.12	0.08	—	0.10	0.85	
57	C 76	鉄 銭	U48		I	—	—	0.18	—	—	—	0.88	
58	C 78	判読不能	V46	SE 111	セクション内土 フ ク	2.23	—	0.12	—	0.63	—	1.65	
59	C 79	元祐通宝	P48		I	2.34	0.26	0.12	0.11	0.63	0.10	2.78	
60	C 80	至道元宝	"	"	"	2.36	0.26	0.12	0.08	0.60	0.11	2.14	
61	C 81	淳□元宝	"	"	"	2.42	0.32	0.10	0.08	0.67	0.11	2.65	
62	C 82	無 文 銭	"	"	"	2.09	—	0.06	—	0.75	—	0.81	
63	C 83	"	"	"	"	1.88	—	0.05	—	0.70	—	0.67	
64	C85A	判読不能	"	"	"	—	—	—	—	—	—		} 4.41 } 接着している
65	C85B	"	"	"	"	—	—	—	—	—	—		
66	C 86	"	W46	SX 274	フ ク 土	—	—	0.10	—	—	—	0.27	
67	C 87	無 文 銭	Q50		I	1.77	—	0.06	—	0.70	—	0.73	
68	C 88	洪武通宝	"	"	"	2.12	0.22	0.14	0.11	0.48	0.15	2.53	背文「一銭」
69	C 90	元祐通宝	R50		"	2.46	0.24	0.12	0.08	0.70	0.12	2.59	
70	C 91	元豊通宝	Q48		"	2.30	0.30	0.11	0.12	0.60	0.10	2.38	
71	C 93	祥符元宝	Q50		IV 上	2.46	0.28	0.11	0.03	0.66	0.11	2.37	
72	C 94	紹聖元宝	R50		"	2.37	0.28	0.14	0.10	0.62	0.12	3.01	
73	C 95	無 文 銭	W45	SX 276	フ ク 土	—	—	0.08	—	—	—	0.23	
74	C 97	紹○○宝	R50		II	—	0.40	0.13	0.11	—	—	1.49	
75	C 98	永楽通宝	"	"	"	2.54	0.23	0.11	0.06	0.68	0.10	2.21	
76	C 99	天○○宝	"	"	I	—	0.17	0.15	0.08	—	0.14	1.13	
77	C 100	永楽通宝	"	"	"	—	0.25	0.12	0.06	—	0.10	1.27	
78	C 102	祥符通宝	R48		IV 上	2.43	0.26	0.08	0.06	0.64	0.07	2.07	
79	C 103	開○通宝	"	SX 275	床 面	—	0.20	0.12	0.05	—	0.12	0.93	
80	C 104	無 文 銭	W45	SX 276	フ ク 土	1.70	—	0.06	—	0.67	—	0.52	
81	C 105	咸平元宝	"	"	"	2.46	0.36	0.10	0.06	0.62	0.12	3.26	
82	C 106	治平通宝	R49		IV 上	2.05	0.10	0.10	0.07	0.68	0.08	1.65	
83	C 107	無 文 銭	"	"	"	1.87	—	0.05	—	1.78	—	0.72	
84	C 108	"	R50		II 下	2.30	—	0.09	—	0.60	—	1.16	
85	C 109	洪武通宝	"	"	"	2.50	0.20	0.08	0.03	0.58	0.09	2.73	
86	C 110	無 文 銭	"	SE 118	フ ク 土	2.08	—	0.10	—	0.76	—	1.43	

No	C No	名 称	出土区	遺構名	層 位	外 径 (直径) cm	外縁幅 cm	外縁厚 cm	内郭幅 cm	孔 幅 cm	内郭厚 cm	重 量 (g)	備 考
87	C 112	洪武通宝	R 49	S X 279	フク土上面	2.22	0.34	0.12	0.09	0.59	0.10	2.83	背文「一銭」
88	C 113	皇宋通宝	"	"	"	—	0.33	0.12	—	—	—	2.49	
89	C 114	永〇〇宝	Q 48		IV 上	—	0.16	0.13	—	—	—	0.60	
90	C 115	無文銭	S 49		I	2.17	—	0.07	—	0.60	—	1.65	
91	C 116	皇宋通宝	"		IV 上	2.40	0.29	0.10	0.10	0.60	0.11	3.06	
92	C 117	永楽通宝	S 48		埋 土	2.50	0.22	0.12	0.05	0.56	0.12	3.81	
93	C 118	〇宋〇宝	W 47	S B 60	フク土	—	0.33	0.12	0.07	—	0.10	0.85	
94	C 119	判読不能	T 49	S X 288	"	—	—	0.10	—	—	—	0.90	
95	C 120	洪武通宝	Q 48	S E 123	"	2.30	0.19	0.16	0.08	0.60	0.15	2.36	
96	C 121	元豊通宝	P 48	"	"	2.43	0.28	0.10	0.07	0.70	0.10	2.36	
97	C 122	無文銭	Q 48	S X 275	床面下粘土	—	—	0.05	—	—	—	0.39	
98	C 123	"	Q 48	"	"	2.29	—	0.10	—	0.66	—	2.15	
99	C 124	皇〇〇宝	P 48	pit内	フク土	—	0.30	0.09	0.10	—	0.10	1.30	
100	C 125	嘉祐通宝	Q 48	S X 275	床面下粘土	2.40	0.24	0.10	—	0.73	0.12	1.78	
101	C 127	洪武通宝	R 48	S E 126	フク土	2.14	0.20	0.16	0.10	0.44	0.14	2.68	背文「一銭」
102	C 128	大観通宝	"	"	"	2.48	0.20	0.15	0.08	0.63	0.16	2.87	
103	C 129	元祐通宝	"	S X 275	床面粘土下 床面直上	2.45	0.23	0.12	0.08	0.68	0.08	1.80	
104	C 130	開元通宝	"	"	床面下粘土	2.47	0.30	0.11	0.06	0.70	0.09	2.19	
105	C 131	無文銭	R 50	S T 274	フク土	—	—	0.08	—	—	—	0.93	
106	C 133	〇武通〇	R 48	S E 126	"	—	0.21	0.11	0.08	—	0.10	0.54	
107	C 134	判読不能	"	S E 124	"	—	—	0.09	0.12	—	—	0.67	
108	C 135	洪武通宝	R 50	S T 274	"	2.37	0.29	0.17	0.08	0.50	0.15	4.36	背文「一銭」
109	C 136	皇宋通宝	Q 50	S E 121	"	2.48	0.32	0.10	0.12	0.70	0.10	2.41	
110	C 137	無文銭	R 48	S E 126	"	2.24	—	0.08	—	0.70	—	1.36	
111	C 138	洪武通宝	W 45	S X 272	pit内フク土	2.28	0.24	0.10	0.10	0.53	0.12	2.59	
112	C 139	無文銭	R 49	S E 130	フク土	2.26	—	0.09	—	0.60	—	1.92	
113	C 140	元豊通宝	R 50	S E 118	"	2.48	0.22	0.10	0.08	0.68	0.09	2.21	
114	C 141	〇〇元宝	"	S E 120	"	2.30	0.24	0.10	—	0.60	0.09	2.28	
115	C 142	永楽通宝	"	"	"	2.51	0.30	0.12	0.08	0.57	0.16	3.95	
116	C 143	"	"	S E 118	"	2.49	0.22	0.13	0.08	0.50	0.15	3.38	
117	C 144	無文銭	T 49	pit内	"	1.74	—	0.07	—	0.70	—	0.55	
118	C 145	判読不能	W 47		IV 上	—	0.16	0.12	0.10	—	0.12	0.82	
119	C 146	無文銭	P 48	S E 123	フク土	—	—	0.09	—	—	—	0.18	
120	C 147	"	"	"	"	—	—	0.07	—	—	—	0.26	
121	C 148	至大通宝	T 49	S X 288	"	2.45	0.24	0.12	0.09	0.56	0.12	3.21	
122	C 149	永楽通宝	W 47	S E 116	"	2.52	0.24	0.12	0.08	0.54	0.12	2.84	
123	C 150	判読不能	U 49	S X 291	"	2.32	—	0.09	—	—	—	2.14	
124	C 151	開元通宝	R 50	S E 118	"	—	—	0.10	—	—	—	1.52	
125	C 152	"	"	"	"	2.45	0.20	0.12	0.06	0.70	0.12	2.70	
126	C 153	聖宋元宝	"	"	"	2.37	0.29	0.12	0.08	0.62	0.12	2.88	
127	C 154	洪武通宝	S 39		II	2.36	0.24	0.14	0.06	0.58	0.14	3.27	
128	C 155	紹聖〇宝	"		"	2.48	0.27	0.12	0.04	0.74	0.12	2.29	
129	C 156	政和通宝	S 38		"	2.44	0.20	0.12	0.05	0.68	0.10	2.34	
130	C 157	無文銭	T 39		"	2.32	—	0.10	—	0.70	—	2.46	

No.	C No.	名 称	出土区	遺構名	層 位	外 径 (直径) cm	外縁幅 cm	外縁厚 cm	内郭幅 cm	孔 幅 cm	内郭厚 cm	重 量 (g)	備 考
131	C 158	判読不能	S 39		Ⅱ	2.36	—	0.13	—	0.73	—	1.56	
132	C 160	開元通宝	T 43		〃	2.38	0.20	0.12	0.09	0.60	0.09	1.29	
133	C 161	熙寧〇〇	R 50	SE 118	フ ク 土	—	0.24	0.12	0.08	—	0.12	1.22	
134	C 162	天聖元宝	Q 41		Ⅱ	2.46	0.24	0.14	0.12	0.65	0.14	2.81	
135	C 163	嘉祐通宝	〃		〃	2.40	0.32	0.10	0.09	0.70	0.09	2.33	
136	C 164	洪武通宝	Q 42		〃	2.37	0.24	0.12	0.06	0.58	0.10	3.24	
137	C 165	元祐通宝	〃		〃	2.40	0.20	0.13	0.10	0.72	0.11	2.99	
138	C 166	皇宋通宝	〃		〃	2.44	0.30	0.08	0.10	0.72	0.09	2.26	内郭加工
139	C 167	至和元宝	〃		〃	2.43	0.27	0.12	0.09	0.73	0.10	2.97	
140	C 168	洪武通宝	〃		〃	2.46	0.33	0.14	0.08	0.50	0.13	3.84	
141	C 169	政和通宝	〃		〃	2.43	0.24	0.13	0.10	0.60	0.09	3.32	伴出
142	C 170	判読不能	〃		〃	2.20	—	0.12	—	0.63	—	2.69	
143	C 171	無 文 銭	〃		〃	1.87	—	0.07	—	0.68	—	0.67	
144	C 172	洪徳通宝	〃		〃	—	0.22	0.12	0.06	—	0.09	2.20	
145	C 173	判読不能	〃		〃	—	—	0.10	—	0.60	—	1.54	
146	C 174	無 文 銭	〃		〃	1.83	—	0.07	—	0.76	—	0.46	伴出
147	C 175	皇宋通宝	〃		〃	2.42	0.22	0.10	0.10	0.74	0.10	3.00	
148	C 177	元祐通宝	〃		〃	2.48	0.23	0.14	0.10	0.67	0.12	2.86	
149	C 178	嘉祐元宝	〃		〃	2.36	0.33	0.13	0.09	0.56	0.11	2.94	
150	C 179	無 文 銭	〃		〃	2.20	—	0.13	—	0.80	—	2.55	
151	C 180	熙寧元宝	〃		〃	2.36	0.28	0.14	0.07	0.54	0.13	3.42	
152	C 181	洪武通宝	〃		〃	2.36	0.20	0.13	0.08	0.56	0.15	2.50	
153	C 182	開元通宝	〃		〃	2.45	0.20	0.13	0.08	0.67	—	3.39	伴出
154	C 183	天聖元宝	〃		〃	2.50	0.20	0.15	0.07	0.65	0.12	3.50	
155	C 184	熙寧元宝	〃		〃	2.50	0.30	0.15	—	0.60	—	4.19	
156	C 185	判読不能	〃		〃	—	—	0.15	—	—	—	0.62	
157	C 186	洪武通〇	〃		〃	—	0.20	0.18	0.09	—	0.17	1.57	
158	C 189	天聖元宝	〃		〃	2.50	0.25	0.10	0.10	0.63	0.12	2.78	
159	C 190	皇宋通宝	R 42		〃	2.45	0.25	0.10	0.08	0.62	0.10	2.80	
160	C 194	開元通宝	Q 42		〃	2.40	0.20	0.10	0.07	0.67	0.10	2.32	
161	C 195	開〇通〇	R 41		〃	—	0.20	0.13	0.05	—	0.08	1.37	
162	C 196	紹聖元宝	P 42		〃	2.41	0.25	0.14	0.07	0.60	0.10	3.42	
163	C 197	無 文 銭	T 44		〃	—	—	—	—	—	—	0.68	
164	C 198	熙寧元宝	V 46	ST 276	フ ク 土	2.37	0.25	0.13	0.10	0.67	0.10	2.10	
165	C 199	熙〇〇宝	R 43		I	2.43	0.20	0.10	0.10	0.67	0.10	1.54	
166	C 200	無 文 銭	S 42	ST 245	フ ク 土	2.20	—	0.09	—	0.72	—	1.81	
167	C 201	開元通宝	R 42	ST 246	〃	2.27	0.24	0.12	0.08	0.64	0.10	2.62	
168	C 202	無 文 銭	S 42	ST 245	〃	1.84	—	0.06	—	0.80	—	0.53	
169	C 203	洪武通宝	Q 42		Ⅱ	2.29	0.17	0.12	0.08	0.52	0.10	2.30	
170	C 204	〃	R 48	SB 64	フ ク 土	2.27	0.30	0.10	0.06	0.59	0.10	2.14	
171	C 205	永樂通宝	Q 49	SB 66	〃	2.37	0.20	0.10	0.09	0.57	0.10	2.17	
172	C 206	〇徳元〇	〃	〃	床 面 直 上	—	0.30	0.12	0.09	—	0.10	1.53	
173	C 207	紹聖元宝	R 49	pit内	フ ク 土	2.40	0.28	0.12	0.09	0.65	0.10	3.00	
174	C 208	〇〇通宝	〃	〃	〃	2.41	0.23	0.10	0.10	0.68	0.10	2.25	

No.	C No.	名称	出土区	遺構名	層位	外径 (直径) cm	外縁幅 cm	外縁厚 cm	内郭幅 cm	孔幅 cm	内郭厚 cm	重量 (g)	備考
175	C 209	天禧通宝	Q 49	S B 63	フ ク 土	2.34	0.24	0.12	0.07	0.58	0.13	3.03	} 伴出
176	C 210	聖宋〇宝	S 49	S E 129	"	—	0.34	0.10	0.02	—	0.10	1.13	
177	C 211	無文銭	T 49	pit内	"	2.08	—	0.08	—	0.72	—	1.57	
178	C 212	"	"	"	IV 上	2.30	—	0.10	—	0.62	—	2.60	
179	C 213	嘉祐通宝	S 48	"	"	2.59	0.33	0.13	0.07	0.67	0.13	2.96	
180	C 214	洪武通宝	T 49	S E 136	フ ク 土	2.20	0.17	0.10	0.04	0.65	0.10	1.89	
181	C 215	至大通宝	T 48	pit内	"	2.21	0.17	0.18	0.08	0.53	0.17	3.60	
182	C 216	無文銭	T 49	S E 136	"	—	—	0.12	—	—	—	0.35	
183	C 217	開元通宝	S 49	"	"	2.37	0.20	0.09	0.06	0.60	0.09	2.17	
184	C 218	永樂通宝	"	"	"	2.42	0.22	0.13	0.10	0.52	0.15	3.16	
185	C 219	元豐通宝	"	"	"	2.43	0.26	0.10	0.10	0.76	0.09	2.62	
186	C 220	無文銭	W 48	pit内	"	1.58	—	0.05	—	1.00	—	0.34	
187	C 221	"	T 48	"	"	2.24	—	0.08	—	0.73	—	1.94	
188	C 222	元豐通宝	S 49	S X 287	"	2.50	0.30	0.13	0.09	0.69	0.11	3.22	
189	C 223	治平元宝	"	"	"	2.40	0.26	0.10	0.08	0.68	0.23	2.48	
190	C 224	〇宋通〇	S 42	S T 246	床面直上	—	0.28	0.10	0.08	—	0.09	1.86	
191	C 225	判読不能	"	S T 245	フ ク 土	2.40	—	0.12	—	0.67	—	1.70	
192	C 226	無文銭	"	S T 246	"	—	—	0.12	—	—	—	0.18	
193	C 227	皇宋通宝	"	S T 245	"	2.41	0.21	0.12	0.05	0.68	—	} 4.76	
194	C 228	判読不能	"	"	"	—	—	—	—	—	—		
195	C 229	元祐通宝	R 43	S T 247	床面直上	2.54	0.37	0.12	0.10	0.54	0.12	3.38	} 接着している
196	C 230	判読不能	Q 42	S E 137	フ ク 土	—	—	—	—	—	—	2.30	
197	C 231	永樂通宝	R 42	S T 246	"	2.40	0.22	0.11	—	0.58	—	2.11	
198	C 232	無文銭	S 43	S T 281	"	1.82	—	0.06	—	0.66	—	0.70	
199	C 233	"	"	"	"	2.30	—	0.09	—	0.70	—	1.93	
200	C 234	"	"	"	"	2.26	—	0.08	—	0.76	—	1.70	
201	C 235	祥符元宝	R 43	S T 247	"	2.34	0.27	0.08	0.11	0.63	0.08	1.37	
202	C 236	無文銭	"	"	"	—	—	0.12	—	—	—	0.90	
203	C 237	天禧通宝	R 42	S T 278	"	2.50	0.33	0.12	0.08	0.60	0.12	3.64	
204	C 238	無文銭	Q 42	S E 137	"	1.66	—	0.06	—	0.10	—	0.37	
205	C 239	判読不能	R 43	S T 247	"	—	—	0.12	—	—	—	0.50	
206	C 240	"	R 42	S T 278	"	2.36	0.23	0.10	—	0.76	—	2.63	
207	C 241	元祐通宝	R 43	S T 247	"	2.44	0.37	0.10	0.08	0.60	0.10	2.46	
208	C 242	"	R 42	S T 280	"	2.43	0.22	0.14	0.10	0.62	0.10	2.90	
209	C 243	皇宋〇宝	R 43	"	"	—	0.24	0.10	0.12	—	0.13	1.36	
210	C 244	無文銭	S 42	pit内	"	2.17	—	0.08	—	0.79	—	1.38	
211	C 245	熙寧元宝	"	"	"	2.34	0.21	0.11	0.08	0.60	0.15	2.22	
212	C 246	皇宋通宝	R 42	S T 280	"	2.48	0.40	0.11	0.07	0.70	0.12	2.67	
213	C 247	景祐〇〇	"	"	"	—	0.18	0.13	0.10	—	0.13	1.85	
214	C 248	〇和〇〇	"	"	"	—	0.29	0.09	0.08	—	0.06	0.66	
215	C 249	無文銭	"	"	"	—	—	0.05	—	—	—	0.16	
216	C 250	政和通宝	Q 42	S T 277	"	2.43	0.18	0.11	0.12	0.63	0.10	2.62	
217	C 251	咸平通宝	"	"	"	2.46	0.30	0.11	0.12	0.60	0.10	2.87	} 伴出
218	C 252	治平通宝	"	"	"	2.40	0.28	0.12	0.05	0.66	0.12	3.05	

No.	C No.	名 称	出土区	遺構名	層 位	外 径 (直径) cm	外縁幅 cm	外縁厚 cm	内郭幅 cm	孔 幅 cm	内郭厚 cm	重 量 (g)	備 考
219	C 253	祥符元宝	R 42	ST 280	フ ク 土	2.48	0.35	0.09	0.09	0.58	0.09	2.23	
220	C 254	無 文 銭	Q 42	SE 137	〃	2.14	—	0.08	—	0.79	—	1.77	
221	C 255	○元通宝	T 44	SE 138	〃	—	0.18	0.13	0.06	—	0.13	0.70	
222	C 256	元豊通宝	Q 42	SE 137	〃	2.40	0.28	0.12	0.08	0.68	0.10	2.63	
223	C 257	無 文 銭	S 43	ST 281	〃	2.22	—	0.09	—	0.66	—	1.91	
224	C 258	判読不能	T 44	SE 138	セクション内 土	2.16	0.22	0.15	—	—	—	0.90	
225	C 259	聖宋元宝	S 43	ST 281	フ ク 土	2.44	0.25	0.12	0.10	0.60	0.11	3.35	
226	C 260	判読不能	〃	〃	〃	—	0.33	0.12	—	—	—	0.26	
227	C 261	元符通宝	S 44	S F 75	焼土下黒色土	2.39	0.27	0.15	0.08	0.62	0.15	3.47	
228	C 262	皇○○宝	S 43	S X 321	フ ク 土	—	0.27	0.15	—	—	—	1.36	
229	C 263	無 文 銭	S 42	ST 246	セクション内 土	1.90	—	0.06	—	0.70	—	0.85	
230	C 264	〃	S 43	pit内	フ ク 土	2.20	—	0.08	—	0.68	—	2.28	
231	C 265	大観通宝	S 42	S X 321	〃	2.44	0.15	0.13	0.07	0.63	0.14	3.14	
232	C 266	〔寧元宝	〃	〃	〃	2.37	0.28	0.13	0.10	0.62	0.11	3.18	内郭加工
233	C 267	嘉祐通宝	Q 42	ST 277	床 面 直 上	2.46	0.20	0.10	0.08	0.70	0.12	1.46	
234	C 268	治平元宝	R 42		IV 上	2.37	0.28	0.13	0.06	0.56	0.12	3.22	内郭加工
235	C 269	元祐通宝	〃	S X 330	pit 内フク土	2.46	0.24	0.12	0.10	0.64	0.11	3.10	
236	C 270	元豊通宝	〃	ST 283	床 面	2.44	0.24	0.10	0.07	0.62	0.12	2.48	
237	C 271	慶元通宝	〃	S B 71	フ ク 土	2.46	0.28	0.12	0.06	0.64	0.11	3.16	背文「四」
238	C 272	聖宋元宝	〃	〃	〃	2.40	0.23	0.12	0.08	0.64	0.10	3.07	
239	C 273	○宋○○	〃	SE 141	〃	—	0.30	0.12	0.05	—	0.11	0.68	
240	C 274	皇宋通宝	T 44	S X 318	〃	2.43	0.46	0.12	0.10	0.68	0.10	2.56	
241	C 275	祥符通宝	Q 42	SE 137	セクション内 土	2.46	0.30	0.10	0.08	0.64	0.10	2.71	
242	C 276	永楽通宝	S 42	S X 330	フ ク 土	2.46	0.21	0.12	0.07	0.58	0.11	2.11	
243	C 277	判読不能	〃	〃	〃	—	—	0.12	—	—	—	1.64	
244	C 278	至道○○	〃	〃	〃	—	0.29	0.12	0.08	—	0.11	0.74	
245	C 279	無 文 銭	R 42	ST 283	〃	—	—	0.07	—	—	—	0.35	
246	C 280	〃	〃	〃	〃	—	—	0.08	—	—	—	0.16	
247	C 281	祥符通宝	T 48		埋 土	2.47	0.42	0.10	0.07	0.60	0.10	3.55	
248	C 283	洪武通宝	R 49		〃	2.37	0.16	0.09	0.09	0.59	0.12	1.83	
249	C 284	朝鮮通宝	R 50		〃	—	0.23	0.10	0.09	0.56	0.10	2.42	
250	C 285	元豊通宝	〃		〃	2.36	0.30	0.07	0.08	0.64	0.07	1.99	
251	C 286	判読不能	〃		〃	2.27	—	0.10	—	0.63	—	1.94	
252	C 287	無 文 銭	V 45	pit内	〃	—	—	0.04	—	—	—	0.76	
253	C 288	元祐通宝	Q 49		〃	2.42	0.29	0.14	0.07	0.56	0.15	3.55	
254	C 289	判読不能	R 49		〃	2.38	—	—	—	—	—	2.42	
255	C 290	〃	〃		〃	—	—	—	—	—	—		} 伴出
256	C 291	治平元宝	〃		〃	2.46	0.28	0.12	0.07	0.60	—	5.76	
257	C 292	判読不能	Q 49		〃	2.20	—	0.10	—	0.70	—	1.48	
258	C 295	無 文 銭	V 46	SE 111	フ ク 土	2.22	—	0.11	—	—	—	1.88	} 伴出
259	C 296	〃	〃	〃	〃	2.20	—	0.12	—	—	—	1.45	
260	C 297	〃	〃	〃	〃	2.20	—	0.11	—	—	—	1.55	
261	C 298	〃	〃	〃	〃	—	—	0.11	—	—	—	0.96	

Ch. 103 落城以後藩政期の銭貨

No	C No	名 称	グリッド	遺構名	層 位	外 径 (直径) cm	外縁幅 cm	外縁厚 cm	内郭幅 cm	孔 幅 cm	内郭厚 cm	重 量 (g)	備 考
1	C 18	寛永通宝	R44		I	2.34	0.25	0.08	0.09	0.57	0.09	1.97	
2	C 188	〃	P42		II	2.40	0.23	0.11	0.06	0.57	0.10	2.79	
3	C 192	〃	R42		〃	2.50	0.25	0.10	0.07	0.60	0.09	2.64	背文「文」

Ch. 104 明治以降現代までの銭貨

No	C-No	名 称	鑄 年	グリッド	遺構名	層 位	No	C-No	名 称	鑄 年	グリッド	遺構名	層 位
1	C 5	十 銭	大正9年	Q42		I	18	C 75	一 銭	大正10年	U48		I
2	C 11	一 銭	昭和9年	T39		〃	19	C 77	五 銭	昭和14年	T48		〃
3	C 13	〃	大正11年	Q39		〃	20	C 84	十 銭	〃 13年	P48		〃
4	C 14	〃	〃 7年	T40		〃	21	C 89	一 銭	明治9年	R50		〃
5	C 15	〃	〃 10年	R43		〃	22	C 92	十 銭	大正12年	Q48		埋 土
6	C 16	五十銭	昭和22年	〃		〃	23	C 96	一 銭	〃 7年	R49		II 下
7	C 17	一 銭	明治10年	〃		〃	24	C101	五十銭	昭和21年	R51		I
8	C 19	〃	大正9年	〃		〃	25	C111	一 銭	大正11年	R49	SX278	フク土
9	C 22	二 銭	明治13年	P44		〃	26	C126	〃	昭和16年	R48	SX275	〃
10	C 23	一 銭	大正10年	〃		〃	27	C159	〃	大正13年	T44		II
11	C 26	五 銭	〃	O44		〃	28	C176	〃	〃 9年	Q42		〃
12	C 28	五十銭	昭和12年	W46		〃	29	C187	〃	昭和10年	P42		〃
13	C 36	〃	大正13年	W47		〃	30	C193	十 銭	〃 15年	R42		〃
14	C 37	一 銭	〃 9年	〃		〃	31	C283	一 銭	大正8年	Q48		埋 土
15	C 39	十 銭	不 明	〃		II	32	C293	五 銭	〃 11年	Q49		〃
16	C 65	半 銭	明治20年	U48		I	33	C294	一 銭	〃 10年	内館		表 採
17	C 74	一 銭	〃 16年	〃		〃	34	C299	〃	〃 8年	W45		埋 土
							35	C132	十 円	昭和26年	Q48	SX275	床面直上

6. 木製品・漆塗り製品等 (PL.33、Fig.61)

出土木製品の大部分はS E138から出土したもので、折敷・曲物底・木槌・漆塗り椀・杵・炭化痕のある板等であり、すでにP53の所で報告済である。これ以外に漆塗り椀と考えられる被膜部分が若干存在するので報告する。

(330)は推定口径10cm、推定高4cm、底径5.5cmを測る漆塗り椀である。底と口唇部が黒漆のほかは朱漆が塗られている。がしかし、残存する木質部が炭化状態を呈するところから本漆器は火を受けているとみられ特に強い部分は朱色が漆黒色に変化している。口縁下1.4cmの部分に沈線様の凹が廻っている。S X308の覆土から出土している。

(331)はまったくの被膜だけであり、内面朱漆・外面黒漆と考えられ底に朱筆で「上」と

いう文字が書かれている。S E 118の覆土から出土している。

(332) も被膜だけであり、内面朱漆・外面黒漆が塗られ、外面胴部には朱漆による花状の文様が認められる。高台部分も若干残存し、底径は5 cm前後と推定される。S E 118覆土出土。

(333) は板状の木製品の一面に朱漆、もう一面に黒漆を塗った例で、幅2 cm厚さは1 cm弱と推定される。膳や饗応具の部分品であろうか。V 47区トレンチ第IV層出土。

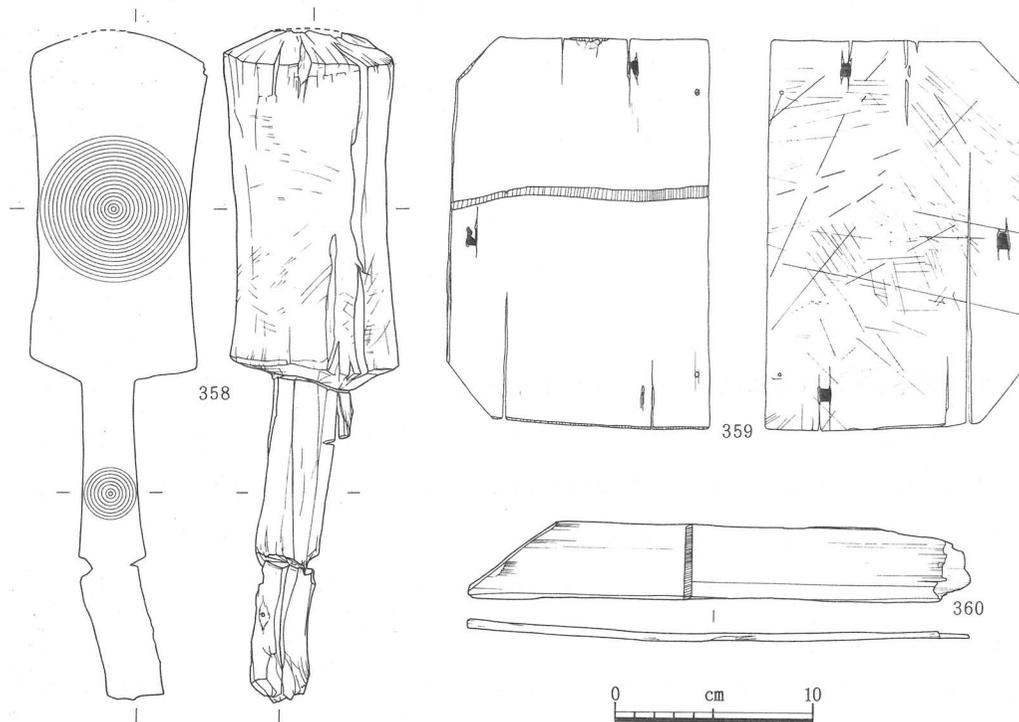
(334) は皮札に黒漆を塗ったもので、半分ずつ貼り重ねており右列の孔と左列の孔にズレは認められない。推定幅(1個体)は約2 cm、高さは6 cm前後と考えられる。

以上の他に漆器被膜として取り上げたものは54個ほどあり、一部には文様の認められる碗残片や、鎧の一部ではないかと推定される皮に黒漆を塗った例がある。しかし、大部分は2~3 mmの細片であるため報告は割愛する。

7. その他の出土遺物

他に城館期の遺物として注目されるのは炭化米(粳)、骨類、貝類があるものの詳細な鑑定を受けていないため報告を後日に譲りたいと思う。

Fig. 61 木製品実測図



Ch.105 木製品観察表

PL.No	Fig.No	遺物No	名称	出土区	遺構名	層位	計測値(長さ×幅×厚さ)cm	特徴	備考
11-(e)	61-359	M61	折敷	T44	SE138	粹内フク土	20.00×(13.00)×0.50		
—	61-360	M58	加工桁	—	—	粹内粘土層	(25.00)×(3.50)×0.30		
—	—	M57	焼木	—	—	—	(33.00)×(9.00)×(1.00)		
—	—	M59	曲物の底	—	—	粹内フク土	(46.50)×(14.00)×(1.20)	焼成痕有	
11-(f)	61-358	M60	木づち	—	—	—	頭部径 柄部分径 (35.00)×8.50×3.50		
11-(g)	—	M63	碗	—	—	—	—	内面にわずかに朱漆が残っている	
33-331	—	M23	漆器	R50	SE118	フク土	—	朱漆の模様有	
33-330	—	M30	—(碗)	T48	SX308	—	—	内外面朱漆、焼痕有	
33-332	—	M16	—	R50	SE118	—	—	外面に朱で菊花文を施している	
33-333	—	M68	—	V47	—	IV上	—		
33-334	—	NR31	革札	R48	SE126B	フク土	—	内外面黒漆ぬり	

8. 城館期以前の出土遺物 (PL.26、PL.33、Fig.62)

城館期以前の出土遺物としては、10世紀頃と考えられる土師器・須恵器の類と擦文土器片、縄文時代(土器の伴出がほとんどないため時期不詳)の石斧・石棒等がある。

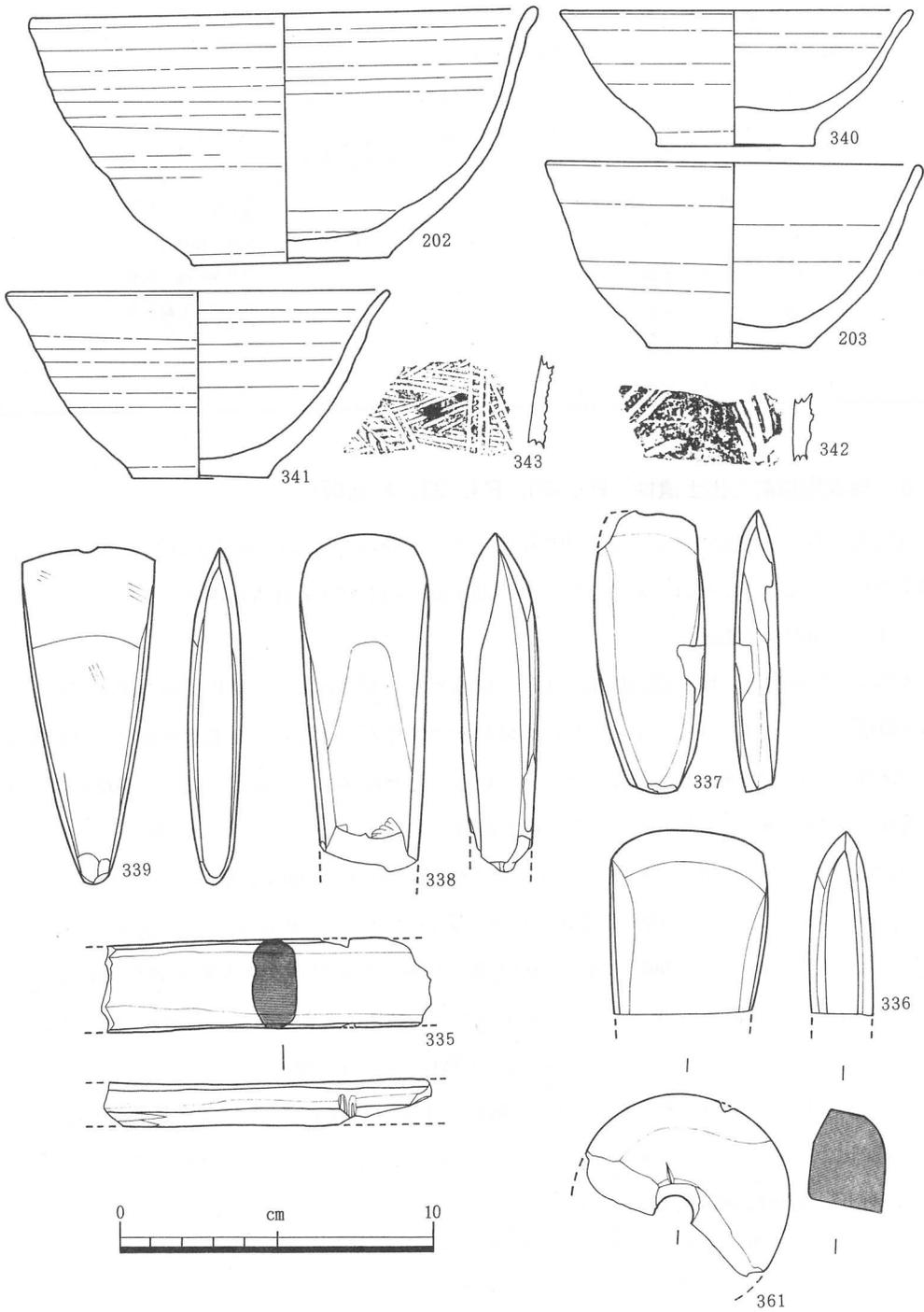
a 土師器・須恵器

土師器と須恵器は、城館期の地業によって破壊された製品が多く、細片のみの出土でみかん箱2個ほど出土している。しかし、幸いにも城館期の地業を受けなかった遺構や地区(S D90・S D96等)からは実測可能な製品が出土している。土師器坏は4点図示した。(202)は口径16.5cm、高さ8.3cm、底径6.4cmの大形の碗であり、内外面ともにロクロ成形無調整で底は回転糸切底である。(203)は口径12.4cm、高さ6.0cm、底径4.4cmの中形品でロクロ成形無調整、回転糸切底である。(202)は全体の色調が黄白色の明るい色に対し、(203)はくすんだ暗灰色を呈している。(340)は底が肉厚な皿形に近い器形でロクロ成形無調整回転糸切底であり、須恵器状の暗灰色の焼き上がりを呈する所と、酸化状態を呈する二器面が認められる。口径11.4cm、高さ4.5cm、底径5.2cmを測る。(341)は器面が擦りへったように砂っぽい器膚を呈し、ロクロ成形無調整回転糸切底の碗形である。口径12.2cm、高さ5.9cm、底径5.1cmを測る。以上の坏の胎土には多量の石英が均等に混入し、同一粘土による焼成がなされたとき

Ch. 106 土師器坏観察表

PL.No	Fig.No	遺物No	出土区	遺構名	層位	胎土	特徴	備考
33-340	—	P1256	T43	—	IV上	明黄褐色	糸切り底	
33-341	—	P1921	U44	—	—	—	—	
26-202	62-202	P 924	V46	SD 92	フク土	黄褐色	回転糸切り底	
26-203	62-202	P2031	T48	SD 96	—	乳褐色	—	

Fig. 62 城館期以前の遺物



ることができる。

b 擦文土器 (P L . 33—342・343、Fig.62—342・343、Ch.107)

擦文土器は甕形土器の胴部片 2 点が出土している。

Ch. 107 擦文土器観察表

PL. No.	Fig. No.	遺物No.	出土区	遺構名	層位	胎土	文様	特徴	備考
33-342	—	P 623	W46		I	褐色			
33-343	—	P2051	U48	SX312	フク土	赤褐色			

c 縄文時代石器

石斧が 4 点出土しており、いずれも磨製のものである。(339)は、刃幅4.3cm、長さ10.7cmで柄装着部がすぼまる形状を呈する。表裏側面ともに無数の擦痕が認められる。(338)は、刃幅4.0cm、長さは基部が欠損しているものの11cm前後、厚さ3.9cmと肉厚な石斧である。

(336)は、中央部から基部にかけて欠損している。刃幅は5.0cm、刃先から内側へ約1cm前後の部分で鑄状に面取りして刃先を整えている。(337)は石質が良好でないため、表面の凹凸が顕著である。刃幅3.3cm、長さ9.0cmの小形製品である。(335)は、石棒と考えられ、長径2.8cm短径1.4cmの楕円状の断面形を有する。

その他、(361)は有孔円盤状石製品とでも言うべきもので、径7.0cmを測る製品である。なお石質については詳細な鑑定を受けていないため、後日報告したいと思う。

Ch.108 縄文時代石器観察表

PL. No.	Fig. No.	遺物No.	名称	出土区	遺構名	層位	計測値(長さ×幅×厚さ)cm	特徴	備考
33-335	62-335	S75	石棒	U48	SE 128	フク土	(10.52)×2.90×1.44		
33-336	62-336	S97	石斧	T44	SE 138	セクション内フク土	(5.86)×4.82×2.08		
—	62-361	S15	加工製品	V46		II	6.89×(4.15)×2.57		
33-337	62-337	S34	石斧	R50		I	8.93×3.36×1.34		
33-338	62-338	S32	〃	P48		〃	(10.82)×3.80×2.36		
33-339	62-339	S100	〃	T44	SE 138	枠内フク土	10.70×4.33×1.54		

V ま と め

本年度の調査は内館平場における2年目ということもあり、昭和59年度調査区の東・南・西側隣接地を実施した。それによって内館東半部における遺構配置・遺物出土状況については、かなりの部分で適確な把握がなされるようになったと思われる。特にS B 38（昭和59年度調査の礎石建物跡）を中心とする、掘立柱建物跡の配置をみると、建て替えによる基本軸の相違がそのまま年代的な相違を考える上で有効な視点になるのではないかと考えられ、北館とはだいぶ様相が違ふと推測している。つまり、北館の建物跡配置はある程度「屋敷割り」の概念を含んだブロック別構成を示すのに対し、内館の場合は同心円の配置を示すのではないかという仮説である。今後、西側の調査を進めた段階で次第に明らかになるであろう。

検出遺構の面では、掘立柱建物跡、竪穴建物跡、井戸跡、溝跡等とともに、いわゆる性格・使用目的のはっきりしない小竪穴遺構・竪穴遺構・礎石列が存在し、遺構の全体像が把握しづらい事実も認めざるを得ない。また、遺構からの出土遺物をもみても、S E 118で示した一括廃棄の染付群、S E 138出土の木製品等を除けばとりたてて注目できる出土状況もみあたらない。

しかしながら、S E 138の覆土堆積状況で認められたように、遺構の構築時期と廃絶時期が出土陶磁器類の相違によって明確化する状況も感知できた。それは、北館にて確認した15世紀後半代の遺物（たとえば美濃・瀬戸縁釉小皿）と16世紀前半代の遺物（主として染付等）および16世紀後半代の遺物（唐津・志野等）が内館においては北館以上に明確な状況で出土していることである。遺構の時期別変遷を考える上で、今後は遺構のセット関係（掘立柱建物跡と竪穴建物跡・井戸跡の基本軸把握・距離関係等）と併行して遺物の出土状況把握という両面からの道が拓けた期待感を有している。

出土遺物の面で見ると、陶磁器類については総出土破片数のうち中国・朝鮮産の搬入品が60%近くに達し日本産の搬入品は40%強である。この出土率は昭和59年度調査分と近似し、北館よりも内館が城館形成期の古い段階から成立していた事実と考える一因でもあった。今回の報告にあたっては、中国・朝鮮産と日本産の各製品も同じく「舶載品」であるという概念に基づいておこなった。この事は陶磁器の組み合わせ（セット）がある程度年代差・時期差を示すという消費地遺跡の発掘成果に依拠している事実とともに、組み合わせ（陶磁器と土器を含む）自体が文化圏ないしは政治的構造範囲を示すのではないかという筆者の仮説に基づいた使用であることを御理解いただきたい。特に、陶磁器類の観察を続けるに従って一部の土師質土器を除けば、地元で生産された類は皆無であり、北日本の地では中国産と日本産の製品区別に大きな意味を有せず、交易の観点からは搬入品の一部を構成するにすぎない（最も前述の時代・年代決定の段階・生活形態の差異を推測する段階では重要である。）という視点をとったのである。

陶磁器類を具体的にみてゆくと、青磁の場合は無文碗、白磁は内湾小皿、美濃瀬戸灰釉では縁釉小皿と同鉢、播鉢については越前よりも珠洲の出土率が高くなっている。しかし、志野・黄瀬戸・唐津というような落城期に搬入されたとみられる器種も存在し、内館については15世紀後半から16世紀末まで城館期全時期に亘って主要な位置を占めていたと考えられる。とりわけ13～14世紀に比定される白磁碗や瀬戸灰釉瓶子等は伝世品の意味を強く有するものであり、内館に居住する人々の階層的位置を考える上で有効である。

今回、土師質土器（かわらけ）として報告した資料については、製作年代が城館期以前である可能性が高く、特に手づくね形態の製品は平泉出土の資料と類似しており、浪岡城跡が12世紀後半から13世紀前半にかけて外ヶ浜方面への古道の一面を形成していたことに留意する必要があると考えられる。

他に鉄製品・銅製品・石製品・木製品等の各種遺物の出土状況は、これまでの調査と同様で特別に注意すべき点は少ない。今後、総括報告の段階で詳細な検討を行うこととする。なお、陶磁器類の破片数統計表を載せておくので活用願いたい。

Ch.109 陶磁器類破片数集計表

産地	名称	器形	数量	小計	中計	合計	出土率				
中国	青磁	碗	360	525	1,430		58.9	100%	36.7	100%	68.6
		皿	130								24.8
		盤・他	35								6.6
	白磁	皿	371	406					91.4		
		碗	24						5.9		
		小杯・他	11						2.7		
	染付	皿	390	482					80.9		
		碗	87						18.0		
		他	5						1.1		
	鉄・褐釉	壺	12	12					0.8		
赤絵	皿	3	3	0.2							
朝鮮		碗	2	2	0.1						
日本	美濃戸 (灰釉)	皿	182	242	998	2,428	41.1	100%	24.2	100%	75.2
		鉢	9								3.7
		瓶子	16								6.6
		壺	13								5.3
		卸皿	6								2.5
		他	16								6.6
	美濃戸 (灰釉)	碗	58	80					72.5		
		皿	7						8.7		
		壺	13						16.2		
		他	2						2.5		
	志野	皿	22	22					2.2		
	黄瀬戸	皿	5	5					0.5		
	唐津	皿	56	58					96.5		
		碗	2						3.5		
	珠洲	甕	11	52					21.1		
		播鉢	31						59.6		
		他	10						19.2		
	越前	甕	145	159					91.1		
		播鉢	14						8.9		
	瓦質土器	火鉢	95	102					93.1		
		香炉・碗	7						6.9		
	産地不詳 陶器	播鉢	186	239					77.8		
		浅鉢	11						4.6		
他		42	17.6								
かわらけ	皿	39	39	3.9							

＝＝＝ 弔 意 ＝＝＝

1987年6月6日三上次男氏が逝去されました。
浪岡城跡出土の陶磁器を丹念に手に取り、
ルーペを近づけていた姿が目には浮びます。
特に、'85年11月に当浪岡町で開催した
中世考古学シンポでは御多忙中にもかかわらず、
有意義な御助言を賜わり、担当者として
望外の喜びであったことを懐しく思い出します。
北日本の中世遺跡調査にあたった発掘担当者が、
陶磁器という重要な考古資料を
歴史的価値を有するものとして把握し、
とりわけ東アジア史における陶磁交易の観点から
御教授いただいた
故三上次男先生
先生の在天の霊に対し、
万感の思いをこめて哀悼の意を表します。

1987. 11. 3

写 真 图 版

PL.1 発掘調査作業風景



(上) A区南部 (北から)

(下) B区 (東から)

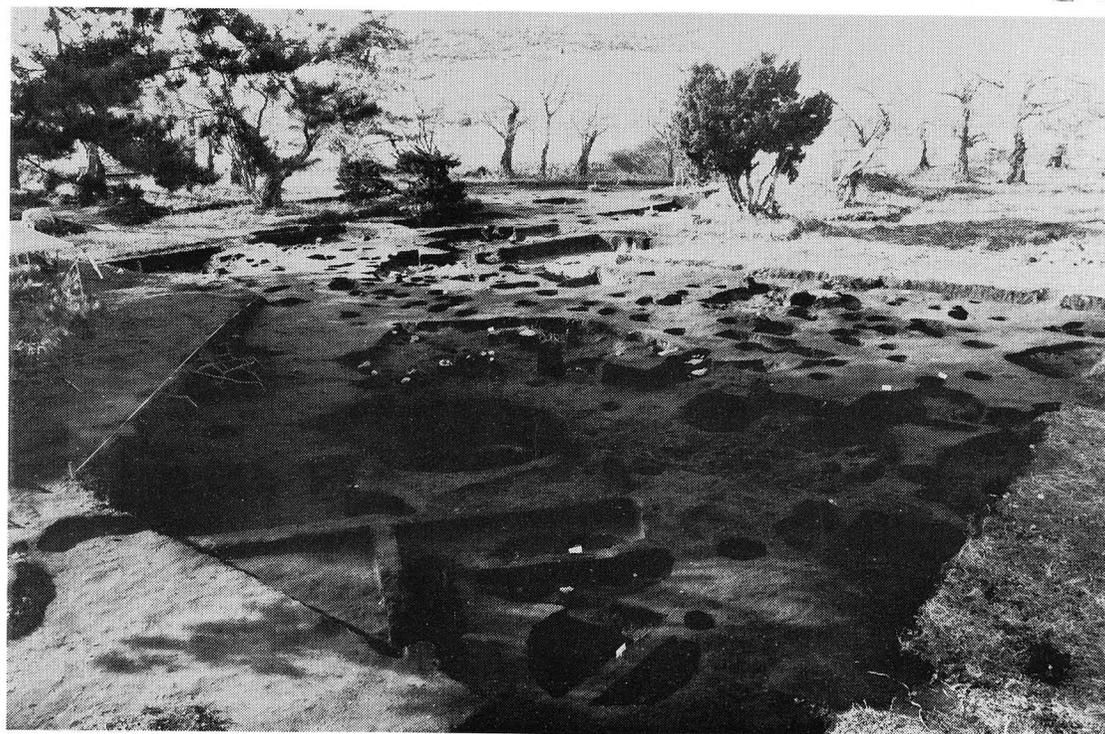
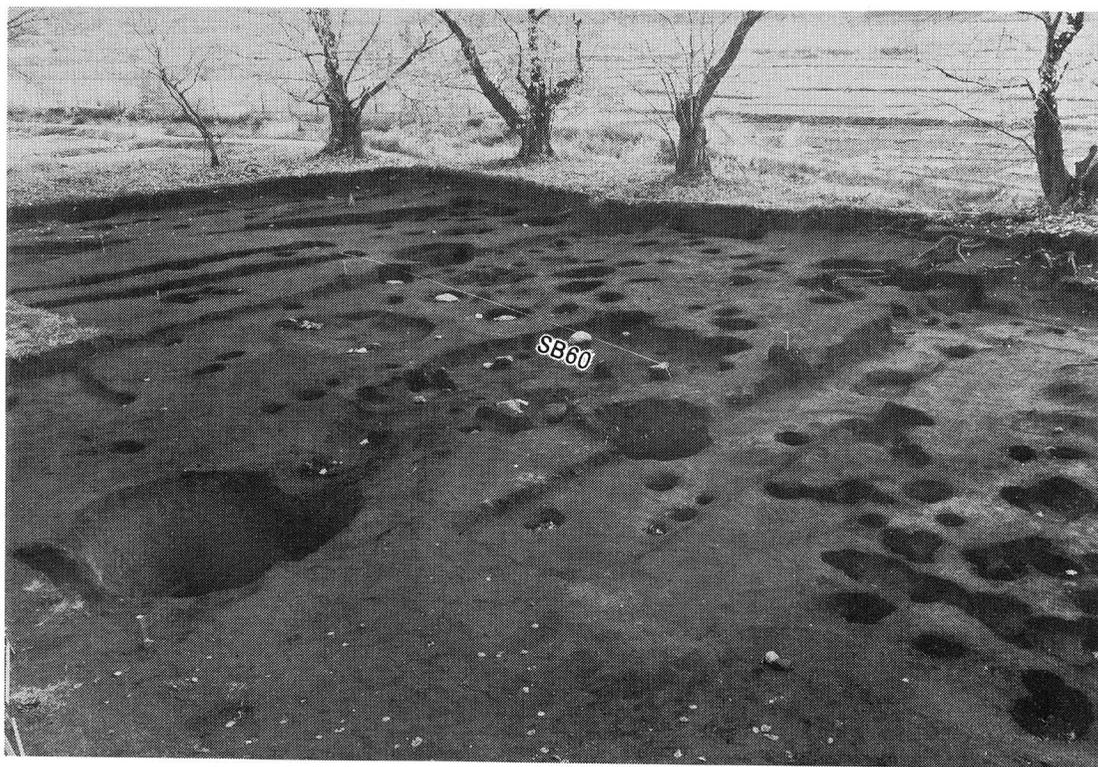
PL. 2 発掘調査区全景(1)



(上) A区北部 (西から)

(下) A区中央部 (北西から)

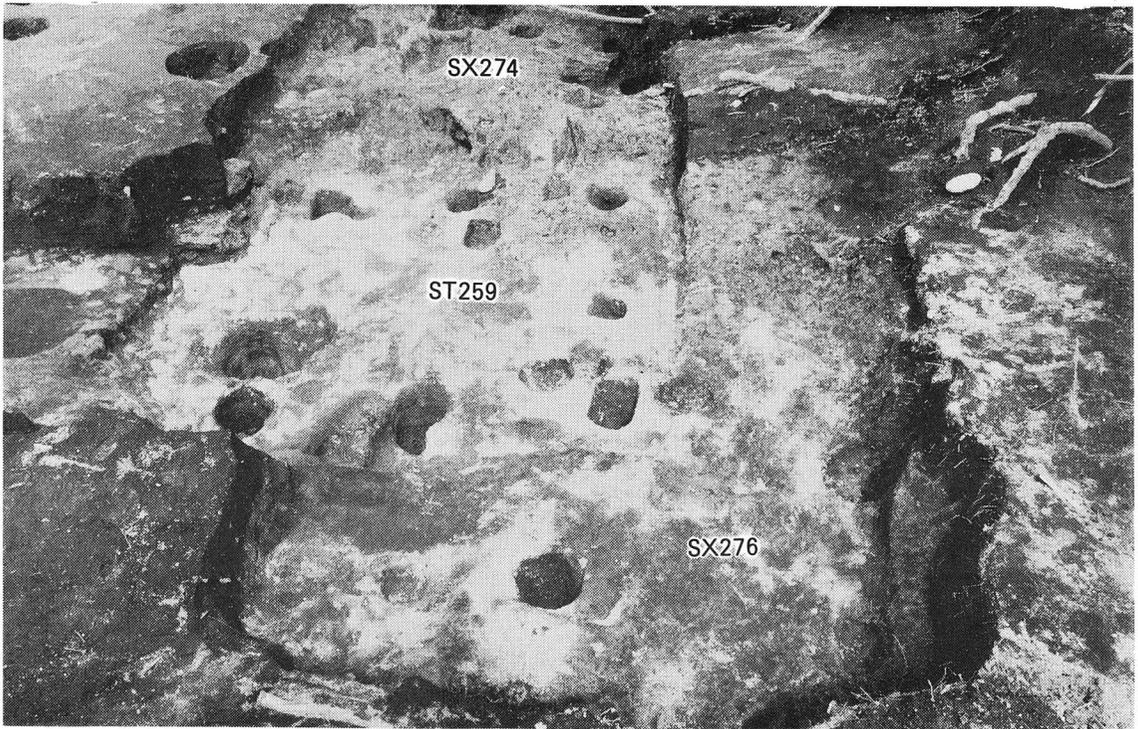
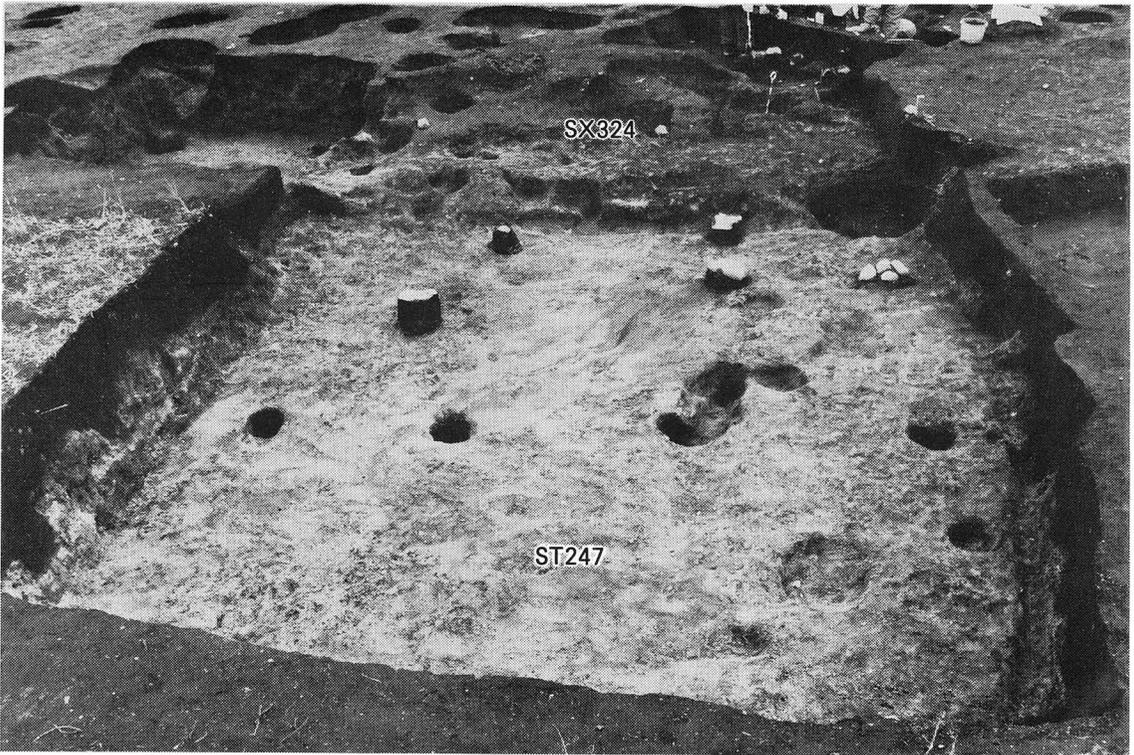
PL. 3 発掘調査区全景(2)



(上) A区南部 (北西から)

(下) B区 (南東から)

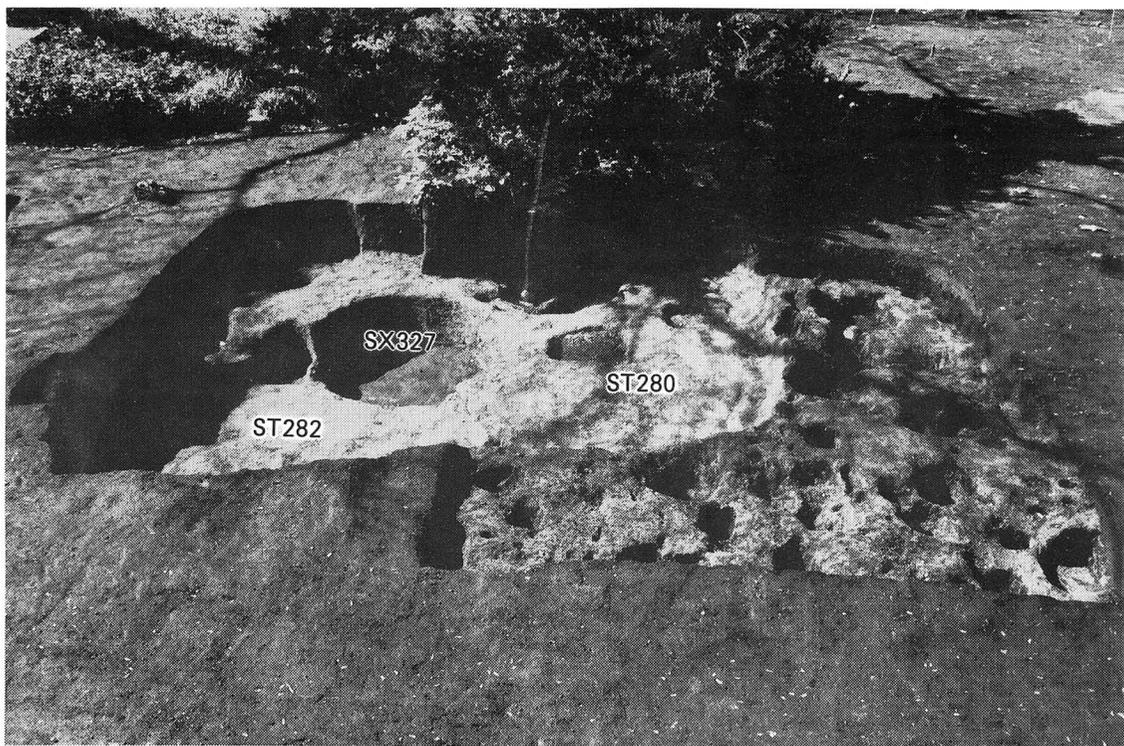
PL.4 竪穴建物跡(1)



(上) ST247.SX324

(下) ST259.SX274-276

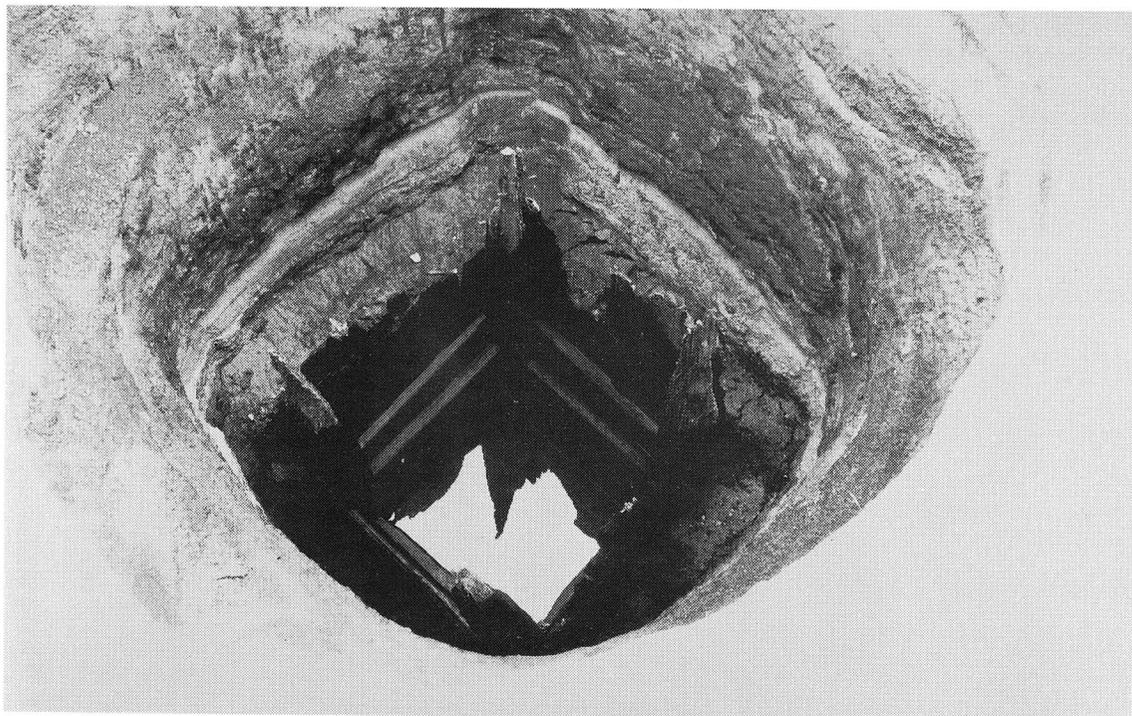
PL.5 竖穴建物跡(2)



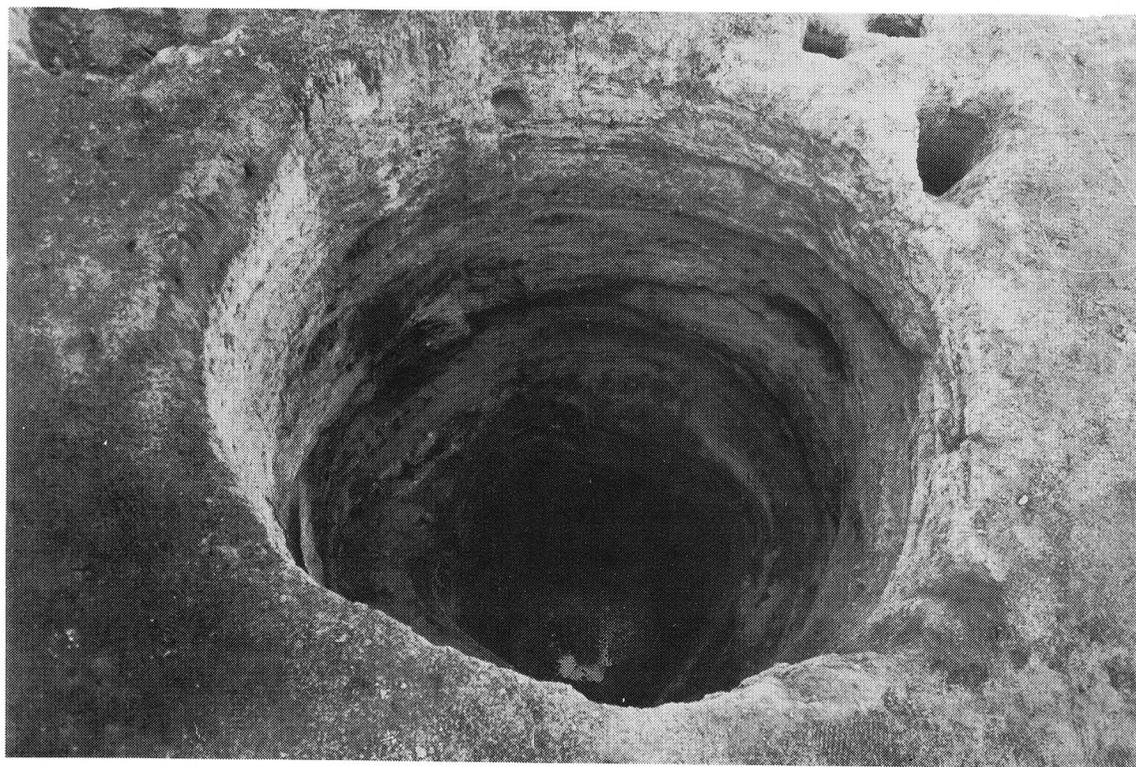
(上) ST280-282-SX327

(下) ST281

PL.6 井戸跡(1)

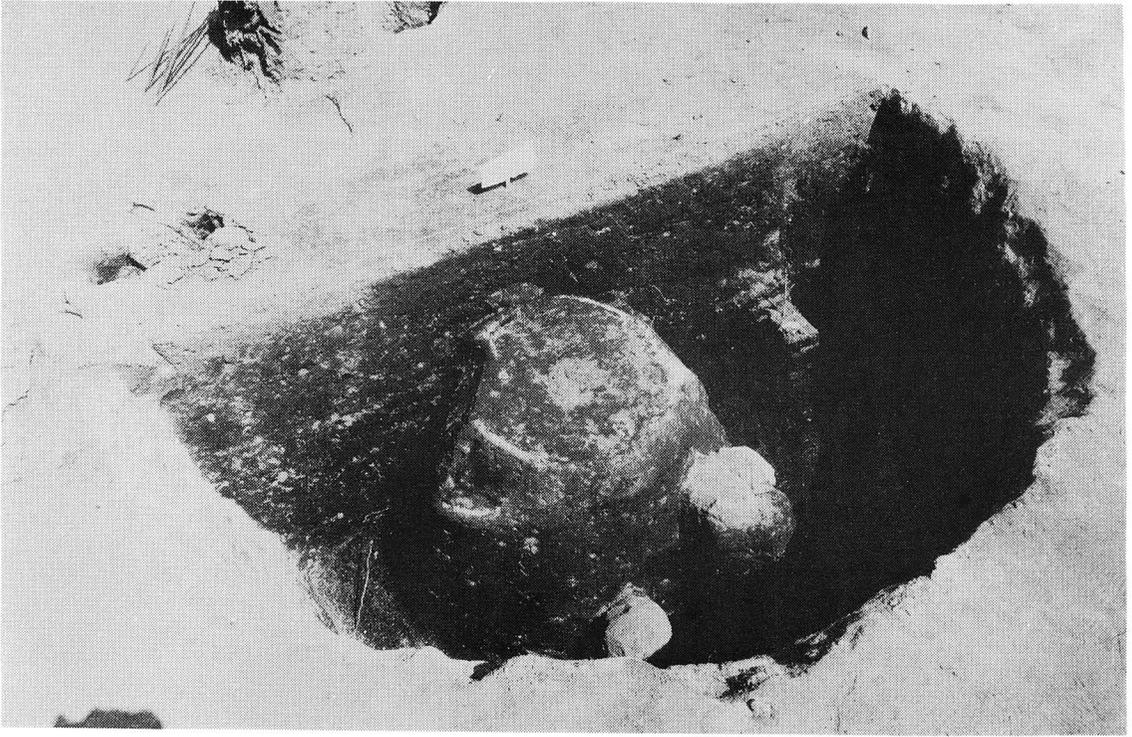


(上) SE111



(下) SE118

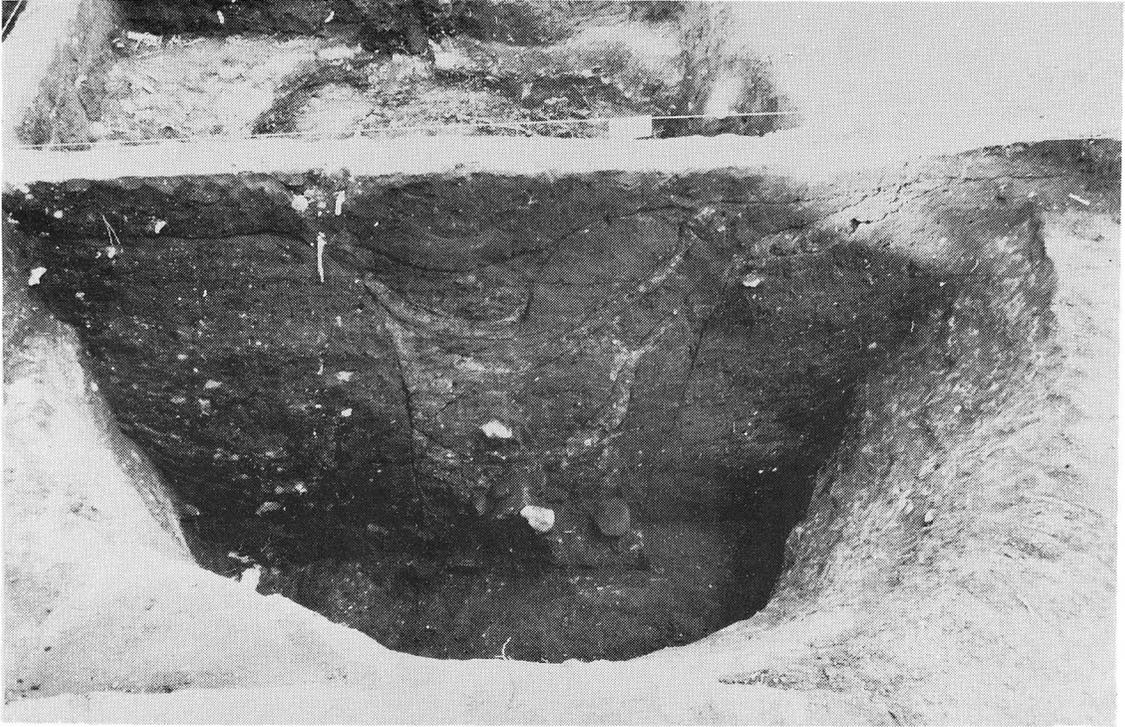
PL.7 井戸跡(2)及び井戸内焼土



(上) SE121・SF73

(下) SF73

PL.8 井戸跡(3)



(上) SE138覆土層序

(下) SE138 (隅柱横棧型木枠)

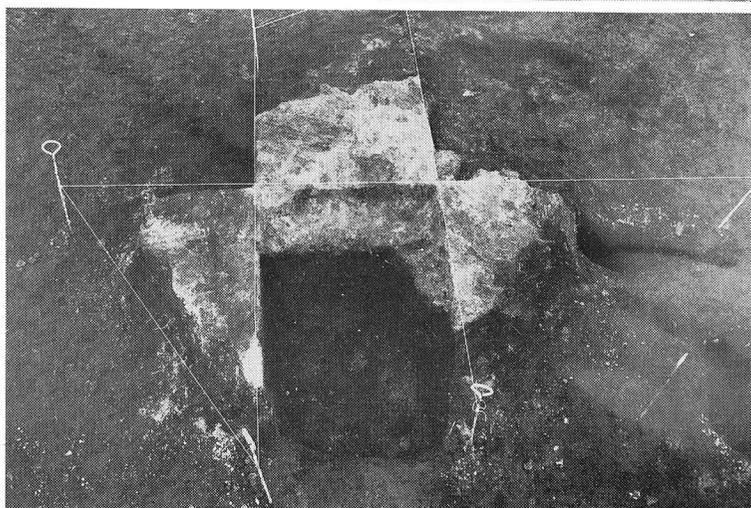
PL.9 溝跡・焼土遺構



(a) SD94 (南から)

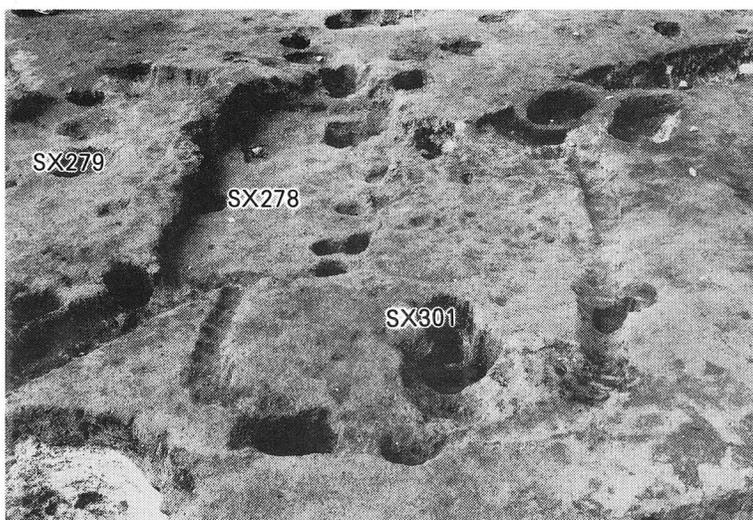


(b) SD95 (西から)



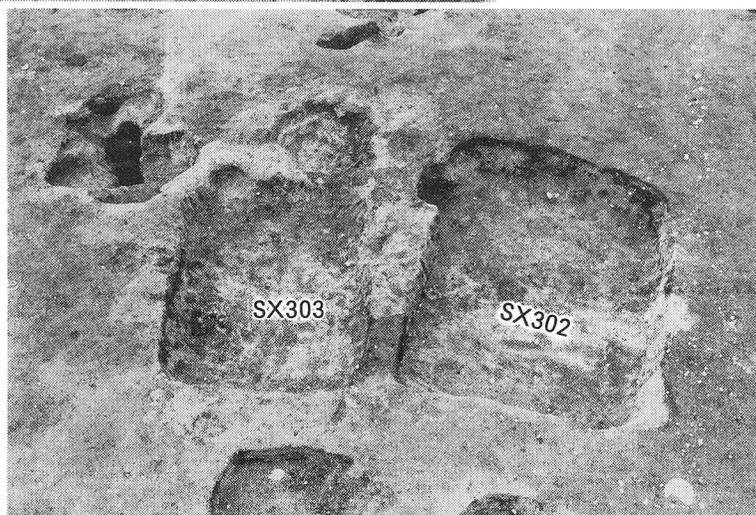
(c) SF75 (南から)

PL.10 竪穴遺構



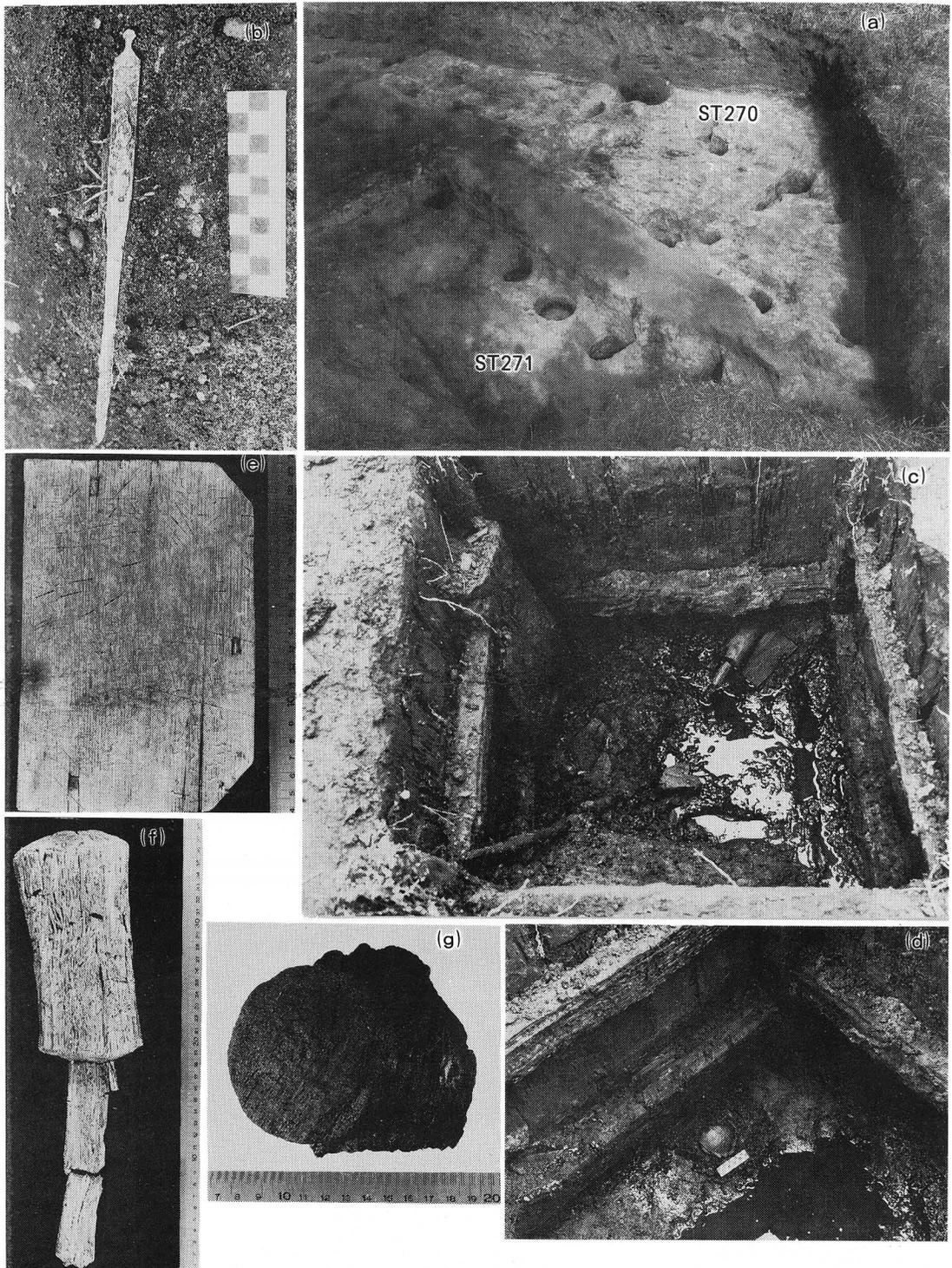
(a) SX278-279-301

(b) SX302-303



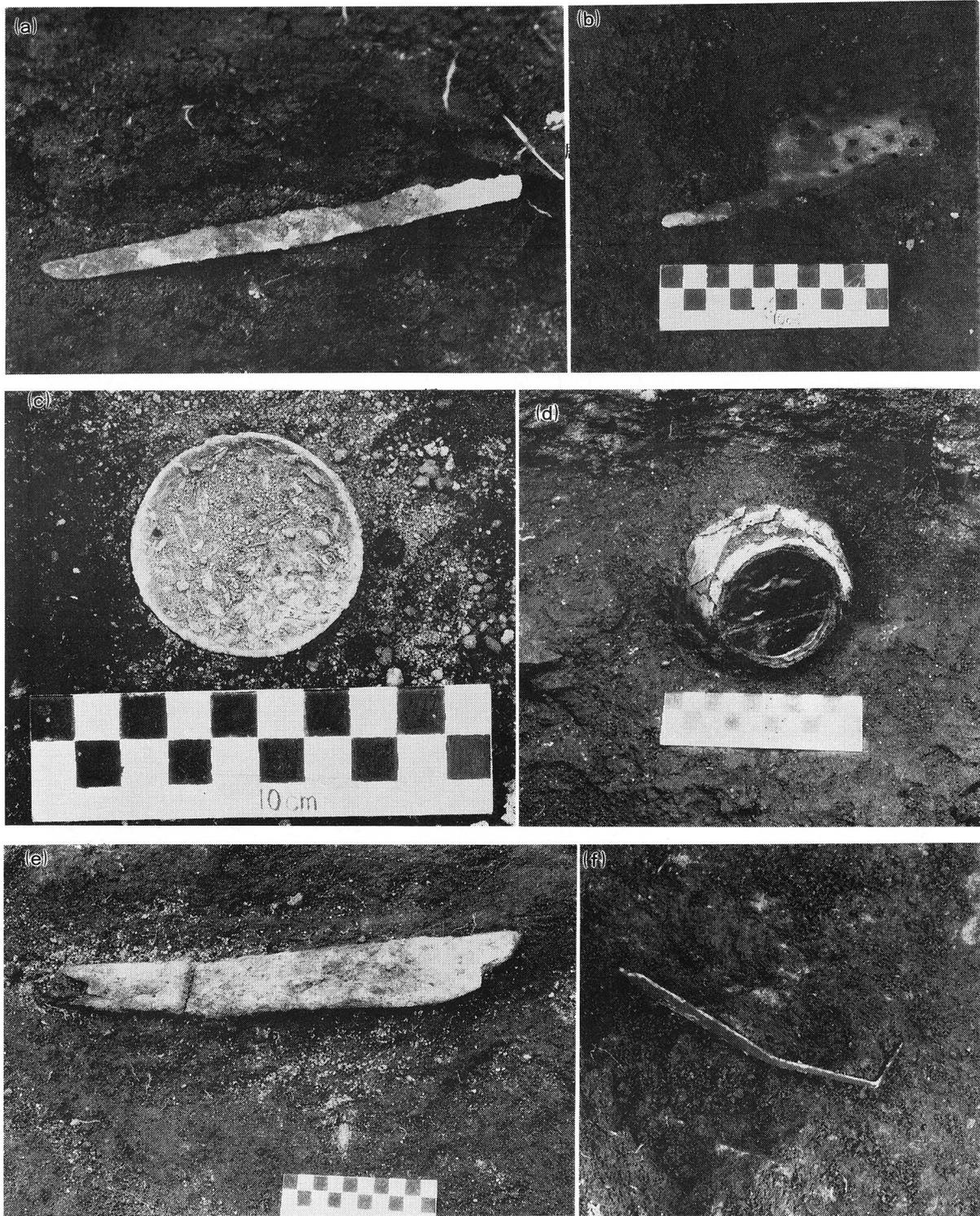
(c) ST245 (南から)

PL.11 遺構と遺物



(a) ST270-271 (b) ST270覆土出土筭 (c) SE138木槌・折敷出土状態
 (d) SE138出土漆塗り椀 (e) SE138出土折敷 (f) 同木槌 (g) 同漆塗り椀

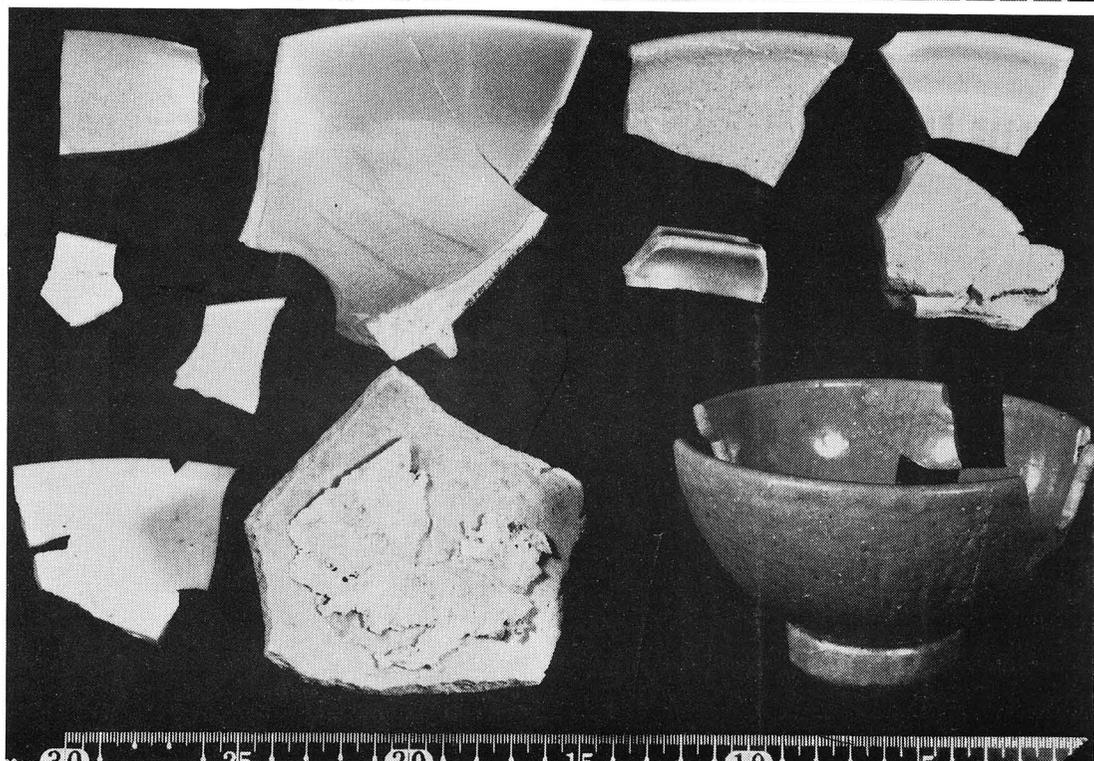
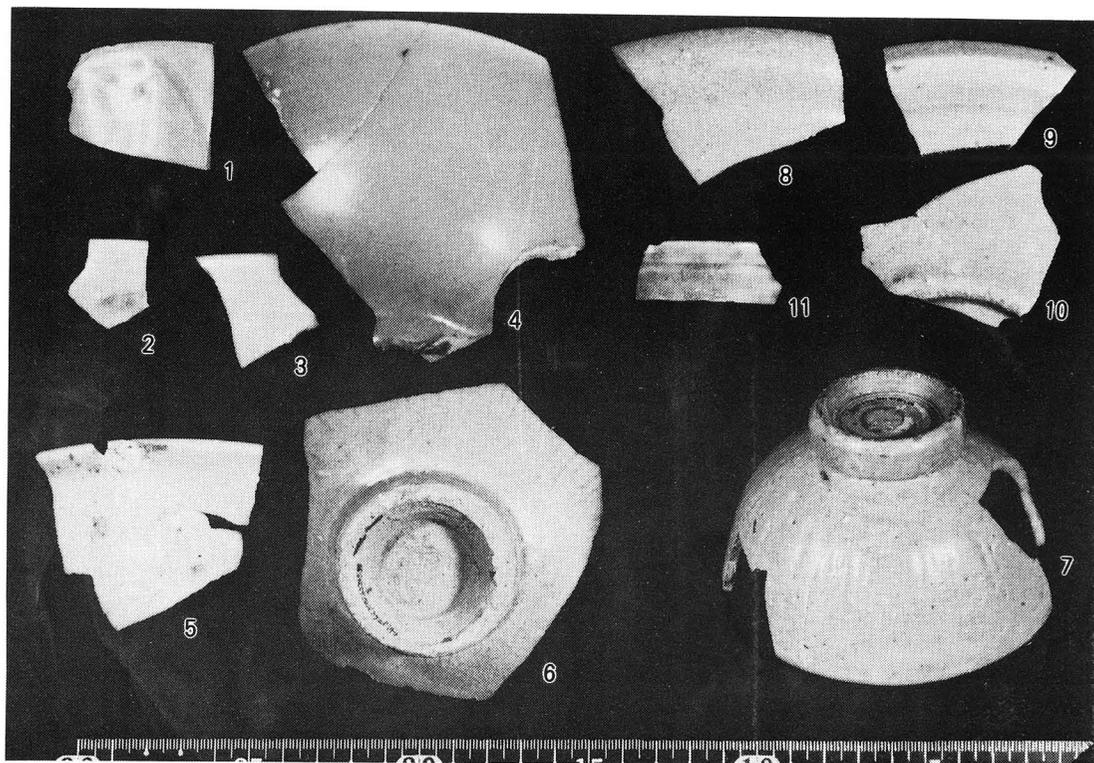
PL.12 遺物出土狀態



(a) SE110出土小刀
(d) SX308出土漆器

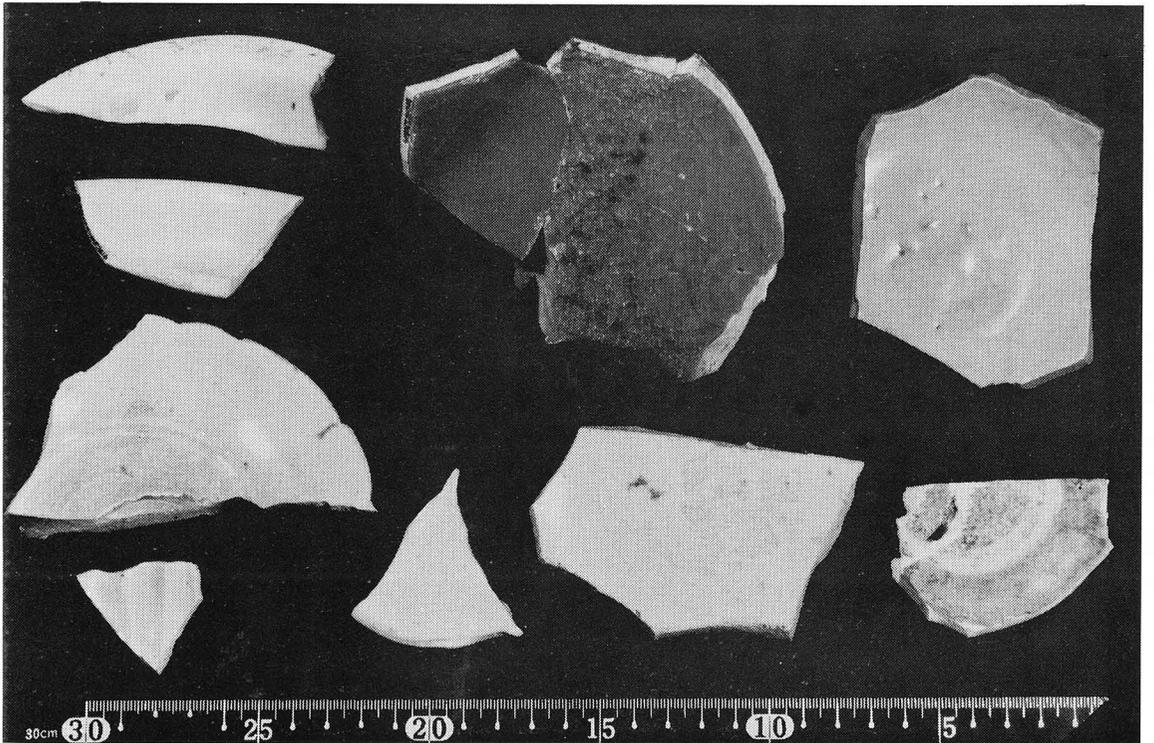
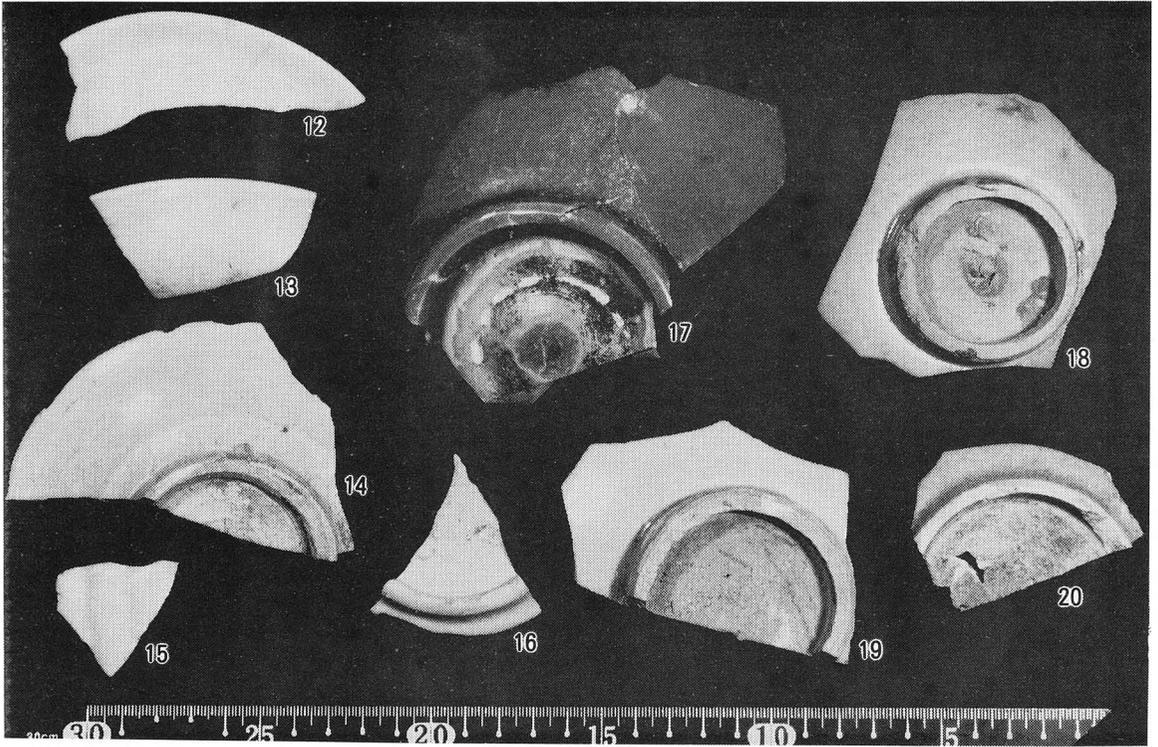
(b) SE111出土鉄製品
(e) SX287出土鉞刀

(c) SE129出土銅製小皿
(f) ST279出土銅製筭



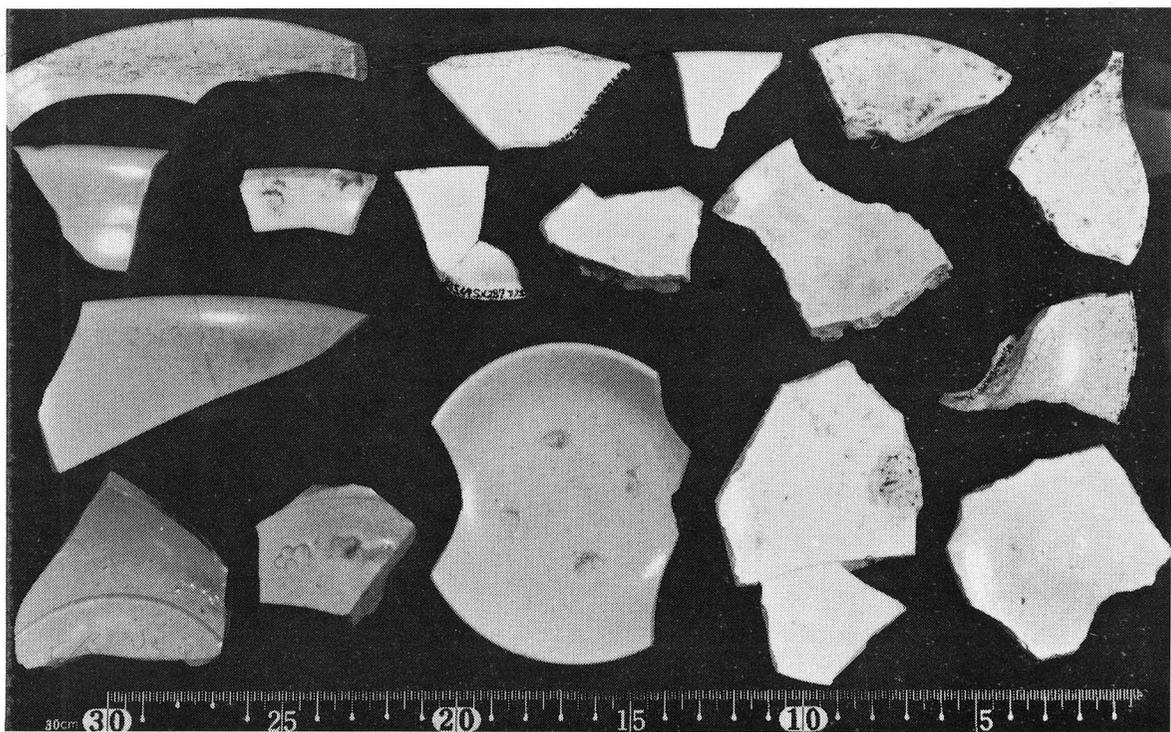
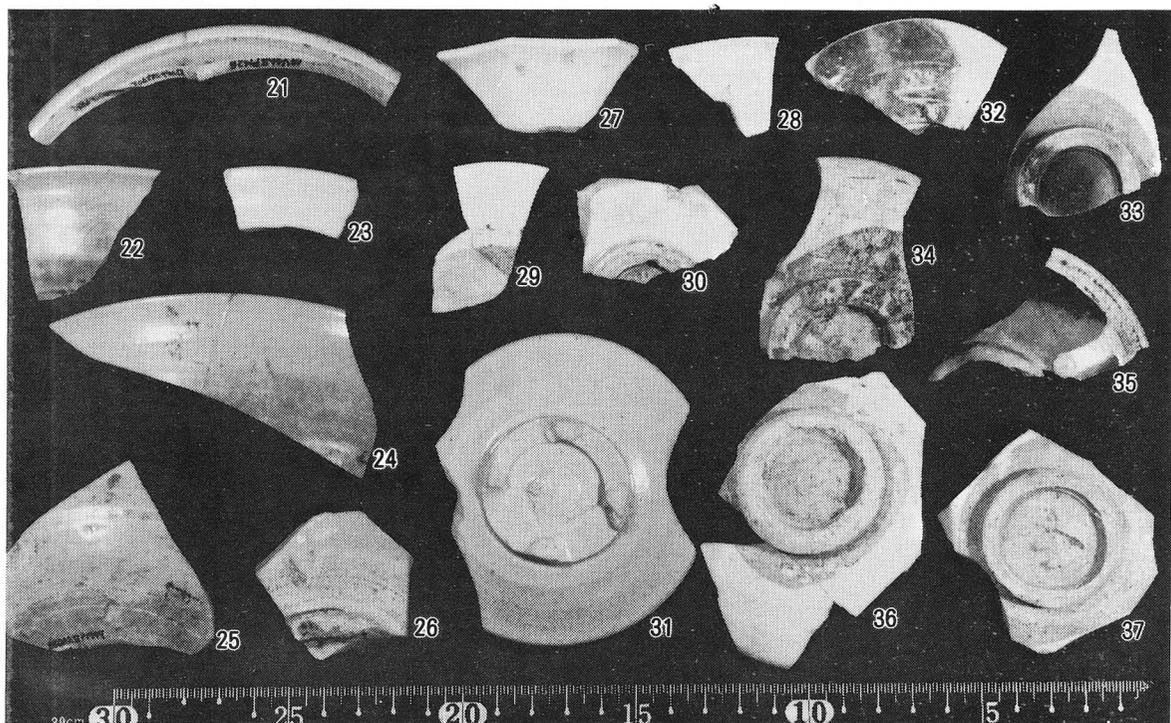
青磁碗 1~7 青磁盤 8~10 青磁香炉 11

PL.14 青磁



青磁皿12~16・20 青磁鉢17~19

PL.15 白磁



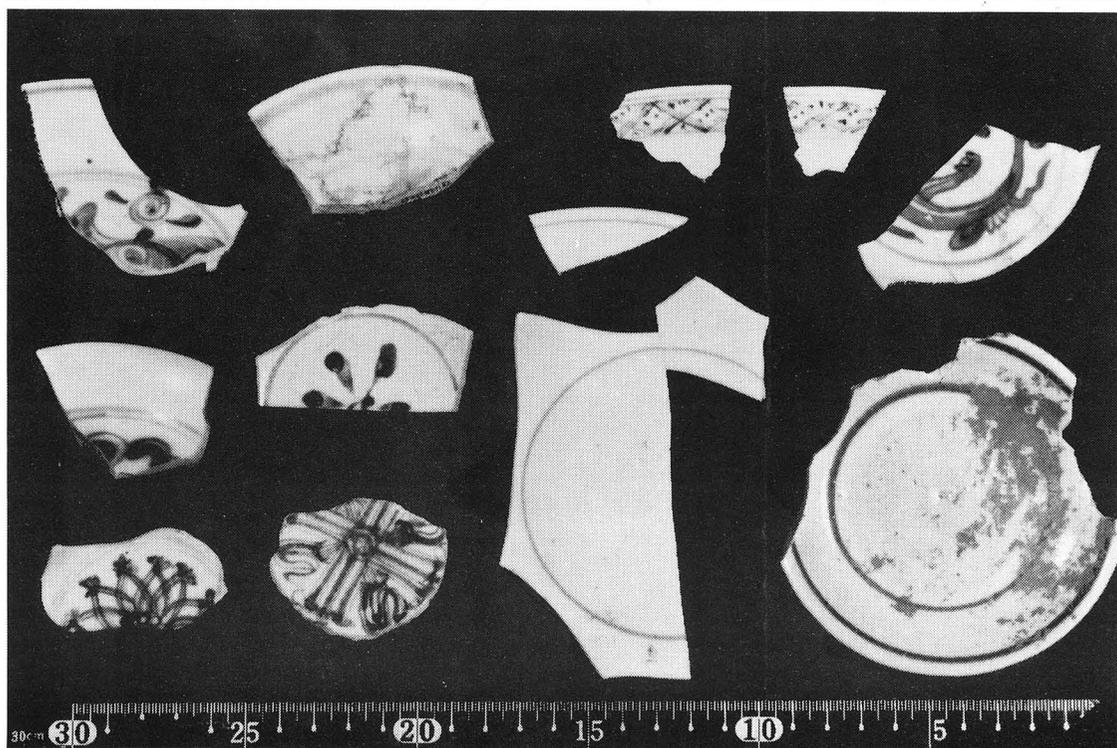
白磁碗21~26 白磁小杯27~29 白磁小鉢30 白磁皿31~37

PL.16 白磁・染付・赤絵・色絵染付

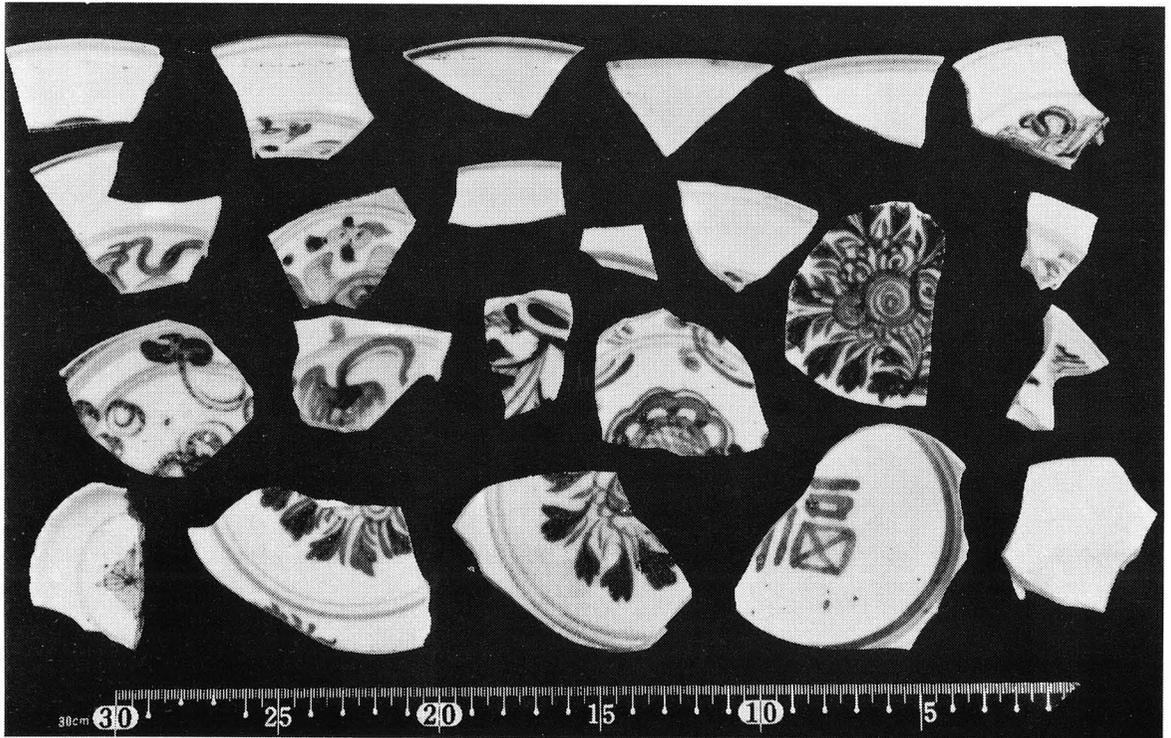
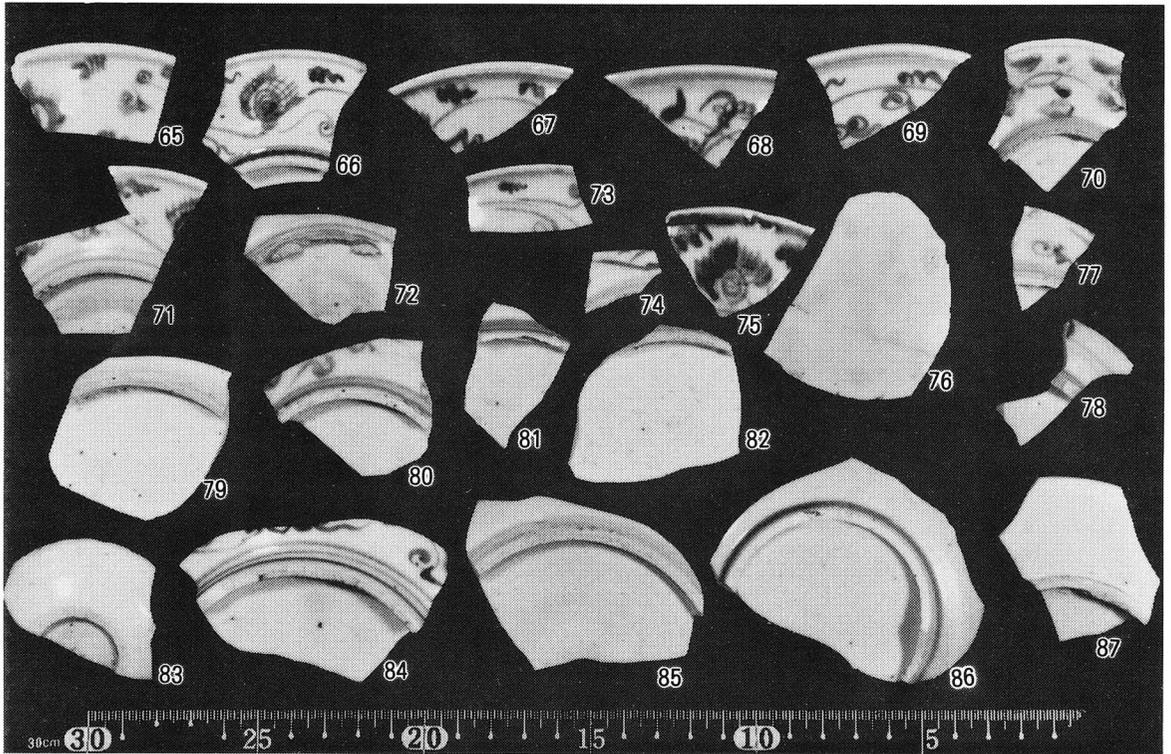


白磁皿38~41 染付碗42・43・47~49
 染付水注? 44~46 赤絵51~52 色絵染付50

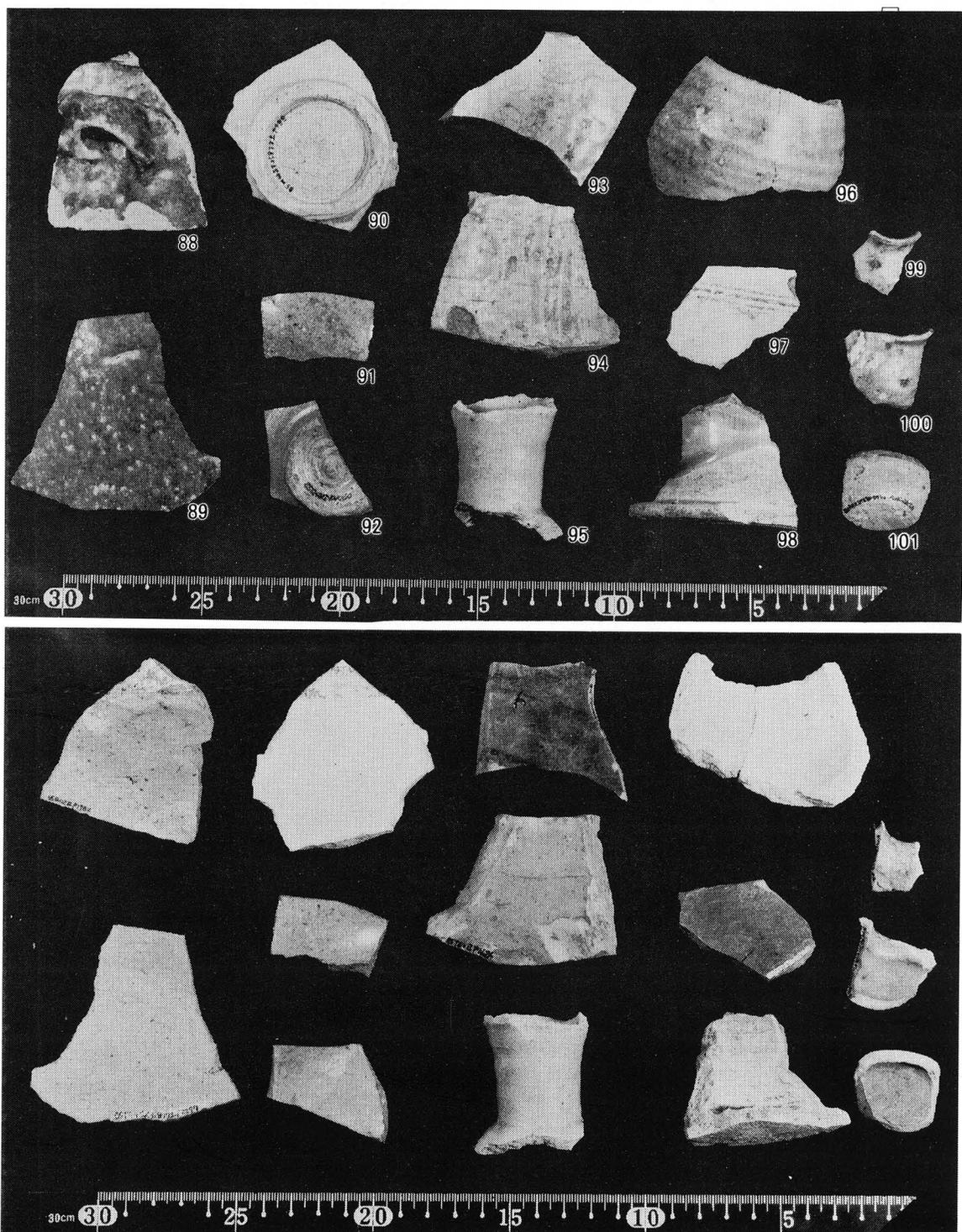
PL.17 染付



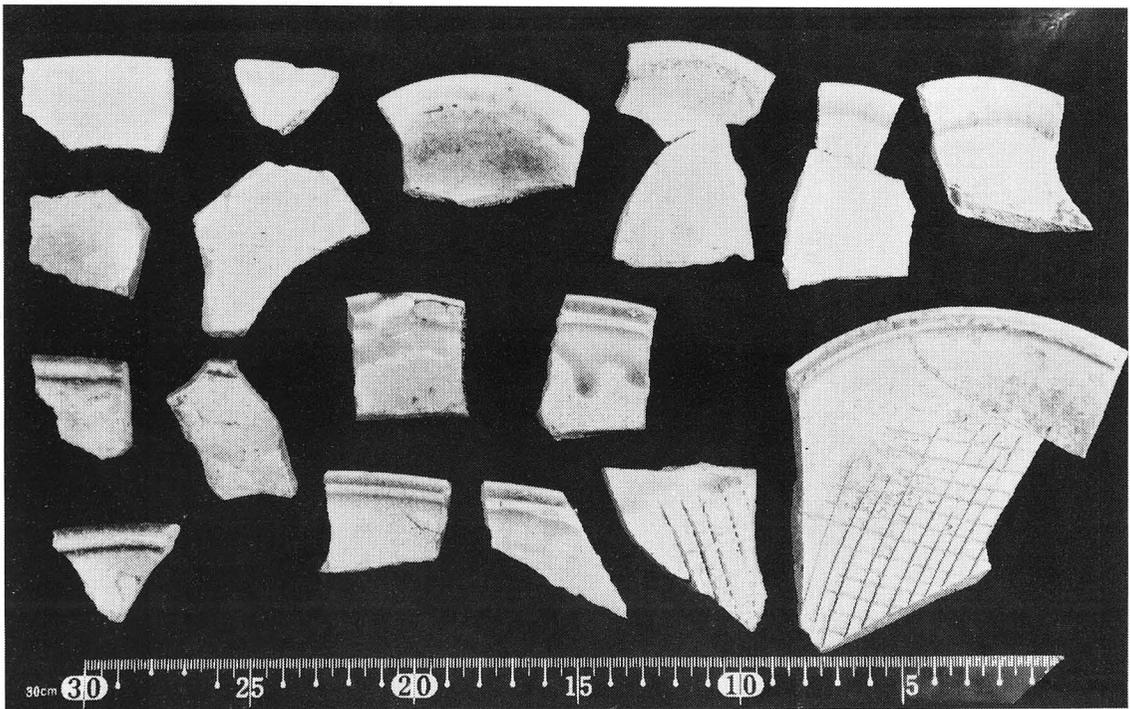
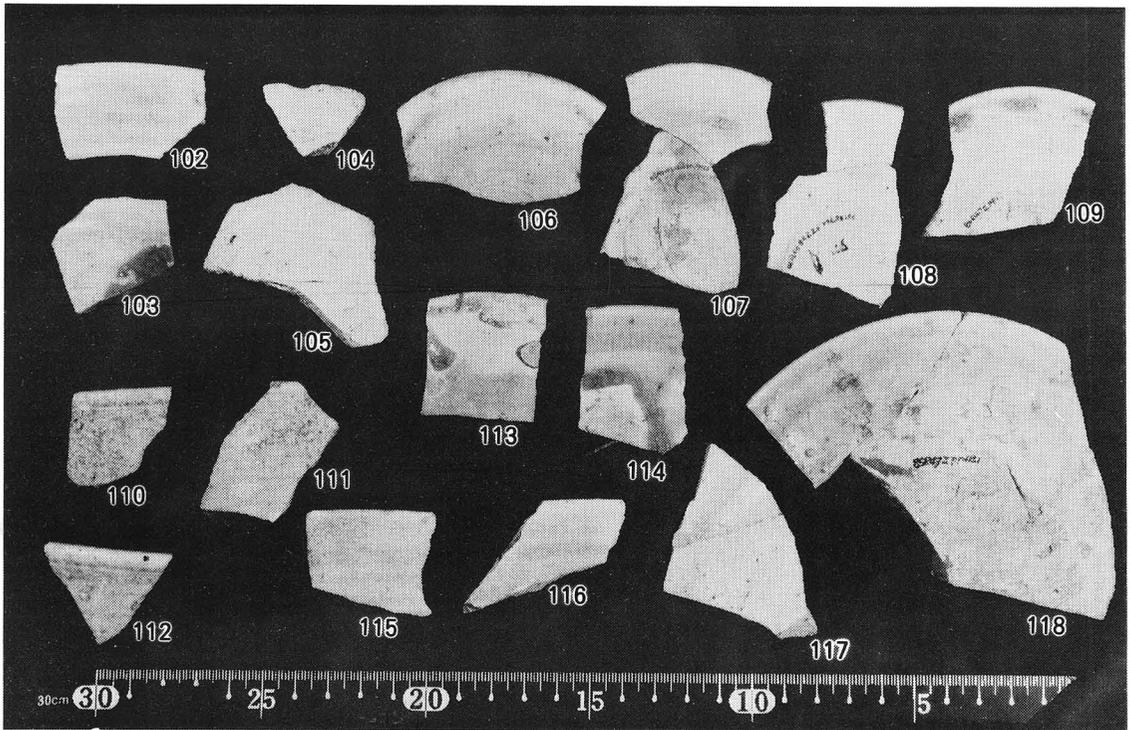
染付皿53~64



染付皿65~86 白磁皿87

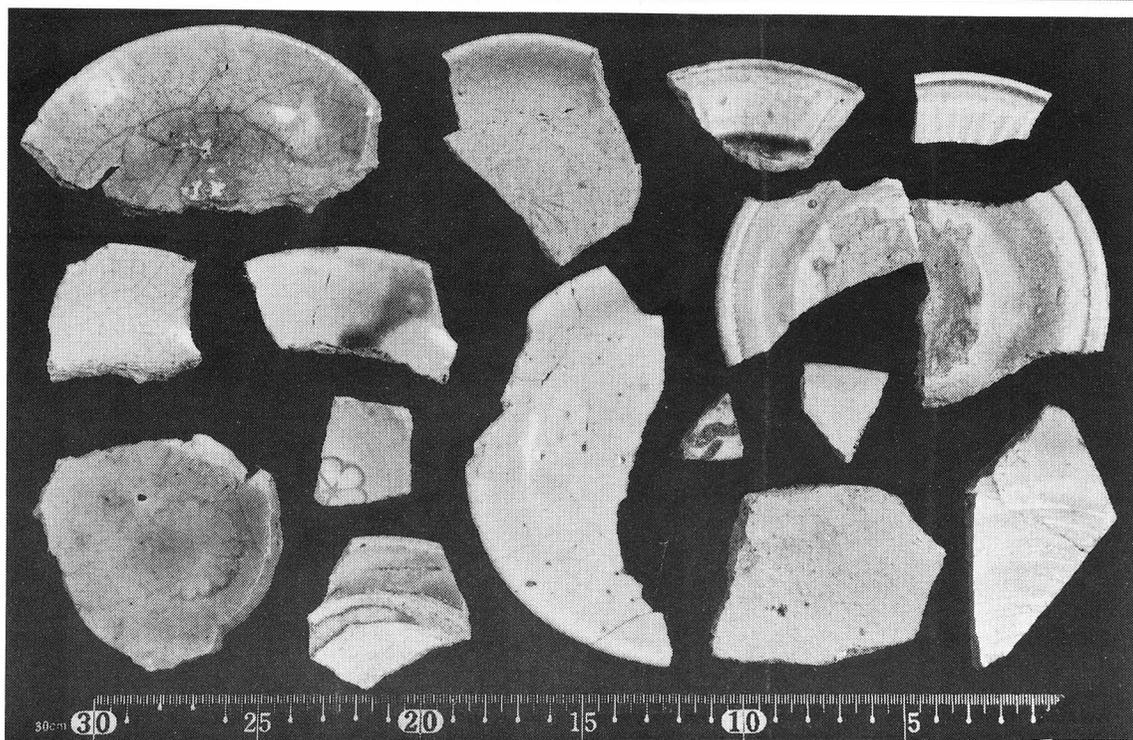


中国褐釉壺88・89 不明陶器90 朝鮮碗・皿91・92
瀬戸灰釉瓶子93・94 同壺95~98 同水滴99~101

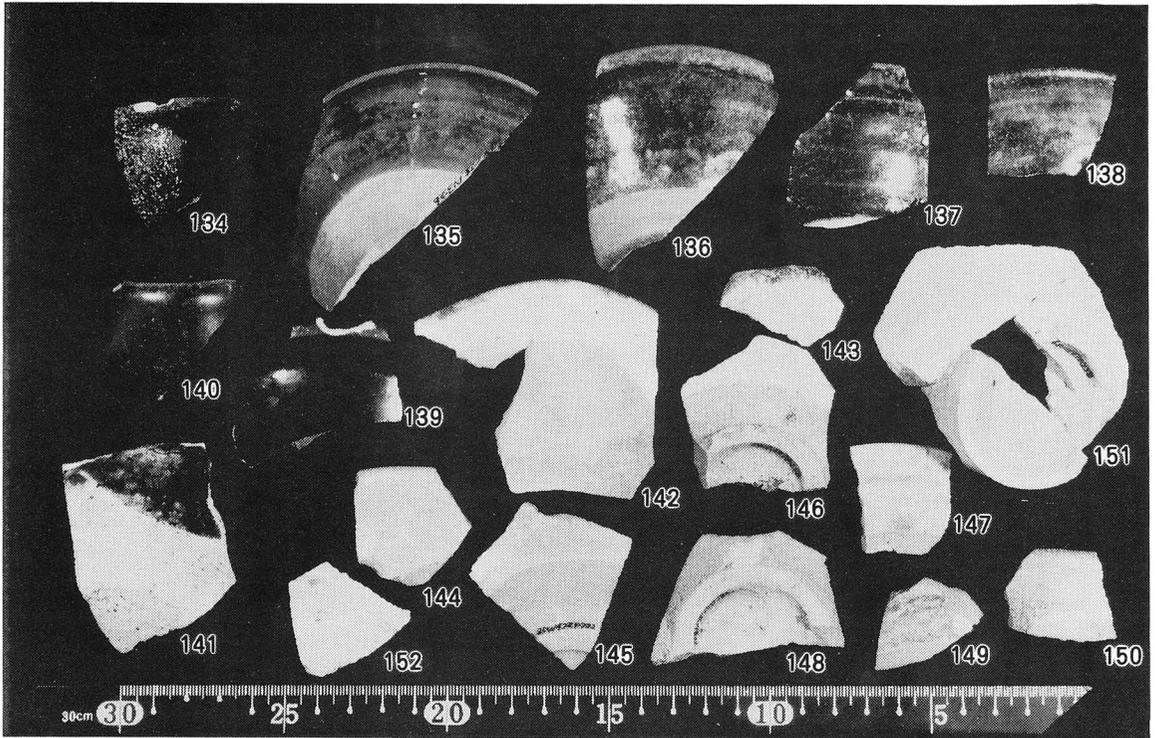


瀬戸・美濃灰釉碗 102.103、同皿 104~109、同香炉 110~112
同卸皿 114.117.118、同浅鉢 114.115.116

PL.21 美濃・瀬戸灰釉他

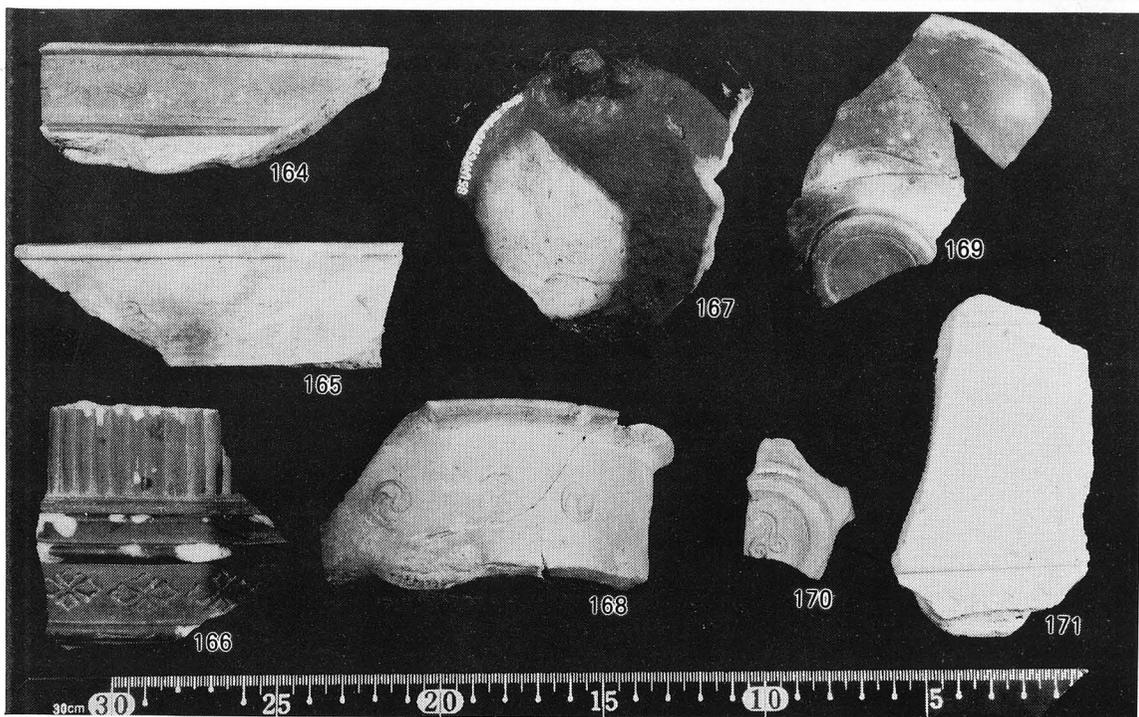
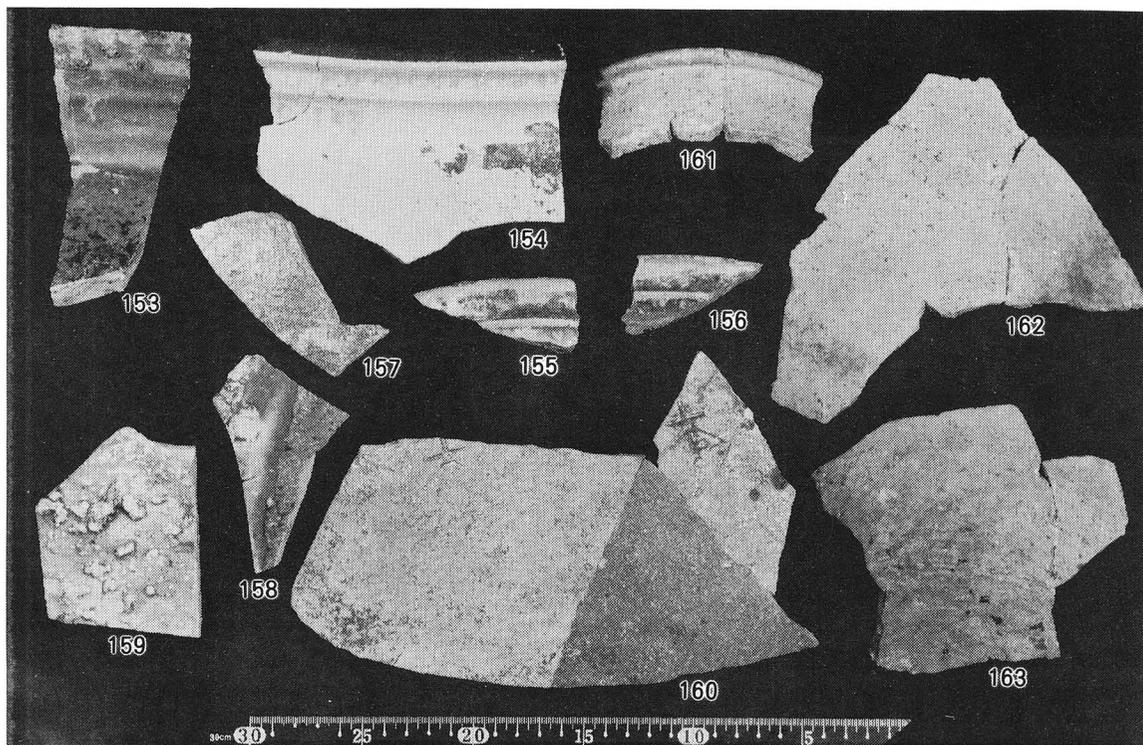


美濃・瀬戸灰釉皿 119~128、志野皿 129.130
黄瀬戸大皿 131~133



美濃・瀬戸鉄釉碗 134~139、同香炉140、同壺141

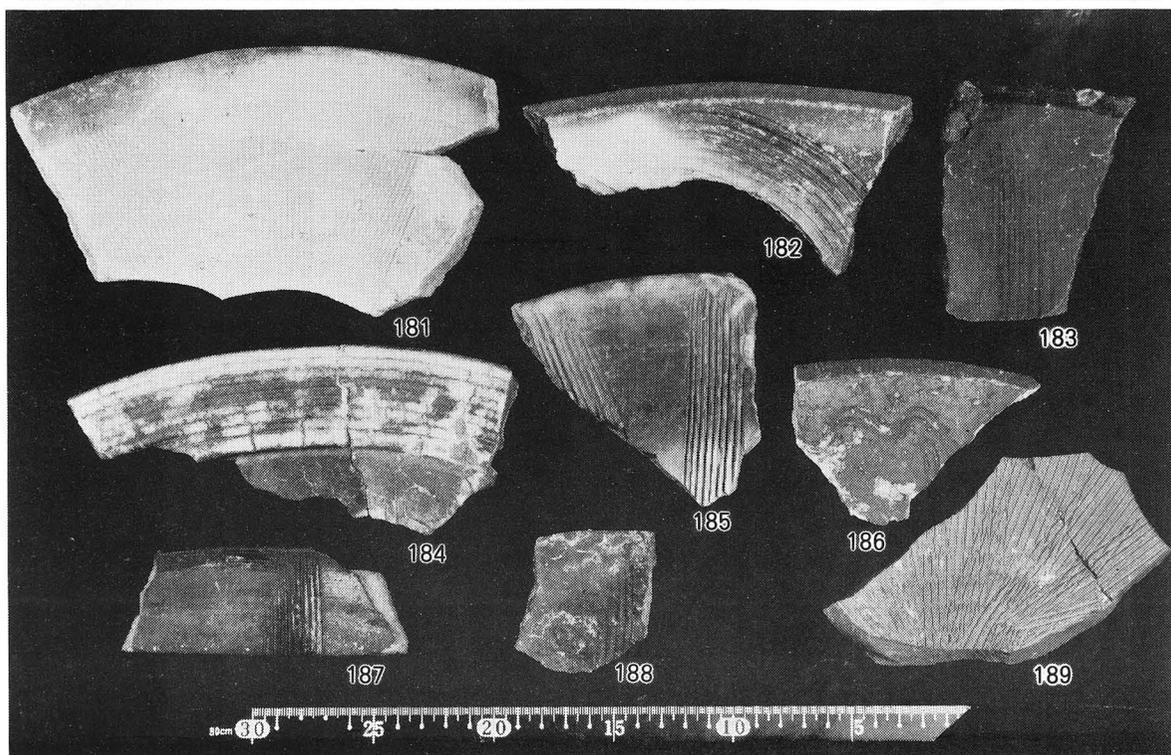
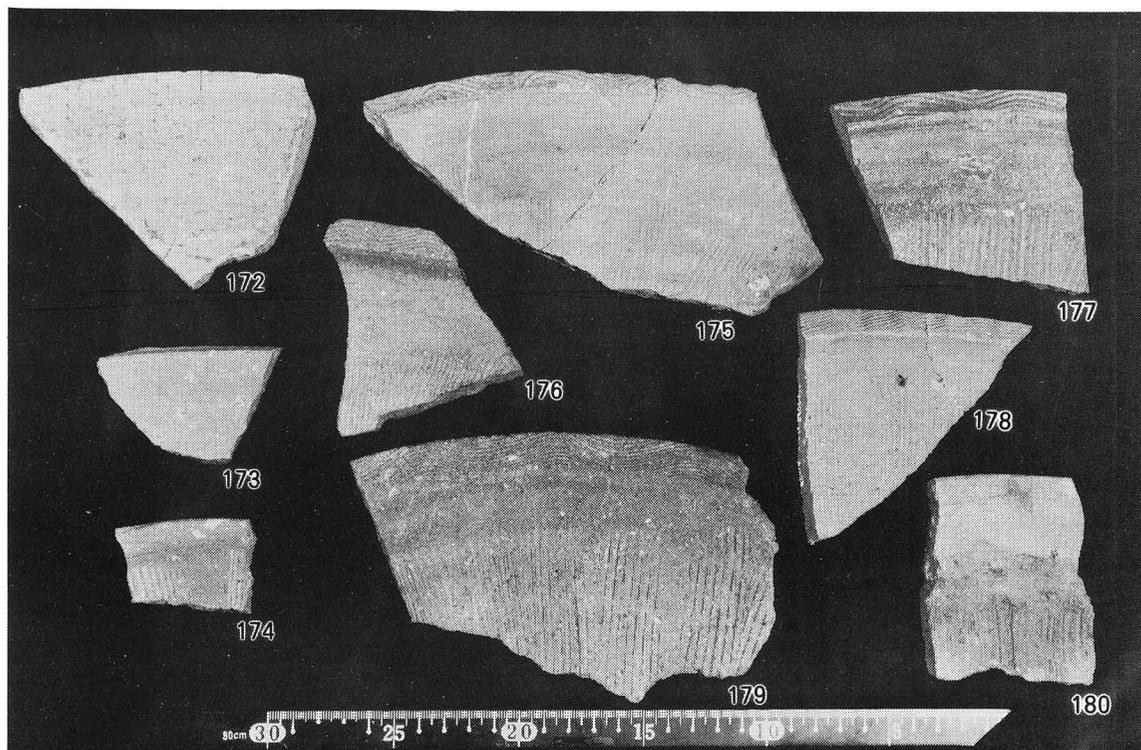
唐津皿142~150・152、同碗151



越前甕153~160、同壺161~163

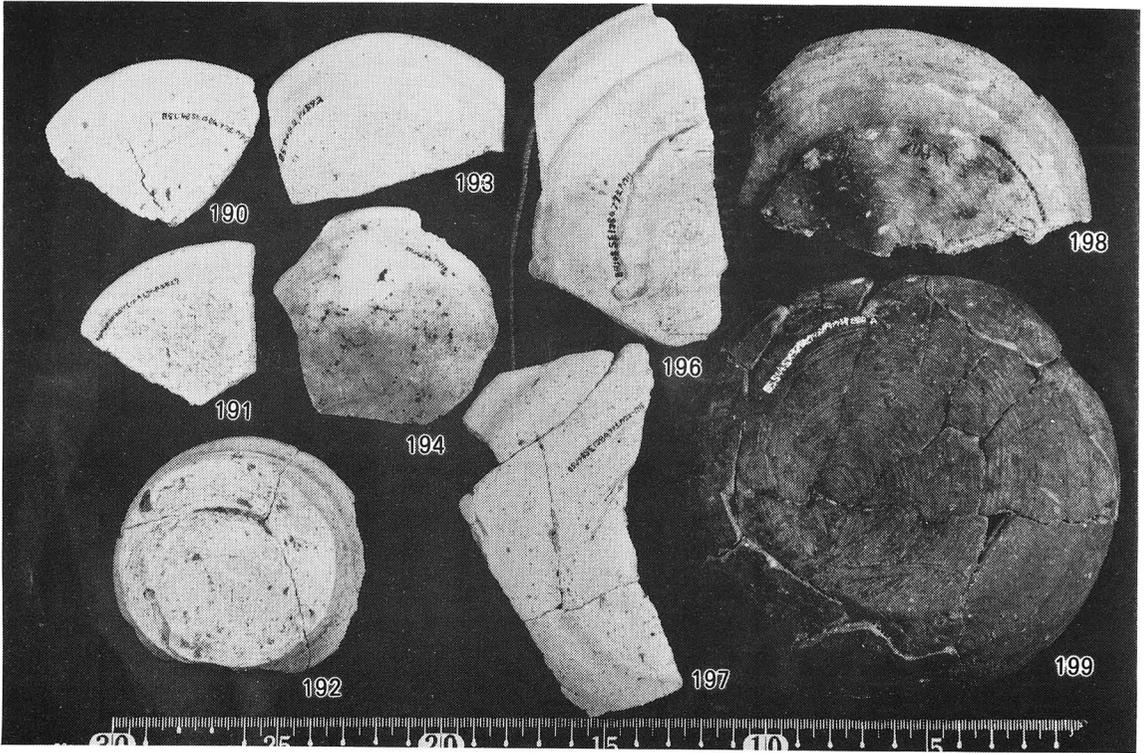
瓦質土器火鉢164~166・171、同香炉167・168、同碗169・170

PL.24 播鉢

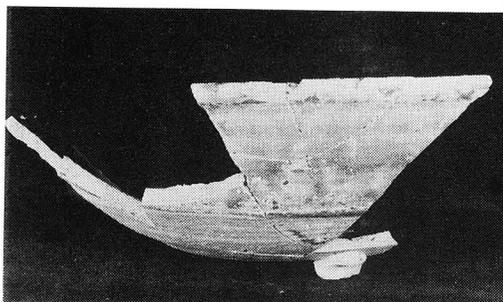


珠洲播鉢172~180、越前播鉢181

その他の播鉢182~189

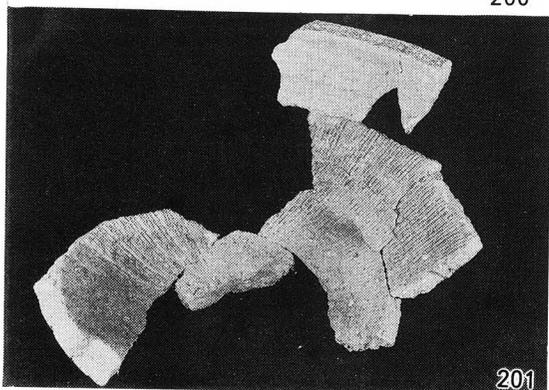
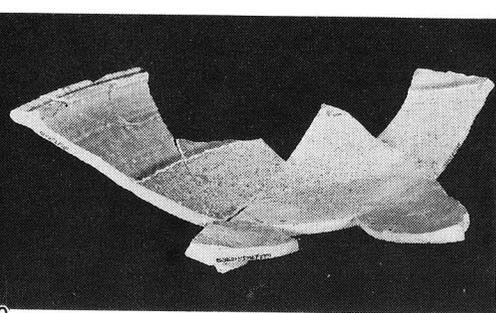


土師質土器190~199



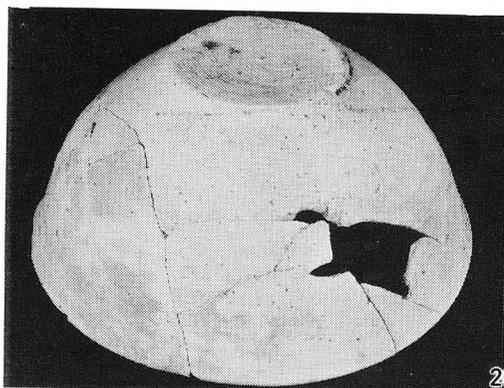
200

瀬戸灰釉浅鉢



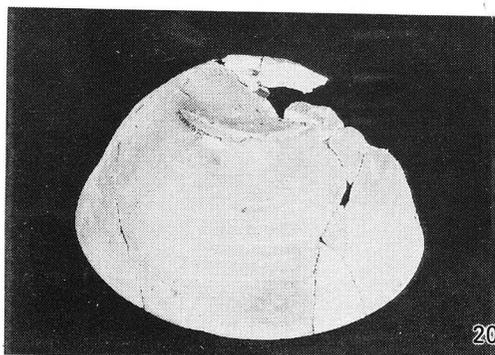
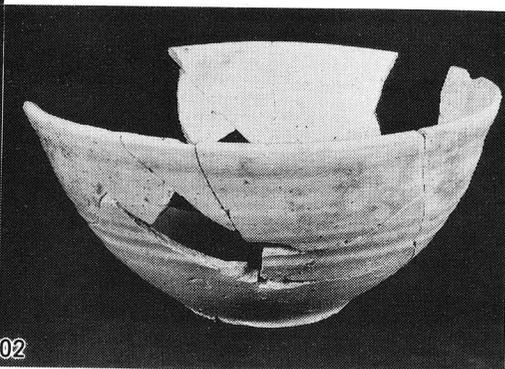
201

珠洲播鉢



202

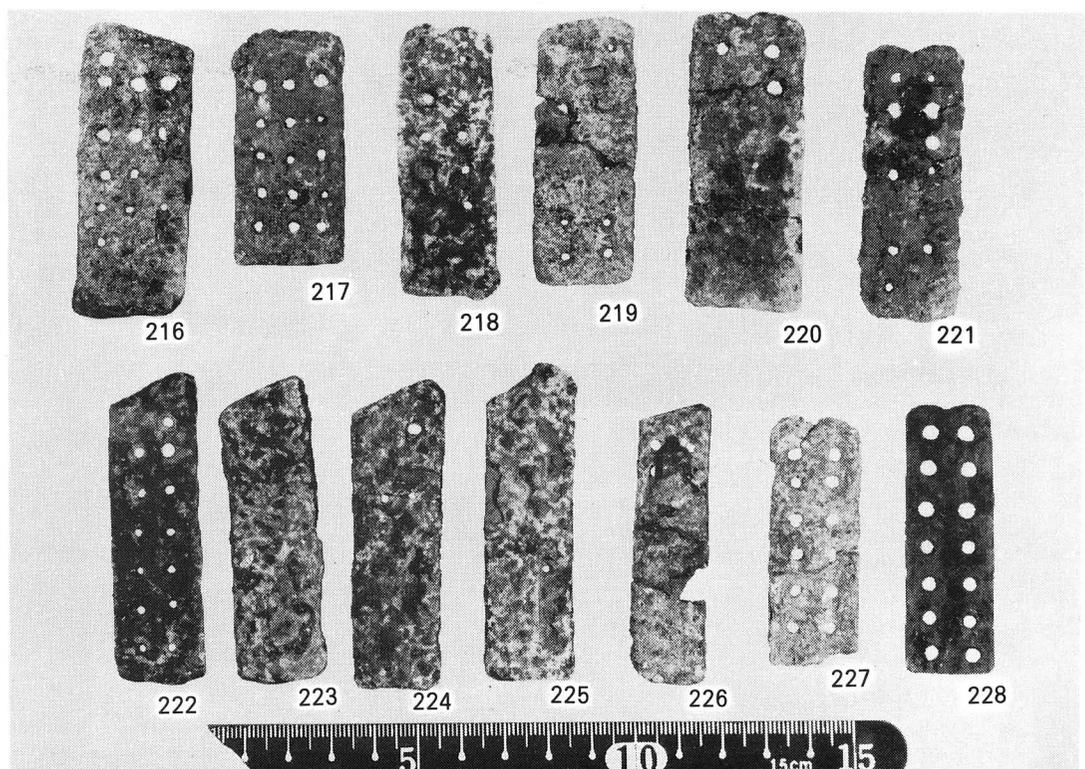
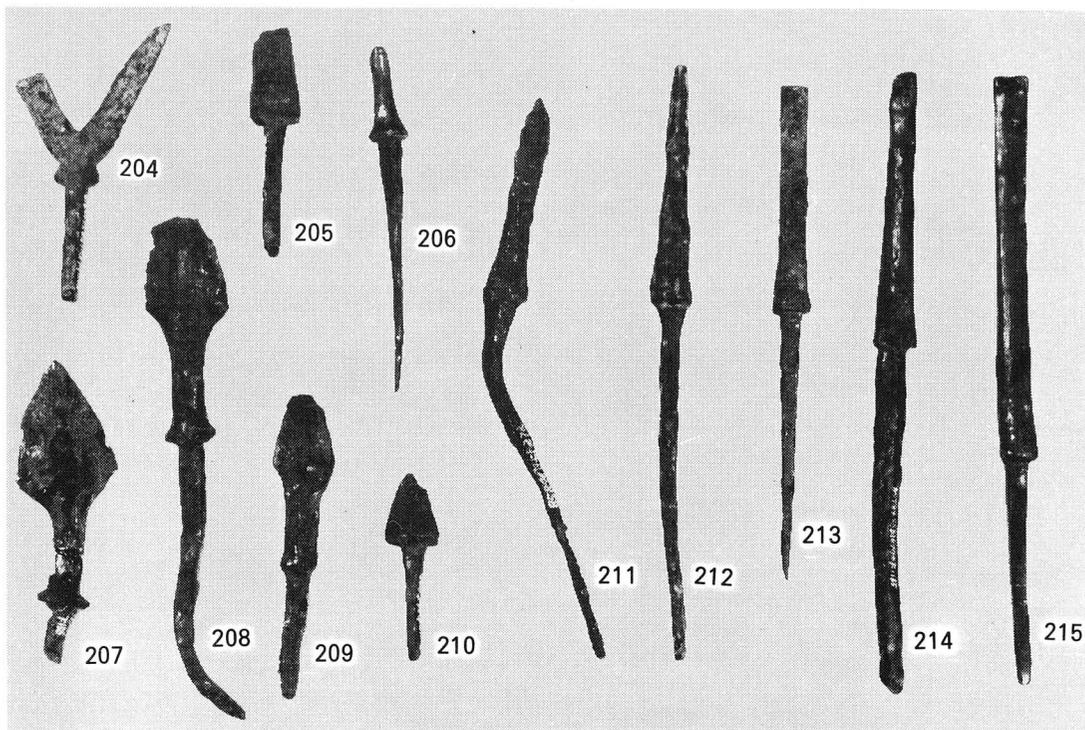
土師器坏



203

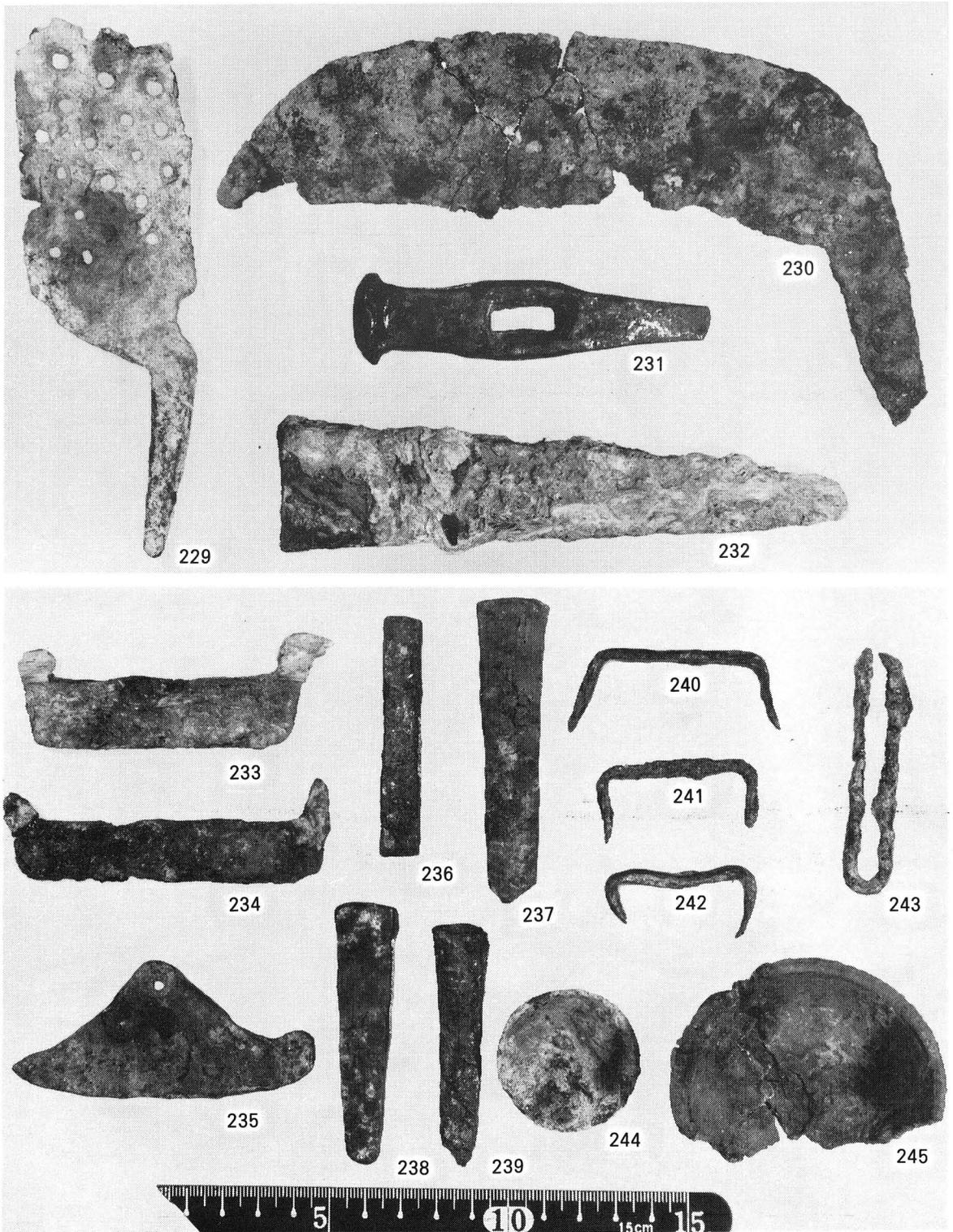
土師器坏

PL.27 鉄製品(1)



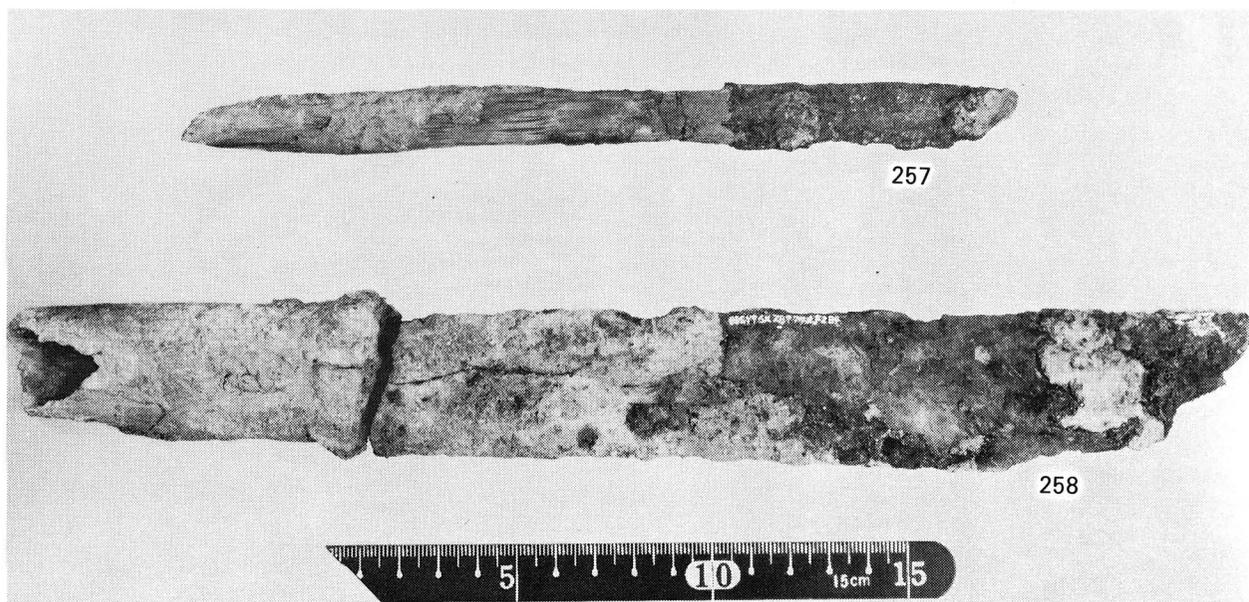
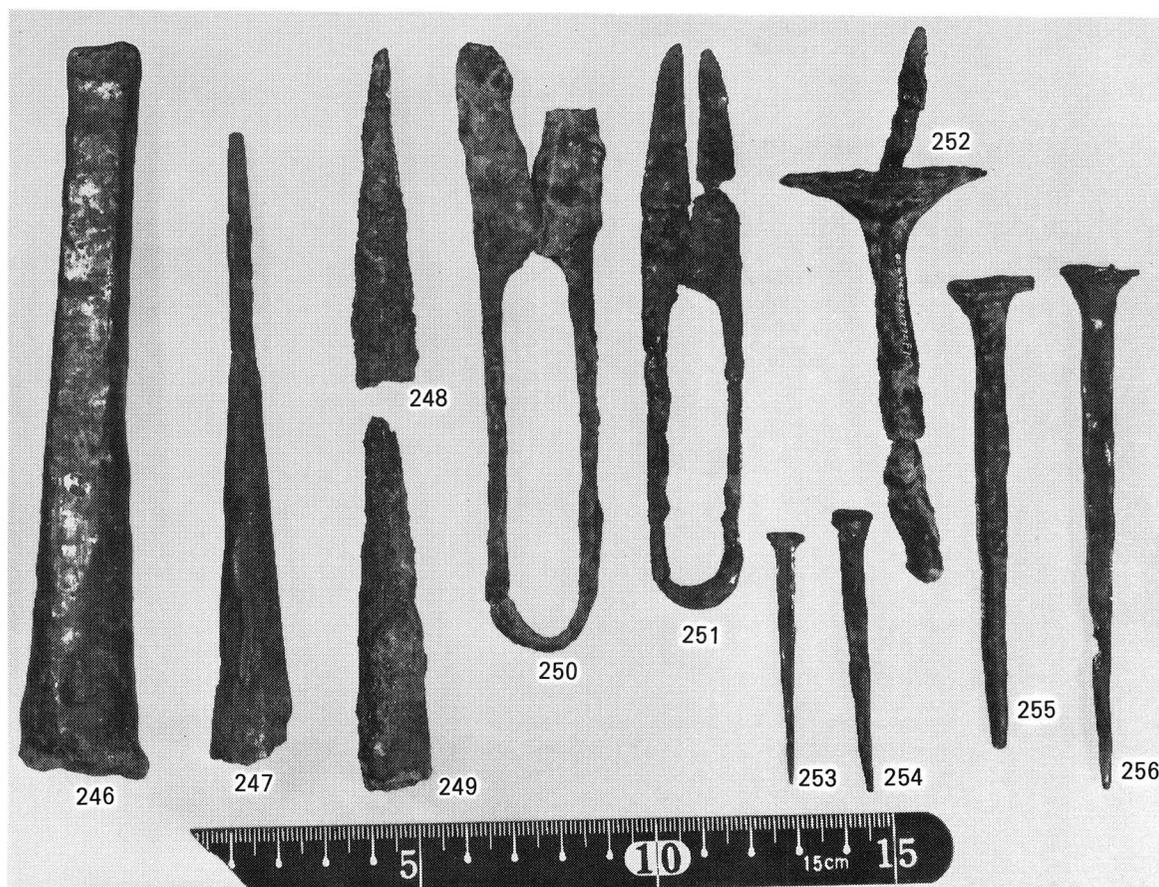
鉄鏃204~215 小札216~228

PL.28 鉄製品(2)



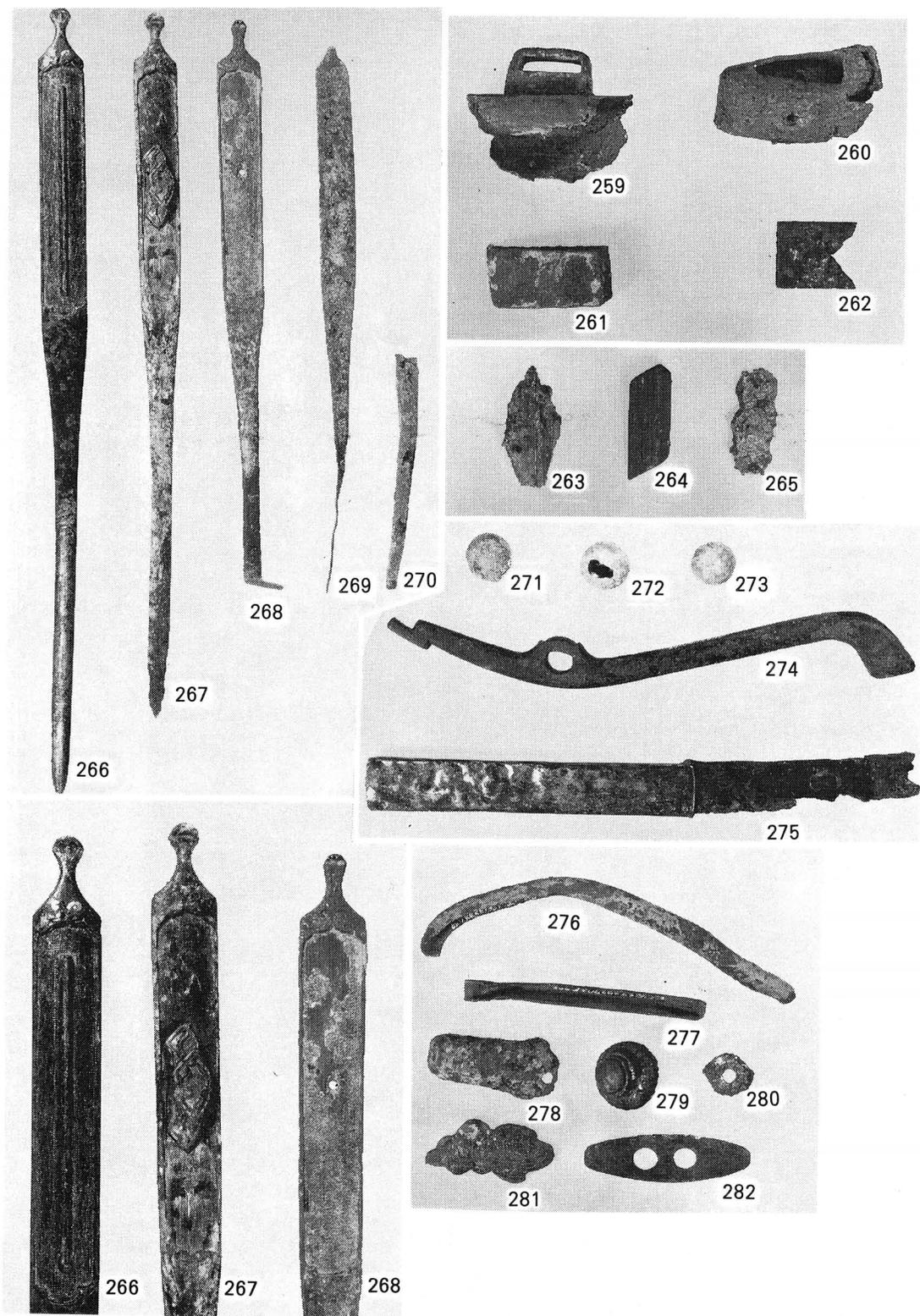
鎌230、苧引金233-234、火打金235、毛拔243、他

PL.29 鉄製品(3)

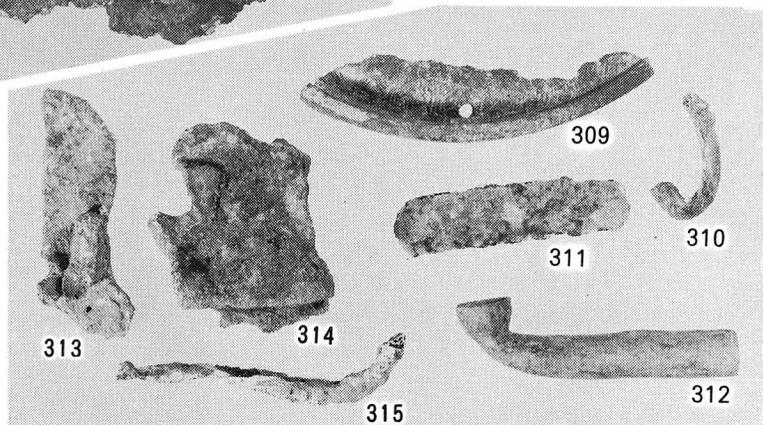
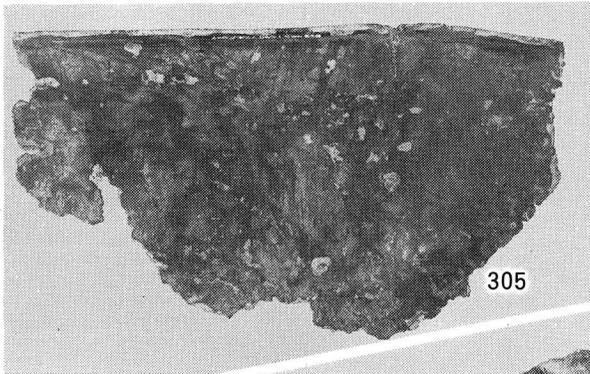
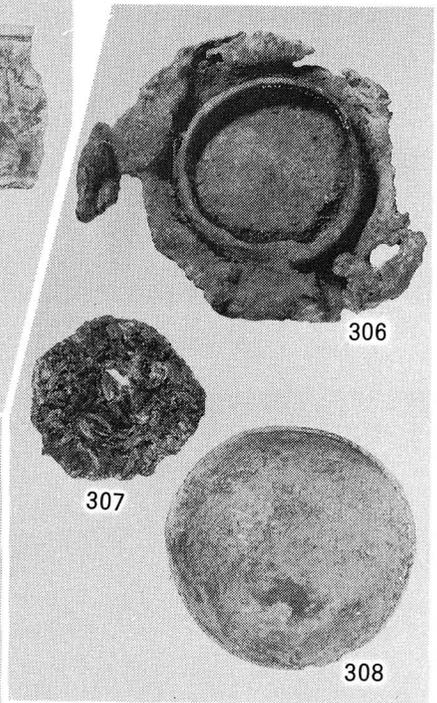
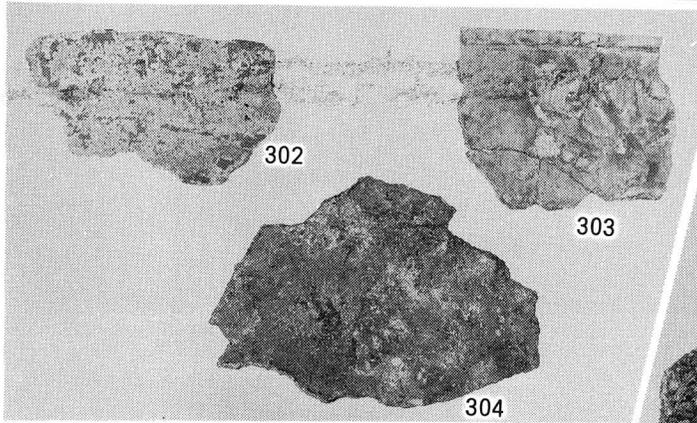
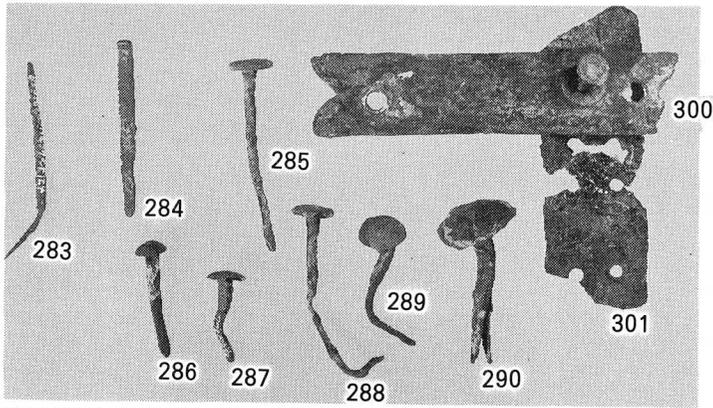


打根246~248、鉄250・251、燭台252、釘253~256 小刀259、鉞刀258

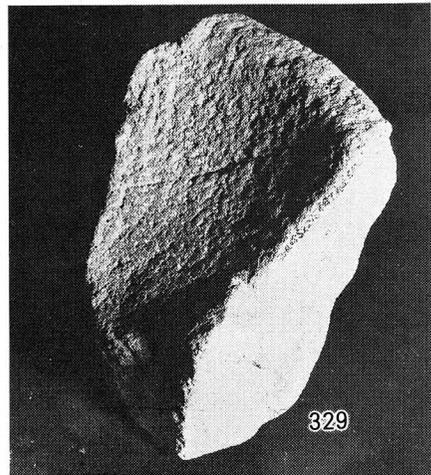
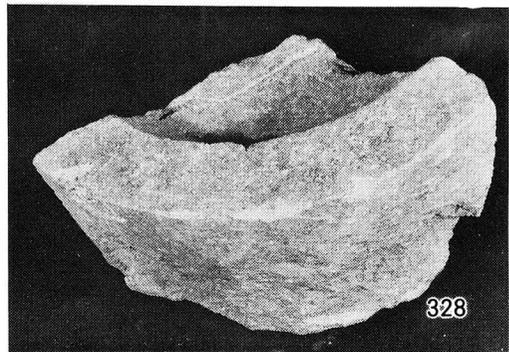
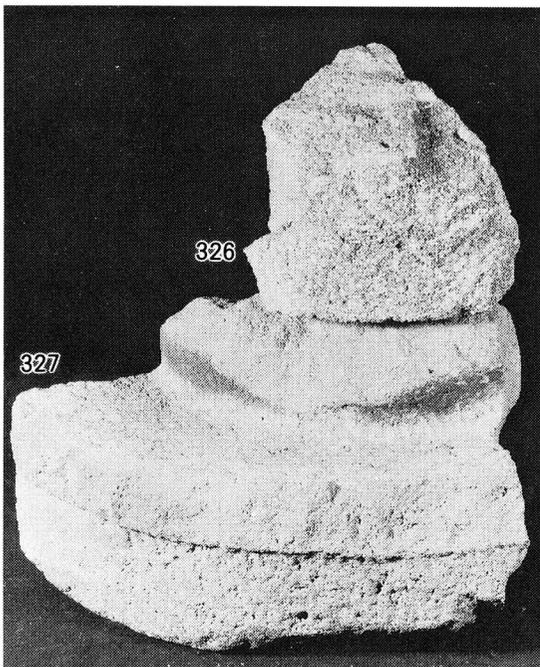
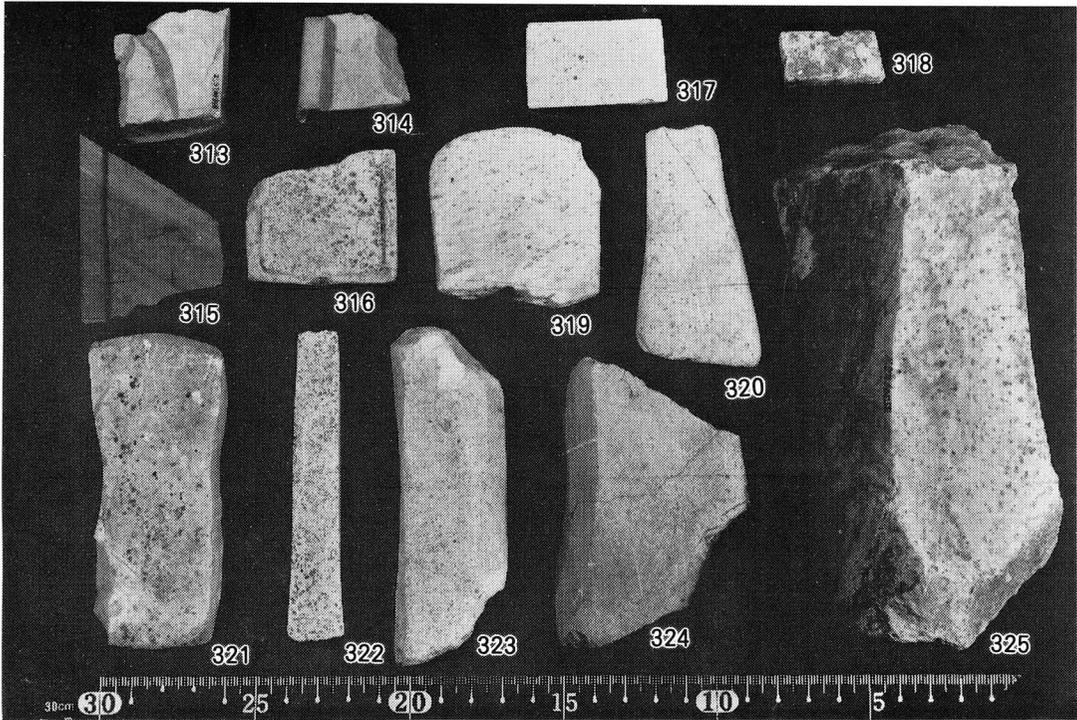
PL.30 銅製品(1)

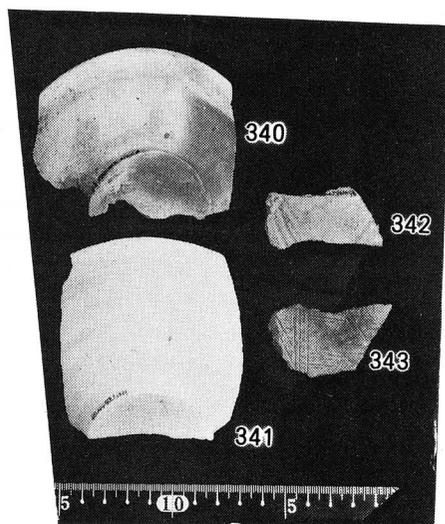
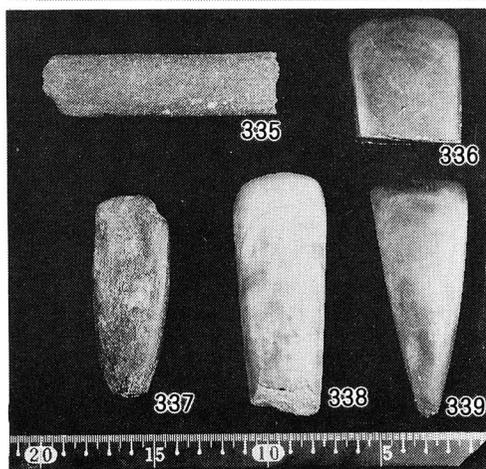
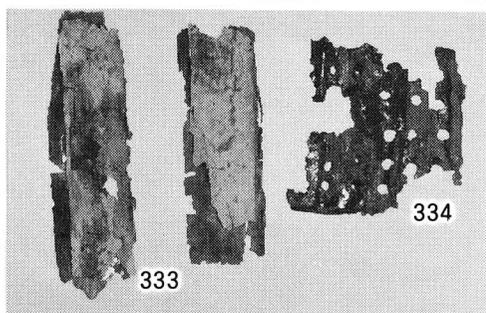
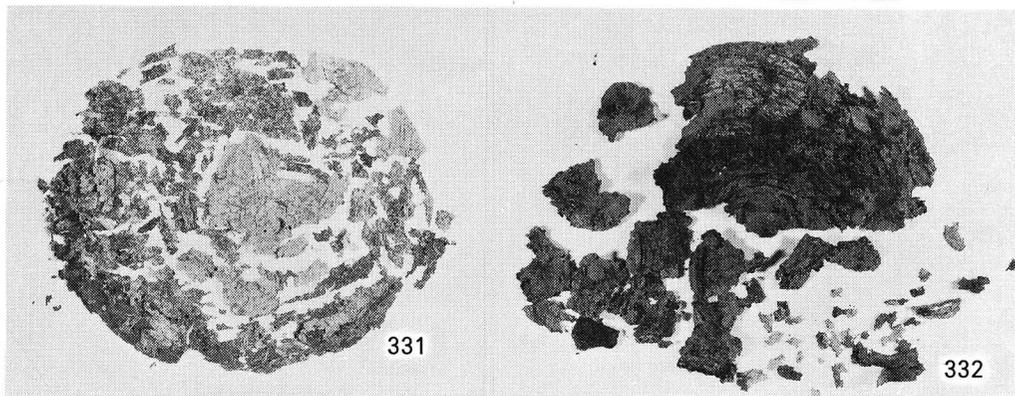
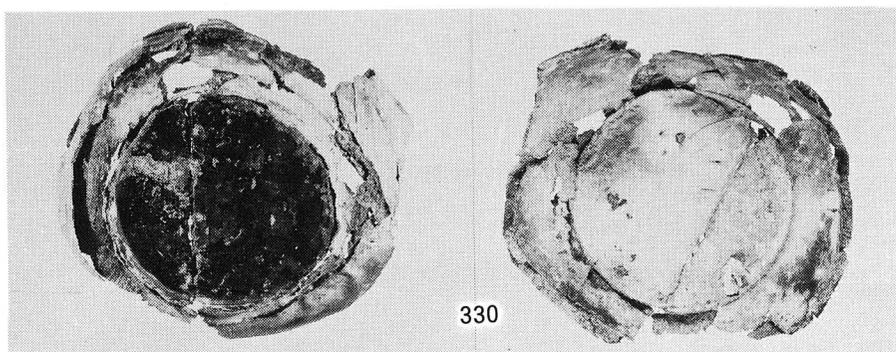


PL.31 銅製品(2)



PL.32 石製品





昭和60年度浪岡城跡発掘調査報告書

浪 岡 城 跡 IX

発 行 浪岡町教育委員会

発行日 昭和63年 1月31日

印 刷 (株)津軽新報社

